熊本県文化財調査報告　　第59集

鞠智城跡

1983

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、昭和55年度から昭和57年度にかけて重要遺跡範囲確認調査（国庫補助事業）の一環として鞠智城跡の調査をいたしました。この調査は、昭和42年から44年に実施した四次にわたる埋蔵文化財緊急調査に続くものであります。

鞠智城は、本県では唯一の古代山城で、その全容の解明が待たれるところでありましたが、今回の調査で城跡の範囲を把握することができました。

調査の実施に当たっては、文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、菊鹿町教育委員会、菊池市教育委員会及び地元米原地区の皆様など、多くの方々の協力を賜りました。調査が円滑に遂行できたことに対し、ここに厚くお礼申し上げます。

この報告書が鞠智城の国指定史跡に向けての基本資料となれば幸いであります。併せて文化財の保護思想の普及に役立つことを強く願うものです。

昭和58年3月31日

熊本県教育長　外　村　次　郎

目　　次

第Ⅰ章　序　　言 …… 1

1　調査に至るまで …… 1
2　調査のための組織 …… 2
3　本報告書の作成 …… 4
4　調査地区 …… 5
5　調査日誌抄 …… 5

第Ⅱ章　鞠智城の歴史 …… 11

1　鞠智城の歴史 …… 11
2　研究略史 …… 12

第Ⅲ章　遺跡・遺構の概要 …… 14

1　地理的位置 …… 14
2　遺跡・遺構の概要 …… 14

第Ⅳ章　第一次・二次調査の成果 …… 16

1　調査遺構 …… 16
A　池ノ尾の門礎石 …… 16
B　堀切の門礎石 …… 18
C　深迫の門礎石 …… 22
D　馬こかしの道 …… 26
E　三枝石垣 …… 29
F　佐官どん …… 31
G　米原集落内の礎石群 …… 35
H　少監どん・紀屋敷 …… 35
I　長者原の遺構 …… 37
J　宮野礎石群 …… 38
2　小結 …… 39

第Ⅴ章　第三次調査の成果 …… 40

1　調査遺構・遺物 …… 40
A　佐官どん …… 40
B　深迫門礎石地区 …… 43
C　土塁 …… 49
D　阿高の礎石群推定地 …… 52

2　小結……54

第Ⅵ章　第四次調査の成果……55

1　調査遺構……55

A　長者原礎石群……55

B　宮野礎石群……60

C　長者山の遺構……63

2　小結……66

第Ⅶ章　第五次調査の成果……68

1　調査遺構・遺物……68

A　A区……68

B　B・C区……68

C　D区……77

D　E区……81

E　F区……84

F　G区……86

G　H区……86

H　I区……91

2　小結……91

第Ⅷ章　第六次調査の成果……94

1　調査遺構……94

A　土層……94

B　検出遺構……96

2　遺物……96

3　小結……96

第Ⅸ章　第七次調査の成果……98

1　調査遺構……98

A　調査に至るまで……98

B　検出遺構……98

2　遺物……100

3　小結……105

第Ⅹ章　考　　察……109

1　鞠智城の範囲……109

2　鞠智城の構造…… 111
English Summary …… 115
付　　論
朝鮮式山城についての一考察…… 125
図面・図版

図　　面

PLAN 1　鞠智城周辺地形図
2　米原地区測量図
3　長者原礎石群
4　宮野礎石群

図　　版

PLAN 1　鞠智城空中写真
2　米原台地全景
3　池ノ尾門礎遠景
4　池ノ尾門礎石
5　池ノ尾門礎
6　池ノ尾門礎周辺
7　池ノ尾門礎周辺
8　深迫地区と米原台地
9　深迫地区空中写真
10　深迫門礎
11　深迫門礎
12　深迫門礎
13　深迫門礎
14　深迫門礎調査風景
15　鞠智城南縁の崖
16　鞠智城南縁の崖
17　堀切門礎石
18　堀切門礎石
19　木野神社礎石
20　鞠智城北側風景
21　長者山全景・東より西をみる
22　長者山風景
23　長者山礎石群
24　長者山礎石群
25　長者山礎石群
26　長者山礎石群
27　長者山全景・西より東をみる
28　長者山と宮野礎石群

29 調査前の宮野地区
30 宮野礎石群より見た長者山
31 長者山よりみた宮野礎石群
32 宮野礎石全景・南より北をみる
33 宮野礎石群遺物出土状態
34 宮野礎石の版築と溝断面
35 佐官どん礎石群
36 長者原礎石群
37 長者原礎石群
38 鞠智城土塁
39 鞠智城土塁
40 三枝石垣
41 長者原地区の開田状態と露出礎石
42 平瓦実測図
43 平瓦実測図
44 第六次調査出土瓦

挿　　図

1 鞠智城調査地点図…… 6
2 池ノ尾の門礎石周辺地形図……16
3 池ノ尾の門礎石実測図……17
4 堀切地形図……19
5 堀切の門礎石実測図……20
6 木野神社横の門礎石実測図……21
7 深迫の地形図……23
8 深迫の門礎石の実測図……24
9 馬こかし地形図……27
10 馬こかし石垣実測図……28
11 三枝石垣地形図……29
12 三枝石垣実測図……30
13 佐官どん地形図……32
14 佐官どん礎石群堆積図……33
15 佐官どんトレンチ配置図……41
16 第6トレンチ土層断面図……42
17 第7・8トレンチ土層実測図……42
18 深迫トレンチ配置図……43
19 C・G・Eトレンチ断面図……44

20 Cトレンチ平面・断面図……45
21 深迫土塁推定地断面図……47
22 遺物実測図……48
23 土塁線調査地一覧……50
24 土塁実測図……51
25 阿高礎石群……53
26 長者原礎石実測図……57
27 宮野礎石群配置図……61
28 宮野礎石土層断面図……62
29 長者山実測図……65
30 第五次・六次調査地区全図……69
31 B・C区平面図　東壁断面実測図……70
32 宮野礎石建物跡出土平瓦叩き目集成（1：2）……75
33 SF 501 断面実測図……77
34 B・C区出土土器実測図（1：3）……78
35 B・C区出土土器……79
36 E区東壁断面実測図……80
37 D・E区平面図……82
38 礎石抜き取り穴実測図……83
39 F・G区平面図　F区北壁断面実測図……86
40 E区出土土器実測図……88
41 E区出土土器……89
42 D区出土土器実測図……90
43 第五次調査出土軒丸瓦復原図……92
44 上原調査地区土層断面図……95
45 第六次調査検出竪穴遺構実測図……97
46 宮野礎石群西溝遺物出土状態……101
47 宮野出土遺物(1)……102
48 宮野出土遺物(2)……103
49 宮野出土遺物(3)……106
50 宮野出土遺物(4)……107
51 古代山城概念図……110
52 長者山礎石建物群配置復原図……112
53 鞠智城概念図……113

表

1　鞠智城調査地一覧…… 5
2　深迫門礎石地区出土遺物一覧……48
3　B・C区ピット計測値……72
4　第五次調査各区の丸瓦・平瓦出土数……73
5　平瓦各類観察表……74
6　ピット計測値……96
7　宮野礎石群計測表……99
8　小礎石寸法表…… 100
9　宮野礎石群出土土器一覧…… 100
10　宮野礎石建物跡出土瓦の出土点数と重量…… 104
11　宮野礎石建物跡出土平瓦の製作技法…… 105
12　鞠智城跡建物規模一覧…… 111

第Ⅰ章　序　　言

1　調査に至るまで

鞠智城の調査には長い歴史がある（第Ⅱ章参考）。熊本県が鞠智城の保存に着手したのは昭和34年で、長者山礎石群（鹿本郡菊鹿町大字米原字長者530 番地）と深迫（菊池市大字木野字深迫1907番地）の門礎石が伝鞠智城として史跡に指定された。

昭和40年代に始まった農業構造改善事業は、重機を投入しての大規模な地貌の改変で、全面的に旧地形が失われた箇所も少くない。鞠智城の存する米原台地にもブルドーザーが進入し、畑地桑園の水田化工事が開始され、多くの遺構が失われていた。この憂うべき状況に対して、熊本県は昭和42年度埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を受け二次にわたる調査をおこない、城の外郭線の確認、米原地区の測量図作成、所在の明らかな門礎石地点などに主力をおいた。その結果、鞠智城についてのいくつかの不明点が解明されたが、米原地区の開発は引続き行われ、昭和42年末から昭和43年にかけて、長者山礎石群の西側一帯の山林が開墾された。また昭和43年４月には深迫一帯の畑地が、ほとんど水田化されてしまった。このような急開発に対応するため、昭和43年８月から、第三次調査がなされ、一応の成果を上げた。また本分集落の阿高地区で礎石群の新発見があった。以上の調査により、鞠智城の遺構の全貌は、ほぼ明らかになり、熊本県教育委員会では、従来の伝鞠智城の名称を鞠智城と改称した。

第四次調査は昭和45年２月におこなわれた。宮野礎石の露出と、長者原礎石群の全面露出、長者山の測量がおこなわれた。

その後、再び鞠智城に調査の手が加えられたのは、９年後の町道稗方～立徳線に伴う事前調査としてであった。この第五次調査は町道の拡幅工事に伴うものであったので、調査地区が限定されていたが、鞠智城の調査史上、初めて軒丸瓦片を検出するなどの成果をあげた。

第五次調査により、再び鞠智城に関心が高まり、熊本県教育委員会では、昭和56年度から３年間の予定で国庫補助による遺跡の範囲確認をおこなった。第六次調査では、第五次調査によって遺構の所在が予想された字上原地区の発掘をおこない、弥生期の遺構を検出した。第七次調査では、従来部分的に礎石を露出していた宮野礎石群の全面露出をおこなった。この間、鞠智城の全体を概観する地形図を作成すべく、空中写真による撮影をおこなった。なお宮野礎石群は昭和56年11月11日付で県史跡に追加指定された。　　（隈　昭志・鳥津義昭）

2　調査のための組織

第一次調査から第七次調査まで多くの方々が調査に参加している。第一次調査から第四次調査までは、鞠智城調査団が調査主体となり、第五次調査は菊鹿町教育委員会、第六次・七次調査は熊本県教育庁文化課が直営で調査をおこなった。　　（上野辰男・島津）

第一次・第二次・第三次・第四次調査

主催者　熊本県教育委員会

調査指導　九州大学教授　鏡山　猛

調査団長　熊本女子大学教授　乙益重隆

調査員　熊本県指導主事　田辺哲夫　　第二高校教諭　原口長之
熊本大学教授　松本雅明　　肥後考古学会長　坂本経堯
荒尾三中教諭　三島　格　　山鹿高校教諭　限　昭志
山鹿高校教諭　杉村彰一　　碧水小教諭　平岡勝昭
熊本農業高校教諭　納富正浩　　熊本大学助手　佐藤伸二
肥後考古学会員　緒方　勉　　社会教育課主事　上野辰男
熊本県教育研究所員　桑原憲彰

調査補助員　熊本大学学生、熊本農業高校・山鹿高校・第二高校生徒他

調査事務局　調査責任者　社会教育課長　重石隆三
社会教育課　課長補佐　木村　繁　　文化係長　松田安雄
〃　庶務係長　伊藤昌弘　　主事　上野辰男
主事　富永　久　　主事　高浜知完
主事　福田那智子　　主事　高木幸代
主事　東大森慶子　　主事　中村　昇

調査協力者　菊鹿町長　飯川　巌　　菊鹿町教育長　富田　貞
菊池市教育長　佐々守造　　菊鹿町社会教育主事　高田貫一
菊池市社会教育課長　津留　清
米原区長　原田成一氏他　　堀切区長　河津三郎氏他
頭合区長　木野政幸氏他　　医　師　松尾公倫

地　主　米岡　明　木野政敏　村上幸人　徳丸信敏
高木二一　米岡孝臣　高木則行

第五次調査

発掘調査は菊鹿町教育委員会より調査員派遣申請を受けた熊本県教育庁文化課が実施し、調査事務は菊鹿町教育委員会が担当した。

調査主体	菊鹿町教育委員会		
調査責任者	教育長 高田貫一		
調査員	県文化課技師 高谷和生	県文化課嘱託	鶴嶋俊彦
調査事務局	総合建設室長 早田政義	社会教育課課長	松永鶴広
	土木課課長 家入憲隆	社会教育係長	菊川常久
	土木課第1係長 芹川真正	土木課第2係長	高木勇

調査指導及び協力者

元福岡市立歴史資料館長	三島格	熊本大学文学部教授	白木原和美
熊本大学文学部助教授	甲元眞之	北九州市歴史博物館主幹	小田富士雄
九州大学文学部助教授	西谷正	九州大学文学部助手	木村幾多郎
岡山大学文学部教授	近藤義郎	奈良国立文化財研究所	森郁夫
九州歴史資料館技術主任	石松好雄	九州歴史資料館主任技師	高倉洋彰
九州歴史資料館主任技師	森田勉	九州歴史資料館主任技師	高橋彰
久留米市教育委員会社会教育課	古賀寿	久留米市教育委員会社会教育課	富永直樹
本田啓介米原地区区長	米原地区住民一同	下田建設株式会社	
県文化課課長	岩崎辰喜	県文化課長補佐	田辺宗弘
前県文化課課長補佐	真弓袈裟勝	県文化課主幹	上野辰男
県文化課文化財調査係長	限昭志	県文化課学芸員	島津義昭

第六次・第七次調査

調査責任者	文化課長 岩崎辰喜	調査総括	文化財調査係長 限昭志
調査員	文化課 学芸員 島津義昭	文化課嘱託	鶴嶋俊彦
	文化課 安達武敏		
調査事務局	文化課課長補佐 林田茂一	文化課経理係長	大塚正信
	文化課主事 谷喜美子	文化課主事	木下英治
	文化課主事 松崎厚生		

調査指導及び協力者

奈良国立文化財研究所長	坪井清足	元福岡市立歴史資料館長	三島格
九州大学教授	横山浩一	熊本大学教授	白木原和美

広島大学教授	小野忠熙	佐賀大学教授	日野尚志
九州芸術工科大学教授	沢村　仁	九州大学助教授	西谷　正
熊本大学助教授	甲元眞之	北九州市歴史博物館	小田富士雄
奈良国立文化財研究所	森　郁夫	奈良国文文化財研究所	金子裕之
元熊本大学助手	板楠和子	九州歴史資料館	田村円澄
大宰府発掘調査事務所	石松好雄	大宰府発掘調査事務所	高倉洋彰
大宰府発掘調査事務所	横田賢二郎	大宰府発掘調査事務所	森田　勉
文化庁	桑原憲郎	佐賀県教育庁	高島忠平
菊池市教育委員会	田中義和	菊鹿町教育長	高田貫一
菊鹿町社会教育課	松永鶴広	菊鹿町社会教育課	
米原区長	本田啓介	米原地区の皆様	

3　本報告書の作成

第六次・第七次調査によって出土した遺物は熊本県文化財収蔵庫に搬入し、水洗、注記などの作業をおこなった。昭和57年度の事業として報告書を作成することになったので、昭和57年10月から熊本県文化財収蔵庫において調査結果の整理を開始、同年12月から原稿、図版作成に着手し、昭和58年2月に出版のための基礎作業を完了した。

本報告書は七次にわたって行なってきた鞠智城調査の一応の総括となす為、第一次～五次調査の成果も含んでいる。第一次～四次調査の概報は熊本県教育委員会より刊行されているものであるが、発行部数が少く、今日入手が容易でない為、今回改めて再編集し刊行した。この作業にあたっては、第一次～四次調査を総括された鞠智城調査団長の乙益重隆国学院大学教授、三島　格、田辺哲夫、緒方　勉、上野辰男、隈　昭志、杉村彰一、桑原憲彰などの諸氏関係者の皆様から助言をいただいた。なお再編集にあたっては、旧原図を再検討し、全体の統一を取る為旧版の原図を整理し、一部差し換えている箇所もある。この作業には、かって第一次～四次調査にあたって調査事務を遂行してきた文化課主幹上野辰男の助言、協力があった。

また第五次調査については、菊鹿町教育委員会の了解を得、調査成果を再録している。第六・七次調査については各分野の専門員から多くの助言を得た。日野尚志佐賀大学教授より、鞠智城に関する玉稿をいただいたので付論として掲載した。

本報告書の編集は、隈　昭志、上野辰男の助言を受け島津義昭が行なった。各項目の執筆者名は各文末に記すとおりである。英文目次、要約は熊本大学甲元眞之氏をわずらわした。

4 調 査 地 区

鞠智城内について発掘調査および実測調査が実施された箇所は次の14地点である（Tab. 1・Fig. 1）。地表に露出している全ての遺構は、大略調査を完了したとみてよいと思われる。古代山城に通有にみられる水門などを欠く点に鞠智城の特質がみられる。

Tab. 1 鞠智城調査地一覧

遺構名	地点名	No.	調査内容	調査年次	備 考
門礎石	池 ノ 尾	1	実測・地形測量	1967	
	深 迫	2	発掘・地形測量	1967	県指定史跡
	堀 切	3	実測・地形測量	1967	
	木野神社	4	実測	1967	
石 塁	馬こかし	5	実測	1967	
	三 枝	6	実測	1967	
礎石群	長 者 山	7	実測・地形測量	1970	県指定史跡
	宮 野	8	発掘	1970 1980	県指定史跡
	長 者 原	9	発掘	1970	県指定史跡
	上 原	10	発掘	1979 1980	
	米原地区内	11	所在調査	1968	
	佐官どん	12	発掘	1967	
	阿 高	13	実測	1968	
土 塁	佐官どん	12	発掘	1968	
	深迫地区	14	発掘	1968	

この表では土塁外形図を作成した箇所は除いている。
No.は Fig. 1 と対応する。

5 調 査 日 誌 抄

A 第一次調査 1967年7月24日～8月2日

7.24 午前11時宿舎地延命館集合、午後2時から結団式の後、米原台地周辺の地形、遺構を見てまわる。夜調査員会議。調査計画、内容、目標、分担、問題点について討議する。

7.25 時々の小雨をついて調査は開始される。鞠智城跡北西部外郭線と想定されていた立徳、頭合、堀切一帯の踏査を開始する。密生した山林のため歩行も困難である。馬こかしは人夫による伐採と平行し測量杭打ちをはじめる。深迫の門礎石地点は測量と共にトレンチを入れる。米原地区測量も骨組測量を進める。

7.26 池ノ尾門礎石の調査をはじめる。外周班は米原台地西側の山林中を遺構を求めて歩きまわり、深迫、馬こかしでの作業は順調に進む。夜の研究会で鏡山教授から指導をいただく。

7.27 馬こかし、池ノ尾、深迫、測量各班の作業は順調に進行する。

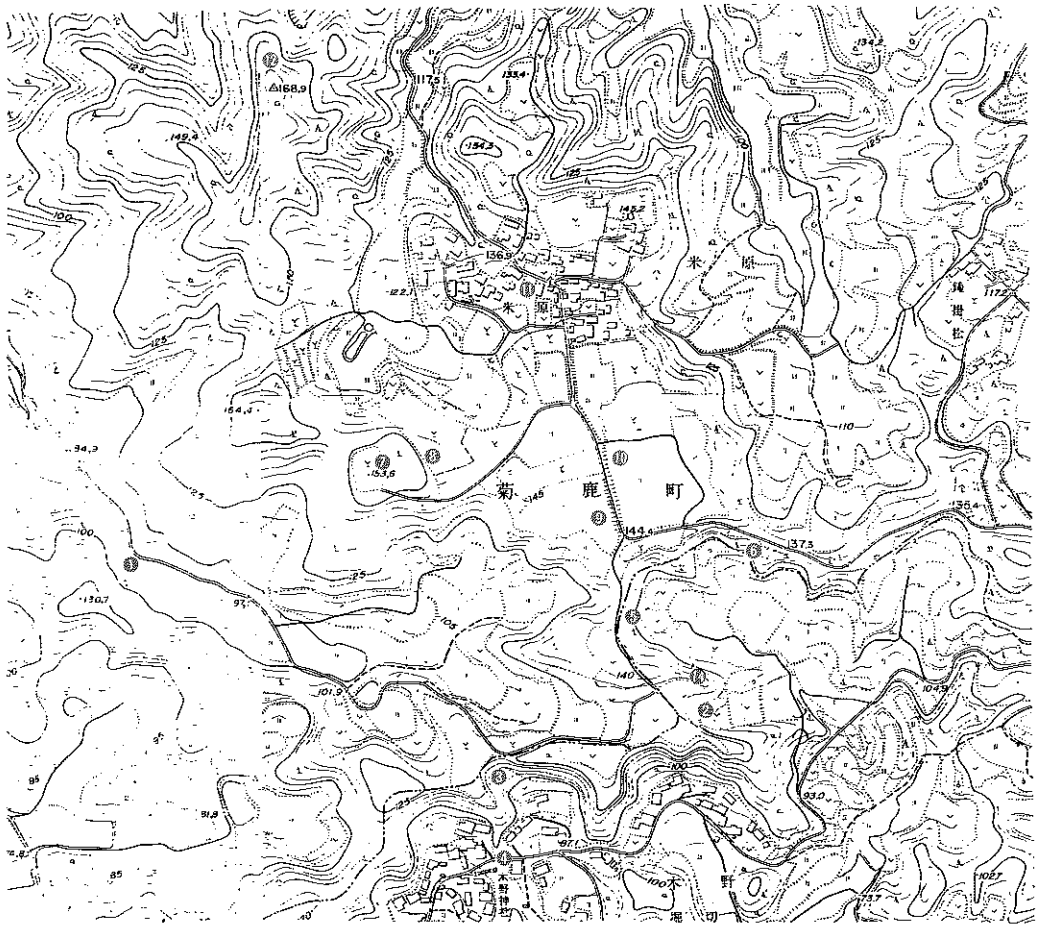


Fig.1 鞠智城調査地点図　(番号はTab.1と対応する) S＝1：10,000

7.28　深迫のトレンチ面積を拡張する。馬こかしの石垣の測量を終る。池ノ尾門礎石の付近で土塁等の遺構をしらべたが明確なものは出なかった。踏査の結果外郭線は米原、宇田線の崖線ではないかと考えられるようになった。

7.29　猛烈に暑い。堀切門礎石の作業にかかる。堀切集落から13名の労力奉仕があり、約2m下に埋まっていた礎石を露出していただく。深迫礎石周辺のトレンチを拡大する。三枝の実測にかかる。金頭、稗方を結ぶ外周線も調査したが人工的遺構は見られず。

7.30　堀切門礎石実測、地形測量を進める。佐官どんは昨日午後から下刈を開始したが午後露出していた礎石と思われる石のまわりを掘り出す。

7.31　堀切、深迫、三枝各班共に測量実測を進める。佐官どん発掘と平行し実測を進める。鏡山九大教授と九大生4名来る。

8.1　堀切、三枝、佐官どん調査を終る。外周線は鏡山教授と坂本らまわる。

8.2　各班とも図面の修正、深迫をはじめ各発掘地点の埋めもどし、物品整理等を済ませる。現地で午後1時30分から調査結果報告会および解団式をおこなう。

3,9　午後6時宿泊地延命館に集合、第2次調査については打合会をひらき、調査対象、方法、任務分担について討議する。

B　第二次調査　　1968年3月10日～3月12日

3.10　米原地区500分の1図の修正。ステッキボーリングの結果、長者原の高木則行氏所有水田、地表下50cmに礎石列1群を発見する。

3.11　ボーリング調査を進めたが確実な遺構は発見できなかった。長者原の揚水ポンプ室付近では礎石群があった地点を教えられたが、開田によって1m以上埋まり、たしかめ得なかった。宮野の開墾地で瓦がかたまって出土する。

3.12　宮野の瓦出土地は遺構に直接結びつかなかったが、その東の桑園中地表下60cmで礎石列を発見する。地形測量と共に礎石列の実測図を作る。午後3時調査を終る。

C　第三次調査　　1968年8月17日～8月23日

8.17　午後2時40分より土塁線の探索。明日以後の断面図作成箇所をさがす。長者山と灰塚との間にある堀割を発見。

8.18　コシカケ松に上り、土塁と推定される切落しをみる。頭合集落の角田一郎氏宅内に礎石らしきものあり。阿高礎石群を調査。

8.19　御金倉の測量。

8.20　阿高礎石群の実測。谷頭の土塁の実測をおこなう。池の堤の上の切落し実測。

8.21　深迫地区の実測。佐官どんより団子冷ましの坂までの実距離の計測。

8.22　長者山礎石群の実測。佐官どん、深迫の撮影をおこなう。鏡山教授来訪。長者山、深迫、堀切、池ノ尾を案内する。

8.23　佐官どん埋めもどし完了。現地引揚げる。

D　第四次調査　　1970年2月13日～3月8日

2.13　結団式。長者原発掘準備にかかる。長者山測量の準備にかかる。

2.14　宮野礎石群の露出作業。長者原礎石露出作業。長者山にトラバースを設定。

2.15　宮野礎石群の縮尺50分の1の実測図を作成。

2.16　長者原の実測、写真撮影。宮野礎石群の測量。長者山測量。午後雨のため作業は中止。鏡山猛氏をかこんで討論会。

2.17　阿高礎石群について鏡山猛氏から教示を得る。宮野礎石の実測・撮影。

2.18　宮野礎石群の地層断面図の作成。長者原礎石群の実測と写真撮影。

3.8　菊鹿町教育委員会、菊池市教育委員会、米原区長に挨拶にまわる。

E　第五次調査　　1979年9月10日～11月30日

9.10　町道拡幅地区を踏査する。その結果発掘期間にはほぼ30日間必要であると考え10月1日からの調査に向けて準備等に入った。今回の調査においては調査事務は町当局で行なったが、調査用具の準備等に手間がかかり、用具類が不充分な状況のまま調査に突入した。現場における作業は町当局の努力にもかかわらず、発掘人夫の欠員等で困難をきわめたが、当初の予定日数を20日間延長し11月30日完了した。

10.1　菊鹿町役場において調査の方針について打ち合わせを行なった。町道より西側、上原地区より調査を行ない、完了後東側部に漸次移行することとした。

10.2～4　A区に第Ⅰ号～Ⅴ号まで5本のトレンチを設定。浅い所で40*cm*、深い所でも1*m*でローム層へ達する。南側より北側へゆるやかに傾斜を持つ。全く遺物、遺構等は検出されなかった。

10.5～10　B区及びC区に南北方向のトレンチを各一本ずつ設定する。B区は工事に先だち旧地権者が採土を行なった為に調査地区を半減している。トレンチにおいてピットを検出し確認に努めたが不明である。C区においては瓦、土器類等を検出し一部焼土らしき面を検出した。しかしながら、調査面積の遺構面が不明である為にこの調査区の調査を一応中断して、次の区へ移動した。

10.11～15、11.1～2　E区では南北方向にトレンチを設定した所、礎石が一個確認された為に、全区拡張を行なった。まず、削掘機により表土剝ぎを行ない、平面プランの確認を行なった。瓦、中世陶器、土師器、須恵器等がSK502、SD501・502に落ち込んだ状況で、南側及び西側には、近世陶磁器を含むSD503・504が検出された。さらにこの地区では総数7個の礎石が発見され、礎石を抜き取ったと思われる一連の土壙SK503・504も検出されたが、礎石については全個とも原位置を保っていない。

10.1～31　再度B区及びC区にもどる。茶褐色土下部より遺物が全面にわたって出土した。大量の瓦に伴い、土師器、青磁が包含する状態で出土したが、遺構に伴うものではなく、下層から検出されたピット群の上面にかぶさる状態であった。さらにD区では南北方向にトレンチ

を設定した所、瓦類の出土を見たために第Ⅱ層までの全面剝ぎを行った。西側に道路状遺構ＳＦ501を、北側に楕円形土壙ＳＫ501を検出した。部分的に炭化物、炭化米の散布が見られたが層を成すようなものではない。さらに遺物では土師器、瓦、土器、瓦等が出土したがこれもまた遺構に伴ったものではなく、西側に向って流れ込んでいる。

11. 5～8　Ｆ区～Ｉ区までの発掘にとりかかる。Ｆ区は、昭和42年度に調査された田の続きで、通称長者原礎石群と呼ばれている。前回未確認部分、礎石の続きが予想されたが直接関係する遺構は検出されなかった。隣接するＧ区では田のコーナーの角であり、深い所でも80*cm*でローム に達する。Ｈ区においても同様であり、40*cm*でローム層に到達し、中にピットが数個検出されたが、直接関係するような遺構は確認されていない。

11. 9～30　各遺構の実測および調査区全体の実測を行なった。30日、各調査区の土層の比較検討を行ない、発掘調査が終了した。

Ｆ　第六次調査　　1980年11月20日～11月27日

11. 20　番地、トレンチ設定　Ｕ～１トレンチ～１～17

11. 21　Ｕ～１トレンチ～１～７　掘り下げ

11. 25　Ｕ～１トレンチ～１より地山面（黄褐色粘質土層）で、径70*cm*程の黒色土（硬い）のピット確認。Ｕ～１トレンチ～１より、地山上面で暗褐色土のピット（30×60*cm*）を確認、掘る。内部に遺物ナシ。Ｕ～１トレンチ～11・13拡張部から下図の遺構確認。弥生期の住居址の可能性有り。

11. 26　Ｕ～１トレンチ～11・13拡張区発掘。平面、東西断面実測図作成。遺物エレベーション。写真撮影トレンチ南壁の土層確認。柱穴はϕ30～40*cm*、深さ20～60*cm*以上まで。竪穴、柱穴ともに黒褐色土の埋土。遺物は弥生土器を中心としている。

11. 27　グリットのセクション実測。平板測量。埋めもどし。竪穴状遺構の実測（断面）。写真撮影（セクション、遺構）。Ⅲ～Ⅴ層に遺物出土する。Ⅱ・Ⅲ層間は不整合。

Ｇ　第七次調査　　1980年12月１日～1981年３月27日

12. 1　上原区トレンチの埋めもどし。平板測量。宮野礎石露出作業。

12. 2　宮野礎石群、礎石露出作業。トレンチ設定。飛渡一屋敷の境に樋門様の石組あり。

12. 3　宮野礎石群の南側と西側にトレンチをいれる。３層上面で一応ストップ。

12. 4　Ｂ～Ｄ・２を発掘。Ｂ列を発掘。

12. 5　鹿本高社会科教員研修で来訪。Ｂ・２～Ｄ・２地区の発掘。Ｂ・９礎石の抜き取り穴発掘。

12.8　C～3・4、D～3・4礎石周辺の発掘。

12.11　B区を5層の版築層まで掘り下げて、雨落ち線を検出する作業。

12.15　A列のセクション実測。

12.16　C区の掘り下げ作業。

12.17　D区の掘り下げ作業。B、C列中間セクション実測。E区では打製石斧。F区で「すり石」。D区御領式が出土する。

12.18　C～2、D～2北側セクション実測。C・D列には、A・B列でみられる硬い黒色の地山がはっきりせず、にぶい褐色土に変化するようで、発掘では注意を要する。

12.19　西側雨落ち溝、上層遺物写真。5列目セクション実測。1列目、土層確認、トレンチを掘る。

12.20　西側雨落ち溝上層遺物実測。雨落ち溝、西南コーナー部発掘。

12.21　西側雨落溝上の遺物レベリングとり上げ。雨落ち溝露出。

12.23　雨落ち溝の露出作業。九大、横山浩一氏専門調査。

12.24　発掘作業休み。町当局との打ち合わせ。田村円澄氏見学。池ノ尾門礎石、北側斜面に土塁を確認する。

12.25　礎石間の遺物実測と取り上げ。土層確認トレンチ、北壁A～9—A～8間。A～9東とB～9西の間。

3.4　発掘区内の整掃。遣り方の材料の準備。

3.5　全体写真の撮影。遣り方設定。

3.6　遣り方設定終了。測量基準杭設定。長者山の整掃。

3.7　長者山礎石建物跡の礎石露出。SB—2の平板測量1／100。写真撮影SB—1。

3.9　長者山礎石建物跡の礎石露出。平板測量1／100。宮野礎石建物実測。

3.10　長者山平板測量。宮野礎石建物跡実測。

3.11　宮野礎石建物跡、遣り方実測。宮野礎石建物跡礎石抜取り穴発掘、及び整掃。長者山整掃。

3.12　礎石群北部の実測。礎石埋め戻し穴、抜き取り穴掘り下げ。B—5礎石横には布目瓦が集中して出土する。B—6埋め戻し穴隣を深く掘り転落させる。礎石旧位置の下には黒色の版築様の土層があり、地山の掘り下げ地業を行なっていることが考えられる。

3.24　周辺調査。三枝写真撮影他。

3.26　菊鹿町、菊池市文化財保護委員合同研修会説明。宮野礎石列断面図。

3.27　宮野礎石列断面図作成。遺物とりあげ。

第Ⅱ章　鞠智城の歴史

1　鞠智城の歴史

鞠智城のことがはじめて史上の記事にみえるのは『続日本紀』文武天皇2年（698年）5月の条に「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕ひ治めしむ」とあるのが最初である。当時この城は大宰府の北の備えとして設けられた大野城と、西南方の備えとして設けられた基肄城とともに、南の備えとしてとくに重要な施設であったことがうかがわれる。これより先に大野、基肄城の築城については『日本書紀』天智天皇4年（665年）秋8月の条に、百済の王族出身でかつ、祖国を失い日本に亡命して来た達率憶礼福留・同四比福夫をして、筑紫国において大野および椽（基肄）の二城を築かしめたことがみえる。故にこれらの二城とともに、33年後になって繕治せしめる必要を生じた鞠智城も、大野・基肄の二城と相前後した頃築かれたことがうかがわれる。

『日本書紀』によると西暦7世紀の中頃は、わが国にとって内憂外患、多事多難な時代であった。すなわち645年孝徳天皇の大化元年には大化改新が行なわれ、その国内整備もととのわないのに朝鮮半島では、つぎつぎに重大な事態が生じた。そして天智天皇2年（663年）には、百済救援のため出兵していた日本の水軍と、唐の水軍が今の韓国忠清道錦江の河口にあった白村江において激戦し、ついに日本は敗北し、百済は滅亡するにいたった。このような国防上の急にそなえて日本の各地には、多くの防塞施設が設けられた。まず天智天皇3年には対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽を置き、筑紫に水城が築かれた。ついでその翌年には長門国に城が築かれ、大野・椽城が築かれたことはすでにのべた通りである。さらに同6年には倭国に高安城を讃吉国山田郡に屋嶋城を、対馬国に金田城が築かれた。このような情勢下にあって鞠智城も築かれたのである。

鞠智城はどこに築かれたのか『日本書紀』にも『続日本紀』にも明らかではない。しかし後にのべるように平安時代になって、史上の記録に散見する菊池城が肥後国にあったことと、ここにのべる鹿本郡菊鹿町米原を中心とする遺構を考える時、それがこの地にあったことは疑念の余地がない。とくに鞠智はククチと読まれ、平安初期に編纂された『倭名類聚鈔』によると、肥後国菊池は久々知とよばれた。故に上古の終り頃まで鞠智と書かれたのが、奈良時代になって二字好字佳名の原則から、菊池と書かれるようになったことは推察に難くない。

菊池城は平安時代になるといろいろと不吉な事件がおこった。まず『文徳実録』によると天安2年（858年）閏2月「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という奇怪な事件がおこった。そして「丁巳、又鳴る」とみえ、相ついで不可解な事件が重なっている。当時の菊池城院が現存する遺構のどこに比定しうるか明らかでないが、今後の研究課題として注目される。さらに大宰府の言上した報告によると、同年5月1日「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という三度目の怪事件がおこっている。そしてこれらの事件があたかも前兆をなすかのように「同城の不動倉十一宇火く」という記事をみるのである。おそらく今回調査の行なわれた米原部落の南側、通称長者原の一帯から出土する焼け瓦と火にかかった礎石、焼け米は、その時の火災を物語るものであろう。

さらに『三代実録』元慶3年（879年）3月16日丙午の条によると「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」という記事がみえる。このばあいの「菊池郡城院」は一に「菊池郡城境」とも「菊池郡城院」ともみえるが、おそらく菊池城院のことにはかわりなかろう。とにかくこうした一連の不吉な事件が相ついだ後、菊池城のことは永遠に史上から消えてしまうのである。そして城の所在地はもちろん、遺跡、遺構さえもわからないまでに忘れ去られてしまった。そして城のことが再び問題視され、考証されるようになるのは江戸時代後期以降のことである。その研究過程を略年譜風にたどってみることにしよう。　　（乙益重隆）

2　研　究　略　史

1．鞠智城についての研究文献は江戸後期になってあらわれた。渋江公正の『菊池風土記』には『文徳実録』の「天安二年菊池郡不動倉十一宇火」との記事を米原村長者屋敷に擬している。

2．八木田桃水は、『桃元問答』で「菊池の初代則隆以来の居城となった深川の菊の城は、鞠智城の旧跡を取りしつらひて居城としたとも考えられるが、城家の居城であった木庭村も鞠智城の旧跡か」とも述べている。

3．『肥後国誌』は深川説を否として、鞠智城は兵庫や不動倉などをもっている官城であるので隈府、水島、米原の一帯にわたる広大な地域を占むるものであろうとみている。

4．明治になって吉田東伍は『大日本地名辞書』で「鞠智城を辺地の肥後国菊池郡に求めるのは、大野城を豊後国大野郡に求めるのと同じである」と笑っている。

5．昭和に入って大阪毎日新聞社熊本支局長であった中島秀雄氏は同紙上に「米原の要害こそ

続日本紀文武天皇二年五月、大野、基肄城と共に繕治された鞠智城跡であろう。礎石の並ぶ山、多くの礎石が出た畑、焦米が層をなして埋っている畑、涼の御所、烏ヶ城、シャカンドン、紀屋敷、宮床、馬洗淵、長者井などの地名がある」と報じている。

6. 熊本地歴研究会は基肄城跡を踏査して米原における遺構と比較し、基肄城跡の研究者久保山善映氏や松尾禎作氏等も米原遺構を踏査して「長者の的石」は朝鮮式山城の城門礎であることを確めた。

7. 坂本経堯はしばしば米原一帯の地形、遺構を踏査して昭和12年8月「地歴研究　第10篇第5号」に「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」さらに昭和17年7月「日本談義　通巻51号」に「鞠智城考」を発表した。

鞠智城の文献を集録して性格を考え、米原高台に登る東、南、西の城門礎、水門礎、長者山の礎石間尺、土塁線などは朝鮮式山城の規模に類し、焦米の多量の埋没は天安二年不動倉十一字火くの史実を物語り、とくに土塁線は自然尾根を利用して外側を切落し、鞍部にのみ盛土した状態に注意し、さらに土塁線は米原台地縁辺だけでなく、これを内郭として塁線は頭合より木野丘陵を北に登って城北の谷をいただく外郭を形成することに注意した。

8. 昭和13年城北村長松尾條規氏は城北村史蹟顕彰会会長となり鞠智城跡を調査し標本を建てて保護顕彰につとめた。

9. 昭和28年10月　九州大学教授鏡山猛氏を中心とする九州文化総合研究所は大宰府、大野城、基肄城の調査の一連として「鞠智城跡の調査保護計画」をたてて県に陳情したが実現しなかった。

10. 昭和28年11月　坂本経堯は熊本史学会に「鞠智城について」を発表した。

11. 昭和31年8月　国学院大学教授滝川政次郎氏を主査とする菊池古文化調査団は米原一帯の遺構を調査し、とくに長者山の礎石列を実測し、明治大学教授島田正郎氏は菊池市において「高句麗国内城と鞠智城」について講演した。

12. 昭和33年9月　熊本日日新聞社発行『熊本の歴史』に鞠智城跡を米原に求めて登載した。

13. 昭和34年12月　熊本県教育委員会は「史跡伝鞠智城跡」として指定した。　（坂本経堯）

第Ⅲ章　遺跡・遺構の概要

1　地理的位置

菊池・山鹿平野の北縁を限る連山の主峰、八方ヶ岳の西南麓には多くの小河川渓谷が入りくみ複雑な地形を形成する（ＰＬ．1）。中でも木野川の支流初田川流域の小盆地、およびその小支谷に面した米原の小盆地は、標高わずかに160m前後の高地にすぎないが、深く湾入した谷や急峻な崖線で区切られ、さながら天然の要害を形成する。このような天然の地形をそのまま利用し、上代山城を築いたのが鞠智城で、その遺構は熊本県鹿本郡菊鹿町大字米原を中心に広く展開する。

2　遺跡・遺構の概要

鞠智城の遺構は従来多くの先学によって探索されてきたが、それらの位置や地名、内容については必ずしも正確に把握されたものばかりではなかった。しかし従来の知見と聞きこみによって知られている遺跡は概ね次の箇所をあげることができる。

まず建物礎石群の所在地についてのべると、米原集落内では人家の間をめぐっておびただしい花崗岩の礎石があるが、それらのほとんどが旧位置から移動している。また米原集落の南方、長者原の畑地帯には、明治の頃まで礎石列が残っていたというが、耕作のじゃまになるため埋めたり割ったりし、今では「長者どんの足形石」をはじめ数個が点在する。とくに昭和40年夏の開田工事には、多くの礎石が発見されたが、多くは庭職人に買いとられたという。また長者原の西端を限る高地を長者山とよぶ。この地は現在集落の共同墓地と雑木林、くぬぎ林からなり、建物の礎石列がみとめられる。礎石列は実測された結果軸心間隔７尺、南北５間、東西４間の建物４棟が、東西に２棟、南北に２棟ずつならんでいたものと想定されている。眺望すぐれ、伝説によると「米原長者の御金蔵跡」とよばれる。また長者山の東麓、字宮野の畑からも古瓦が発見され、周辺に礎石列があったというが今では埋没して明らかでない。

その他頭合（つごう）集落の宅地内には、もと並んだ状態で礎石群があり、田子山および頭合を起点として木野の丘陵を北にたどった土塁線の頂部にも礎石群があったというが、いずれも現存しな

い。

つぎに城門礎石とみられるホゾ穴のある石材についてのべると、まず米原集落の東南側、菊池市深迫には巨大な平石が畑の中に斜に埋まっている。その相対する礎石こそ現存しないが、おそらくこの地は鞠智城に出入する城門の一つであったことがわかる。同様なホゾ穴のある門礎石は菊池市堀切より上りつめた旧道のほぼ中央部に埋没しており、これと相対する門礎石は現在堀切の木野神社の鳥居わきにすえられている。その他にも城門礎石は、黒蛭の谷から米原に上る道路わきの池ノ尾に1個残る。石材は、深迫や堀切の例に比べるといちじるしく小さいが、ホゾ穴の大きさや形はまったく同じで、花崗岩を使用する。おそらくその相対する礎石は洪水などで流失埋没したのであろう。

鞠智城の外周を特色づける施設の一つに、山の尾根をめぐって、延々とつらなる土塁線がある。その土塁は盛り土によって堤防状をなすものもあるが、多くは山の尾根の部分を連続的に加工したものである。すなわち山の尾根の、城外側を急崖に切り落して上面をならし、城内側には犬走り状の「車路」を設ける。このような土塁は福岡県大野城や、佐賀県基肄城などにしばしばみるところで、鞠智城の場合も同様である。現在土塁線のたどりうるのは、米原部落の西方を限る「長者山」および「灰塚」、「ススミの御所」、「佐官どん」の峰にわたる尾根、およびその支脈をなす「権現さん」の峰にわたってみとめられる。その他にも米原集落の南方菊池市の堀切より同市一寸榎にわたる崖線、黒蛭より池ノ尾方面にわたる崖線、木野川の沖積平野にのぞむ頭合集落や本分集落の背後を限る山の尾根などに、断続的にそれらしきものをみる。

以上のほかにも鞠智城の内外には、由緒ありげな地名や施設が各所に点在するが、その実態は明らかでない。すなわち米原集落内には「少監どん」、「紀屋敷（まつりやしき）」、「岩蔵山」、「長者井戸」その他の地名があり、米原西方の丘陵には「ススミの御所」の地名も存する。また黒蛭の谷には石垣を築いてつくった樋門があり、米原集落の南方「馬こかし」の難所には道路の片側を高い石垣で築く。さらに一寸榎に通じる「三枝」にも道路の側面を高く石垣で築いた所がある。もちろんこれらの樋門や石垣は構築手法からみて近世の所産と考えられるが、城の配置や周辺施設から考えて、何か由緒ありげに思われる。

とくに鞠智城の外郭は、米原集落を中心とする周辺約5㎞以内の地域に限られるか、それとも従来言われていたように道場・立徳・頭合の背面をめぐる山の尾根づたいに、牛落しの谷をへだてて黒蛭・堀切を経て東北方金頭（きんがしら）の峯につらなる周囲約11㎞の、ぼう大な外郭線によって構成されるかについては、今後の調査をまたねばならない。　（坂本・乙益）

第Ⅳ章　第一次・二次調査の成果

1　調　査　遺　構

A　池ノ尾の門礎石

鹿本郡菊鹿町本分から頭合を通って約66分の1のゆるい傾斜をのぼって800mばかり行くと右手に池ノ尾の門礎石がある（Fig. 2）。

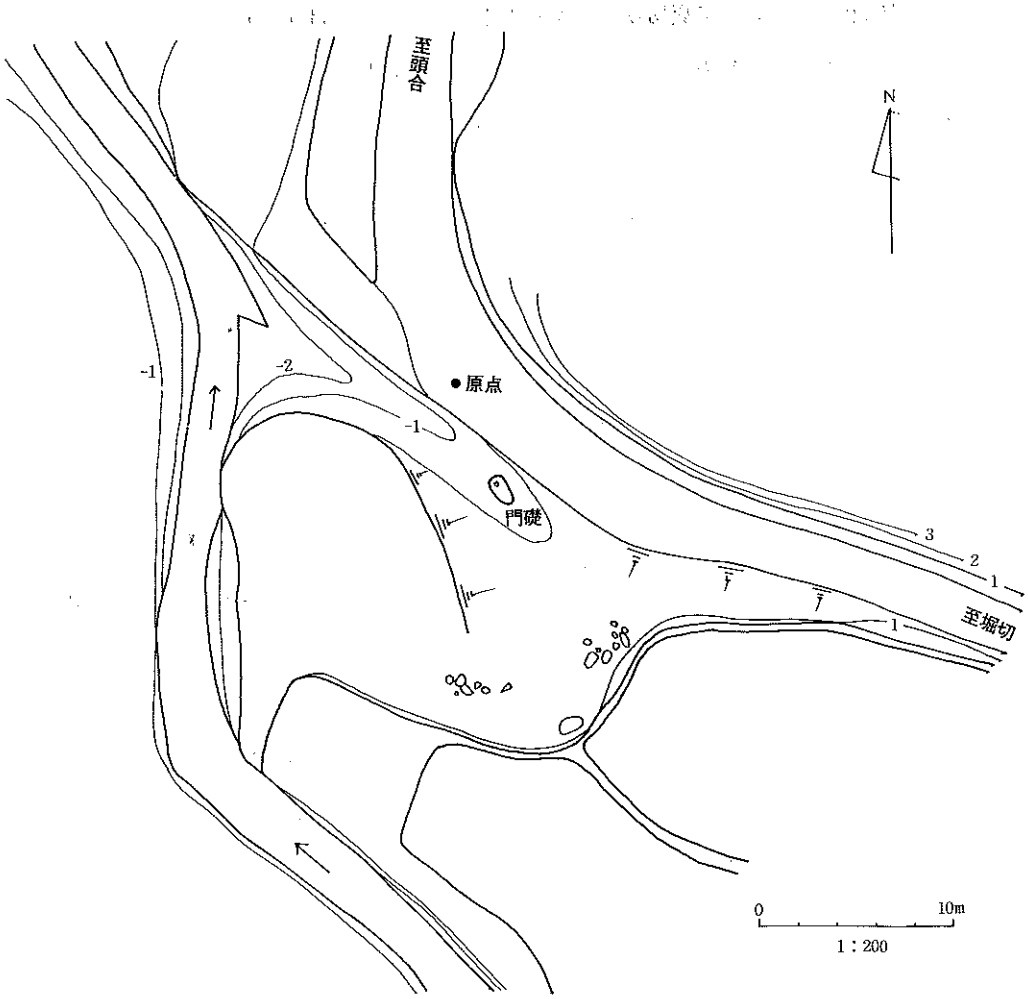


Fig.2　池ノ尾の門礎石周辺地形図

北方から木野・頭合と続いて来た丘陵の稜線——鞠智城の外郭線であろうといわれる——この稜線が、方向をかえて急に西方に屈行する。その方向変換点にこの門礎石がある。西北方からの交通を遮断検問するにふさわしい地点である。

門礎石は雨水によってできた浅い谷の谷頭にある。花崗岩の風化した粗粒砂からなる地盤は侵蝕が激しく、調査時には地表下約50cmに埋没していた。

門礎石の周辺を掘開して地層を調査した結果赤色砂土、青色粘土、花崗岩砂土、灰色砂土、黒色砂土などが間に塊石をまじえて乱雑に堆積していることがわかった。このことから、門礎石の現在の地点は原位置から移動しているといわねばならない。原位置はおそらく現位置から

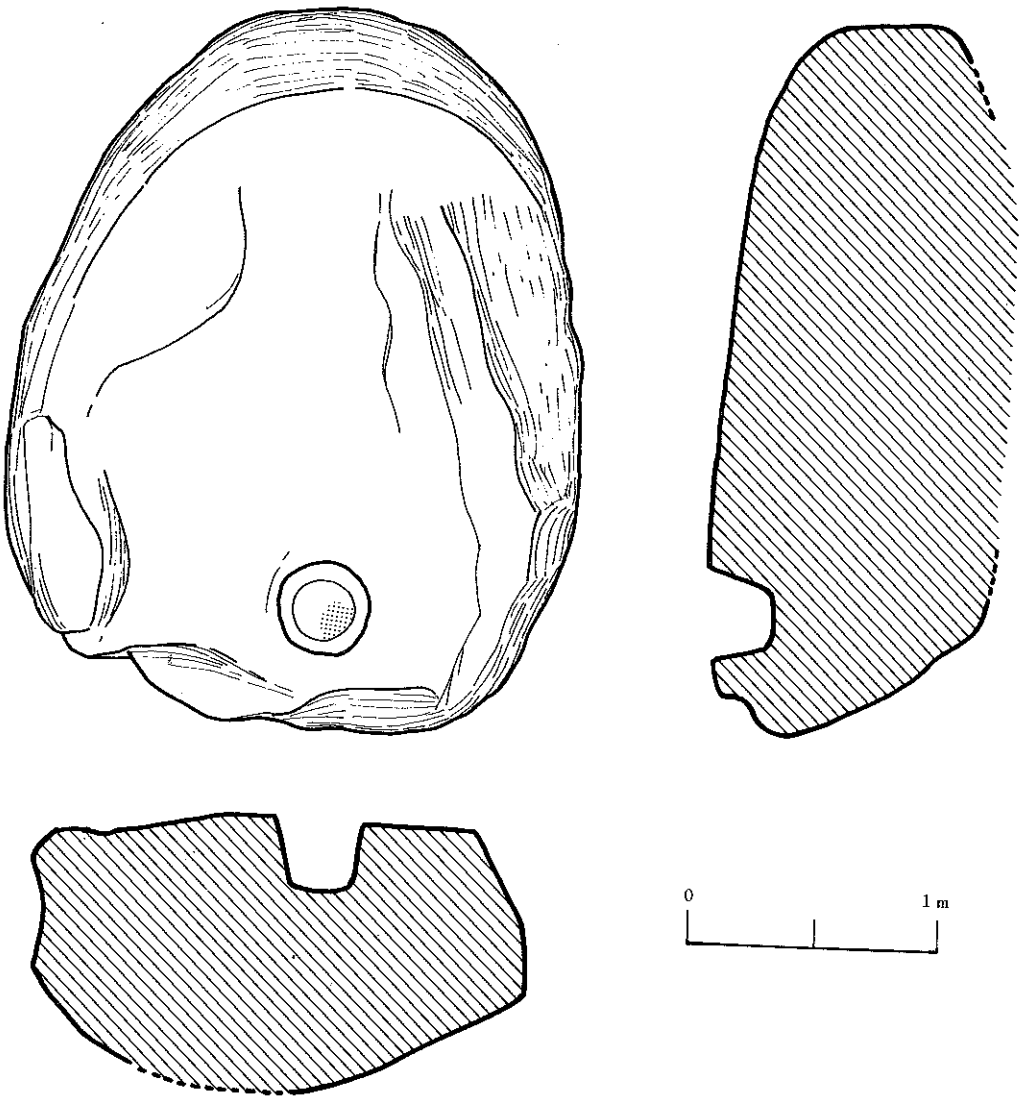


Fig.3 池ノ尾の門礎石実測図(アミは鉄錆の残存部を表す)

谷の方向に約10m ぐらいさかのぼった地点に想定される。というのは、その地点が谷をさかのぼった方向への傾斜変換線にあたっており、現在も畑の畦畔が１m近く高くなっていること、さらに後にのべるが、その点と西方稜線を結ぶ線上にめくら水門のあとではないかと思われる塊石、切石が埋没しているからである。

門礎石の岩質は花崗岩で、長軸が谷の方向にむかい、その平面形は長軸の長さ1.43m、短軸の長さ1.15m の卵形を示す。礎石表面長軸の北端から23cmの点を中心として直径17cm、深さ14cmの門のほぞ穴がある（Fig. 3）。

ほぞ穴の内面は磨滅して平滑である。ほぞ穴の最深部は、穴の中心をそれて北側によっている。ほぞ穴のふちの磨滅の程度も、穴のふちが一様に磨滅しないで、南側の部分が磨滅がつよい。穴の底面に鉄錆がのこっている。門扉のほぞを受けるために鉄製の受け皿がおかれていたことを示すものである。[1)]

現存する門礎石に対応する門礎石があと１基あるべきであると考え、原位置と推定される付近を掘開したが、遂にそれらしいものは発見できなかった。しかし掘開作業の途中、一定の範囲に塊石、切石があることに気付き一帯を掘開した。門礎石の周囲とおなじく流入した土砂が約50cmの厚さに被覆している。

土砂を除去するにつれて多数の塊石、切石が出てきた。その配列に石垣状の遺構が復原できないだろうか、また配列に一定の方向がもとめられないかなど、[2)]細心の注意をもって掘開し測量したが遂に確認できず、今回の調査を打切り再び地中に埋没した。これらの塊石、切石のならびは石垣線をなす可能性がつよい。

註　1), 2)　九州大学教授鏡山猛氏の御教示をうけた。

B　堀切の門礎石

隈府又は黒蛭方面から米原へ入ろうとする重要な通路の一つに堀切がある。読んで字のごとく米原を囲繞する山稜を掘りとおして道路を通じている。この調査に行った当初、泥熔岩の崖を２～30m もの長さにうがってつくった隧道がいくつもあることが深く印象にのこっている。

堀切は高さ約４m の鞠智城の外郭線かと思われる稜線を道路幅3.50m をもって切りとおして通路をつくっている（Fig. 4）。この切り通した南側、米原から言えば稜線の外側に門礎石がある。はじめ崖にたてかけてあったが、あとで現在地に移転したという。調査時には流入した土砂におおわれて全くその所在がわからず、村民にたずね、おおよその見当をつけて掘開作業をはじめ、深さ1.50m で、はじめてさがしあてたほどである。

門礎石は巨大な１枚石を用い、表面を削平して平滑にしている。平面形は長方形を基準とす

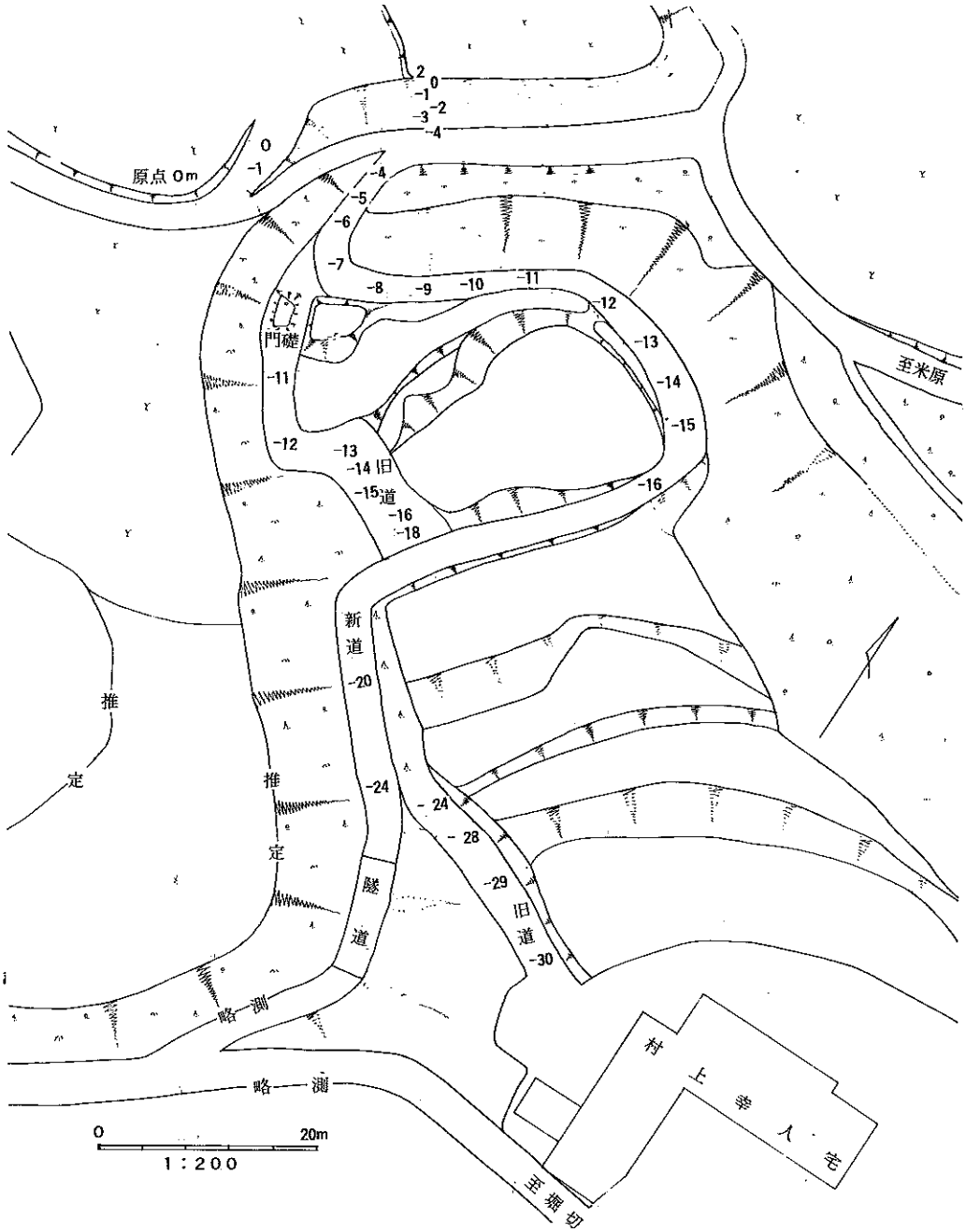


Fig.4 堀切地形図

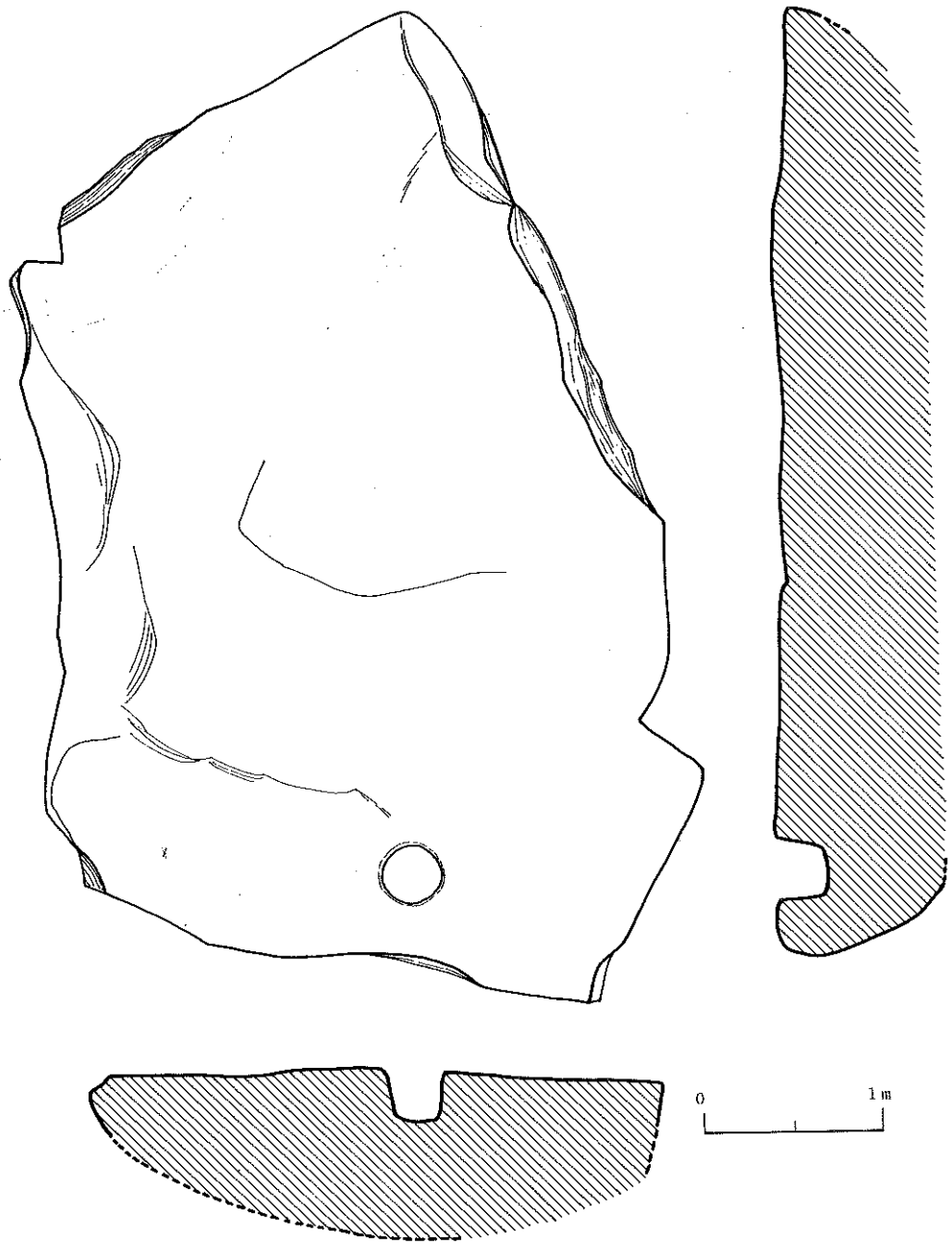


Fig.5　堀切の門礎石実測図

るが変形が著しい。石の長さは長軸線上で2.66m、幅はもっとも広いところで1.84m、石の厚さ約20～50cmを有し花崗岩である（Fig. 5）。

門礎石表面の長軸線上、一側に寄って直径16cm、深さ15cmのほぞ穴をうがっている。穴は底部に近づくに従ってせまくなり底径10cmとなる。穴の南側が磨滅の度が強い。穴の内壁、上線から約5cmさがったところに門扉廻転軸の受皿による茶褐色の鉄錆が残存している。

門礎石のほぞ穴に近い一側面約40cmにわたって緩やかな弧状に欠ぎ取られ、磨研されている。おそらく門扉を支える掘立柱をたてたあとであろう。

おなじ堀切集落の木野神社石段下に礎石がもう1基ある。古老の話では50年ばかり前に堀切の門礎のあった場所からここに移動したといい、前記堀切の門礎石と一対をなすものである。これを仮に木野神社門礎石と称する（Fig. 6）。

木野神社門礎石の平面形は長方形に近いが、それも多少変形している。石の全長は短軸線上で80cm、長軸のもっとも幅の広いところで1.04mを有する。石表面の北端から24cmの点を中心として直径10cm、深さ14cmのほぞ穴がある。堀切門礎石と同質の花崗岩で全体に10度傾いてい

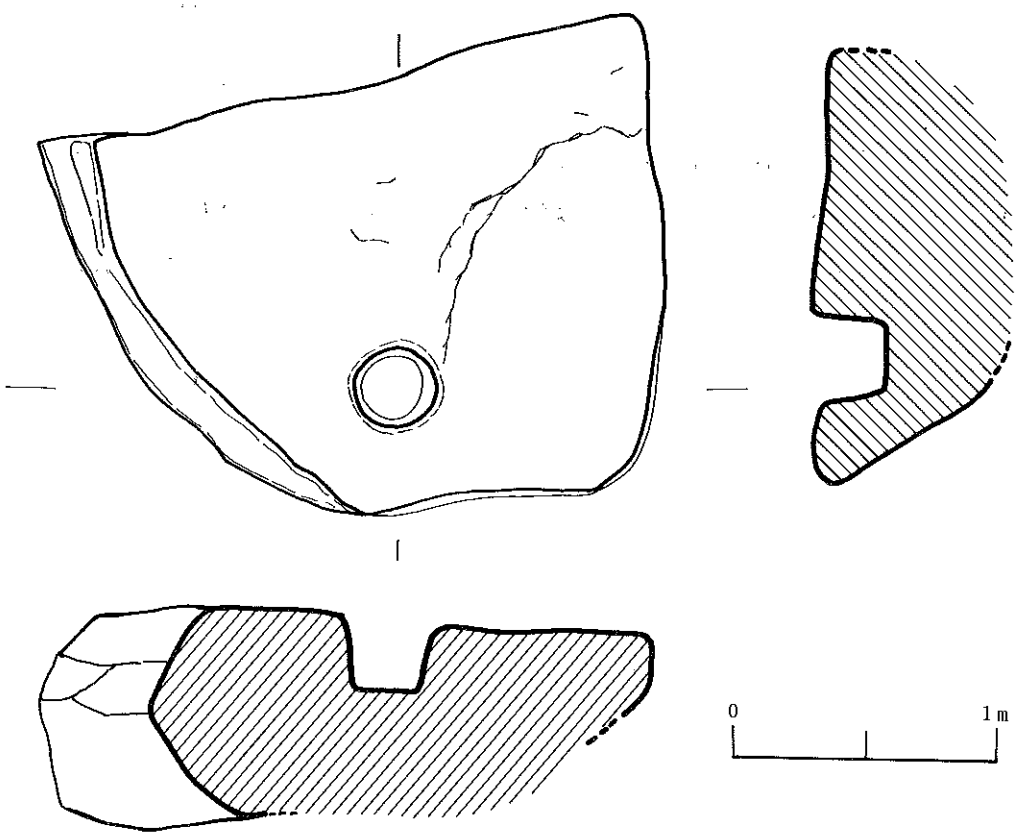


Fig.6 木野神社横の門礎石実測図

調査終了後堀切門礎石と木野神社門礎石の実測図をつきあわせたところ、この2個の門礎石はほぞ穴を両端において、おのおのの石の端が接合することがわかった。もと同一の個体であったのが割截されて1個は原位置近くに残り他の1個は持ち去られて木野神社に運ばれたことが判明した。古老の話は必ずしも全部を尽くしていなかったけれども事実を伝えていたわけである。　（原口長之）

C　深迫の門礎石

門礎石を中心とする遺跡は、鞠智城全域からみればほぼ東南に位置し、行政的には菊池市深迫に属する。古くから「長者ドンの的石」とよばれる巨大な門礎石が、谷頭近くの畠地の崖面近くに半ば傾斜し、埋もれかけている[1)]（Fig. 7）。本期間の調査目的を

① 深迫遺跡の地形測量 $\left(\frac{1}{200}\right)$

② 礎石の実測をかねて、その埋没状況を知るために、礎石に接してトレンチを入れる

の2点にしぼって調査した。以下調査所見の内、重要と考えるものを、箇条書きに列挙して記載する。

門礎石（Fig. 8）

1. この門礎石については、背後の崖上から転落したとも従来言われ、かつそのようなことを推定させる地形でもあるが、この考え方は今回の発掘の結果からは否定される。
2. トレンチ断面の所見によれば、旧地主の萩尾氏が約30年前、この石を移動させる目的で掘った穴が明かに認められ、それ以外には層序の攪乱は全く認められなかった。
3. なお、門礎石の下位及びそれと同一のレベルの層には、布目瓦の破片、石塊、鉄釘、炭化物などが伴出した。
4. 現在門礎石の傾斜するのは、除去の目的で根石を抜きとり、反対側から持ちおこしかけた傾斜と考えるのが、合理性のある考え方であろう。
5. したがって礎石は多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考える。
6. 石質は花崗岩（当地方ではコメ石という）で、その寸法は長径2.68m、短径2.26m、厚さ約80cm以上を測り、上面はことさらに加工した痕跡はないが、概ね平滑面を呈する。一側に偏して円形の枘穴が穿たれているが、仔細に見ると、二段にえぐられかつ完全な同心円になっておらず偏っている。また枘穴内部を観察すると使用による磨滅面は西側がもっとも強い。このことは回転方向に関連する。寸法は下記のごとくであるが、この寸法は池ノ尾所在の門礎石の枘穴の寸法に近似するようである。さらに枘穴のある側の礎石の縁が明瞭なえぐ

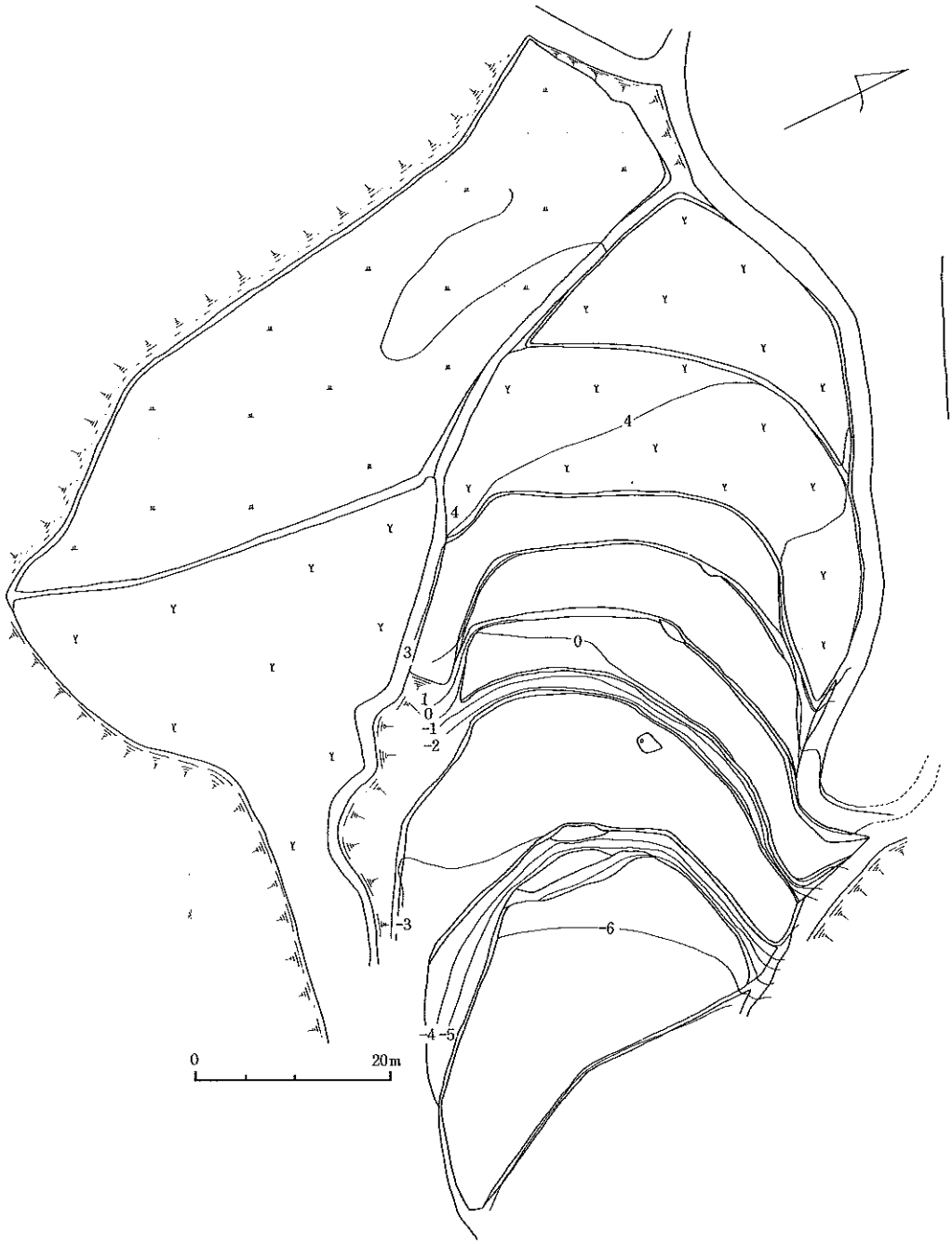


Fig.7 深迫の地形図

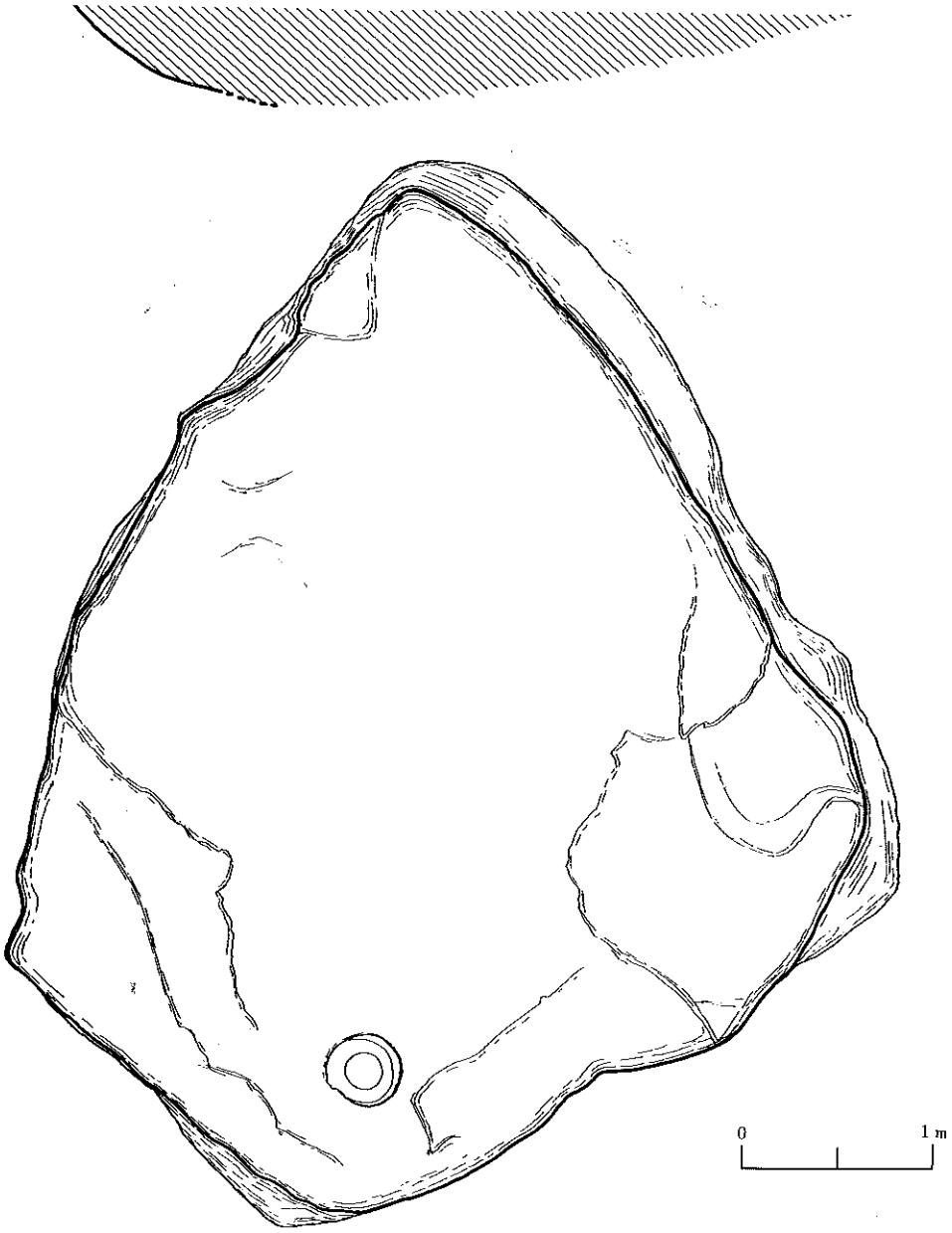


Fig.8 深迫の門礎石の実測図

りではないが、浅い不整形のカーブをもっている。枘穴寸法—深さ14cm（約4寸6分）・短径18cm（約5寸9分）・長径20cm（約6寸6分）。

7. 門扉の柱根につくられた出枘を、枘穴に嵌入して門扉が廻転する式の、枘穴礎石に属するが、枘穴内には堀切門礎石で認められたような、軸受けの機能をもつ鋳鉄の受皿があったような痕跡はない。

8. 廻転の方向を示唆するのは6でのべた枘穴内面の磨滅程度の差異が西側においてより著しいことから、門扉が後に開く「内開」の門扉であったことを推定させる。

9. 対称位置に同様の礎石があるのか否か、片袖式の門扉なのかについては、それを検出するために、トレンチを拡大したのでその項でのべる。

拡大トレンチ

門礎石より南に上記の問題を解決するためにトレンチを拡大した。その結果トレンチ内においては対称をなす門礎石（西礎石）はなかった。但し発掘面積が狭少であるため、結論については、次年度の調査まで留保したい。また門礎石より東側についても、全く鍬を入れなかったので、同様に留保したい。以下拡大トレンチについての所見をのべる。

1. 枘穴の中央より南に約5.8m（唐尺19尺）余の地点に礎石をぬいたあとの根石群とでも称すべき長径約20cm余の石群を発見、石質は花崗岩であるが、凝灰岩も1箇ある（現地表よりマイナス60cmの深さである）。石群の周囲と下位には黒色土を認める。あたかも穴を穿った際に嵌入する上層の土のような印象を与える。石を抜いた穴は現存長径約1.2mを測るが、これは上位は削平されているので上位の径はこの数値よりもさらに大きいことが考えられる。

2. 門礎石と根石群と考えられる石群との間は、後代のいも穴や背後崖面からせり出した土などを別にすると、概ねピンクがかった硬い粘土である。これは人為的な盛土ではない。幅3.6m（12尺）。但し内法を測る。

3. 上記2のピンク色の粘土の地山の東西断面は中央部がわずかではあるがやや高く平坦である。南北断面は門外、つまり谷の方にやや低く傾斜し、黒土をかぶっている。これらの点は自然の地形にも合致している。

4. この地山面には幅12cm程度で長さ20cmの礫がくいこみ凝灰岩の細片や土師質の細片がみられる。

5. 1の石群に近く、直径40cm、深さ34～40cmのピットが検出された。このピットは周囲の土と識別はかなり困難で、ただ硬度を異にする。内部から遺物は検出されていない。

測量における所見

1. 谷頭近く位置する礎石の、相対する谷（迫）はさほど大きい方ではない。開口部近くの県

道まで約300m 位である。けれどもその勾配はかなり急で、現在でも六の段崖が形成されている。深迫の城門に達する道路を考えた場合、往時はたとえ距離はみじかくとも、かなりの坂道であったと考えてよいのではあるまいか。

2. ことに門をくぐって、城内に入ってからは、現在地形のままでは普通の方法では登れない程の崖である。これは谷頭から土をせり出して開いた段畑が各所にあるからである。門礎石の位置から城内と推定される、比較的平坦部まで50数メートルの距離を上るには、どうしてもひどい坂道を登るかまたは曲折の多い道路を通るほかない。

3. 近距離でかつ勾配の急な道を通ったとすれば「階段」を設けるという特別な施設がまず考えられる。現地形においてそれを示唆するかのような「はり出し」が礎石の下の崖面に1箇所、上位に3箇所。これらを当時の階段の痕跡と認められないだろうか。勿論これらは崖面を縦断せねば確言できないことで、決して断定するのではないが、われわれは上記のような想定を今年度の調査時に考えたのであえて記録しておく。

4. この想定をたすけるのは拡大トレンチ所見1・2・3でのべた、硬い地山で、これは両門礎石の間の、路面を物語るものではあるまいか。

5. 深迫の城門に到達するまでの道路についても、中央・右より・左よりなどのルートがあろう。何れであるかについては、憶測する資料はあっても、その証拠はない。上記のことがらとともに次年度の課題である。

最後に、上記各項を要約すると、拡大トレンチにおいて検出した根石群は、西側門礎石の抜きとられた跡で、両礎石の間の硬い地山は当時の路面で、しかも前記のごとき勾配をもつ。しかしてピットは両礎石に附属する柱の穴であろうか。東礎石は枘穴礎石で内扉は後開きであろう。

（三島　格）

註 1）坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」地歴研究　1937年　熊本県地歴研究会刊

D　馬こかしの道

深迫門礎から米原に進む場合どうしても通らねばならない通路がこの「馬こかし」である。この地点は通路が急にせまくなり要衝の地といえる。現在東側は水田が湾入し、西側は軟弱な凝灰岩を鋭くえぐった自然の崖になっている。この馬こかしの通路は坂本経堯氏の記憶によると、昭和初年には非常にせまくて丸太棒を渡してあり、現存する東側の石塁については草木が繁っていてよく分らなかったとのことである。しかし地元の老人の話では石塁を築いた記憶もなければ、祖先が築いたという言い伝えも残っていない。したがって石塁の築造時期は分らないにしてもかなり古い築造であることがいえる。

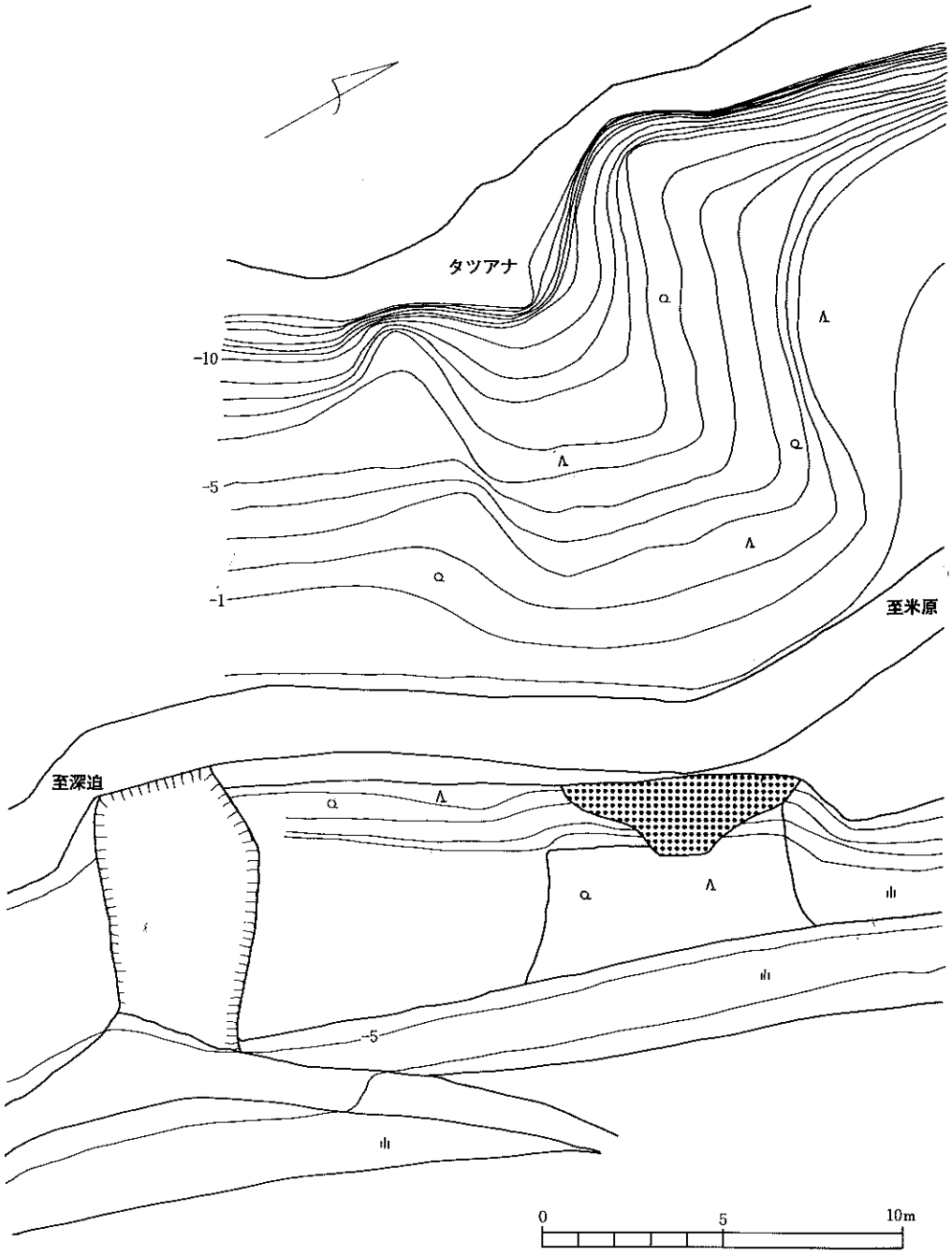


Fig.9 馬こかし地形図

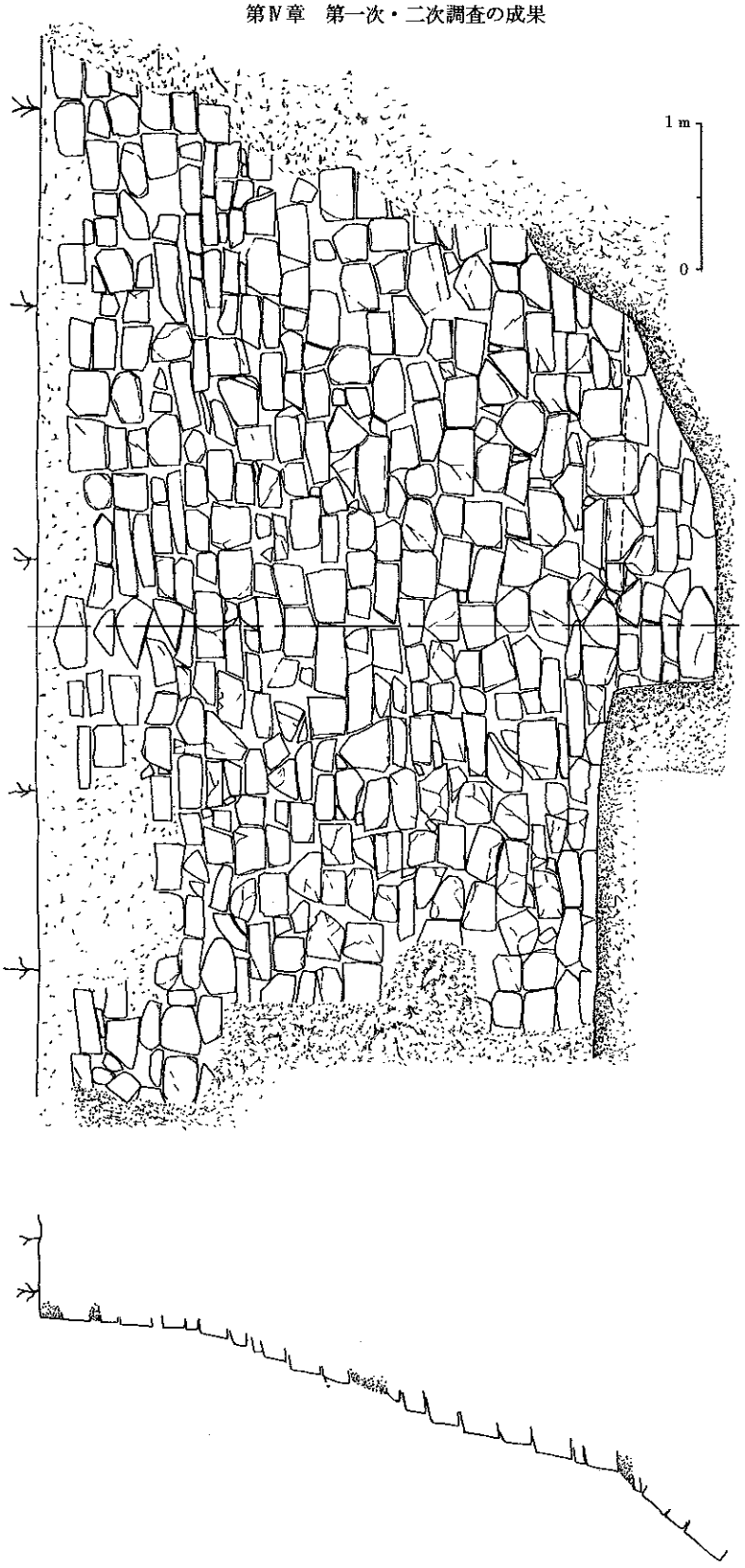


Fig.10 馬こかし石垣実測図

さて石塁は先述のとおりこの通路の東側にのみ認められる。その規模は長さ約6.6m、高さは約4.3mまで確認できる。傾斜は断面図（Fig. 9）に示すように非常に急勾配で、上から約2mまではややそり気味であるが、その下約3.8mまでは幾分ふくらみをもち、それ以下は根固め状に裾を広げている。石材はほとんど凝灰岩を加工して使用し、一部に安山岩質のものを認める。石塁の築造状態は、ほぼ長さ30～60cm、厚さ10～30cmの切石をほとんど水平に積みあげ、すき間には小形の石をつめこんでいる。なお石塁の奥行きについてはその深さ、形状ともに不明である（Fig. 10）。

石塁の裏に当たる西側の崖は目のくらむような急傾斜で、水平距離にしておよそ10mで12mの落差があり、さらにそこからはほとんど切り立ったようになっていて、道路面との比高16.5mを計る。崖の最深部は俗に「タツアナ」と呼ばれており、降雨のときは流路となる。タツアナから上を見上げると、凝灰岩の浸蝕崖がちょうど屏風のように切り立ち、その間からわずかに空が見えるといった感じである。（隈）

E 三枝の石垣

三枝石垣は米原・一寸榎方面をむすぶ道路筋に在る。米原台地の南側北崖にそって道路は遠

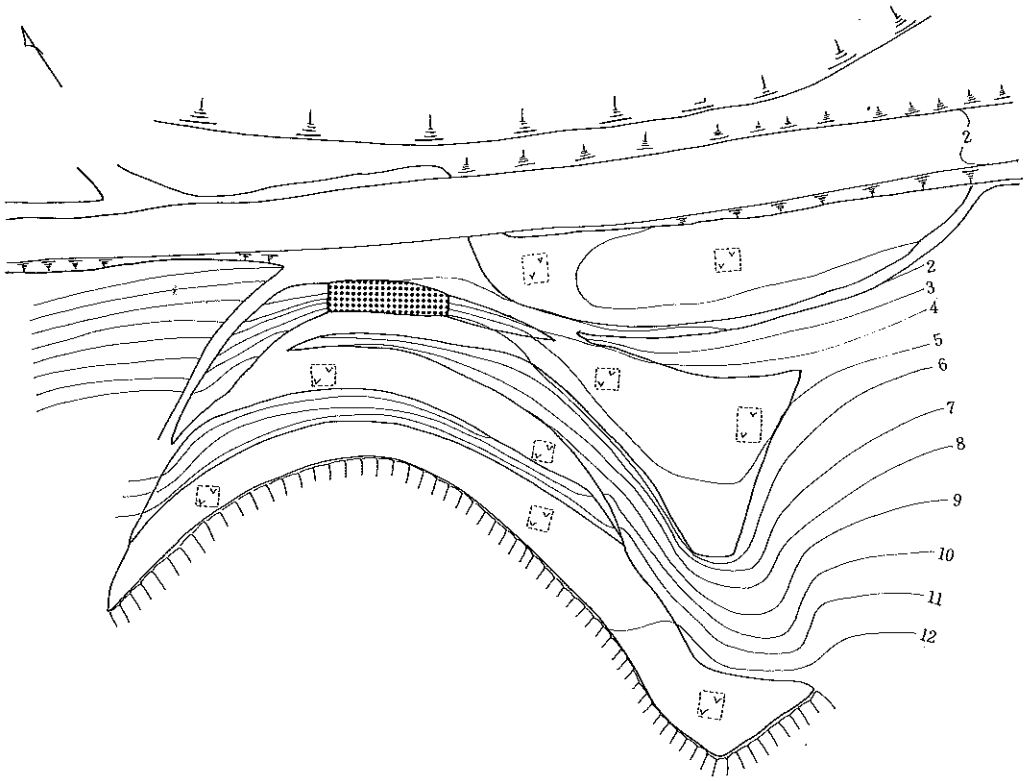


Fig.11 三枝石垣地形図

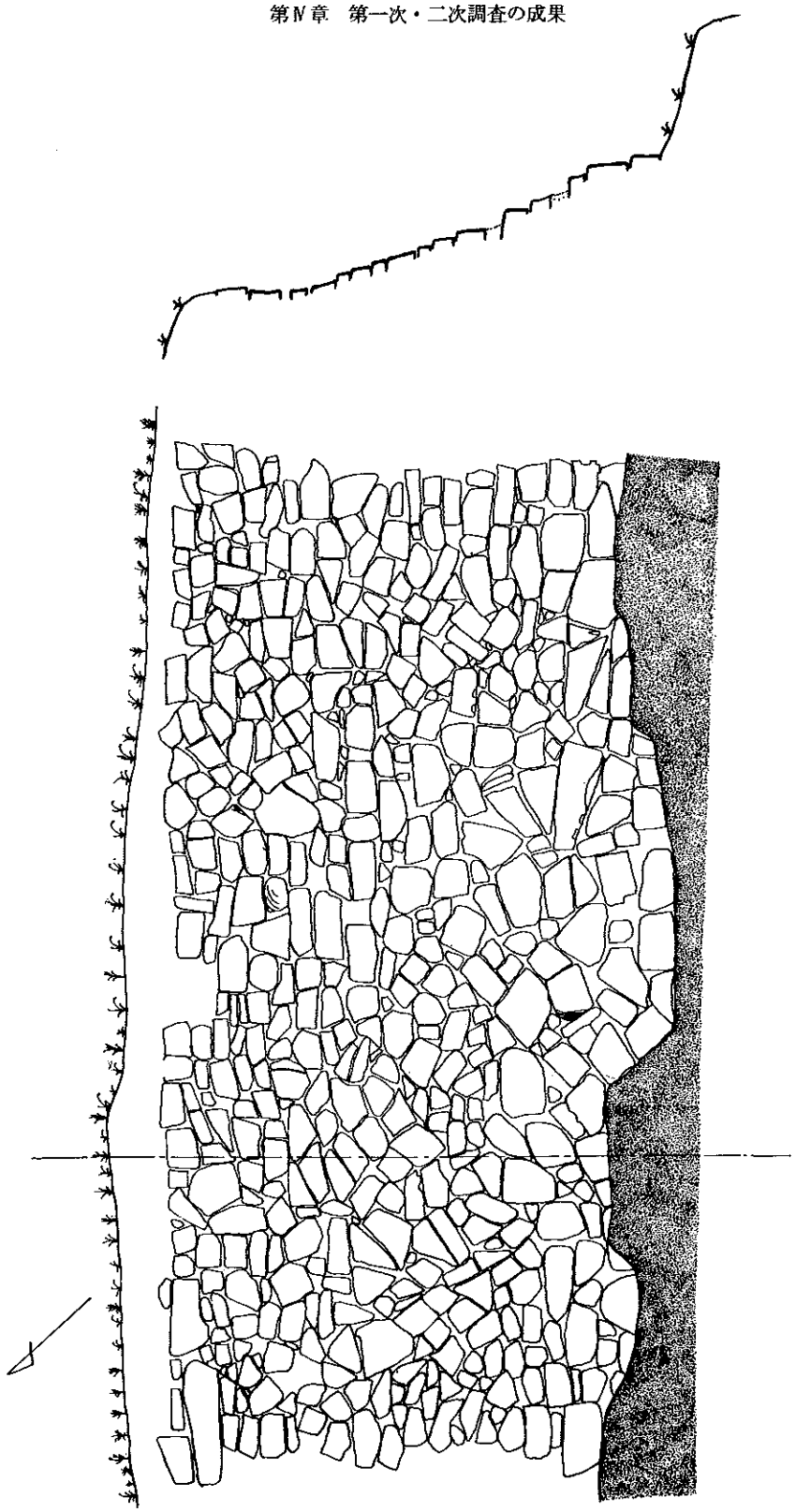


Fig.12 三枝石垣実測図

なる。石垣付近の地形（Fig. 11）は、東西に走る道路の南、北側がかなり急な崖線をなす。

石垣は道路の南面に位置する、道路をはさんだ北側崖には石垣は認められない。しかし、崖の基部に数段にわたって石垣を築いている。

石垣についてのべる（Fig. 12）とその長さは約8.30m。高さ約4.30m。中央部の傾斜は約75度を有する。石垣は15～20段形成されている。石材はほとんど凝灰岩で大きさ約50cm×70cmの切石を用いている。

石垣上部の二段は下部の築造と異り石材は同質であるが、切石を用いて上面を水平に保ち、全体に安定感がある。とにかくこの部分は後世補強したものであろうか。最下部の石垣の築造にあたっては比較的大きな切石を用いて赤土層にくいこませている。

石垣の築造にあたっては空隙の充填に意がそそがれ、切石間の間隙には不定形ではあるが、断面の平らな石材で補強している。

全般的に築造に当っては、下石は左斜めにおかれ、上石は右斜されている。上石が右に落ちようとする力を下石の支点が左側におかれている。このような「組み方」は一般に「右きき」の人の手法に多いという。石組みの一部に矢を打ちこんだ痕とみられるものも認められた。石垣を中心とする附近から遺物の発見はなかった。（杉村彰一）

F 佐官どん

米原集落の西方には長者山、および団子冷しの峠・灰塚・ススミの御所など、一連の峰が北にむかってのびている。これらの連峰には土塁線と車道が延々として構築されている。その最北端の峰にある平坦部が「佐官どん」である（Fig. 13）。

この地は従来注意されたことがなかったが、今回の調査にあたって「佐官どん」という呼称と、この地方で米石と称している花崗岩が数個露出しているという聞き込みがあったので、現地を踏査したところ、果して礎石群の堆積を発見した。しかも露出している石材には一定の秩序がみとめられたので、新たに調査地区に加えた。

令の制度によると、佐官どんとは官吏四等官のうちの「サクワン」と同音で、しかも鞠智城の中心部と考えられる米原の集落の中には「シヨウゲンどん」という地名が残っているところから、大宰府職名としての少監や、大・小典の名称を思わせる由緒ありげな地名には少なからず心をひかされた。

調査にかかってみると、露出している礎石の1号から5号までのうち、2号以下は移動したものであることが、形状・レベル・柱間などから容易に推察された（Fig. 14）。1号はかなり安定しており、或は移動していないかも知れないので、これを基準に長さ1mのステッキボー

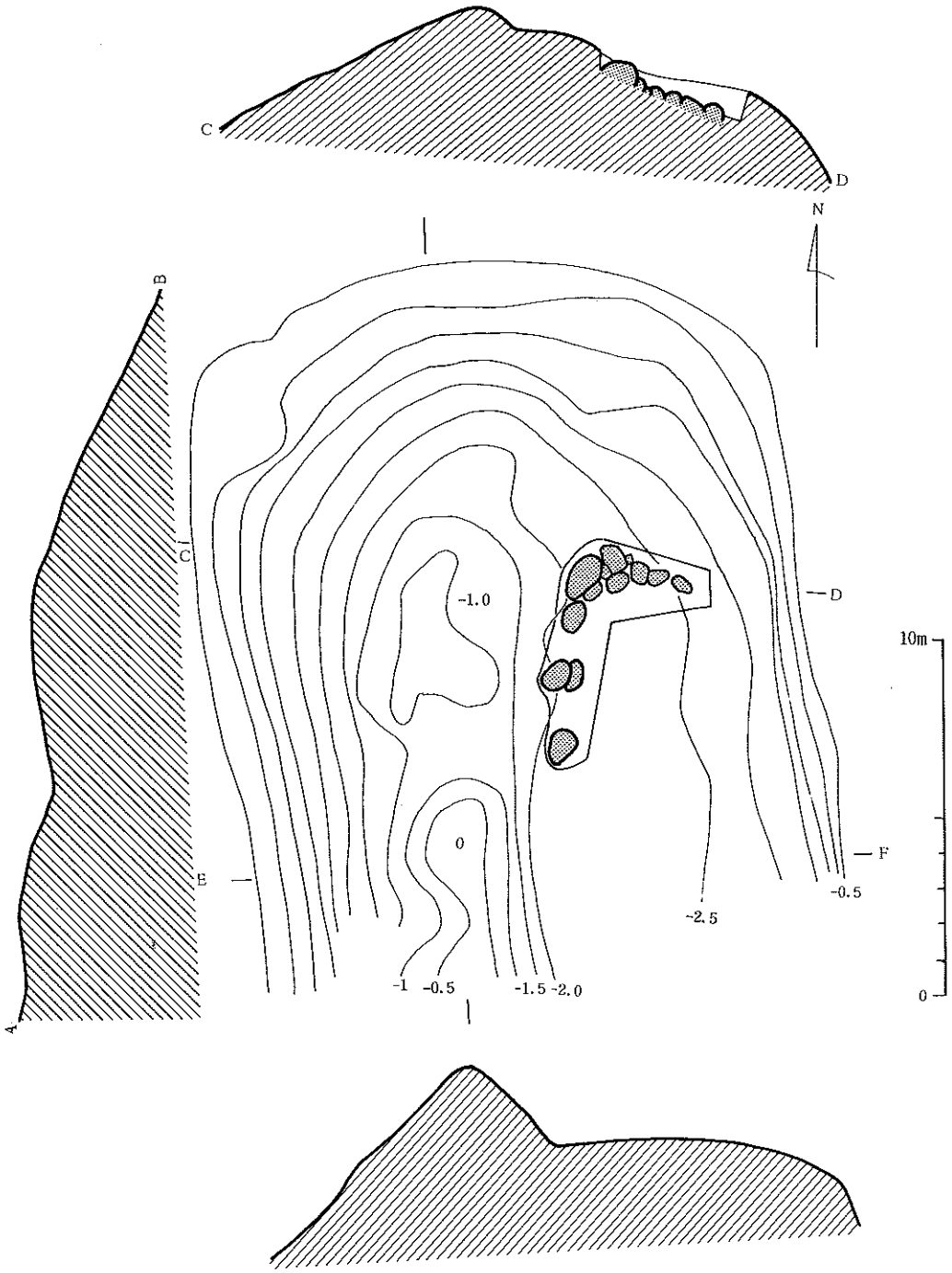


Fig.13 佐官どん地形図

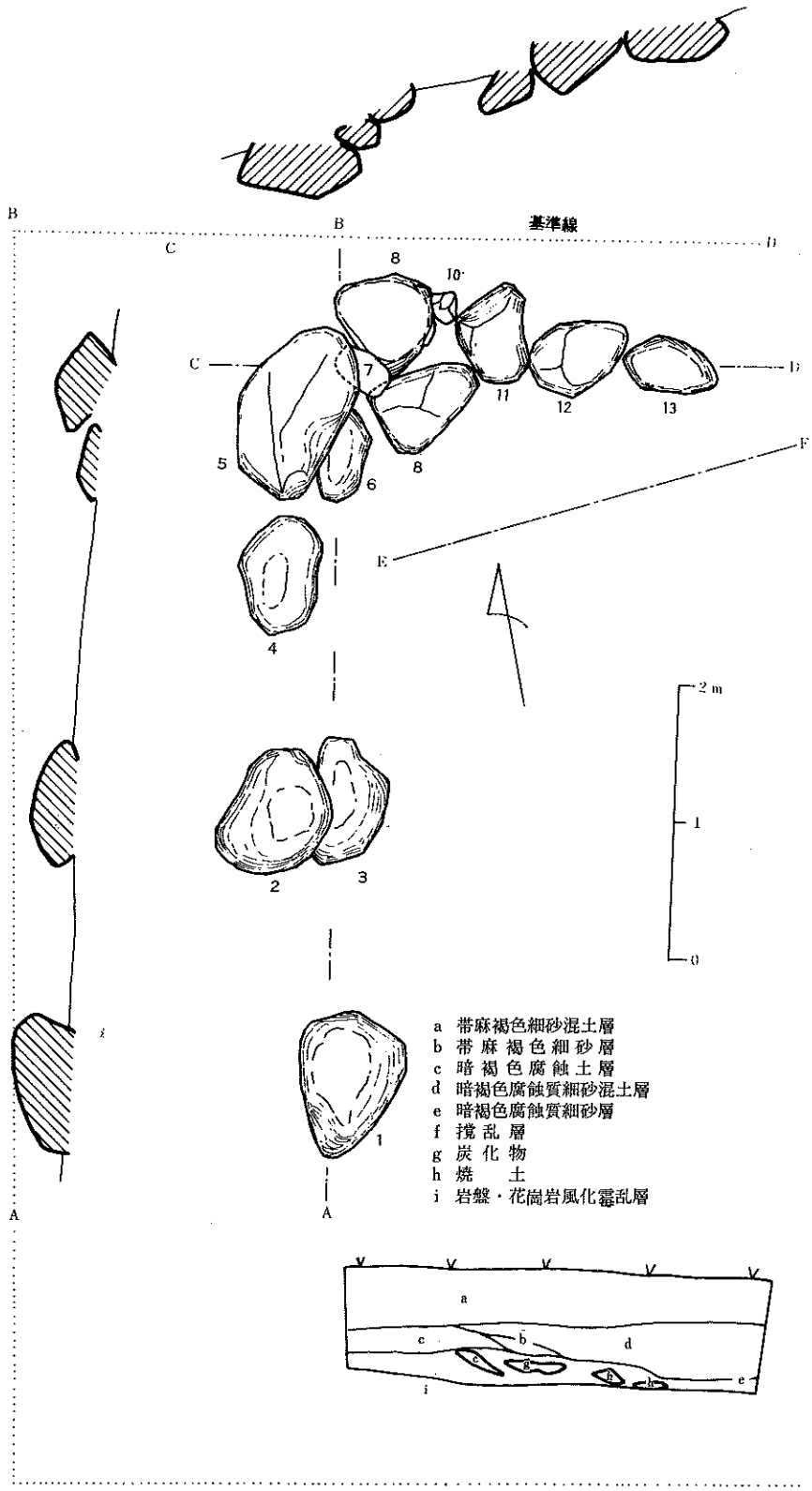


Fig.14 佐官どん礎石群堆積図

リングをもって礎石や根石の埋没状況を探査したが、５号から東へ石の堆積があることを知りえたほかは何の手がかりもなかった。建築用地として残された平面も幅10m内外という狭い面積であるし、土も軟らかであって、１号のレベルを基準として考える場合、探査洩れはないつもりである。

従って５号から東へトレンチを掘開し、埋没している石を露出していった。その結果13号までの石群を発見したが、７・10号は根石程度の石である。しかし、これらの石群はもしかすると自然堆積であるかも知れないので、発掘途中注意していたところ石群の間から、かなりの量の炭化物や焼土が発見され、人間生活の痕跡が濃厚にみとめられた。

土層断面図ＥＦは石列より約１m南寄りのトレンチ南壁のもので、同種の土層は地形に即して北へ傾いているので、石列（11号～13号）はＦの攪乱層の中にあることを確認した。この土層図から考察すると、まず岩盤の上に攪乱層があり、その中に石列・炭化物・焼土が共存するという点が注目される。石列の堆積状況からして、この礎石は原位置を離れ、地面の傾斜に沿って押し転がされた状態と考えられる。しかし、その時期がいつであったかは、土器などを包含していないので不明であり、埋没された原因もわからない。その後Ｃ層・Ｅ層、次いでＦ層、次にＢ層、最後にＡ層が堆積しているが、それらは西側の土塁が崩れていったものと思われる。

もし、攪乱層が想定される建造物一帯の広さにわたって存在し、その層の高さに礎石があるということも考えられるが、１号～８号の礎石を上に押し上げることは現実には困難であろう。むしろ、礎石が存在した面は１号の存在する現在の地表面からそう深いものとは思えない。そうだとすれば開墾か何かの理由によって礎石を隅に片付けたのであろう。開墾とすれば地下８０cmも掘って埋める必要はない。もっと浅くてよいはずであり、それも石を落し込むに足る土壙だけで充分と思われる。然るに石列より１mも南へ離れたＥＦ線にまで攪乱層のＦ層が存在するということは、石を転がす時少くともＥＦ線より北側に広く窪地があったことを示している。しかも礎石が岩盤に直接接していて間層を持たないことからみて、石を転がした時期は新しくないと考えられる。

このように考えてくると、開墾による埋没も否定されるべきであって、他の理由を考えねばなるまい。むしろ建造物が現在の地表に近い高さに存在し、西は土塁で保護され、東は深い切落しになっていて、北が手薄であり、しかも最北端の位置などからすると、建造物の北側は当初から岩盤の深さまで切落しになっていたとは考えられまいか。この場合なら、この建造物の焼失後、礎石を転ばせて落せばこのような状態になろう。しかし普通礎石は後世まで原位置に残存するのが例であり、古く礎石を落し込む必要があったかは疑問である。また北端における

切落しを証明するためには、南北にトレンチを入れてF層がなくなる線すなわち切落し線を確認する必要があろう。

ともかく現存する11個の礎石群は、土塁線の最北端に当るこの地に、建造物があったことを示しているのである。

この地に立てば、北麓の木山から西へ立徳・頭合をまじかに見ることができる。崖線の切落しが深く地形的にみても要害の地であることがうかがわれる。

尚、土塁線を南にたどれば、約30mほどのところに、花崗岩が4個露出しており、史蹟顕彰会の標木が立っている。更にこれより約13m南にたどると、西へ数メートル入ったあたりに標高168.9mの三角点がある。（田辺哲夫）

G 米原集落内の礎石群

鞠智城の中心部をなしたと推定される米原地区は、古くから集落に占拠され、城内遺構のほとんどが失なわれている。今わずかに残るもとからの礎石群や、由緒ありげな地名・伝承などについてのべると次のようなものがある。

まず人家のまわりに寄せあつめ、または積まれた礎石群についてのべると、それらの石材はほとんど花崗岩の自然石を用い、部落民はこれをコメイシとよんでいる。その他にも礎石にはわずかであるが安山岩の自然石が用いられ、地元民はこれをアワイシとよぶ。これらのコメイシやアワイシからなる礎石群は、現在地表に露出しているものだけでも50個以上の多数にのぼるが、旧態の配置を存するものは皆無に近い。わずかに原田成一氏宅地内に残る花崗岩の礎石2個と、礎石を掘り取った痕跡は有力な手がかりとなるもので、建物の柱間間隔7尺を有したことがわかる。建物は何間何面であったか明らかでないが、主軸が南北に長い長方形の配置が想定される。

その他にも集落のほぼ中央、米岡佐吉氏宅地の東端に1個と、集落の西北端米岡運喜氏宅の庭先と桑畑に各1個、花崗岩の礎石が残っているが、これだけで建物の配置を復原することは困難である。礎石の多くは火にかかった形跡をみとめるが、瓦はほとんど見当らない。おそらく集落内にあった当時の建物群は、谷に面した平坦部を利用し、主軸が南北にむかう一定の規格をもって配置されたのではないかと推定される。

H 少監どん・紀屋敷

米原集落内には今でも由緒ありげな地名を存するが、それらの来歴は明らかでない。まず集落の東南隅、原田康憲氏宅地のつづきには、深い谷にのぞむ約80m²の凹地があり、地元民はこ

の地を「小監どん」とよんでいる。その理由には何の伝承もない。現地は西方と南方に一段高い（高さ約1.50m）桑畑によってかこまれ、東側は高さ約10m以上におよぶ急峻な崖になっている。表面調査の結果、ヘラ目のある古瓦一片を採取したが、それだけでは年代判定の対象にならない。礎石その他遺構らしいものは何もなく、およそ集落内の最もせまい片隅に、このような由緒ありげな地名を存すること自体に疑念を生じる。

ちなみに大宰府の官制には長官としての帥をはじめ（権帥をあてることもある）大弐・少弐・大監・少監・大判事・大典・少判事・大工・主神など、特有な制度があった。中でも少監は従六位上相当官で、奈良時代頃までは中央政府から来任したが、平安時代の終わり近くなると土豪などが歴任し、しかも定員を上まわって10数名も就任することがあった。鞠智城米原集落の一隅に、たまたま「少監どん」の地名を存することは、たとえその由緒がわからないとはいえ、先にのべた米原の西北方に位する「佐官どん」の遺構とともに注意すべきであろう。或は推察するに鞠智城の城主は少監の位にある者を任じたのであろうか。それとも米原に住んでいた土豪が、たまたま少監に任ぜられたのであろうか。いずれにせよ今後の研究が期待される。

また米原集落の北部寄りの高木郁郎氏宅地内には「紀屋敷」の地名が残っている。これを集落ではマツリヤシキと発音する。現在宅地の周囲には割って積んだらしい建物の礎石材や、加工石材の堆積をみるほか、遺跡または遺構を物語るべき要素は何らみられない。宅地内は約90㎡もあるので、今後ボーリングまたは発掘調査すれば、或は何らかの遺構が発見されるかもしれない。ちなみに大宰府の役人には肥後の土豪紀氏が、大監・少監その他の官職に就いていたことを物語る記録はあるが、鞠智城との関係は見当らない。また「紀」を「マツリ」とはいかにしても読めないのに、あえて呼称するのはどうしたことであろうか。或は祭祀を行なったところであろうか。

その他集落内には中世の名田を思わせる地名が少なくない。まず「紀屋敷」の東隣には「弥次郎丸」と「恵庵屋敷」の地名が併存し、その東隣には「六郎丸」の字名がある。さらに集落の南端、公民館の前には「乙丸」の地名があり、集落唯一の商店迫本ツル子氏宅地には「屋敷」の地名を存する。おそらくこれらの地名は鞠智城とは無関係であろう。また公民館の北方、原田秀喜氏宅一帯に「中グリ」の俗称名を存するのは、この一帯に散在する五輪塔や石碑につながる、寺院があったことを物語るのではなかろうか。尚、米原集落の西北端、矢野形家氏宅裏に祀られている「岩倉山」は、自然の岩塊を数個集積した小祠を祀り、たとえ現在の施設は近代の所産でも、祭そのものの形態は古くさかのぼるにちがいない。

集落の西北隅の最もひくい位置にある「長者井戸」は、地元民の飲料水を供給する大切な天然の湧水池で、年中豊富な水量を保持する。

I 長者原の遺構

ここにいう長者原という地名は、米原集落の南側入口「六ン蔵」から、北は米原公民館付近まで、東は米原への幹線道路をもって限られ、西は長者山、御金蔵の東麓一帯にわたる約4.5haの地域を総称する。この一帯に建物の礎石群があり、炭化した米を出土することは早くから知られており、おそらく米原長者の伝説や、米原の地名もそのことからおこったにちがいない。

文化6年（1809年）石上宜続の著わした『卯花園漫録』によると「肥後国山鹿郡不動倉といふ所」に焼米を出土することがみえている。おそらくこの不動倉という地名は、当時の関係資料から考えて『文徳実録』天安2年の条にみえる「菊池城不動倉十一宇火」の記事に比定するのあまり、現存地名の山鹿市にある不動岩と混同し誤まったものとみえる。故に米原の焼米はよほど古くから広く知られていたにちがいない。このように長者原における焼米を多量に出土する現象は、石上宜続の誤った記事をまつまでもなく、天安2年に焼失した菊池城の不動倉十一宇の遺構を物語っていることはいうまでもなかろう。

現地にはもと畑をめぐって多くの建物礎石群が整然とした配置で残っていたが、米原集落に入る南からの幹線道路をつくったさいに、多くの礎石は道の下に埋没したという。加うるに去る昭和41年の開田工事には10数個の礎石が掘りおこされたが、菊池市の庭園師に引きとられたといわれる。

現在礎石列の残るのは熊本県の指定標木のたつ高木則行氏の水田、および水田用揚水ポンプ小屋に接した原田信裕氏の桑畑、この北隣に位する堀野隆氏の田さらにその北隣にあって全体の約半分は埋めたてられた高木二一氏の水田などである。その他にも乙丸の水田（米岡孝臣氏所有）その西約20mに位する矢野形家氏所有の水田などである。中でも昭和43年2月の調査によると高木則行氏の水田には、長辺がほぼ南北にむかう4間2面分の配置をもって、建物礎石列がならぶことがわかった。もちろんこの調査はボーリングによって探りあてたもので、発掘露出すればさらに大きな規模を呈するにちがいない。本年度の調査には時間的にも労力的にも余裕がなかったが、近い将来にはぜひ礎石列の再現を期したい。

堀切、一寸榎方面から米原へ入る幹線道路の東側、すなわち字上原には、何ら遺構らしいものを発見できなかった。わずかに公民館寄りの農道に礎石2個を発見したが、すでに開墾のさい動かしたとみえ、周囲から現代遺物が出土した。また開田された直後にはわずかながら布目瓦や土師器、須恵器の細片が採取されたが、それだけでは何のきめてにもならない。

次に、米原の地名起源ともなり、米原長者の伝説を生むにいたった焼米の出土地点について

は、ほぼ次のようなことがわかった。米原集落の人びとの話によると長者原の幹線道路の西側に展開する水田や畑には、ほとんど全面にわたって焼米を出土するという。しかしもっとも濃厚な分布がみられるのは熊本県の指定標木の立っている一帯、とくに高木則行氏の水田と小道をへだてて隣接する高木辰彦氏の水田、および揚水ポンプ小屋付近の桑畑と水田などである。とくに迫にのぞむ高木一二氏の畑にはおびただしく、地下約30cmに層をなすところがあるという。今回も耕作されたあとから、約5合分ぐらいの焼米を採取した。

尚、長者原一帯から採取される炭化物には、焼米のほかに粟・稗・小麦などの雑穀類が炭化したものもみられる。とくにこれらの雑穀炭化物は長者原の共同墓地周辺に多かった。

J　宮野礎石群

米原長者の御金蔵跡と称する長者山の東麓には、従来多くの古瓦が出土した。しかるにその遺構はもちろん、何の手がかりもえられなかったので、昭和43年度にはこの地区の全面的な発掘を予定していたが、たまたま今年の3月に入ってブルドーザによる開墾が行なわれ遺跡は消滅した。

開墾直後に行きあわせたわれわれは、古瓦の堆積している地点2箇所をえらびトレンチを掘開したが、すでに土層は攪乱され遺物だけを採取したにすぎない。古瓦は平瓦と丸瓦からなり荒い布目のあるものと、ヘラ目のあるもののほかに、格子目文を有するもの数片があった。それらの量は破片点数にして約5～60片にのぼり、おそらく鞠智城創築当時のものと推定される。すでにブルドーザは多くの古瓦を、北側の低地埋立にさいして再発掘することさえできないほど深く埋めてしまった。おそらく長者山東麓宮野における新しく開墾した地区には、1―2棟分の建物が想定されるが、今となっては確かめようがない。

昭和43年3月、新しく開墾された長者山の東麓地区には、古瓦出土地のほかに礎石群の埋没することがわかった。もちろんそれらの礎石群はボーリング作業でつきあてたもので、全体の配列や規模にはまだ疑念がある。しかし石のならびを図上復原によって判定した結果、この建物は長辺が南北にむかい、5間3面をなすもののようである。何ぶんそれらの礎石列は桑畑の下に埋没しているため、全面的に発掘することは困難であるが、将来水田化されない限り保存条件はよい。昭和43年度の調査にはこれらの礎石のうち、一部だけでも露出し、建物の全体配置を把握する計画である。

尚、宮野の米岡孝臣氏所有桑畑では建物1棟分の礎石群しか探索できなかったが、すでに畦畔には自然礎石の移動したもの3個が寄せられており、ボーリング作業をつづけると数棟分の建物が確認されるであろう。表面採取の結果、古瓦の細片は、迫の農道にのぞむ崖線まで、か

なり広範囲におよぶことがわかった。

2 小　結

鞠智城の調査が企画され、ようやくそれが着手されたときにはやや時期おくれの感があった。すなわち米原集落内に残る礎石列はすべて変形移動し、城門礎石のごときも旧位置のままを存するものがほとんどなく、古代山城のあとを物語る遺構はすでに消滅したのではないかとさえおもわれた。とくに昔から最も重視され、米原長者の伝説を生み、地名の起原ともなった焼米出土地は未調査のまま水田化され、加うるに古瓦出土地として知られる御金蔵東側の宮野まで、不用意に開墾されてしまった。しかるに、調査に着手してみるとこうした懸念は氷解した。さすがに城は雄大な規模と多くの重要施設を擁したところだけに新しい知見があいつぎ、予算と時間の不足をかこつほどであった。すでに個々の物件、ならびに遺跡、遺構については各項に詳しいのであらためてくりかえさないが、来年以降に実施すべく見送った計画は少なくない。その主なものだけをあげると次の事項がある。

1　城域の確認
2　山頂をめぐる土塁線の分布図作成
3　土塁の発掘と実測
4　御金蔵の測量と礎石列の実測
5　少監どんの発掘
6　紀屋敷における遺構確認のための調査
7　宮野礎石群の露出と実測
8　長者原礎石群の露出と実測
9　池ノ尾門礎石垣線の発掘
10　土塁の分布調査
11　土塁の発掘
12　周辺の調査
13　その他昭和42年度分の補正調査

以上、今年果せなかった事項だけでもばく大な作業量が残っており、これらを完全に遂行するにはわずか1～2年でできるものではない。むしろ長期にわたって継続的に調査を遂行することによってこそ、はじめて鞠智城の実態は明らかになるであろう。　（乙益）

第Ⅴ章　第三次調査の成果

1　調査遺構・遺物

A　佐官どん

米原集落西方の連峰は従来土塁線と考えられてきた。佐官どんはその最北端にあたり、昭和42年度から調査を開始した。すでに第Ⅳ章でのべた通り、礎石としては手頃な大きさの花崗岩が6個、土塁の裾にほぼ南北に並んで露出している。しかしそれらはいずれも原位置を動いていることが明らかであった。ただ南側の第1号石だけは原位置を保っているものと考える。さらにこれよりかぎの手状に7個の石が東に傾斜しながら埋没している状態を発掘した（第2トレンチ）が、石が並ぶ床面にのみ炭化物や焼土を伴ったので、これら7個の石が単なる自然堆積でないことを知った。

本年度の調査はこの位置の建築遺構の有無を追求することと、土塁の切断作業によって人工的な遺構を確認することに重点をおいた（Fig. 15）。

(1) 建　築　遺　構

もし、この地点に建築遺構があるとすれば地積から考えて土塁線東側の幅約10*m*内外の平坦面以外には考えられない。そこで先ず動いていないと考えられる第1号石から東へむかって第3トレンチを掘開した。第1号石よりほぼ8尺にあたる地点で地山（花崗岩の風化雰乱層）が陥没し、その部位の地表下40*cm*で礫の集合状態を発見した。それは礎石を抜いた跡ではないかと考えたので、さらに北へ第4トレンチを設定した。しかし、このトレンチでは礎石を抜いた痕跡は見当らず、また第1号石より北8尺のところに掘開した第5トレンチにもそれらしき徴候はなかった。さらに第1号石の周囲を掘開したところ、根石なども存在せず、この石も原位置から移動したものであることが判明した。これらの結果、佐官どん土塁線下の車路先端部の平坦面には、礎石で原位置をとどめるものは皆無であり、根石や礎石を抜いた穴など、礎石を据えた痕跡も確実なものは発見されないことを確認した。

従ってこれらの石は礎石ではなく、建築遺構も存在しなかったと考えるかまたは埋没している石の周辺に焼土や木炭が存在したことから、前年度想定したように礎石群があったとみるべきか依然として疑問は残る。もしこれらの石が礎石であるとすれば建築遺構は発掘地点より離

れて南に寄っていたことも考えられる。また考えようによっては発掘地点にあった遺構が、その後の開墾耕作によって礎石を抜きとった跡までも消失してしまったともみることができる。目下のところ積極的な根拠はないが、現地の平坦部は土を掘りひろげ、ことさらに地積を拡張した形跡が認められるので、おそらく本来建物があったとみるべきであろう。

(2) 土　　塁

佐官どんにおける土塁は自然の尾根を加工してつくられたらしく、外側は切り落しによる断崖をなし、深い谷にのぞむ。土塁の内側には車路が設けられ、その内側は段状の斜面をなす。今回の調査には土塁の北端から約15m南に寄ったあたりに長さ4.5m、幅0.8mの第7トレンチを設定した。トレンチ内には表土下約20cmに3条の石英の細い岩脈が見られ、それが残る部位までは攪乱されてないことが明らかである（Fig. 17）。さらに断面観察によると最下層の花崗岩霧乱層が最も高くなっている部位は、土塁直下でなく、むしろ土塁の内側寄りにみとめられた。とくに、自然層の一つである黄褐色細砂土層は土塁の外側において、あざやかにそぎ落し

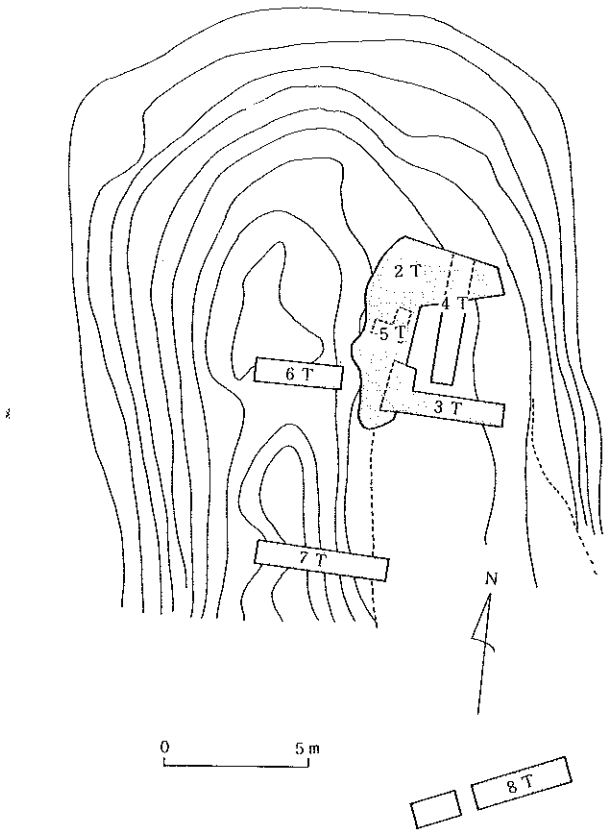


Fig.15 佐官どんトレンチ配置図

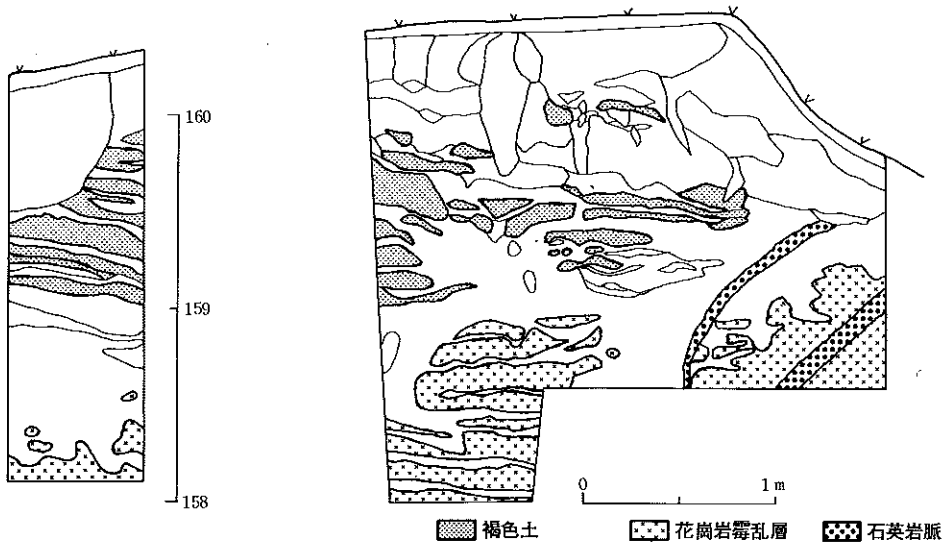


Fig.16 第6トレンチ土層断面図

た状態がみとめられた。同様な切り落しは土塁の内側にもみられた。したがって、佐官どん地帯における土塁は、多くのばあい自然の尾根を利用して外側を急に、内側を車路にするために、切落しながら構築したことがわかる。しかし尾根が切れて平坦に近くなった北端付近では石英の岩脈が尽きるあたりから、褐色土層を交じえた各地層が縞状に横たわり明らかに盛り土であることが判明した（Fig. 16）。

このように佐官どん一帯では、尾根の外側を切落し、或は土盛りしているところから、これが城をまもるための土塁であったことは間違いないものと考える。　　（田辺・緒方　勉）

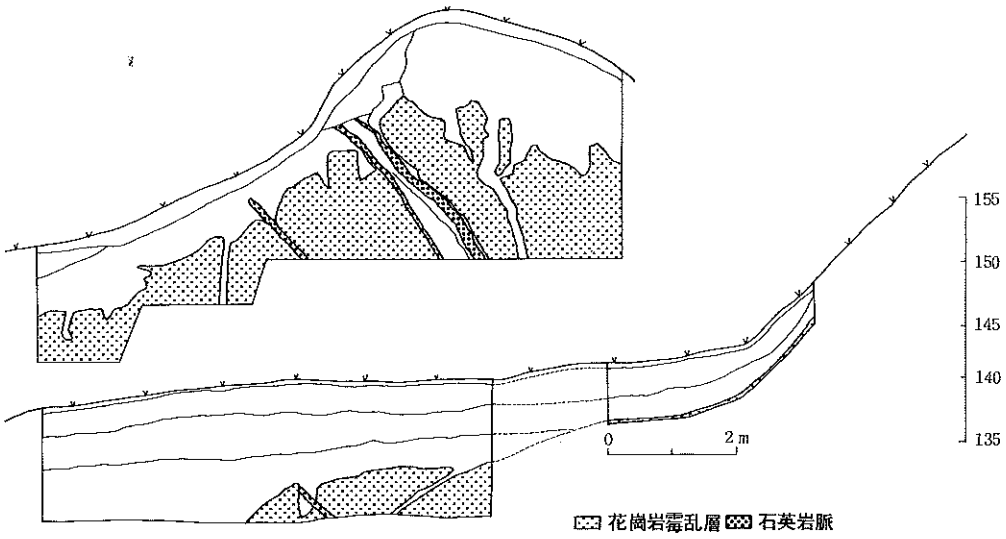


Fig.17 第7·8トレンチ土層実測図

B　深迫門礎石地区

本年度は、昭和42年度の調査において、次年度の課題とした、城外から城門に達する道路を発掘により確認することと、門礎北方にあたかも城門に接続するかのごとく伸びる尾根に注目して、発掘によりこれを確認することに調査目的を限定した（Fig. 18）。

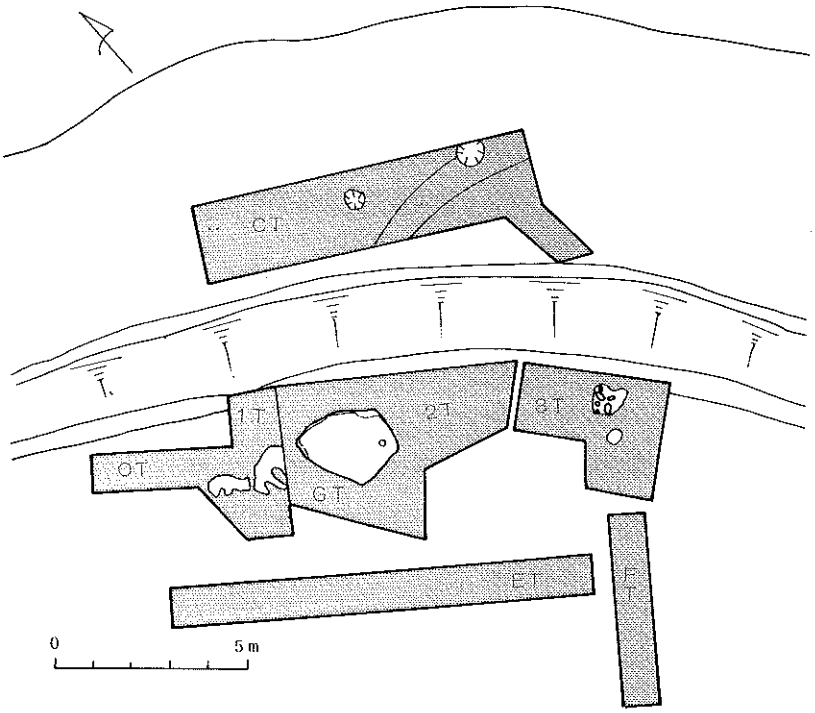


Fig.18 深迫トレンチ配置図

この地区は42年度の発掘成果で、いくつかの所見が確認乃至は推定されているが、今次調査に必要な部分のみを摘記する[1)]。

①門礎（長径2.68m　短径2.26m　厚さ80cm以上）は、多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考えられる。

②柱根につくられた出枘を、枘穴に嵌入して門扉を廻転する枘穴礎石であることは確実であるが、回転方向は枘穴の磨滅状況等から考慮すれば、門扉が後に開く「内扉」であったと推定される。

③対称位置に門礎があるのかどうか、あるいは片袖式であるのかなどの点については、明確にできなかったが礎石西側の地区において、礎石をぬいた根石群と思われる石群を発掘した。その間隔は枘穴中央より5.8m（唐尺19尺）である。礎石東側地区は日数の制限上未発掘。

④上記の門礎石と推定根石との間はピンクに近い硬質粘土で、人為的な盛土ではない。内法

幅3.6m（12尺）。この面で土師器の細片を得た。

⑤推定根石に近く径30cm深さ34～40cmのピットを検出したが、これはあるいは礎石に附属する柱穴であろうか。

⑥④以外の遺物は礎石下から布目瓦3片を検出した。

⑦④のピンク色の硬い地山面を両門礎間の路面と推定し、礎石北方の崖面にわずかに認められるはり出した部分4箇所に注目し、城門から城内平坦部に達するには、曲折急坂の多い道を上下するよりも、いくつかのステップをもつものではあるまいかと想定した。

上記③においてのべたごとく、門礎石の東側地区は未発掘であったので、本年度はその地区を含めた所謂門外の地区3箇所（E・F・Gトレンチ）と門内にあたる礎石上段の地区（Cトレンチ）を発掘し、上記諸点の解決に一歩近づこうとした。以下、調査結果を地区別に概観する。

(1) 門礎石地区

Eトレンチ（1m×11m）

東側面の観察によれば、土層には特別の変化はないが、地表下20～30cm前後で硬度によって上下層に分離される。部分的には3層まで区分出来るが、この層はより粘質が強い。注意すべきは地表下マイナス35cmで刀子片が出土したことである。今のところ硬い面を当時の地表面とする積極的な証左はないが、その可能性を全く否定するものではない。後に述べるGトレンチとの関連は Fig.19 のごとくである。

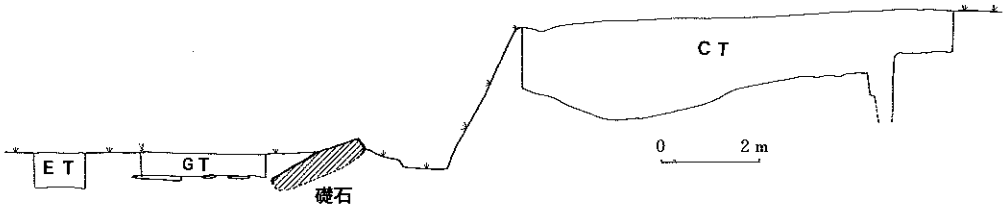


Fig.19 C・G・Eトレンチ断面図

Fトレンチ（1m×5m）

Eトレンチに直交するごとく設定したが、特別の変化は認められない。Eトレンチの第2層は本トレンチの第4層に対比される。

Gトレンチ

42年度トレンチに接して、東西に4mのトレンチを設定しさらに図のごとく拡大した。その結果は、礎石を発見することはできなかったが、門礎石端より約50cmはなれて、黒色粘土と白色粘土があたかも圧延されたような状況で検出された。前者は現今農家の土間に見られるタタキのような堅さと黒さをもち、厚さ5～16cmを測る。後者は前者にくらべ薄いが塊状の白粘土

をたたきつけたような面でやはり硬い。また塊状のブロックの痕跡が残っている。そして断面図には出ないが白色粘土の下に黒色粘土が認められる部分もあり、版築状を呈する。以上の所見を門礎石とCトレンチの関係で見れば、Fig. 19 のごとくなる。版築状の白・黒の硬質粘土は門礎石と無関係とは考えられないようである。近世陶片1を得たのみで、関係遺物はない。

Cトレンチ（6.6 *m* × 2 *m*）

当初は崖に沿ってA・B・C・Dの4区を設定したが、労力の都合上最重要と思われるCのみを発掘し他は割愛した。また問題を解決するポイントとなる崖面の掘開も中止したが将来かならず実施すべきである。トレンチの位置は門礎石の位置する畠地より比高約3 *m* を測る。

発掘中地表下マイナス 70～160*cm* の間に土師質土器3片・刀子片1などを得た。その外、凝灰岩礫片が若干同じ深さから検出されている。この数値は後述の第5層に近い数値である点は

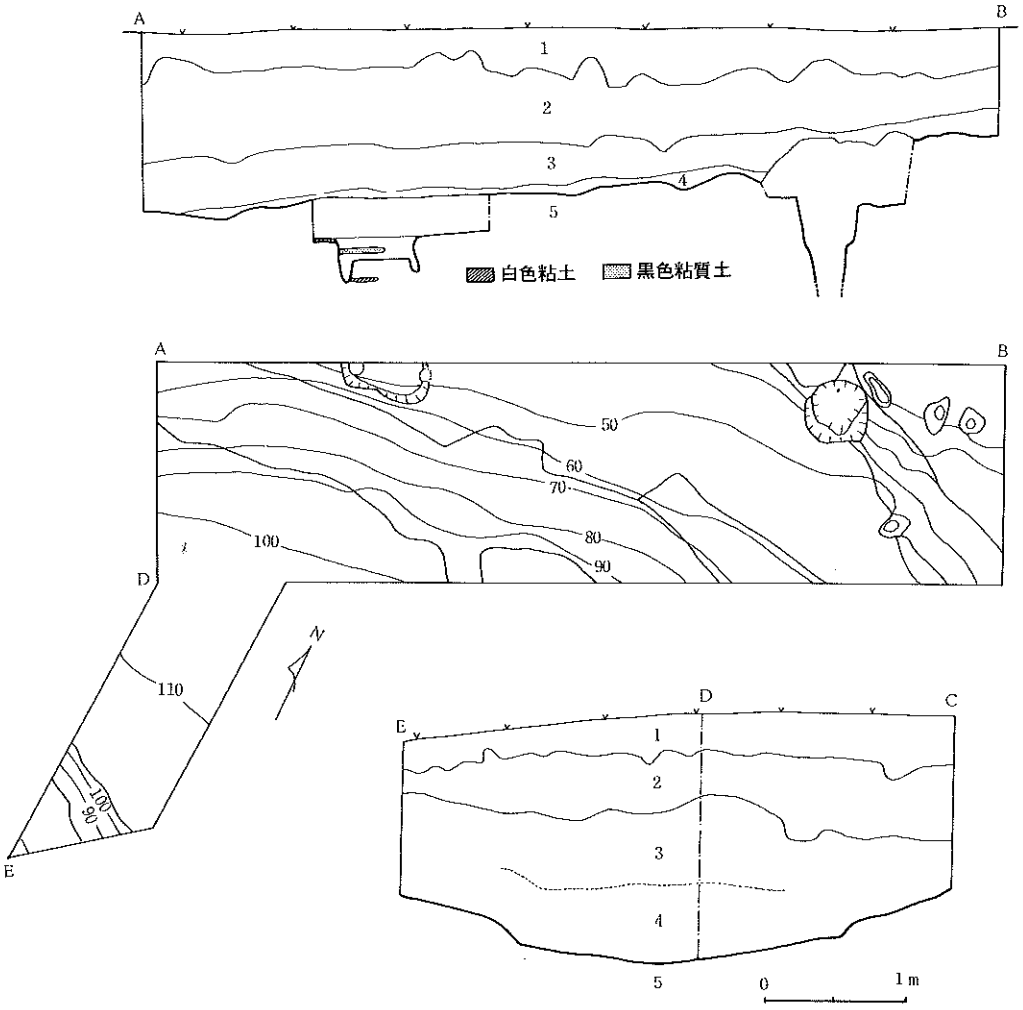


Fig.20 Cトレンチ平面・断面図

注目される。

完掘の結果、硬質の赤褐色粘土層（第5層・地山）を全面に亘り露出し得た（Fig. 20）。この層は北に高く南に低いという遺跡の自然地形に通じているが、トレンチの南東隅部に長さ約3 mの幅の狭い平坦面が認められたので、さらに拡大した結果、マイナス1. 10 mを最低位として、再びこの面は対称方向に高くなっていることが確認された。これをFig. 20でいえば図のマイナス90cm近くの実線と拡大区のマイナス1 m下の実線の範囲である。その幅は約2. 8 m である。横断面で示せばFig. 20C—D断面によく認められる。この浅い凹字状の平坦面はかつての道路ではあるまいかと調査者らは考えたが、僅か6 m余のトレンチ内での所見であるので結論はひかえたい。たまたまその想定を助けるものが、いわば道路ののりに相当する部位に発見された、柱穴と思われる2箇所の Pit である。

第1号 Pit（トレンチの東側）

平面形は円形に近いが、2段にくびれている。上位の径は45～46cmを測り、深さ35cmでくびれてせまくなる。底は不明瞭であるが深さ55cm以上である。上位の Pit 内には軟質の黒褐色土が充満し、下位にはより粘質の強い黒褐色土がはいっていた。また Pit の縁まわりの土に白粘土まじりの斑点が混在するのは注意される。

第2号 Pit（トレンチの西側）

壁面に接して落こみがありその底に2箇の小形の Pit が認められた。うち西側のものはやや内傾する。落こみの平面と断面には、白・黒粘土の薄層が交互に認められるが、黒色は硬く白色は軟かい。第1号と第2号（両 Pit の中央）の間隔は約3. 3 m である。

(2)　深迫土塁推定地

門礎石の北方は俗称馬こかしに至る隘道によって現在は切断されているが、元来は一連の尾根であった尾根が台地から派生して、門礎のある深迫の谷とその北隣の谷との境界を形成している。尾根の先端部は門礎石と直距離20数メートルにすぎない。道路によって切断された以東の尾根は長さ約90 mで、城外側は20 m以上の急崖をなし谷に移行しているが、この崖面の崩壊はきわめて新しいものである。尾根幅は調査地点で約8 mを有する。上記の急崖のみがやや高く（高さ50～70cm幅1 m）しかも断続的に尾根と同方向にいくつかみられる。しかしてその内帯は平坦で削平されている。

調査は、こうした地形が土塁として当時構築されたか否か、言いかえれば土塁として扱ってよいか否かを、発掘によってたしかめることを目的とした。われわれは調査区域を深迫推定土塁と仮称することにした。

1 m × 7 mのトレンチを尾根に直交するごとく設定し、地山に至るまで掘開を試みたが、日

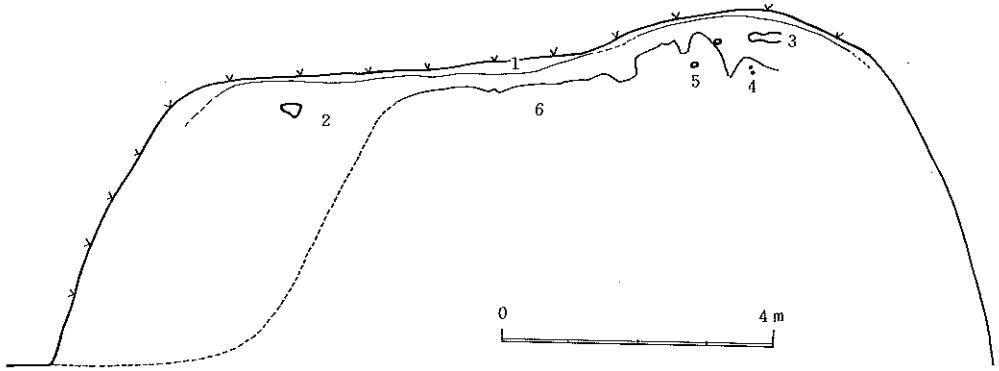


Fig.21 深迫土塁推定地断面図

時不足で後述のごとく完掘できなかった。長側壁（北側）断面では、地山（第6層）の上に黒褐色粘土（第2層）表土層（第1層）の順でのり、第2層の東端には含白色粗砂粘土とピンク色の薄層が少量認められる（Fig. 21）。ここで注意すべきは第6層が東側から約7 mの地点において、深さ約2 m掘っても認められず、時間不足のために完掘できなかったのは残念であるが、図示推定のごとく現路面とあるいは接続するのであろうか。現路面は坂道のため流水などにより地山が露出している。もし土塁とするには城内側をけずり取る方が工事上からも首肯されるとすれば、前述地山が急に深くなるのは注意すべき点である。

現在のわれわれが見る地形は、城外側がやや高く内側は平坦であるので、戦術上防禦しやすい地形であるが、それがただちに7世紀の地形に通ずるものではない。この台地の地質が、崩壊・裂罅を生じやすい地質であることは既に地質学者の説く所である。崖側の高さ50～70cm幅1 m位の丸みをおびた高みを土塁とするには賛成できない。成因つまり背後の崩壊を考えれば明白であり旧地形についての手がかりもない。つぎにつづく6 m余の平坦部もきめ手はなく、植林、畠地などによる開墾の疑ももたれる。以上やや否定面をのべたが、それはあくまでもこの地区に関してであって広域に亘る鞠智城に土塁が存在しなかったというのではなく、大規模な発掘によって証明されるまでは、深迫土塁に関しては視野を転じてさきに指摘したごとく、門礎と尾根が直距離20数メートルの近距離である点を重視して、おそらく城門に接する自然地形は築城に際して利用されたであろうという程度に理解しておいた方が良いと考える。

(3) 遺　　物

各トレンチで得られた遺物を表示すると次頁のごとくである（Tab. 2・Fig. 22）。

土器はすべて細片であり、器形を知ることがほとんどできないが、Fig. 22の3. 4は底部片であり底面には糸切りは認められない。5は口縁部である。鉄製品として2箇の刀子がある。1は片関（カタマチ）である。

Tab. 2　深迫門礎石地区出土遺物一覧

C

1　区	2　区	3　区	拡張区
呉須付陶片	土師質片 2　— 70	刀子片 1　—70	土師質底部　—170
弥生時代底部	土師質片 1　—115	(Fig. 22—2)	(Fig. 22—3)
その他 1　—95	土師質片 1 第 3 層	土師質 3 片第 2 層	土師質口縁部 —170
土師質小片 1　—70	中世陶片 1　— 50		(Fig. 22—4. 5)
中世陶片 1　—50	土師質片 1　— 30		

E

刀子片　—35
(Fig. 22—1)

F

縄文石鏃

G

陶片 1

上記の各項を要約すると、

1.　門礎石の背後 4 ～ 5 m の地点の C トレンチにおいて、浅い凹字状の平面を検出し得た。認められた長さは約 3 m にすぎないが、幅は拡大発掘により約 2. 8m であることがわかった。限定された発掘面積ではあるが、その横断面形は Fig. 20 においてかなり良好に看取される。調査者は断定をさけながらも道路ではないかとの想定をもった。その考えを支持するのは、刀子、土師質の土器片の出土と、道のりに相当する部位で検出された柱間 3. 3m の Pit である。しかも白・黒の粘土を版築状に使用している。

2.　上記の今次の推定道路は、門礎石の位置と関連する。昭和42年度の所見として、既述のごとく礎石西方の城門を通る推定道路がある。これと今次のそれはつながるのか否か。本年度の発掘所見からは関連づける材料はない。

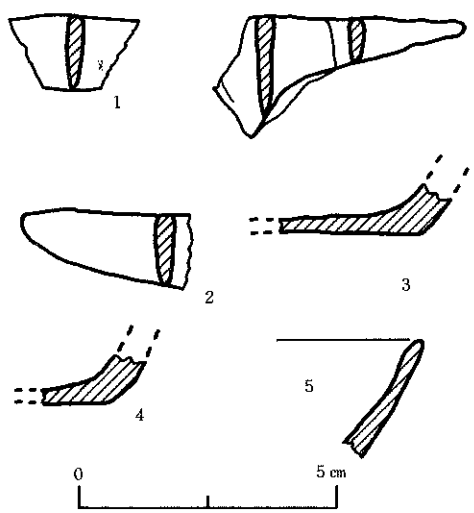


Fig. 22　遺物実測図

3.　この問題を考える上に見のがせないのは、G トレンチにおける、版築状の遺構である。これを路面の一部と見るか、礎石に伴う遺構と見るか問題であるが、もし前者とみた場合、東側対称位置に第二の門礎石があることになるが、今までの発掘では発見されていない。そこで第三の考え方として崖の中にそれがあろうとする推理が生れる余地が生ずる。

4.　上記 1 ～ 3 の問題を解決する有効な方法は、現門礎の位置する畠地と比高 3 m の上段畠地の境界をなす崖

を発掘すれば、問題は解決することになろう。

5.　土塁について。そうであるという確証は今のところはない。けれども築城計画にとり入れられたであろうことは充分に想定できる。深迫に限らず、米原地方では地質学的な証明と後代の地形変改を考慮に入れることを忘れてはならない。（三島）

註

1）三島　格「深迫の門礎石」『昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報　伝鞠智城跡』熊本県教育委員会　昭和43年

本遺跡の調査には鏡山　猛教授の御指導を得た。記して感謝申上げる。なお実測図は佐藤伸二・隈　昭志・緒方　勉・亀井明徳・中村幸史郎・松本健郎氏らによるものである。

C　土　　塁

鞠智城の外周を明確にするためには土塁線の確認が必要である。第一年度の調査では一応の外郭線が推定されたのであるが、今回の調査目標は、さらに土塁線の断面を計測することにより、推定の段階から一歩進めようということにあった。そのために現在地表にあらわれている土塁の状態をそのまま計測しなければならない。今回の調査は土塁線と推定される箇所の単なる断面計測だけに終った。これを証明するためには土塁線を実際に切断しなければ明確に断定できない。それでも実測図によって一応の分類ができる程度の資料だけは得られた。

計測点の設定は調査員協議のうえ、比較的原形を留めている場所をえらび、かつ各地点間の距離的にみて必要とみとめられる所をえらんだ。設定した地点は以下のとおりである。

初田川と木野川にはさまれた松尾神社の東側の尾根（輿かけ松～室町）、米原集落の西方に連なる「長者山」から「佐官どん」にいたる峰、その外郭とみられる頭合の南東部の谷頭、さらには谷頭から堀切に至る線など、合計19箇所である（Fig. 23・24）。

これらの土塁または土塁とみられる施設は、規模も形も地点によってまちまちである。このことは鞠智城の外郭施設があくまでも天然の地形に依存し、これをそのまま利用または加工したことによるものであろう。

まず米原集落の西側を限る、佐官どんから長者山にいたる尾根に構成された土塁線についてみると、頂部の幅は必ずしも一様ではない。広いものは約15m、せまい所では数メートルにすぎない。これらの土塁断面を実測すると、およそ二種に大別される。すなわちA型は山の尾根の外側と内側を切り落して懸崖にしたもので、尾根の頂部は平坦な面となり、その断面は梯形を呈する。B型は山の尾根の外側、つまり城外側を急傾斜に切り落し、城内側には犬走り状の車路を設けるものである。そのばあい城内側は比較的ゆるやかにつくられている。

その点本分集落の裏手「輿かけ松」一帯の尾根にみられる土塁らしい遺構は、幅約15～20m

① 奥かけ松北１
② 奥かけ松北２
③ 奥かけ松北３
④ 奥 か け 松
⑤ 室　　町
⑥ 黒 蛭 谷 頭
⑦ 堀切トンネル堤の上
⑧ 堀切門礎の上
⑨ 深 迫 の 西
⑩ 長 者 山 東
⑪ 灰 塚 堀 割
⑫ 灰　　塚
⑬ 団子さましの上
⑭ススミの御所東
⑮ス ス ミの 御 所
⑯ススミの御所北鞍部
⑰ 佐官どん南の三角点付近
⑱ 佐官どん南の三角点
⑲ 佐 官 ど ん

Fig.23 土塁線調査地一覧

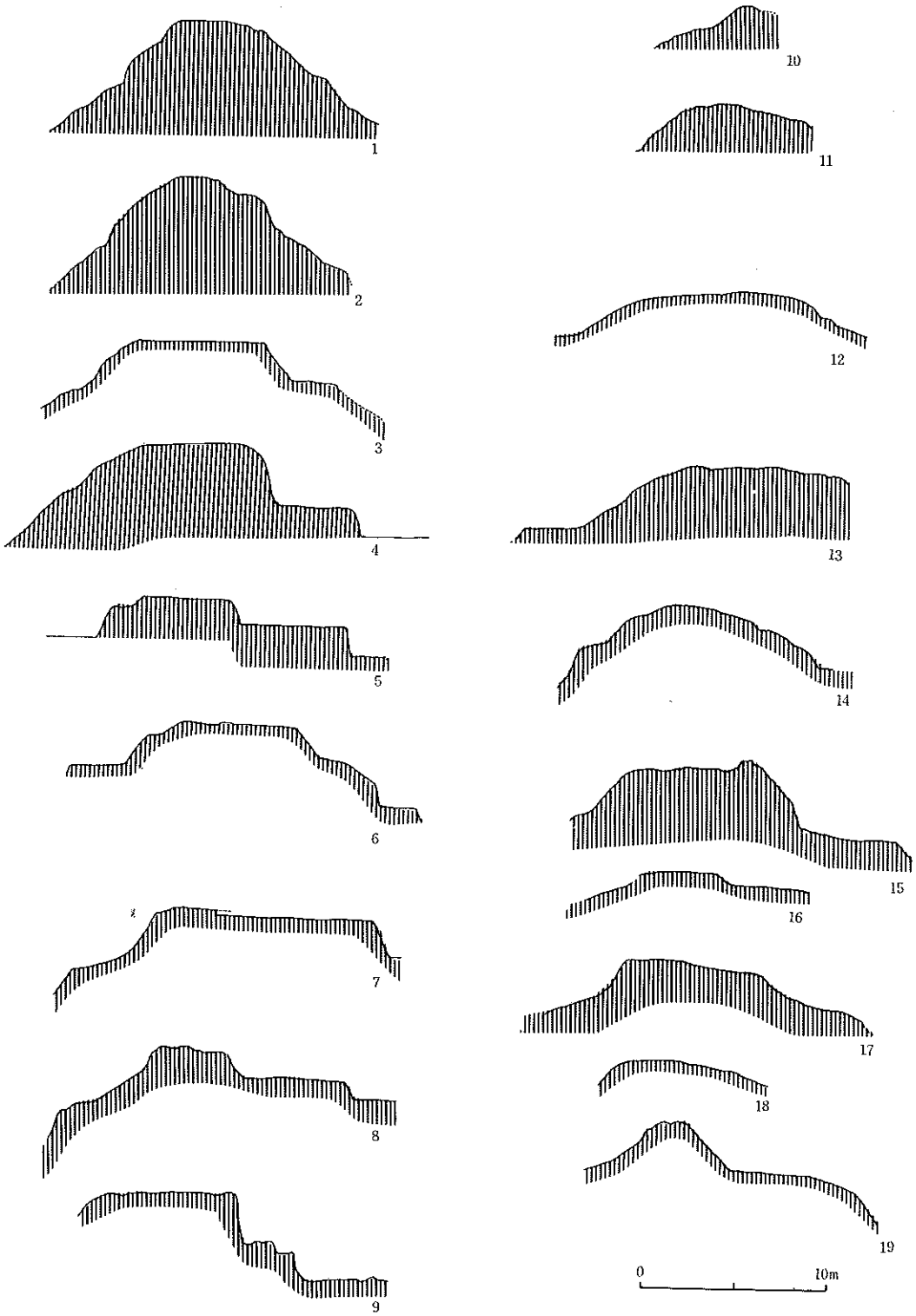


Fig.24　土塁実測図　(No.はFig.23と対応する)

もあり、上面が平坦で、はたして土塁として意識的につくったかどうか疑うむきもある。しかし城の外側が急な懸崖となり、内側の傾斜がゆるやかであるところから、天然の地形を部分的に加工しながら、外敵に対する防禦線として最大限に生かしたのではなかろうか。

以上の知見はあくまでも現地の地形観察と、実測作業の成果にもとずく推論であって、鞠智城成立当時の地形が現在のままであったとは考えられない。何ぶん米原集落を中心とする周辺地形は、きわめて崩壊しやすい土質で、今でも年々大きな崖崩れを生じる始末である。現在のところ米原集落の西側を限る長者山～佐官どんの峰にいたる断続的な土塁と懸崖は、おそらく築城当時のおもかげをとどめるものと思うが、他の地区についてはさらに精密な調査を必要とする。　（坂本・隈・杉村）

D　阿高の礎石群推定地

鞠智城の南域は堀切より池ノ尾につづく崖線をもって限られる。その延長は頭合から黒蛭につづく尾根につながるもののようである。ここにのべる阿高の礎石と推定される自然石群は、本分集落より初田川橋を経て黒蛭集落にむかう途中、県道から約300m北にむかって上った畠道の両脇にある（Fig. 25）。

現地は標高約70mを有し、なだらかな斜面が、急斜面に移る地形の変換地点付近にあたる。これより道は幅せまくなり、爪先上りの坂道が今の尾根へむかっている。この尾根の北側を流れる溪谷の谷頭に「池ノ尾の門礎」があり、あたかも尾根は鞠智城の外郭線の役目をはたしている。

石材はいずれも質のよい花崗岩の自然石で、道をはさんで北側に6個、南側に2個、いかにも意味ありげな配置をなしている。各石材は上面が平らかですわりがよく、もちろん原位置から移動していることはいうまでもない。石材の大きさは一辺の長さ約70～90cmの立方体に近いもの4個、長さ80cm以上、幅約80cm、厚さ40～50cmを有するもの2個、長さ170cm幅80cm、厚さ不明1個、大きさ不明1個からなり、完全に露出するとさらに正確な数値が得られるであろう。何ぶん現地は農地にいたるテーラーの幹線道路であるため、発掘できなかった。はたしてこれらの石材がいかなる建物配置を構成していたものか、現段階では推測の域をでない。或は単に後世の石工が、山から掘り出した姿のよい石材を運び出し集積放置したのかもしれない。とにかくその実態究明は、今後の調査計画の一つとしてとりあげることにした。　（隈）

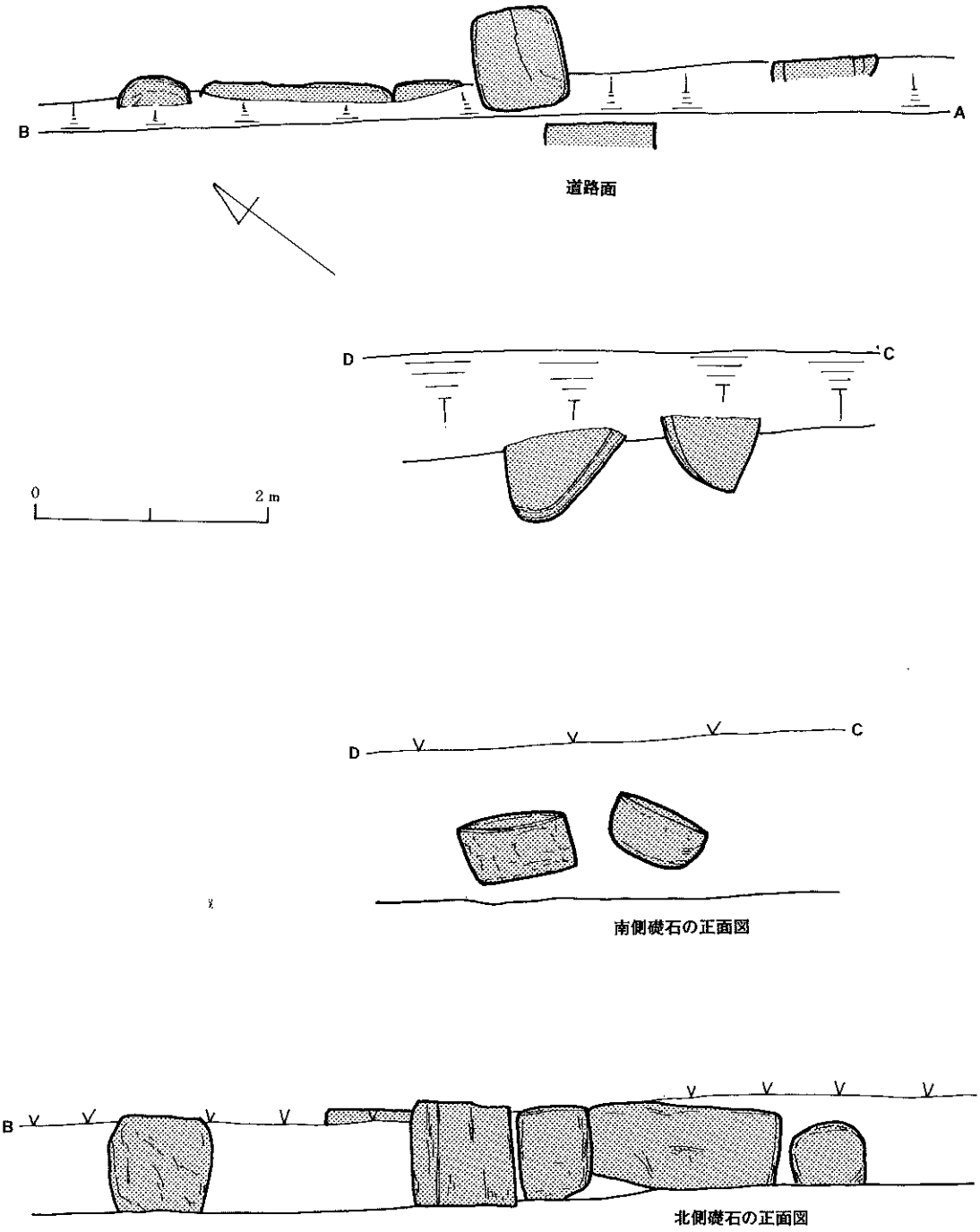


Fig.25 阿高礎石群

2　小　　結

以上のべたとおり、昭和43年度（第三次調査）における鞠智城の調査は、短期間に集中的作業を遂行したにかかわらず、従来疑問視されていた多くの問題解決の端緒を得た。即ち、佐官どん地区においては、建造物遺構の存否をめぐって、対立的な考え方が残るが、現地の地積、発掘調査の成果から何等かの遺構が存したことは明らかであろう。特に、佐官どん地区における土塁は天然の地形を城外側は切りおとしにして懸崖を作り、内側には犬走り状の車道を設けるなど、明らかに人為的な遺構が確認された。更に、土塁の延長線上には土盛りをし、人工的な遺構が認められた。

深追地区においては、初年度以来の懸案であった城外から城内にはいる道路進行方向の確認に重点がおかれ、その遺構と見られる断面がU字形を呈した地山のおちこみや、掘立柱らしいものの遺構も検出され今後の調査に明るい見通しがたつに至った。

次に鞠智城をめぐる土塁線については、現地一帯の土質がきわめて崩壊しやすい花崗岩の風化土壌と、軟質凝灰岩からなるために、現在でも年々大きな崖くずれを生じる始末である。したがって、これら土塁線の確実な遺構を把握することは極めて困難な作業であった。しかし、米原集落の西方を限る長者山～佐官どんに至る尾根状に断続的に見られる土塁線は、おそらく築城当時の面影をとどめるものと思われる。その他、頭合（つごう）集落の北東部、堀切より黒蛭方向に続く尾根には人工的な土塁遺構こそ発見されなかったが、通称阿高の山道にかかる農道の両脇に礎石にふさわしい花崗岩の石材8個が堆積していた。これを建築遺構の名残りと見るか、単なる石材の集積と見るかについては大きな問題として残るが、今後の調査計画の一つとしてとりあげたい。来年度の調査には

1　鞠智城全域の確認
2　長者原における礎石群の露出と実測
3　池ノ尾門礎および石積群の発掘
4　宮野礎石群の露出と実測
5　紀屋敷、少監どんの実態把握
6　その他、第1、第2年度の補正調査

などが残されている。

これだけの調査が完遂されても鞠智城に関する問題点は完全に解明されたとはいえない。今後といえども、問題意識を新たにしながら継続的調査と研究がのぞまれる。　　（乙益）

第Ⅵ章　第四次調査の成果

1　調査遺構

A　長者原礎石群

長者原とよばれる、平坦部の桑園から、炭化米が得られその地中に礎石が包蔵されていることは耕作者・村人のみならず研究者の間にもかなり広く知られていた。けれども近年の開田化の波はこの地にも達したことは、緊急調査概報[1]に記すごとくで、本調査地域においても地主の高木則行氏によると、8箇の礎石を抜いたという[2]。

本地点については、すでに昭和43年3月10日ボーリングによる試掘が行なわれ[3]、南北5列、東西3列の、礎石配置をもつ遺構が概ね確認され仮の配置図が作製されていた。本年度は上記の遺構を発掘により確認することを目的として実施された。

調査は、上記の配置図により南北9 m東西5 mの発掘区を設定し、全面掘開を行なったが、地表下20cm前後で、A－1、A－2、A－3、A－5[4]の計4箇の礎石上面に達したが、概ねこの深さで土の色に変化を認められた（Fig. 26）。変化とは、黒色土と茶褐色粘土の面が、それぞれ不整形のひろがりをもって、マイナス20cm前後から発掘区全域にわたって認められることをさし、前者はA列の礎石があると推定されるところにより面的ひろがりをもち、かっ黒色土中には、多量の炭化した米粒を含む。その深さは厚い所で20cm余、薄い所では2～3 cm。後者は礎石を抜き取る際にあばかれた土と考えられるが、そのひろがりの中には黒色土が、かすり状に混在する。なお両者の中には、少量ではあるが、灰や黄色を呈する粘土も混入する[5]。以上を要約すると、かつてこの建物が火災にかかり、木材や収蔵されていた米などが火気を受け炭化し、建物全域面に落下堆積した。後代に至り地表下マイナス20cmでは、耕作時の鍬先に石はかかるので、黒色土の下層にある茶褐色粘土層があばかれ、石が除去された。茶褐色粘土のひろがりの下には礎石は無い。以上の所見は、東西中央断面における所見とも一致する。

つぎの発掘は、日程の制約上発掘区の南半のみの掘り下げにとどめたが、A列のみは礎石の遺存状況が良いので、将来の保存をも考慮にいれA列東側の一部のみを掘開した。

つぎに、断面の観察と各礎石について略記する。

南北断面

発掘区の西側を延長区をも含めて、約13ｍを観察した。既述のごとく20cm前後の耕土（第Ⅰ層）の下に、褐色土（第Ⅱ層）があるが、この第２層までブルドーザーが入り、より下位の黒色土層（第Ⅳ層）をもひっかけているので、褐色土と黒色土の双方が混在したブロック（第Ⅲ層）が点在する。礎石の頂部を含めてかなりの深さまでが、第Ⅳ層に属する。根石について付言すると、断面図はＡ列の投影であるが、Ａ－１は未確認であり、Ａ－２・３・４・５は現存する。黒色土のひろがりは北側では、Ａ－５近くまで認められるが、漸次稀薄となる。南側はＡ－１より南に約３ｍ延びて、漸次稀薄となる。断面からは遺物は検出されない。

発掘区における礎石列

既述のごとく、第Ⅳ層以下の発掘を南半区にのみとどめたが、露出された礎石は、Ａ、Ｂ、Ｃ列の各１、２、３だけであるが、Ａ列以外は根石のみである。石材は当地方でコメ石と呼ばれる、花崗岩のみに限定されている。

Ａ－１　長径84cm　短径76cm　頂部に楕円形の平坦面をもつ、前記のごとくこの石のみが他に比べ低い。根石は未確認。

Ａ－２　長径72cm　短径68cm　真下の根石と側面からさしこんだ根石を認める。

Ａ－３　長径124cm　短径64cm　他に比べ大きくかつ平坦面も広い。北東隅の根石は認められないが、もともとないものと思われる。

Ａ－４　（根石）Ａ－３とＡ－５の間がこの部分のみ長いので、小試掘坑を入れた結果、半環状にめぐる根石を検出した。

Ａ－５　露出作業時に既に平坦面が露出した礎石。長径116cm　短径60cm。Ａ－３と同じく長形で平坦面も広い。

Ｂ－１　（根石）10箇の根石がほぼ環状にならぶが、とびぬけて大きい根石が１箇ある。これはのせる礎石の裏の形状に関連するものであろう。長径116cm。

Ｂ－２　約16箇の根石が環状にならぶが、西側はかなり抜き取られている。長径124cm。

Ｂ－３　中央断面にかかり、全形状をうかがえないが、７箇が環状にならぶ。長径96cm。

Ｃ－１　12箇が円坐状にならぶ。長径130cm　短径120cm。

Ｃ－２　約21箇が円坐状にならび、Ｃ－１とともに根石としては、遺存のよい方である。長径100cm。

Ｃ－３　約６箇が認められるか、Ｂ－３と同じく未発掘に属する。

中央断面（東西断面）

Ａ－３、Ｃ－３をきった東西の断面を示したものであるが、Ｂ列Ｃ列の礎石を抜いたための

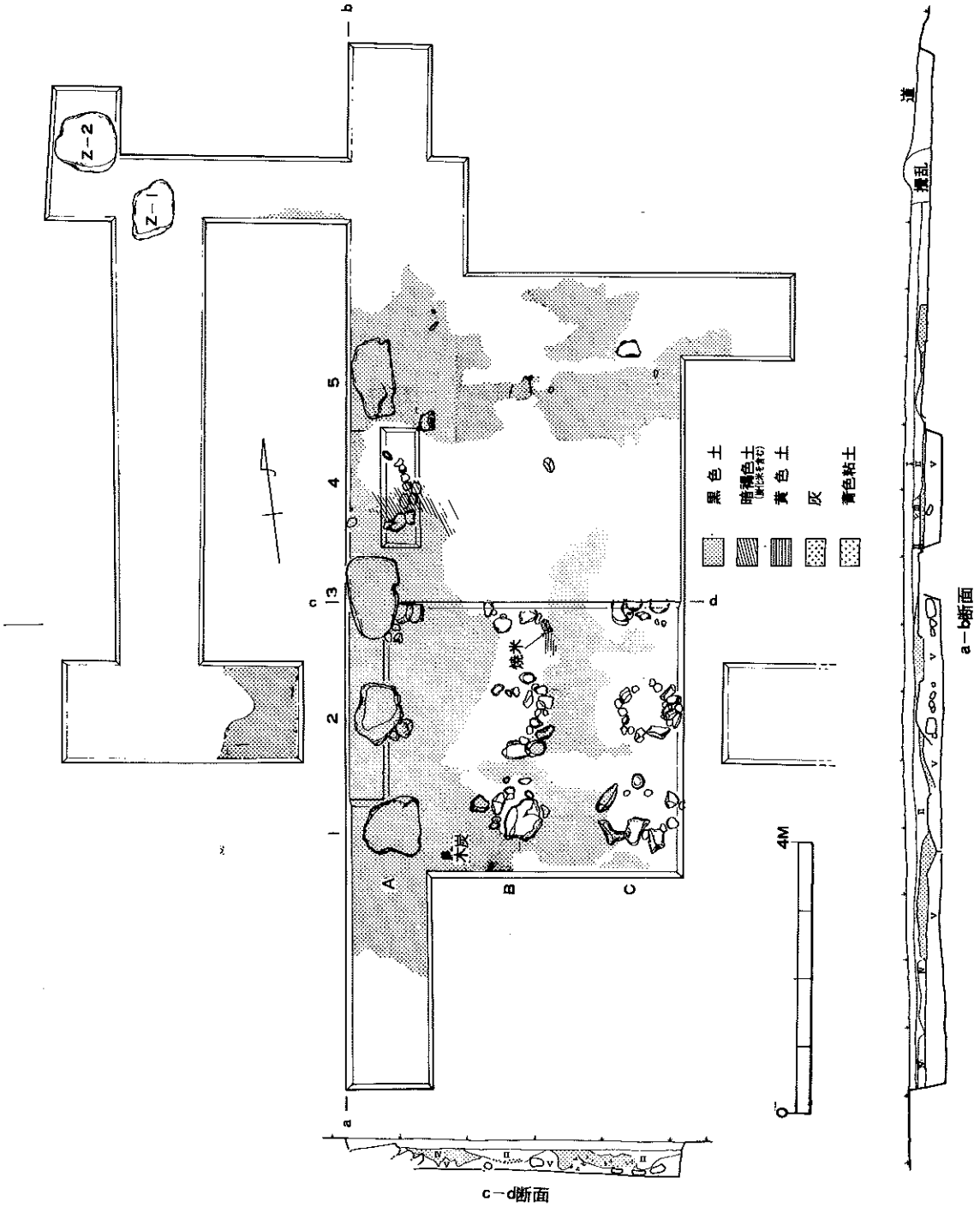


Fig.26 長者原礎石実測図

攪乱土が看取されるが、A列は黒色土につつまれ安定している。

つぎに、礎石の方位と柱間間隔について簡記する。方位はA列において磁北より6度5分東偏する。柱間間隔は不正確であるが、次のごとき数値を得た。

A2—A3　168cm　5.544尺　A2—B2　182cm　6.006尺　A3—A4　162cm　5.346尺

B2—C2　202cm　6.666尺　A4—A5　158cm　5.214尺　A3—B3　202cm　6.666尺

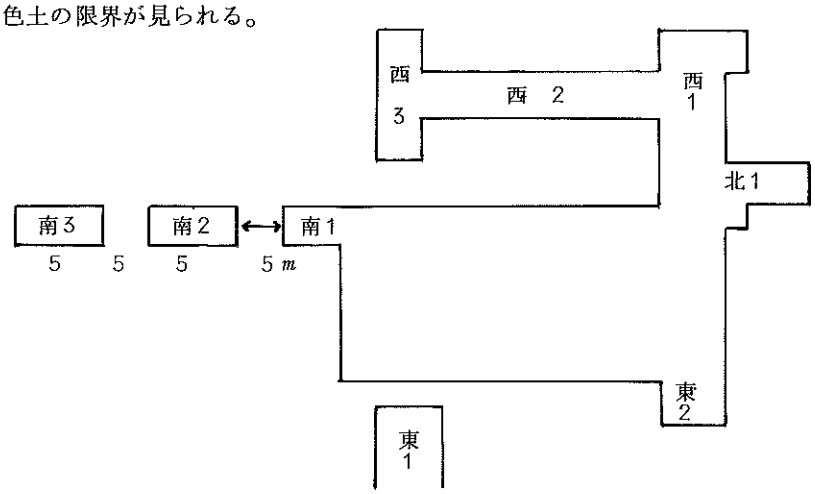
上述の数値において、ほぼ確実に柱間を計測し得たのは、A列のみであり、他は比較的遺存のよい根石を使用したが、不正確である。さらに北半の発掘において良好な礎石を得て、より正確を期したい。

第一次・二次の調査で得られた礎石からは2間4間の建造物となるが、さらに礎石がかつて存在したのか否かを一応考えてみる必要がある。発掘の結果からは、南側については抜き取られたと考えられない。おそらくA—1は角柱であろう。北側には、次のような多少の疑点がある。それはA—5に接する攪乱層は、A—6が抜かれた結果の攪乱と見られる点で、もしそうであったとすると西1区の黒色土はA—6に関連づけられ理解しやすくなる。確証はないが、Z—1、Z—2のいずれかをA—6に比定されもする。西側については発掘の結果から存在し得ないのではないかと思う。東側については、東1区を約3m拡大したが、存在を示唆するような所見はない。但し東側地区は、かつて段落ちとなって現町道に平行な細長い畠地があったという記憶が、地主にも確実にあるので、東側のその1列が段畑をひらいた為に破壊されたとも考えるが、いまそれを実証する材料はない。

発掘拡大区

図示のごとく、発掘区を拡大したので、その概況をのべる。

東第1、2試掘区　前者については特記事項はないが、断面に崖状の段落ちが認められる。後者には黒色土の限界が見られる。



西第1試掘区　黒色土の北限が本区と北第1区にかけて見られるが、この地点は攪乱がかなり激しいので、黒色面のひろがりは、やや北にのびていたと考えられる。攪乱部には搬出された礎石2箇（Z－1、Z－2）が検出された。礎石下には水道管が通る。

西第2試掘区　黒色土は漸減するが、明瞭な境界は認められない、おそらく西1区、西3区をつらねる線が、本区の東壁下を通るものと思う。

西第3試掘区　礎石A－2より西に約1.4mはなれた所に黒色土の境界が認められる。西限であろう。

南第1試掘区　礎石A－1より南に約1.5mで、黒色の境界が認められ、断面にも検出される。

南第2、3試掘区　遺構、遺物など検出されない。

遺物

布目瓦小破片　南第1試掘区とC－3近くで出土。

青磁片　南第1試掘区出土。

米・木材片　いずれもまっ黒く炭化している。前述の黒色土の中に前者は含まれる。もみがらのついたものとつかないものがあるが、つかないものが量的に多い。A－1とB－1の中間の南側壁の角近くから、米と木材がかなり多量に出土。米粒の出土状況は、個々の米粒は揃っておらず、塊状で不統一であるので穂のままで焼けたとはいえない[6]。

土師質壺　高台付土師質の破片その他の小片が僅かであるが出土。

結　　語

今次の調査によって多少の疑点はあるにしても、四間二面の建物のプランを明らかにし得、かつその建物が火災にあい焼失したことも明らかにし得たと思う。焼失のおおまかな時期を示すのは、土師質の土器片であり、以降の遺物は全く含まれない。

従来、長者原一帯から出土する焼け瓦、焼け米などの説明にあたって、『文徳実録』所収の天安2年（858年）の「菊池城不動倉十一宇火」の記載を引用して、その事実を示す材料であると通説のようにいわれているが、われわれの調査の結果、断定はつつしまなければならないが、その可能性が考えられるようである。ただし不動倉の規模や十一宇という棟数については、われわれの知識は完全でない。不動倉十一宇がはたして長者原とよばれる台地にのみあったのか否か疑ってみる必要があり[7]、これらは今後に残された問題である。伴出の木材の樹名、稲の同定などは本報告にゆずりたい。　　（三島・緒方）

註

1）『昭和43年度埋蔵文化財緊急調査概報　伝鞠智城跡　三万田遺跡』　熊本県教育委員会　昭和44年

2）近年の開田による抜き取り以外にも、たとえば、長者原のほぼ中央を通る県道拡張工事の際にも、多

少の地形変改がなされているが、この変改は礎石配置に重要な関係をもっている。

3）乙益、田辺、緒方、上野および三島らが担当した。文献は『昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報　伝鞠智城跡』　熊本県教育委員会　昭和43年

4）礎石には下記のごとく番号を付した。A—1はA—2・3・5よりやや深い。これはブルドーザーによる沈下を思わしめる。

	1	2	3	4	5
A	○	○	○	○	○
B	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○

5）この黄色粘土は、宮野礎石における、礎石下の知見により判断すれば、根固め用の粘土の一部と考える。

6）長者原では、炭化米のほかに粟・稗・小麦などが得られている。（註3書の長者原の項）

7）昭和31年8月滝川政次郎教授を中心とする菊池古文化調査の折に、三島は米原集落近くで相当量の炭化米と木材片を検出した。

本実測図のトレースには高木恭二君らの協力を得た。記して感謝申し上げる。

B　宮野礎石群

昭和43年3月のボーリング調査で、地表下約30～50cmに、南北に長軸をとる礎石群が埋没していることを確認した。そこで今次の調査はその礎石群を露出して、建造物の規模を明らかにし、この建造物が鞠智城の中で、どのような機能をもっていたかを推定するためのものであった。ただ日程の関係で礎石以外の遺構については調査できなかった。調査は前回のボーリング調査にもとづいて礎石の周囲だけを露出したが、礎石の下部の調査は1礎石にとどめた。露出した礎石群は西から東へA、B、C、D列、南から北へ1～10とした（Fig. 27）。

礎石列はA列が10個、B、C、D列はそれぞれ8、6、5個で合計29個を確認した。A—10は現在の桑園の北の端にあたり、その北側は段落ちの畑地になっていて、そこに2個の礎石が存在している。おそらくここの礎石群の中から移動したものであろう。礎石の石材は、D—2（硅岩質）をのぞいてすべて花崗岩を使用しており、上面は平坦になるよう加工されている。

29個の礎石のうち原位置から移動したと考えられるものは、B列の4・6、C列の3・4・5、D列の2・3・4の8個でA列は全部原位置であろう。とくに地形がA—1からD—5方向にかけて低くなっているため、D列は耕作時の邪魔になる関係からD—1以外をかなり深く埋めこんでいる。実際地主の話によると、D—1は表土下わずか12～13cmであったので、耕作するたびに邪魔になっていたということである。

原位置にあると考えられる礎石間の中心距離は東西、南北ともに約2.41～2.42m（＝8尺）である。したがって東西約7.20～7.30m（礎石端から礎石端までの距離8.35m）、南北約21.60～21.70m（同22.70m）の長さになる。つまり現状では間口3間、奥行9間の建造物を想定するのが妥当であろう。なおこの建造物の性格については別項にゆずることにする。

この礎石列の中でとくにD—4は移動しているうえに、石の表面に多量のススが付着している。このような例は宮野礎石の中には他に例のないことである。そのほか礎石の周辺から遺物を検出したのはA—2・3・5、C—3で布目瓦片、A—8とA—9のほぼ中間からやや西よりのところから平瓦のかなり大きな破片を、A—1からは土師片と椀型土器を検出した。とくに瓦類は二次的な火をうけたとみえ赤味をおびている。

礎石群の露出後、版築の広がりや遺構を確かめるため試掘坑を設定した（Fig. 28）。A—1を東西南北に掘った第Ⅰ試掘坑、B—1から南方に3.5m延ばした第Ⅱ試掘坑、A—4から西方6.5mの第Ⅲ試掘坑、D—1から東4mの第Ⅳ試掘坑がそれである。第Ⅰ試掘坑は礎石を固定する場合にどのような方法を取っているかを確認するためである。まず地山を鍋底状に掘り下げてある程度固め礎石を安定させたために約30～40cmの厚さで版築を行なっているにすぎない。版築は地山の赤土や黒色土を交互に固めたもので、スコップでもかなり手こずるくらいに固めている。なお礎石下に根固め石も使用していないことも特色であろう。第Ⅱ

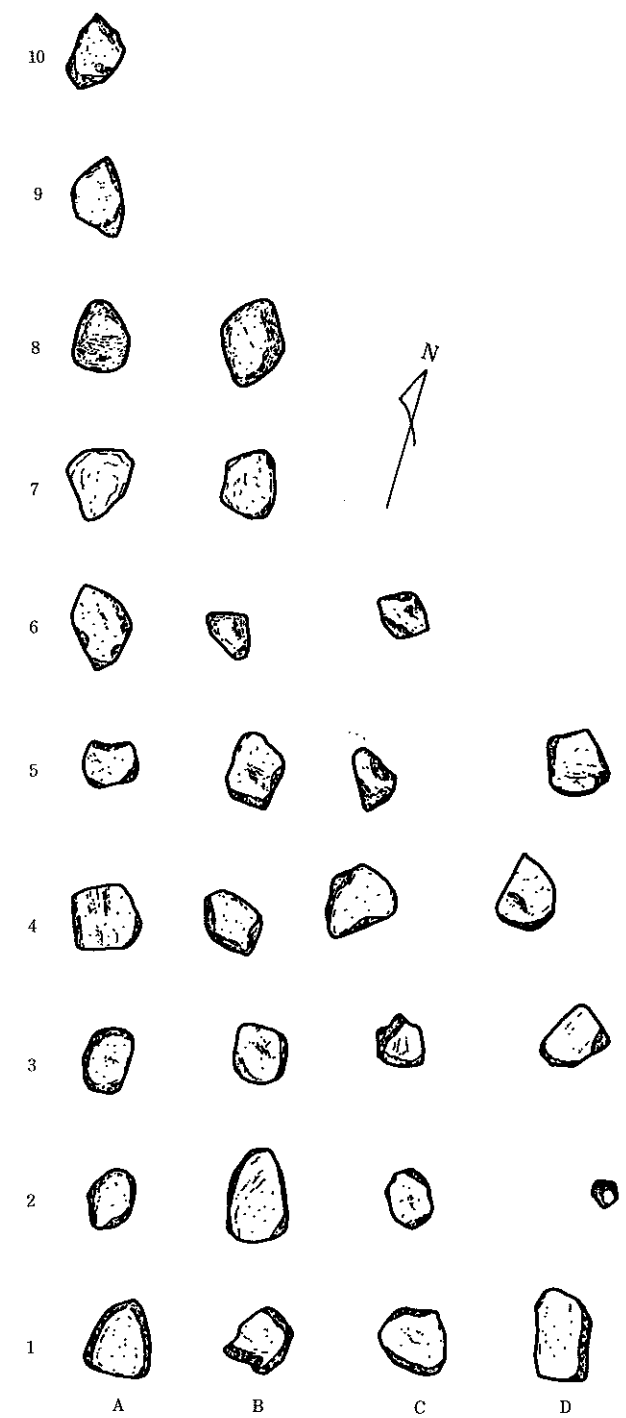
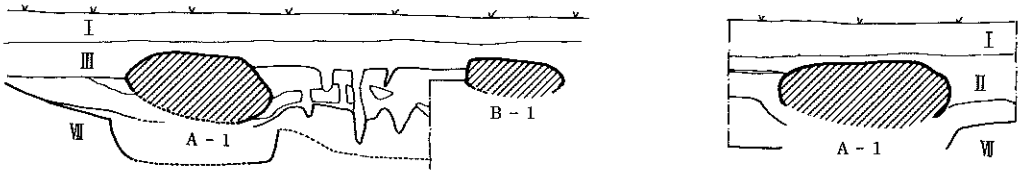
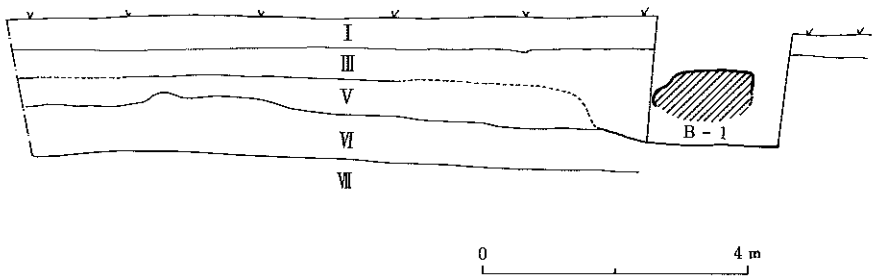


Fig. 27 宮野礎石群配置図

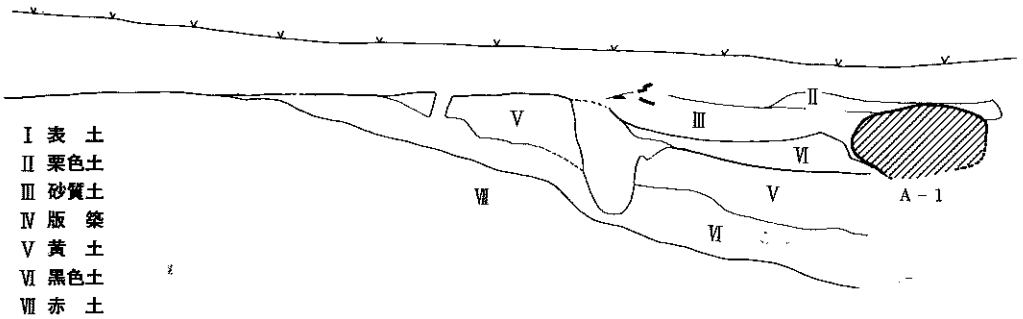
Ⅰ 試掘坑



Ⅱ 試掘坑



Ⅲ 試掘坑



Ⅳ 試掘坑

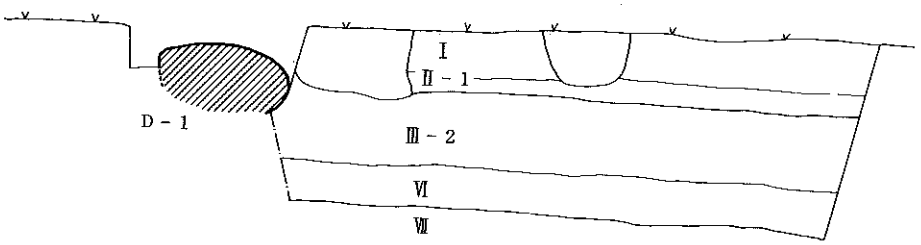


Fig.28 宮野礎石土層断面図

試掘坑も版築の広がりを確かめるためのものである。ここでは地山が深いので地山の上層の黒色土層に黄色がかった版築を行なっている。第Ⅰ試掘坑の状態と同じように建造物の外側にはわずかに約40cmの版築の広がりを認めるだけである。第Ⅳ試掘坑では版築の外側への広がりはまったく認められない。建造物の西側の遺構を調べるための第Ⅲ試掘坑では、礎石の外側に約1.70mの広がりをもつ黒色土層（地表下約60cm）を確認した。この地表は地山上の黒色土の二次堆積層と考えられる。またその上面がやや固いことから、当時の地表の一部ではないかと推測する。なお図中で地山が西側で平坦になっている部分があるが、これは近年ブルドーザーによって削平されたためである。また礎石の外側約1.50～1.80mのところ、深さ約30cmで平瓦片を多数検出した。

宮野礎石列の全般的な特徴として、礎石の下部をある程度固めたことはもちろんであるが、建造物の内側になる部分は、礎石の上端から約10cmの深さで非常に固めており、建造物の外側はほとんど手を加えていないことを指摘できる。また、版築の上面に花崗岩の風化した砂質土が、約2～8cmの厚さで存在する部分がある。この砂質土は版築後おそらく建造物の西側から流入した堆積物であると考える。（隈・杉村・桑原憲彰）

C 長者山の遺構

長者山は米原集落の南西約500mにある小丘で、長者原台地の西端を限る要害の地である。この小丘は北につづき灰塚、ススミの御所の土塁線を経て佐官どんの峯につながり、一連の小山脈をなす。この地には昔から米原長者どんの「御金蔵」があったという伝説がある。おそらく現在地表に露出している礎石群からおこった伝説であろう。

現地は鹿本郡菊鹿町大字米原字長者原530番地にあたり、丘全体は雑木とクヌギ林におおわれている。丘の大部分は米原集落の共同墓地になっているため、頂部の変形いちじるしい。この地に礎石列があることは早くから知られており、熊本県が「伝鞠智城跡」として指定したのもこの地であった。しかるに墓地の周辺は竹笹や雑木が生い繁り全貌を確かめることは容易ならぬものがあった。たまたま今回は米原地区の人たちによって、樹林の下刈りが行なわれていたため、全山の地形測量を完遂するとともに、新しい礎石群を発見し、多大の収穫をあげることができた（Fig. 29）。

長者山は宮野礎石群の所在地から約60mはなれたゆるやかな丘で、宮野の礎石群との比高差約10メートルを有する。丘頂は数段に分割された平坦部が構成され、米原地区の共同墓地になっている。従来、礎石群の判明していたのは、共同墓地の北側に接したクヌギ林の中の平坦部地点で、南北2列、東西4列、合計7個におよぶ。これらのうち、東西の礎石間隔は7尺の柱

間が想定され、南北は7尺5寸の柱間が復原される。このような1間3面の建物はありえないので、おそらく礎石列の北側か南側にもう1列分の礎石があったと考えられるが、確認されていない。おそらく抜きとられたのであろう。この地点に礎石列のあることは古くから知られており、かつて昭和31年8月、神道文化会と菊池文化顕彰会が共催して調査した際には、古瓦の残欠や須恵器の小破片が検出されている。

共同墓地内の礎石群は合計10個以上に及び中には移動していないものもあるが、多くは埋葬のさい、動かされ、不均等な配置をもって散在する。これだけの礎石群をもって幾棟分の建物を復原できるか問題であるが、少なくとも現状から考えて、二棟以上はあったものと考えられる。さらに、墓地の東側のクヌギ林の茂みから今回新たに発見した4個の礎石列は、柱間間隔7尺が復原され、おそらくこの地点から墓域の平坦部にかけて1棟分の建物があったことが考えられる。

又、墓地の北西側の段落ちになった山林中の平坦部に南北方向に2.2m間隔で3個の礎石があり、その西に2個の石がみられる。まだ埋没しているものも予想され、ここにも1棟の建物が予想される。

次に、共同墓地の西側では、昭和43年正月、何らの予告もなく、ブルドーザー開墾が実施され、多くの礎石群が消滅した。後日、聞くところによると、開墾された平坦部には等間隔をもって7個の礎石列があったように思われる。おそらくこの平坦部には、1棟以上の建物があったと考えられるが、今は探索のしようがない。墓地の西端には、現在移動していない礎石1個と移動した礎石2個が認められるが、おそらくこの地点にも1棟分の建物があったのであろう。現在、開墾されてしまった長者山西側の平坦部では、西北方の谷と東南方の谷に合計3個の礎石が転落している。又、長者山の南、比高約20メートル下がった地点には平坦な土地があり、あるいはこの地点にも何らかの建物遺構が存在するかもしれないが、今回の調査では確認することができなかった。

要するに長者山の礎石群は、地形的にみて鞠智城内でも重要な施設があったものと考えられる。すなわち、北は、灰塚、ススミの御所、佐官どんの尾根につながる土塁線をひかえ、東は宮野礎石群及び長者原礎石群に接し、西は池ノ尾城門礎石をのぞみ、南は深迫城門礎石及び堀切の城門礎石を見下ろす展望のよい地点にあたり、軍事的意義は大きい。しかも長者山の建物は瓦葺であったと考えられ、従来、数片の古瓦が採取されている。　　（乙益・上野）

Fig.29 長者山実測図

2　小　　結

以上のべた通り鞠智城は昭和42年度の第一次・二次調査に着手以来、第三次調査（昭和43年度）を経て本年度の第四次調査を終るにあたり、従来判らなかった多くの問題を解決することができたことは、何よりも有意義であった。

すなわち第一次調査時には、鞠智城の外郭線を一応把握するとともに、米原集落およびその周辺に散在する礎石群を記録し、長者原一帯の測量調査を行ない、基礎的な作業を概成した。さらに「堀切」と「深迫」、「池ノ尾」に現存する城門礎石を完掘露出し、城の全体配置を探索する有力な手がかりをえた。一方米原集落の西を限る小山脈に設けられた土塁線をたどり、「佐官どん」の尾根にある平坦部の発掘を行なった。また従来実態の明らかでなかった「馬こかし」の石垣や「三枝」の石垣はたとえ後世の所産とはいえ、鞠智城の配置を知る有力な手がかりとなった。とくに43年３月に行なわれた第二次調査によって、「宮野」と「長者原」に礎石群が埋没していることが明らかになり、第四次調査の端緒となった。

第三次調査は主として「深迫」の城門礎石一帯に進入道路の方向を把握するとともに、周辺に土塁遺構らしきものを発見した。とくに第三次には土塁線や切落しの崖線をたどり、その実測図を作成することに重点をおいたが、「長者山」から「灰塚」「ススミの御所」「佐官どん」の尾根にいたる土塁線、および車路のほか明確に把握できるものはなかった。それというのも米原地方は花崗岩の風化土地帯であるため、崖線の自然崩壊箇所が多く、人為的遺構との区別があまりにも困難であったからである。

第四次調査はすでにのべた通り「長者山礎石群」および「宮野礎石群」「長者原礎石群」に重点をおき、礎石列の全面露出作業を行なった。「長者山」地区では今回新たに発見した礎石列も合計して、約1000平方メートルの中に、５～６棟分の建物が想定された。とくに従来判っていた墓地の北側にならぶ礎石列は、南北７尺、東西７尺５寸の柱間間隔が復原された。このような礎石配置は従来類をみないので、さらに今後の探索が必要である。また「宮野」の礎石群では東西４列、南北10列分の礎石列が確認され、柱間は東西 8.5 尺、南北８尺の間隔を有することが判った[1)]。おそらく、このような九間三面の建物配置から考えると、長倉の跡と考えられ、三間四方を単位とする東倉・中倉・西倉の三倉が一棟内に在ったものと推定される。

さらに「長者原」の礎石群は東西6.5尺、南北 5.5 尺の柱間間隔が復原され、礎石は東西３個、南北５個分だけしか確認できなかった。少なくともこのような礎石配置の建物は他に類がなく、柱間間隔も他の礎石とはまるで違った数値をえた。一体鞠智城では、各礎石群によって

柱間間隔を異にするのは、いかなる理由によるものであろうか。或は各建物の機能が本質的に異なるのであろうか。また各建物の成立年代が違うのであろうか。いずれにしても大きな問題が残る。

このように鞠智城は従来幻の城跡とよばれていたが、ここにようやく全体の概念だけでも明らかにすることができたのはまことに幸である。しかし、まだ多くの問題が残されている。すなわち城の全域には「少監どん」「紀屋敷」をはじめ「長者山」の南平坦部、「堀切」の門礎石の上段にある古瓦出土地点、「長者原」における埋没礎石群、その他域の外郭線と内郭線の把握など、疑問点が少なくない。今後といえども鞠智城は、抜本的な継続調査を行なうことがのぞまれるものである。　（乙益）

註

1）第七次調査では、宮野礎石を全掘し、測量を行った。その知見では宮野礎石群には唐大尺（1尺＝0.976尺・約29.6cm）が使用されていると判断された。唐大尺によって柱間寸法を復原すると、桁行・梁行とも8尺で正しく各礎石の中心となる。（図面4参照）

第Ⅶ章　第五次調査の成果

1　調査遺構・遺物

A　A　　区

字上原444の2・445の2番地に相当し、面積は486㎡をはかる。水田として利用されていたA区では、1m幅のトレンチを合計8本設定した（Fig.30）。8トレンチ北半においてローム層が北側へ傾斜しており、耕作土・茶褐色土層・黒色土層・赤褐色土層・ローム層という層序をなす。しかし、8トレンチ南半及び他のトレンチでは黒褐色土層・暗赤褐色土層を欠失しており、地表下25～30cmでローム層が現われた。

A区は米原の台地上の中でも標高の最も高い地点にあり、以前の水田化に伴い削平され整地されたものであろう。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。　　（高谷和生）

B　B・C　区

B区は字上原447の2・448の2番地に相当し、面積311㎡をはかる。C区は字上原449の2番地に相当し面積は139㎡をはかる。

B区は水田、C区は桑畑として利用されていた。両区に1×2mのトレンチを2m間隔で設定したところ、B区の北端トレンチでピットを検出し、C区では、比較的多くの遺物が出土した。そこで、両地域のトレンチを拡張して遺構の有無を確認することにした。

(1) 土層の関係

B・C区は耕作土（Ⅰ層）・茶褐色土層（Ⅱ層）・黒色土層（Ⅲ層）・暗赤褐色土層(Ⅳ層)・黒褐色土層（Ⅴ層、C区のみ有）・赤褐色土層（Ⅵ層）・ローム層（Ⅶ層）の層序がみられた。遺物は主にB区とC区南半においてはⅣ層上位に、C区北半ではⅢ層下位に包含されており、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦・青磁・中世陶器と多岐にわたる。完形の知れる遺物はなく、すべて破片・細片となって出土し量的には土器類は少なく、布目瓦が主体をなす。この遺物包含層が中世期の土器類を混在する形で出土していることは、中世期以降に成因のあることを示し、遺物が破片・細片となって出土するのは、これと関係するとみられる。

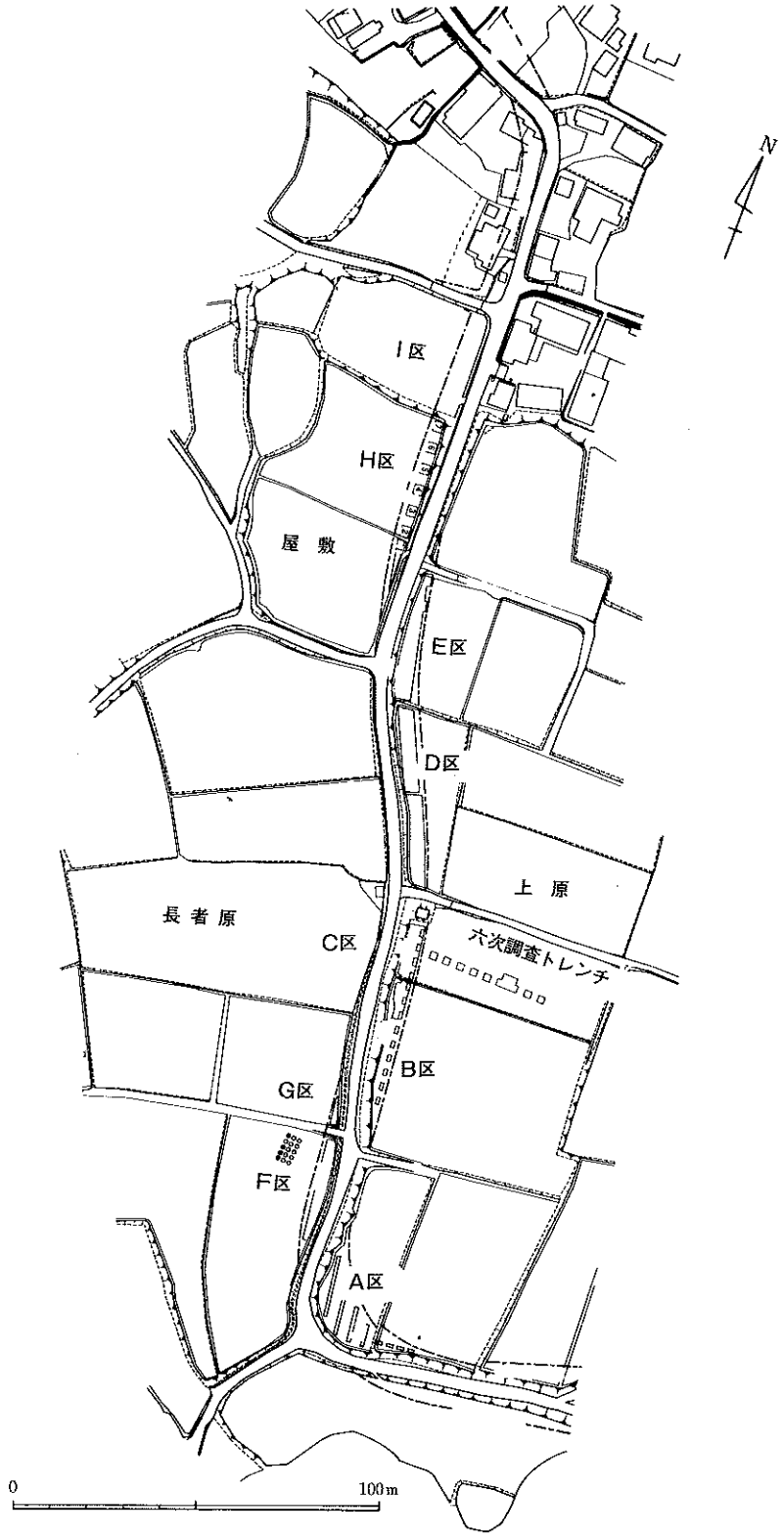


Fig.30　第五次・六次調査地区全図（A～I区は第五次調査地区名）

(2) 検 出 遺 構

B・C区では合計70個のピット群がⅥ層下位・ローム層上面で検出された。検出作業はⅣ・Ⅴ・Ⅵ層を注意深く掘下げて行なったが、南北断面図（Fig. 31）にみられるように、断面にかかるピットはB区ではⅥ層上面、C区ではⅤ層上面ないしはⅣ層中から掘りこまれていることを観察できた。一方、ピットの埋土にあっては、B区のNo. 1、C区のNo.13が黒色土であったことを除けば、多くのピットがⅣ層の土を埋土としていた。したがって、ローム層上面で最終的に確認した多くのピット群が掘りこまれたのも、B区ではⅥ層上面、C区ではⅤ層上面ないしはⅣ層中からではないかと考える。ただし、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層とも極めてしまりのないフカフカの土層であり、上面といっても断面から想定するもので、平面的に検出することができなかったことを断っておく。

ピット群は径20～50cm大のものがほとんどであり、円形ないしは不整円形の形状をなす。ピットの底の標高値による観察では、B区で145.00～145.40mに、C区では144.80～145.30mに多くのピットが位置する。8例のピット中には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦等の遺物を出土した（Tab. 3）。

そのほか、B区北端部ではⅥ層中に長さ150cm、幅50cmにわたり焼米が薄く散布する箇所が

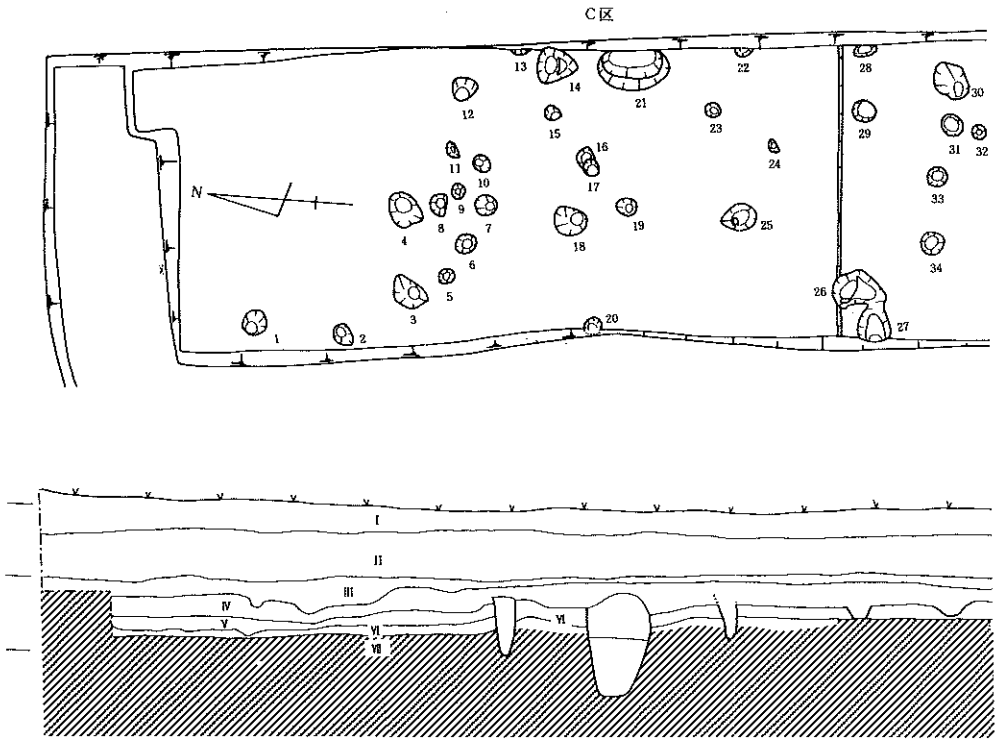


Fig.31 B・C区平面図　東壁断面実測図

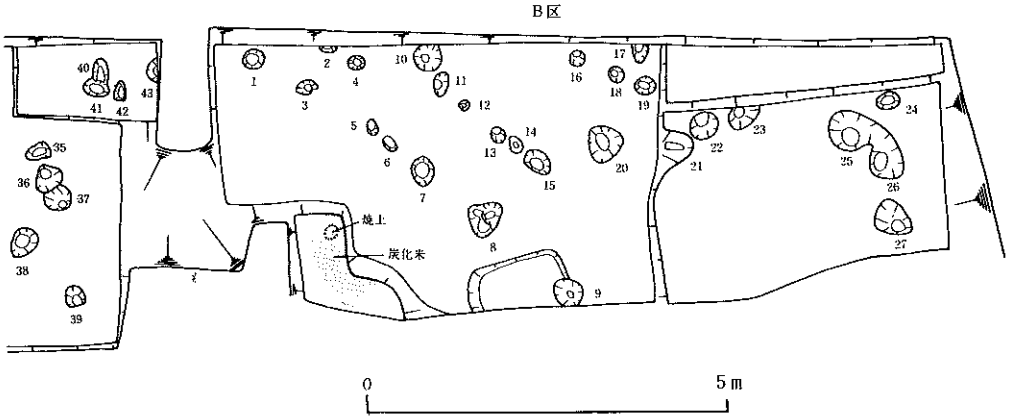
あり、その中に径20cm前後の焼土を検出した。

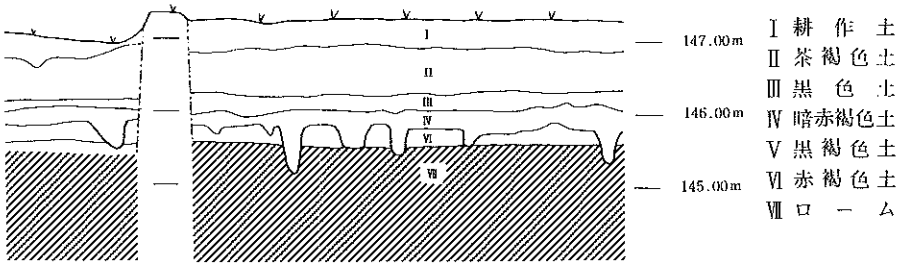
(3) 遺構の性格

検出されたピット群の中で、比較的に規則的な配列をとるとみられるピットに、C区のNo.4・18・25およびNo.29・33・38・39がある。ピットの間隔と方位（磁北）は、前者が2.3m前後でN1°30′W、後者が1.10～1.34mでN38°Eである。そのほかB区ではNo.1・3・5～9（N31°E）と、No.10～15（N39°E）がほぼ一直線上に並ぶ。これらのピット列の底の標高値は、C区のものが40cm前後、B区のものが80.90cmという差がある（Tab. 3）。発掘面積が限られているため、ピット列の性格については断定をし難いが、一応4本の柱列を想定し、その年代については布目瓦片を混入するピット（C区No.25）があることから、鞠智城築城期から遺物包含層が堆積した中世の間とみられる。

(4) 出土遺物

B・C区で出土した遺物のほとんどはⅢ・Ⅳ層中に包含されており、下層からは出土していない。遺物の大部分が瓦類で、土器類が若干ある。また、8個のピット内からは縄文土器・須恵器・布目瓦が出土している。全形の知れる遺物はなく、すべて破片・細片となって出土している。





Tab. 3　B・C区ピット計測値

区	ピット番号	深さ(cm)	ピットの底標高値(m)	長径×短径(cm)	備考
B一区	1	40.8	145.157	29 25	
	2	64.4	.098	23 ?	Ⅵ層上面からの掘り込み
	3	24.4	.253	30 19	弥生土器壺胴部片
	4	28.3	.188	24 19	
	5	28.7	.192	22 15	
	6	46.0	.012	22 13	
	7	36.7	.075	40 32	
	8	20.6	.904	50 44	
	9	40.0	.670	44 37	
	10	88.7	144.903	38 ?	Ⅵ層上面からの掘り込み
	11	37.3	145.164	32 20	
	12	18.0	.320	15 14	
	13	38.0	.095	23 20	
	14	18.0	.265	22 18	
	15	42.5	.720	40 28	
	16	22.0	.305	20 20	
	17	44.0	.295	? 21	Ⅵ層上面からの掘り込み
	18	34.5	.175	20 20	
	19	20.5	.330	28 24	
	20	26.5	.905	50 48	
	21	16.0	.545	47 47	
	22	41.5	.295	40 37	縄文土器2片
	23	40.5	.290	? 30	
	24	31	.350	30 20	瓦1片
	25	44	.225	63 55	
	26	62	.025	71 45	縄文土器1片、瓦5片、須恵器甕1片
	27	25	.385	62 47	瓦1片
C区	1	66.5	144.510	33 33	
	2	39.5	.790	24 32	
	3	42.9	.780	50 35	
	4	44.0	.865	50 38	
	5	32.7	.915	21 19	
	6	33.2	.935	28 26	
	7	40.6	.886	30 27	
	8	23.0	145.047	27 22	
	9	29.8	144.995	19 19	
	10	63.4	.671	22 22	
	11	18.7	145.109	24 14	
	12	56.1	144.655	36 31	
	13	73.5	145.015	27 ?	Ⅳ層中からの掘り込み
	14	69.5	144.580	57 50	
	15	37.4	.929	23 19	
	16	14.1	145.166	? 23	
	17	29.0	.040	? 20	
	18	59.3	144.735	45 35	
	19	45.6	.885	28 23	
	20	25.1	145.035	25 ?	瓦片出土
	21	120.0	144.460	96 (54+α)	Ⅴ層上面からの掘り込み、黒褐色の埋土
	22	53.0	145.135	32 ?	Ⅴ層上面からの掘り込み
	23	20.6	.175	22 18	
	24	31.0	.055	20 10	
	25	24.5	.096	50 37	瓦片出土
	26	68.0	144.425	75 58	
	27	53.9	.877	50 44	
	28	24.0	145.515	34 ?	
	29	34.1	.127	31 30	
	30	33.9	.186	57 46	
	31	24.3	.257	30 28	土師器甕口縁部片出土
	32	28.4	.222	20 20	
	33	25.6	.231	26 26	
	34	44.2	.027	33 31	
	35	25.0	.255	33 22	
	36	59.2	144.865	40 35	
	37	54.9	145.480	37 33	
	38	66.3	144.795	34 43	
	39	25.3	145.213	28 26	
	40	19.8	.177	? 21	
	41	35.1	.005	36 19	
	42	17.1	.196	28 15	
	43	31.6	.020	32 ?	

瓦類

C区のⅢ・Ⅳ層中から軒丸瓦の破片を含む比較的多くの瓦類が出土している。軒丸瓦は蓮弁2葉分の破片で、中房・円縁は欠失しているが、素弁8葉の蓮華文軒丸瓦に復原される。弁は長さ4.0cm、幅3.6cmで中央に丸みを帯びた稜線が走り、その左右は匙面を呈す。弁と中房は連続せず、また弁間には間弁が配される。胎土に白色砂粒を含み、焼成は堅緻で褐色を呈する。弁区の復原径12.8cm、中房の復原径3.8cm前後となり、周縁を加えた推定瓦当径は18cm前後となろう。

丸瓦はすべて小破片で点数も平瓦に比較して大幅に少ない。M—1は行基葺き丸瓦の尻部片とみられる資料である。凸面は後述する平瓦g類に類似する回転利用のハケ目調整がなされ、その後凸面側縁は頭の方へケズリ調整される。側面は頭の方へケズリ調整され、面取りは行なわない。胎土は良好で砂粒を若干含み、焼成は堅緻で暗灰色を呈する。M—2は丸瓦胴部分である。凸面はタテ方向のケズリ調整を行なった後、タテ方向のナデ調整が加えられている。凹面はタテ方向の部分的なナデ調整がされ、側縁には分割界線とみられる幅4mm深さ2mmの沈線が残り、凹面側縁を面取りする。胎土は良好、焼成堅緻で灰色を呈する。

丸瓦は胎土が良好で器壁が薄手のものと、白色砂粒を含む厚手のものに大別できそうであるが、いずれも凸面調整はタテ方向にケズリ調整される。また、側面の凹面側に分割截面、凸面側に破面を残す資料がある。丸瓦の分類については、今後の資料の増加を待ちたい。

平瓦は完形の資料はないが、凸面の叩き目と凸面調整によって8種に分類した(Tab. 4・5)。

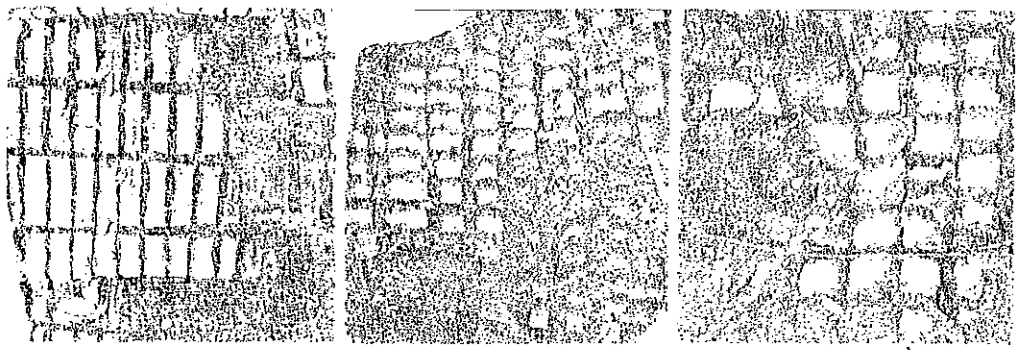
Tab. 4　第五次調査各区の丸瓦・平瓦出土数

区		B	C	D	E	F	計
丸	瓦	0	15	1	3	0	19
平	瓦	20	158	13	72	2	265
	a 類	1	18 (5)	1	5 (1)	0	25 (6)
	b 類	2	31	0	0	1	34
	c 類	0	9	0	0	0	9
	d 類	12 (2)	55 (7)	8 (1)	25 (5)	1	101 (25)
	e 類	0	1	0	0	0	1
	f 類	1	3	0	4	0	8
	g 類	0	2	0	0	0	2
	h 類	0	8	0	2	0	10
	不 明	4	16	4	36	0	60
	計	20	173	14	75	2	284

(　) は平瓦凹面広端縁に布端の圧痕をもつ資料数

Tab. 5　平瓦各類観察表

分類—番号	厚(cm)	凸　面	凹　面	側　面	胎　土	焼　成	色　調	備　考
a 類—1	3.3	長格子の叩き目 ↓ ヨコナデ ↓ 広端付近のケズリ	糸切り痕 模骨痕 広端縁よりに布端の圧痕	分割截面と破面があり軽くケズリ調整する	良　好	普　通	褐　色	——
b 類—1	2.4	大型の格子叩き目 ↓ ヨコナデ	糸切り痕 模骨痕 分割界線	〃	〃	〃	灰　色 ～ 灰黒色	分割界線は幅5㎜深さ3㎜
c 類—1	2.5	小型の格子叩き	模骨痕	〃	砂粒を少し含む	〃	灰褐色	——
d 類—1	3.0	ヨコナデ ↓ 広端付近の横・斜方向のケズリ調整	模骨痕 糸切り痕 布の綴じ合せ目 広端縁よりに布端の圧痕	〃	良　好	堅　緻	灰　色	模骨痕の幅は約4㎝
e 類—1	2.7	横方向のケズリ調整	糸切り痕 模骨痕 粘土板合せ目(S) 広端縁のケズリ調整	〃	〃	普　通	明るい赤褐色	——
f 類—1	2.8	横方向のハケ目様調整 ↓ 部分的にナデ	糸切り痕 模骨痕	——	砂粒を少し含む	〃	明褐色	——
g 類—1	2.3	f 類より深いハケ目様調整	細片のため不明	分割截面と破面があり軽くケズリ調整する	良　好	〃	灰褐色	——
h 類—1	2.4	幅の広い条痕となる調整	糸切り痕 模骨痕 粘土板合せ目	〃	〃	〃	〃	——



a類－1　　b類－1　　c類－1

Fig.32 宮野礎石建物跡出土平瓦叩き目集成(1：2)

この8類は、叩き目の見えるもの（a、b、c類）（Fig.32）とその後にナデ、ハケ目状調整を加えるもの（e、f、g、h類）に大別することができる。

a類　幅1～2㎜、間隔2.5～5㎜の刻線とこれに直交する幅2～4㎜、間隔6～17㎜の刻線を加えた叩き板による長格子の叩き目

b類　幅5㎜、間隔7～9㎜の刻線とこれに直交する幅5㎜、間隔10㎜前後の刻線を加えた叩き板による大型の格子叩き目

c類　幅2～3㎜、間隔3～5㎜の刻線とこれに直交する幅3～6㎜、間隔5～7㎜の刻線を加えた叩き板による小型の格子叩き目

d類　全面をタテまたはヨコ方向にナデ調整し、凸面の広端付近をケズリ調整する

e類　ヨコ方向のケズリ調整

f類　ヨコ方向の浅い条線となるハケ目状調整

g類　幅2㎜前後で間隔3㎜前後のヨコ方向の条痕となる調整

h類　幅・間隔とも8㎜前後の条痕となる調整

以上分類した8種の平瓦の中で、a～c類は叩きの後にヨコナデ・ナデ調整を加えるものがほとんどであり、調整の丁寧な資料をd類として分類していることは充分に考えられる。また、e類のヨコ方向のケズリやh類の特異な条痕を調整段階のものとして考えてよいかという疑問をもつが、ここでは一応調整段階の作業によるものとみなした。

さて、8類の平瓦は細片で2点出土しただけのg類を除いて、凹面に糸切り痕・模骨痕がみられ、a・b・d・e・f・hの6類に粘土板の合わせ目（S型）、d類に布の綴じ合わせ目の圧痕、d類に分割界線が認められ、また、側面は8類のすべてが凹面側に分割截面、凸面側に破面を残している。

以上の痕跡によって、出土した平瓦は、粘土板桶巻作り平瓦と考えられる。

なお、a・d類の多くの資料に凹面広端縁に布端の圧痕がみられ、凸面広端縁をタテ方向の

ケズリ調整を加えていることは、d類の大半の平瓦がa類の叩き目を後の調整によって消失させたものであることを示すと考えられる。

土器類（Fig. 34・35）

縄文土器（1・2）　1はB区のピットNo.22内、2はC区Ⅳ層中から出土した。両方とも鉢形土器のやや外傾する口縁部片で内、外面に条痕がみられる。1の口唇部は研磨されている。1、2とも胎土に角閃石をはじめ砂粒を含み、焼成良好で暗褐色を呈する。

弥生土器（3・4）　3はB区2トレンチのⅣ層中から出土した甕形土器の底部片である。体部外面を縦方向にハケ目調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈する。4は壺形土器の強く外反する口頸部片である。内面をナデ調整、外面を強いハケ目調整する。口唇部平端面に5㎜前後の間隔でハケ目工具の端部を押し当てた列点文が施される。胎土に微砂粒を含み、焼成良好で褐色を呈する。

土師器（5・8・9）　5はC区Ⅳ層中から出土した壺の口縁から肩にかけての破片である。口頸部は直線的でやや外傾する。肩部の内面を左回りにヘラケズリ調整する。器面が変化しており、ほかの調整は不明。胎土に白色砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈する。8は丹塗りの鉢であろう。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は外反ぎみで、口唇から3.6㎝の位置に一条の沈線を配する。胴部のハケ目調整の後に口縁から胴部にかけてヨコナデ調整し、丹塗りを行なう。局部的にヘラ研磨する。内面の口縁部はヨコナデ、胴部を左回りにヘラケズリする。胎土・焼成とも良好で、内部は褐色を呈する。復原口径は25.4㎝を測る。9は丹塗り高台付杯で口縁部を欠失する。高台は底部端にとりつき、内面をナデ調整、外面、高台部をヨコナデ調整し、底部外面は回転ヘラ切離しである。胎土・焼成とも良好で、内部は褐色を呈する。底径9.4㎝を測る。

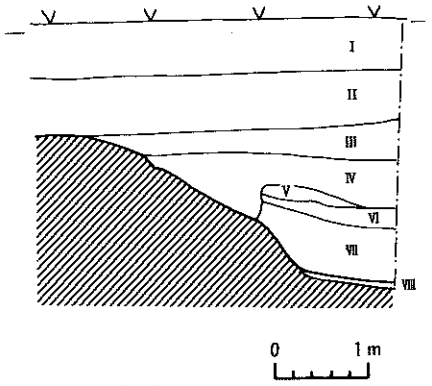
須恵器（6・7）　両者とも甕の肩部片で、外面を格子叩きの後に横、斜方向のカキ目調整を行なう。内面は6が同心円叩きの後にヨコナデし、7は右回りの同心円叩きを行なったままである。両者とも胎土・焼成は良好で暗灰色を呈する。

青磁椀（10・11）　両者ともC区のⅢ層中から出土している。10は口縁部から体部中位にかけての破片で、外面に削り出しの蓮弁文がみられる。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色を呈し細かな貫入がみられる。11は体部下位の破片で、外面の削り出し蓮弁文の上に櫛目をいれる。内面には見込みの花文の一部がみえる。胎土は灰白色で釉は灰オリーブ色を呈し細かな貫入がみられる。ともに龍泉窯系のものであろう。　（鶴嶋俊彦）

C　D　　区

字上原196の3番地に相当し、面積180㎡をはかる。

第Ⅲ層（暗い茶褐色土）の上面に縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、布目瓦等が出土している。散在しており特徴はないが一部西側のＳＦ501に流れ込む状況で検出された。



Ⅰ層　表土(耕作土)
Ⅱ層　明茶褐色土
Ⅲ層　暗茶褐色土
Ⅳ層　黒褐色土
Ⅴ層　黒褐色土＋黄色ロームブロック
Ⅵ層　黄色ロームブロック土
Ⅶ層　黒褐色粘質土
Ⅷ層　黒褐色粘質土＋ロームブロック

Fig.33 ＳＦ501断面実測図

(1) 検　出　遺　構 (Fig.33・37)

ＳＦ501　道路状遺構と思われる。Ⅳ層中に土師器、須恵器等を含んでいる。Ⅴ層は黒褐色土に黄色ロームのブロックを含むものでかなり堅固である。さらにⅧ層においては、黒褐色粘質土にロームブロックが混入したものであり、この面においても堅固さを持つ。これはこの遺構は2回にわたって使用されたものであり、第1回はⅧ層中に布目瓦が2点出土していることから、その時代は布目瓦の使用されていた時期もしくはそれ以降と考えられる。また2回目はその上面に中世陶器等が含まれることからそれ以前の時期であると考えられる。現存のものは遺構の東限にあたり対応するものは確認されない。

ＳＫ501　楕円形の二段に掘り込んだ土壙である。長軸方向1.8m、短軸方向0.9mであり、更にもう一段下がり深さ60cmを測る。埋土は黒褐色を呈し、遺物は出土しない。

炭化米散布地点　ＳＫ501の南側に、南北方向に主軸を持ち長軸4.5m、短軸2.0mの楕円形の範囲内に散布が見られ、一部炭化米、炭化物の集中する箇所もあるが、層として確認できるものはない。

(2) 出　土　遺　物

瓦類

D区では平瓦16点、丸瓦2点の総18点の出土である。その内d類が多く8点を占める。

調査地区内西側のＳＦ501に流れこむような状況で、もしくは第Ⅱ層明茶褐色土層中から瓦が出土する。第Ⅱ層自体は各時期の遺物が含まれる二次的な層であり、この地区出土の瓦も遺構に伴ったものではない。

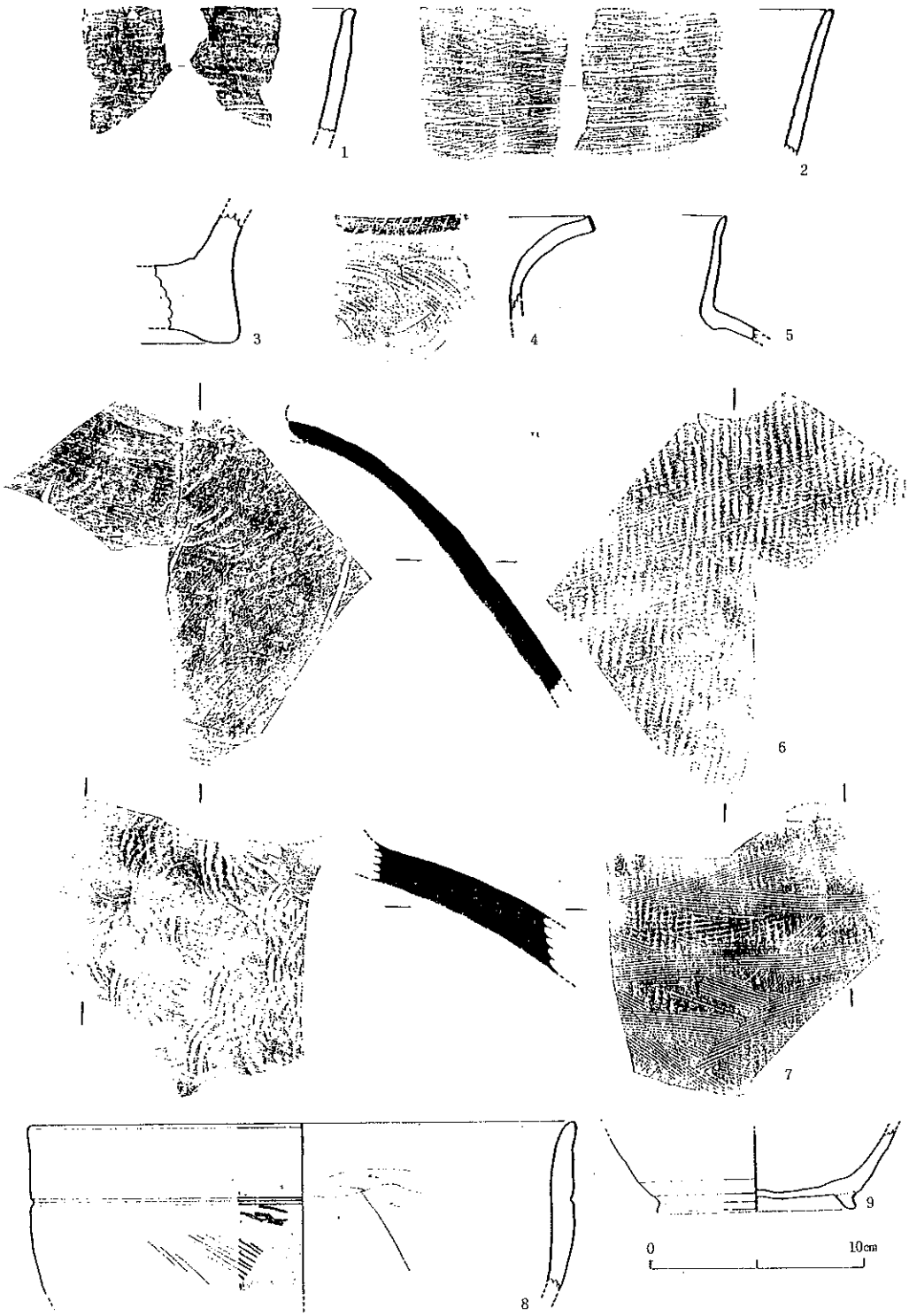


Fig.34 B・C区出土土器実測図(1:3)

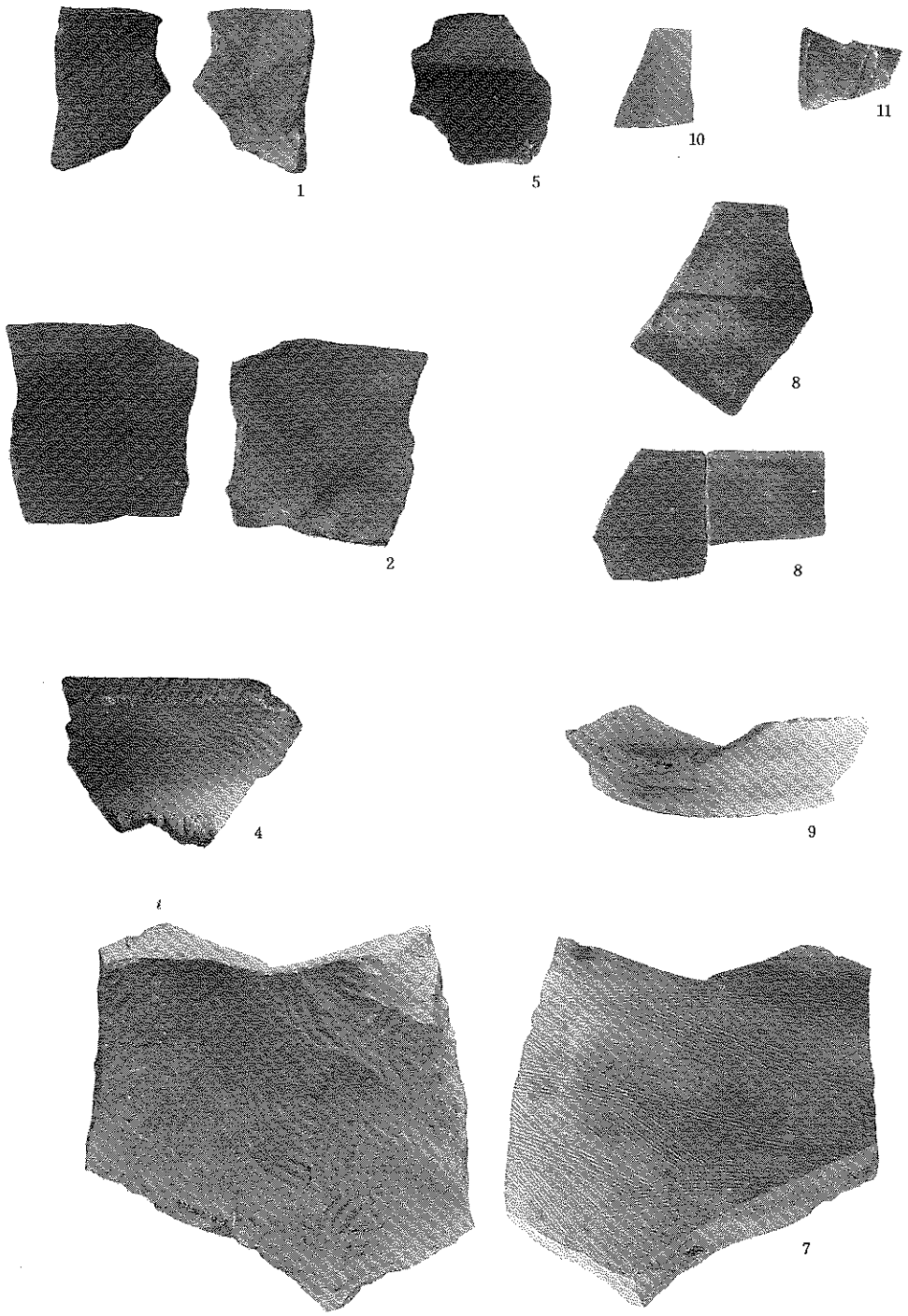


Fig.35 B・C区出土土器

土器類（Fig. 42）

縄文土器（1・2・3）　1は鉢形土器の肩部片で、口縁部に向ってやや外傾する。外面は横位の調整を、内面は同じく横位の研磨が施される。胎土に微砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。2は底部片である。底部はややあげ底状をなし、復原径は6.8cmである。胎土には微砂粒を多く含み、焼成はもろく、色調は褐色を呈する。3は平底の土器の底部片である。底部の周縁は指頭圧痕と思われるくぼみが連続する。胎土には石英粒を含み、焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈する。

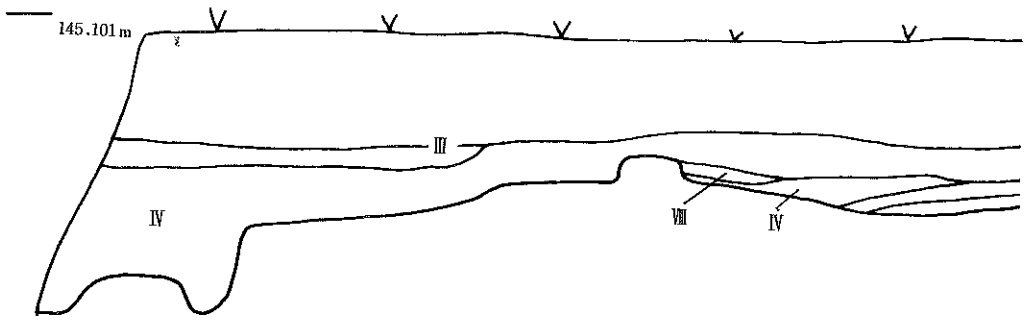
弥生土器（4）　中期の甕形土器の口縁破片である。口縁上部がややくぼみ内側へ張り出す。外面はていねいにナデ調整がなされ、内面には横位のハケ目が見られる。胎土には微砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。

須恵器（5）　杯蓋の天井部から口縁にかけての破片である。かえりを有し復原径は12cmである。外面は天井部付近をヘラ削りし、他はヨコナデ調整を施す。焼成は良好堅緻で、色調は黒灰色を呈する。

土師器（6）　丹塗り杯蓋のつまみ部である。凝宝珠形をなすがやや扁平である。横位のナデ調整を施し、胎土は密で焼成も良好である。

土師質土器（7）　糸切り底の小皿の完形品である。道路状遺構の上面、第Ⅳ層黒褐色土層からの出土である。胎土、焼成ともに良好であり明褐色を呈する。

中世陶器（8～11）　8は瓦質の皿である。体部下位を左方向にヘラケズリ調整を行ない、他はナデ調整を行なう。復原口径は18.5cmを測る。胎土に微砂粒を含み、焼成は良好。色調は



Ⅰ層 田の客土
Ⅱ層 茶褐色土
Ⅲ層 ローム再堆積層
Ⅳ層 明茶褐色緻密土
Ⅴ層 茶褐色土＋ロームブロック
Ⅵ層 黒褐色土（Ⅴ層とⅧ層の間のロームブロックを含まない）
Ⅷ層 ロームブロックを多量に含む層

Fig.36 E区東壁断面実測図

外面が灰黒色を内面が灰白色を呈する。9は土師質の鉢型土器の破片である。風化が著しく調整不明。復原口径は、33.4cmである。胎土には石英粒を若干含み、焼成良好である。色調は赤褐色を呈する。10は火舎の口縁部破片である。玉縁状の口縁を持ち下部には文様らしきものが見られるが明瞭ではない。内外面ともにナデ調整を施し、焼成良好である。色調は灰褐色を呈している。11は火舎の口縁部破片である。口縁は玉縁状をなすと思われる。口縁下には不等間隔で径1.8cmの三ツ巴文が刻印されている。内外面ともに調整を施し、焼成良好である。色調は灰白色を呈している。

D E　区

字上原195の3番地に相当し、面積250㎡をはかる。

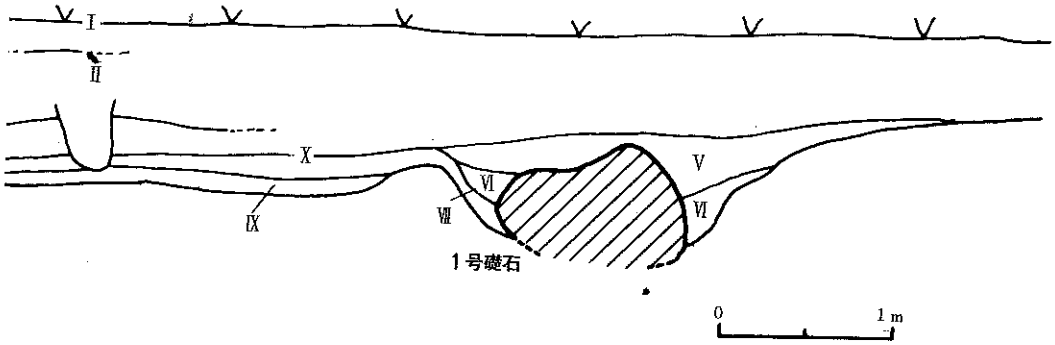
第Ⅱ層茶褐色土を剝ぐと、一部赤色ローム層に達し、遺構面が明瞭に現われる（Fig. 36）。

(1) **検出遺構**（Fig. 37）

S D503・504　共に近世陶磁器染付等が出土する遺構である。S D 503は南側へ傾きを持ち深さは30cm程である。S D504は現行道路面とほぼ平行に走り、深さは70cmを測る。

S K502　南北4.8m、東西3.5mを測る土壙である。多数の土師器、須恵器、備前甕、瓦等が出土しているが、土壙面に密着した状況ではなく、浮いた状態で全遺物が検出されている。

S K503・504　礎石を抜き取った跡の穴と思われる。S K503は、長軸方向2.0m、短軸方向1.2m、深さ0.4mである。土壙内埋土は3層に分かれⅡ層黒褐色には根固め用と思われる径15cmの安山岩を含む（Fig. 38）。S K504は長軸は1.5m短軸1.0m深さ0.2mを測る。深さが浅い



Ⅶ層　ロームを少量含む堆積層
Ⅸ層　暗茶褐色緻密土(Ⅳより強い)
Ⅹ層　Ⅵ層に近似した黒褐色土
Ⅺ層　ローム漸移層

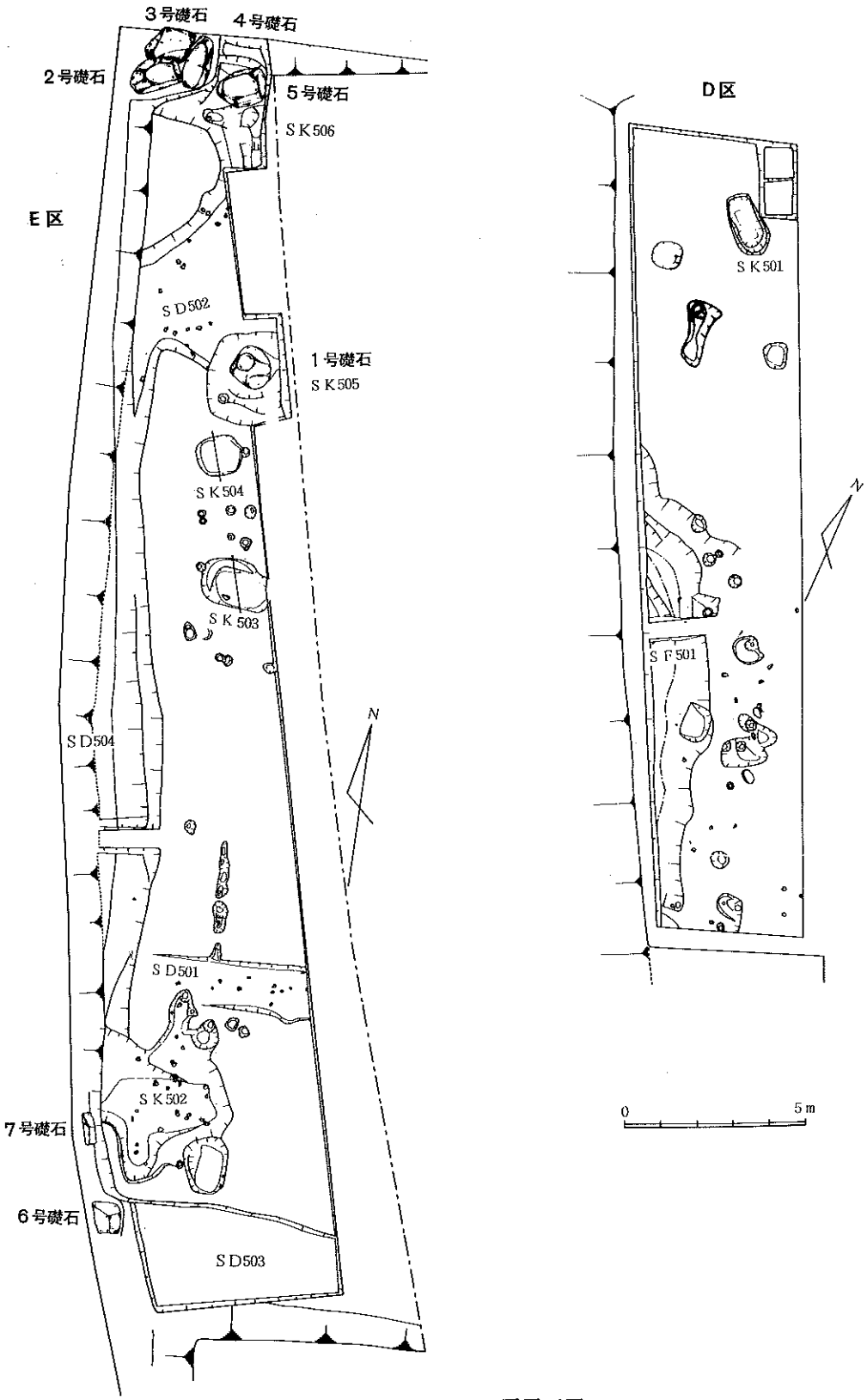


Fig.37　D・E区平面図

のは、この地区では北側が強く削平を受けているためである。ＳＫ503とＳＫ504の柱間間隔は3.6ｍであり、それはさらにもう一間ＳＤ503側に延びる可能性は充分ある。しかしながらＳＤ503がさらに深く削平を行なっている為にすでに遺構はとばされていると想像される。さらにＳＫ503の第Ⅱ層からは備前焼が出土し、この礎石が移動された時期を示すのではなかろうか。

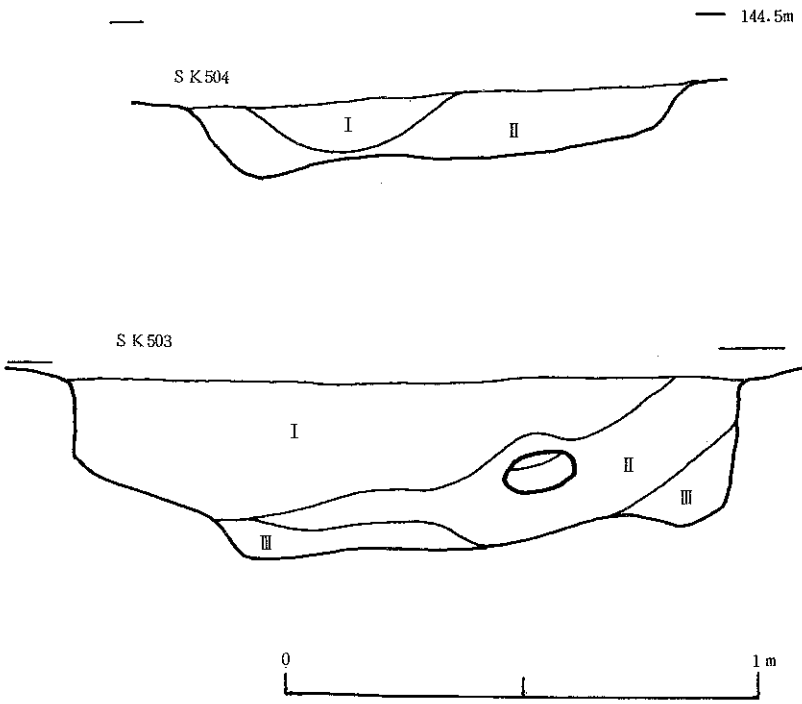


Fig. 38　礎石抜き取り穴実測図

ＳＫ505　礎石を抜き取った後に礎石をさらに地中深く潜らせる為の穴である。ＳＫ505は第１号礎石を埋める為の土壙であり径は3.5ｍ、深さ1.0ｍを測る。

ＳＫ506　南北方向及び東西方向に一条の溝を持つ不整形の土壙である。土壙埋土の第Ⅳ層は褐色土層で中世陶器のすり鉢を含んでいる。また第５号礎石はこの層の上面に載っており、おのずと礎石の置かれた時期が限定されよう。

ＳＤ501　東西方向に走る幅1.5ｍ、深さ0.2ｍの溝遺構である。西側に向うにしたがって浅くなっており、途中で端部は消滅する。溝内には瓦が溝底部より10～20cm浮き上がった状況で確認された。

(2) 出　土　遺　物

瓦類

瓦の出土は平瓦75点、丸瓦３点の総数78点であり内訳は Tab. 4 の通りである。その内で特

徴的であるのはａ類及びｆ類が比較的に多く、さらにｆ類では端部を有するものがａ類の２に対し５と多いことが指摘される。

しかしながら出土の状況及び瓦がかなり強く磨耗を受けていることなどから本来の位置を保ったものではなく、中世の時期攪乱によって混入したものと思われる。

土器類（Fig. 40・41）

ＳＫ502　この土壙内からは中世時期の遺物が多く出土している。１は中世陶器である。胴部より口縁部に向ってゆるやかに外反する壺である。外面には６㎜方形の格子目文の叩きを施し、内側にはヘラによる調整が見られる。復原口径は18.0㎝で焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。２は中世陶器である。備前焼の大甕であり、所謂玉縁状をなす。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良、色調は赤褐色を呈する。また計測は不可能ではあるが同個体の胴部片が検出されている。３は土師器である。甑の取手で、残存長 4.8㎝ である。胎土内には石英粒を多数含む。焼成は良、色調は茶褐色を呈する。なお全調査区内で唯一の出土例である。

ＳＤ502　４は瓦質土器である。すり鉢の底部であり底部径は11.8㎝、残存高2.7㎝である。底部より上方に向って刻線を施し、１㎝内外の単位に５本の条線を持つ。焼成は良好で堅緻。色調は灰色を呈する。５は須恵器である。破片であり、内面に同心円文の叩きを、外面には不鮮明ながらも叩きを施している。焼成は良好。色調は乳灰色を呈する。６は中世陶器であるすり鉢の胴部片である。下部より上方に向って刻線を施し、1.5㎝ 内外の単位に７本の条線を持つ。外面には小型の格子目文を持つが磨耗の為不鮮明である。焼成は良、色調は明褐色を呈する。７は中世陶器である。外面には７㎜大の方形の格子目文の叩きを施す。11と類似する。胎土に微石英粒を含む。焼成は良好、色調は暗紫灰色を呈する。８は中世陶器である。火舎の底部であり、復原底部径は29.6㎝を測り、下部に凸帯を一本持ちそれをヘラで調整を行なう。焼成は良好で、色調は乳灰色を呈する。

ＳＫ506　北側第４号礎石の埋まっていた土壙である。９は中世陶器である。すり鉢の底部であり、復原底部径は 13.0㎝を、残存高 5.0㎝を測る。内面にはまず横位の浅い条痕をめぐらし、底部より上方に向って２㎝内外の単位に６本の条線を持つ。胎土は密。焼成は良好かつ堅緻、色調は灰色を呈する。10は瓦器である。胴部片であろうが、部位は不明である。外面は器壁が荒れ観察不能であり、内面には不鮮明ながらも叩きが観察される。胎土には５㎜大の石英粒を含む。焼成は良、色調は暗黒灰色を呈する。11は中世陶器である。胴部片であり１と類似する。外面には長辺1.0㎝、短辺0.6㎝の長方形の格子目文叩きを施す。さらに内面にはハケ目による調整を左上方より右下方へと横位に施す。胎土は密。焼成は良好、色調は明灰色を呈する。

なお図中にはないが、龍泉窯系と思われる青磁片がＳＫ502より１点、ＳＫ503より１点出土している。

(3) 礎　　石

この地区には礎石が７個確認されている。しかしながらも原位置を保っておらず、第２号～第４号に至っては埋土等から近年移動し集められたことが、第６号、第７号は町道整備の際、邪魔であった為、掘り上げ現法面に打ちつけた事などが確認された。以下各礎石につき概況を述べる（Fig. 37）。

第１号礎石　安山岩、自然石、旧上面は逆転して下方を向く。第２号礎石　花崗岩、自然石、旧上面は上方を向く。第３号礎石　花崗岩、自然石の周囲を打ちかき調整を加える。旧上面は逆転して下方を向く。第４号礎石　花崗岩、自然石、旧上面は逆転して下方を向く。第５号礎石　花崗岩、自然石の周囲を打ちかき調整を加える。火を受けて赤変している。旧上面は上方を向く。第６号礎石　安山岩、自然石、旧上面は側方を向く。第７号礎石　安山岩、自然石、旧上面は上方を向く。（高谷）

Ｅ　Ｆ　　区

字長者原503の２番地に相当し、面積170㎡をはかる。

Ｆ　Ｇ　　区

字長者原502の２番地に相当し、面積40㎡をはかる（Fig. 39）。

水田に利用されており、耕作土（Ⅰ層）・茶褐色土層（Ⅱ層）・ローム層（Ⅲ層）がみられ、Ⅱ層中に近世以降の磁器片が１点出土した。Ⅱ層はＦ区のⅢ層に対応し、整地の際の客土と考えられる。遺構は検出されてない。

Ｇ　Ｈ　　区

字屋敷688の２番地に相当し、面積181㎡をはかる。

水田として利用されており、３ｍ四方のトレンチを３ｍ間隔で設定した。土層は耕作土（Ⅰ層）、水分を含んだ茶褐色土層（Ⅱ層）・ローム層（Ⅲ層）で、水田化の際にローム層に達する削平をうけている。遺構は検出されず、遺物も出土していない。

水田として利用されており、第四次調査で発掘された長者原礎石群が、西方約６ｍの水田下に埋没していることから全面の発掘を行なった。Ｆ区の道端には、花崗岩・安山岩の礎石が４個露出していたが、これは以前の水田化工事に際して、西方水田中から掘りおこしたものであ

る。

F区は耕作土（Ⅰ層）、暗茶褐色土層（Ⅱ層）、茶褐色土層（Ⅲ層）、黒色土層（Ⅴ層、北側に部分的にみられる）、ローム層（Ⅵ層）という基本層序から成る。北側部分では、Ⅱ層に比較的多くの炭化米を含み、Ⅲ層に少量の炭化米と布目瓦・中世陶器・青磁・近世以降の磁器が細片となって出土した。土層の関係からすると、ローム層に達する削平が行なわれた後にⅠ～Ⅲ層が堆積したものである。第四次調査の長者原礎石群の発掘でもふれられているように、町道側のF区付近は段落ちの細長い畑であったという話からすれば、Ⅰ～Ⅲ層は整地のための客土と考えることができる。炭化米を含んでいることは、西側の礎石群付近の土を客土としたためであろう（Fig. 39）。

一方、F区の北側では、Ⅴ層上面で土壙または溝状の落ちこみを検出した（ＳＸ501）。埋土（Ⅳ層）は、褐色土やローム塊を含む茶褐色土等の互層から成り、遺物は出土しなかった。長者原礎石群に近接するため、これに関連する遺構の可能性が考えられるが、限られた調査区であり、遺物も出土していないので断定は控えたい。

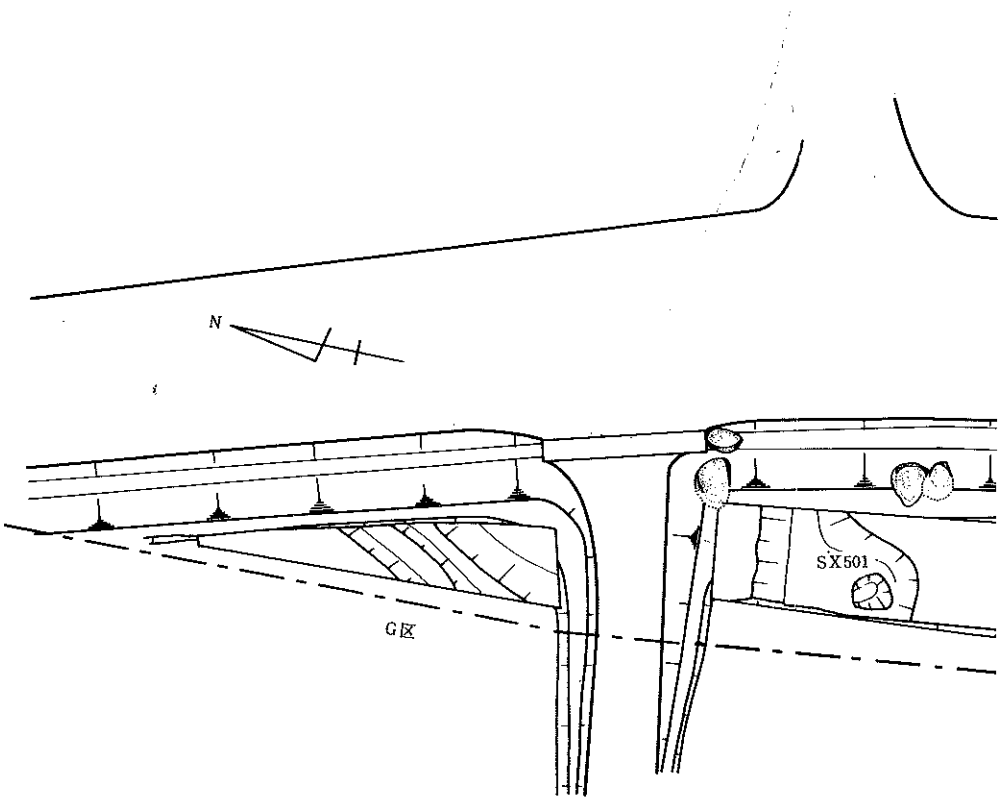
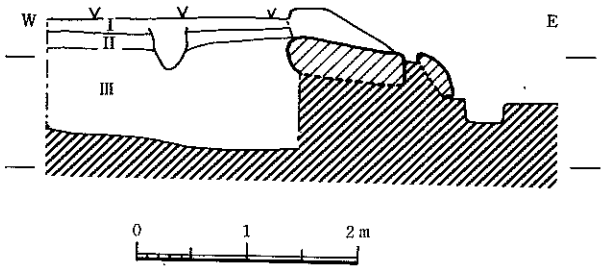
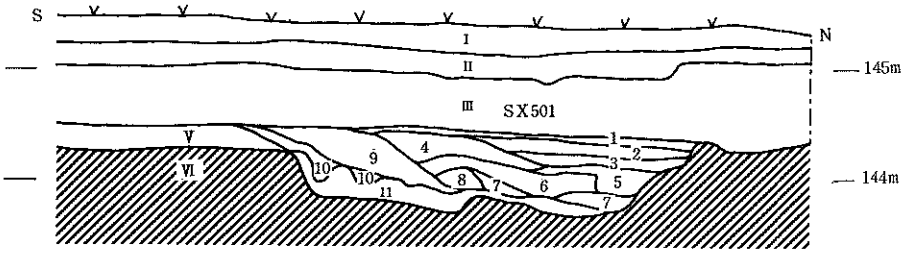
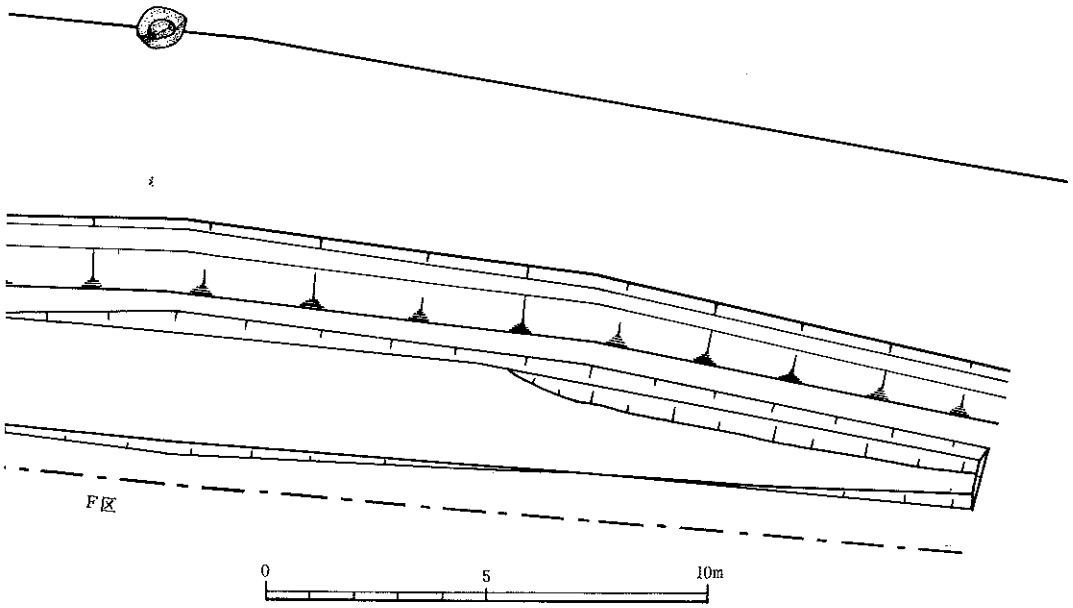


Fig.39　F・G区平面図　F区北壁断面実測図


W
E
I
II
III
0
1
2 m


S
N
I
II
III
SX501
V
VI
145m
144m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
10
11


F区
0
5
10m

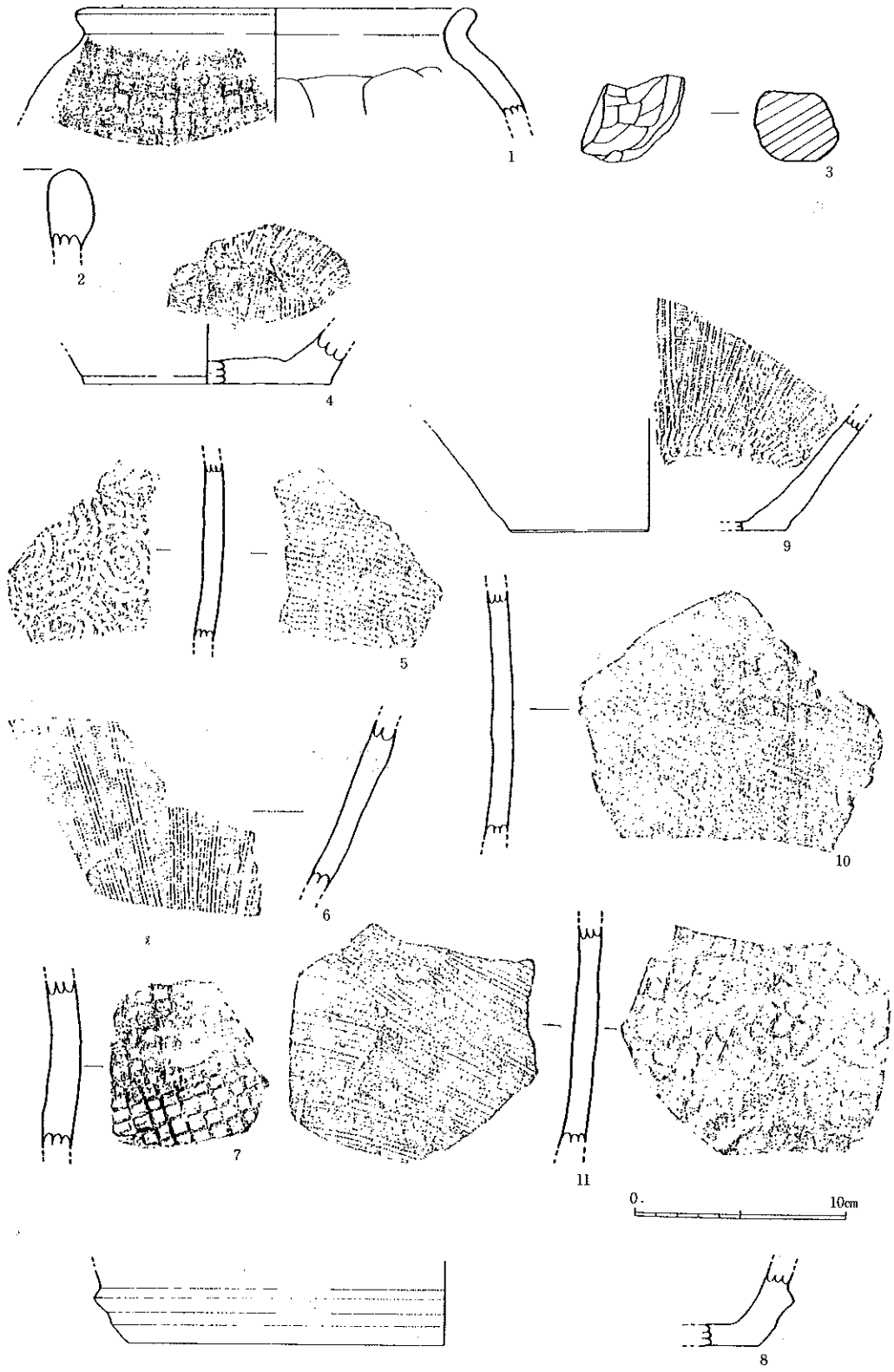


Fig. 40 E区出土土器実測図

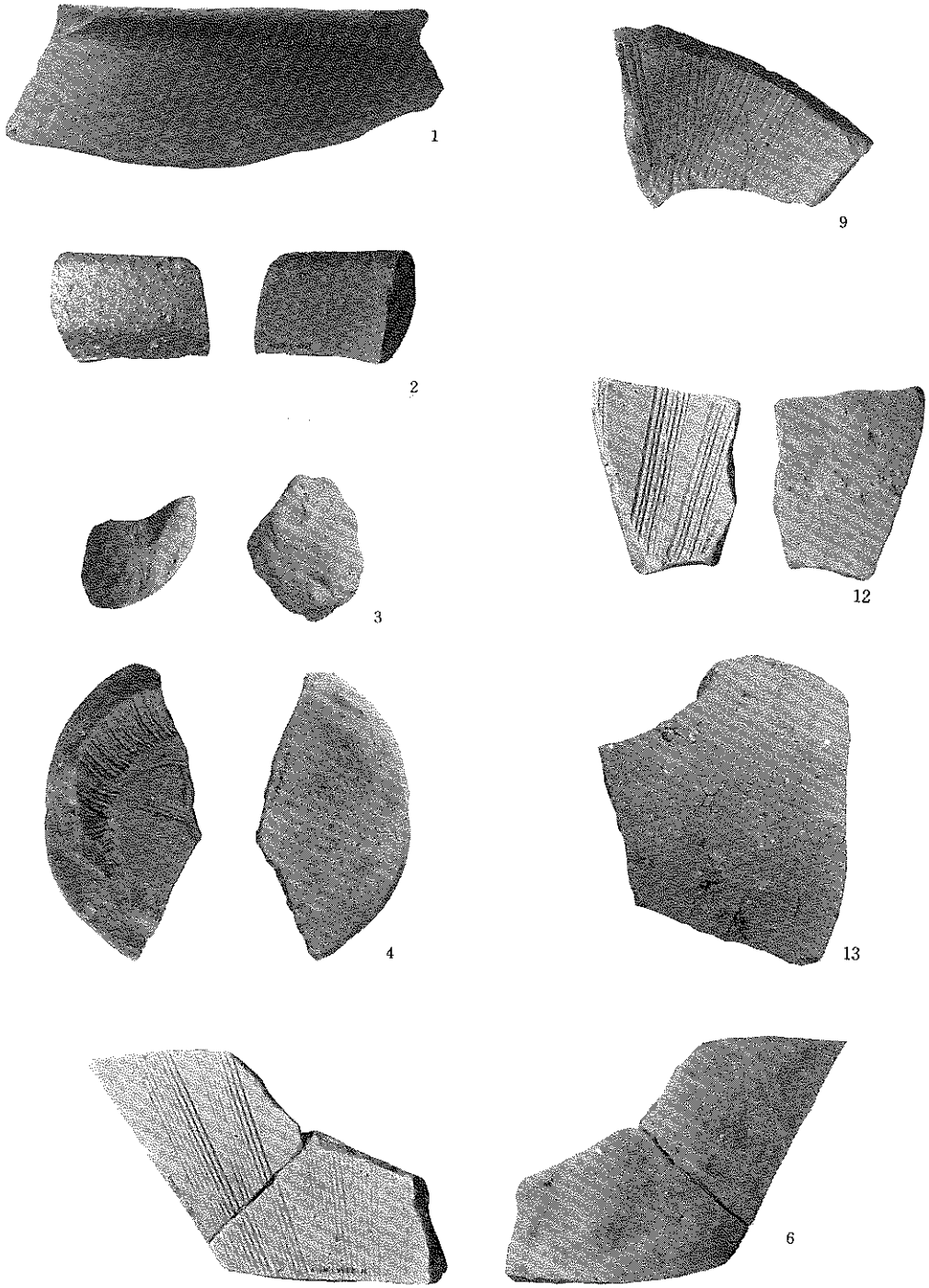


Fig. 41 E区出土土器

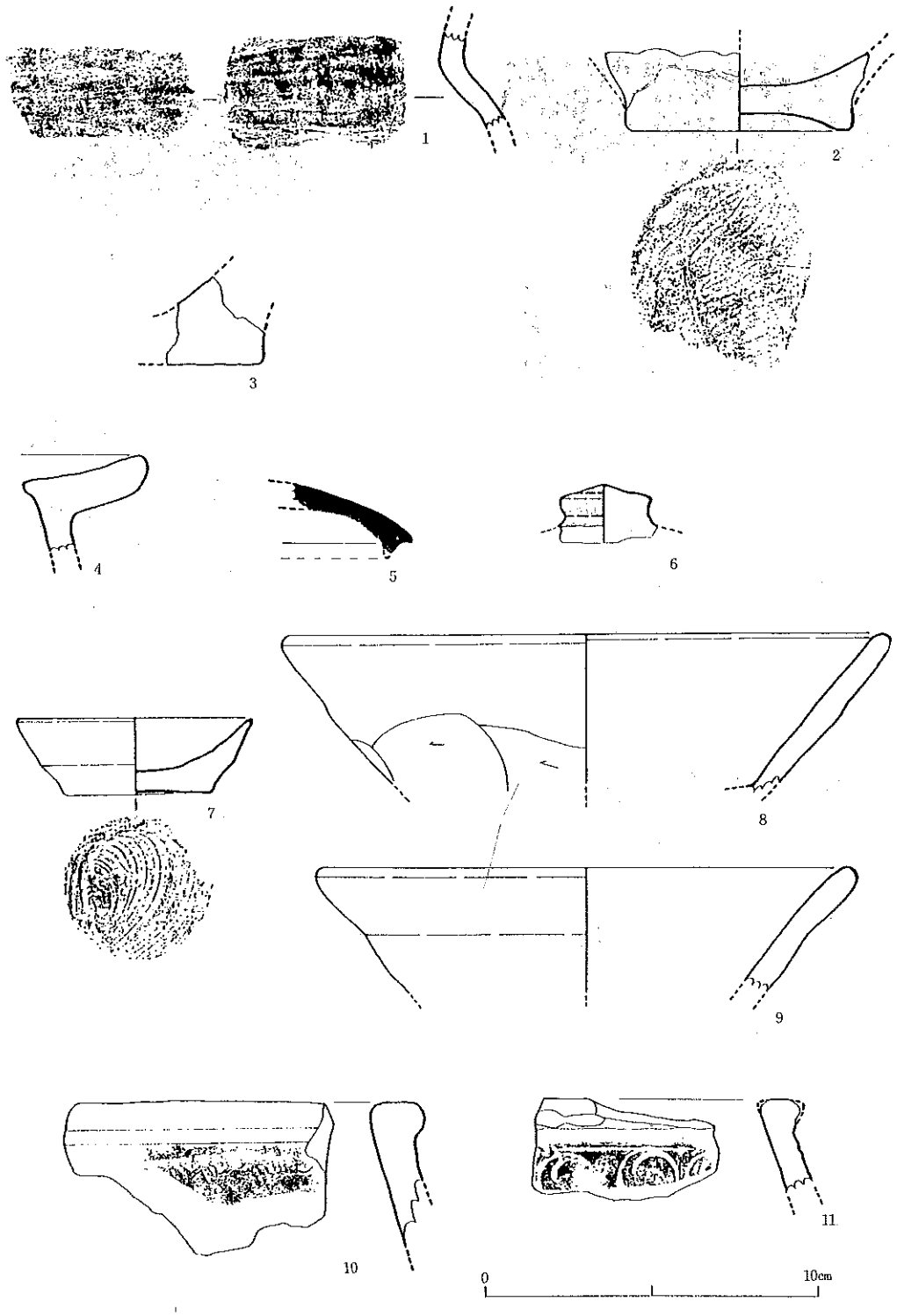


Fig.42　D区出土土器実測図

H I　区

字屋敷693の3番地に相当し、面積128㎡をはかる。

地元で「乙丸」と呼ばれる桑畑であるが、かつて宅地であったためローム層まで達する削平をうけていた。遺構は検出されず、遺物も出土していない。（鶴嶋）

2 小　結

昭和41年9月の水田化工事を直接の契機として行なわれた翌年からの四次にわたる調査は、多大な成果をあげ、「幻の城」と呼ばれていた鞠智城を米原一帯に断定するに至り、その全体像を明らかにした。しかし、継続調査の必要性が説かれていたにもかかわらず、十数年を経過してしまい、今次の道路拡幅工事に伴う緊急調査を行なうこととなった。

すでに削平をうけた区画も一部にあったが、遺構の存在が予想された台地上については、道路敷となる部分の発掘を行なうことができたことは幸いであった。

(1) 上原地区の遺構

字上原地区における遺構の検出である。従来町道より東側、米原地区最高所にあたる字上原地区には遺構が確認されていなかったが、今次の調査で次の遺構が検出、確認された。まずB・C区においてピット群を検出し、中に4本の柱列を想定できた。ピットは第一次調査の深迫の門礎石の付近から検出されているが、今回のように柱列を想定するには至っていない。またE区においてはSK503・504とSK505が検出された。柱間間隔は土壙の北端から北端まで3.4m（約11尺）、南端から南端まで3.8m（約13尺）、中心から中心まで3.6m（約12尺）を測り、更に何間か延びて、東隣の水田下に礎石もしくはその抜き取った跡の土壙が埋没しているものと思われる[1]。しかしながら柱間間隔は宮野礎石群が東西8.5尺、南北8尺。長者山礎石群では南北7尺、東西7.5尺、また長者原礎石群では東西6.5尺、南北5.5尺を測り、E区検出の遺構では南北約12尺となり、柱間間隔については更に問題が残された。

鞠智城とほぼ同時期と思われる大野城跡・基肄城跡においても12尺という長尺の柱間間隔は確認されていない。しかし北西隅に4個の礎石が集中している事や土壙の状況等から、ここに礎石を持つ建物を推定したい。

(2) 軒丸瓦の出土

今次の発掘では遺構に伴うものではなかったが、鞠智城跡で初めて軒丸瓦が出土した[2]。破片だが素弁八葉蓮華文軒丸瓦に復原される[3]（Fig. 43）。弁が肉厚で稜線が通り、弁先が強く反転

するという特徴は、百済末期様式[4]のそれである。九州における百済末期様式の軒丸瓦は、基肄城跡・大野城跡をはじめ北部九州に集中的に分布する「九州式単弁瓦」あるいは「百済系単弁軒丸瓦」と呼ばれているものが有名であり、その九州への流入の契機は天智天皇4年（665）に着工される大野城・基肄城の築城にあると考えられている[5]。この九州式単弁瓦に比較して鞠智城跡の軒丸瓦は、個々の弁がはっきりしており、弁面にふくらみがなく逆に弁全体が強く湾曲し、中房の径も小さく復原される。これらの相異は両者の系譜上の違いによると考えられる。最近、大野城跡でも九州式単弁瓦と異なる7世紀後半代とみられる軒丸瓦が出土しており[6]、弁の平面形や稜線が基部から弁先まで通る点では、鞠智城跡の軒丸瓦との類似性がうかがえ注目される。

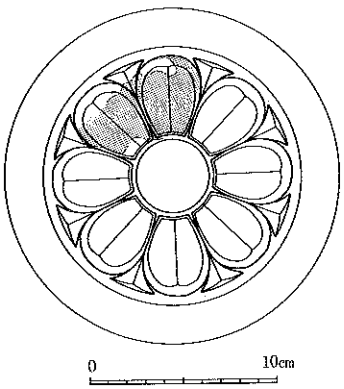


Fig.43　第五次調査出土軒丸瓦復原図

一方、鞠智城跡の軒丸瓦を模倣したとみられるものが、城南町陳内廃寺から出土している。3類のCとして分類されている素弁八葉蓮華文軒丸瓦[7]で弁の形状が極めて類似する。しかし弁は細身となり整斉性に欠けるので、鞠智城跡の軒丸瓦に後出するものと考えられる。3類の軒丸瓦は創建後の補修瓦とみられ、8世紀初頭頃に考えられている[8]。なお、3類の軒丸瓦に伴う重弧文軒平瓦の中には、格子タタキの後に鞠智城跡の平瓦h類と同様の広幅の条痕となる調整を加えている例がある[9]。この調整方法は他地域に例を知らない特異なものであり、軒丸瓦の類似性と共に双方の瓦製作が無関係でないことを推測させる。

鞠智城跡から出土した軒丸瓦は蓮弁2葉分の破片であり、中房・周縁の文様および瓦当と丸瓦との接合方法など不明である。したがって、その年代観については速断をつつしむべきであろうが、陳内廃寺との関係から西暦700年前後に求めるのが最も妥当かと思われる。これに誤りがなければ、鞠智城が史料上に初現する文武2年（698）の「繕治」の際に製作された可能性がある。

(3)　その他の時代

鞠智城時代の遺物の他に縄文時代晩期、弥生時代中・後期、古墳時代(土師器壺片)、中世期の遺物が出土したことである。先行する時代については過去の調査等から当然生活域が想定されていたが、今後の調査でさらに資料が増加した。また現在継続中である第六次調査ではC区東隣の水田下に弥生時代後期の竪穴住居址一軒が確認され鞠智城に至る糸口が示された。また鞠智城以後についても多くの資料を得た。C区出土の青磁は龍泉窯系のものであり、13世紀前半～13世紀中葉の時期のものと思われる[10]。またD区出土の小皿は13世紀前半～14世紀中葉の時

2 小　結

期と考えられる[11]。さらに下るが、米原集落内原田成一宅には「大永7年」（1527）の銘を持つ方柱形の逆修碑がある。このように13世紀頃には集落が営まれていたとみられる。

以上第五次調査は第四次調査から10年経過し、更に昭和55年度より実施さらている鞠智城跡遺跡範囲確認調査に至る過渡的な意味合いが強い調査であった。しかし昭和44年来より提起された種々の問題には答えることが少なく、第六次調査へうまく橋渡しできたか、はなはだ疑問であるが、今後の調査の発展的展開に期待してやまない。　（高谷・鶴嶋）

註

1）以前の調査の際に第2号及び第3号礎石等の集合状況により、この水田に建物の想定がなされている。

2）乙益重隆氏からかつて軒平瓦が出土しているという御教示を得た。遺物とその出土地については未確認である。

3）瓦当文様の呼称法については原則的に「古代の瓦」（稲垣晋也編『日本の美術』№66至文堂 1971）によった。

4）稲垣晋也「古代の瓦」『日本の美術』№66　至文堂　1971

5）小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究・歴史時代篇』　1977

6）「特別史跡大野城跡Ⅲ」福岡県教育委員会　1979

7）松本雅明「陳内廃寺」『城南町史』1965

8）前掲7）

9）この調整に使用された原体については、板の小口に刻目を入れたもの、あるいは叩き板（平行叩き目、格子叩き目）の先端を利用した場合が考えられる。なお、平瓦h類の条痕については、「削条痕」という呼称が適当ではないかという横山浩一氏の御教示を得た。

10）『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集（下）』福岡県教育委員会　1978　C区出土の青磁は分類上R3類に含まれる。

11）前掲10）と同じ。ここでは小皿と規定しているが、法量との関係等から特小皿に分類される。

第Ⅷ章　第六次調査の成果

1　調　査　遺　構

A　土　　層

第五次調査は町道の拡幅工事に伴うものであったので、調査範囲は限定されていた。A～Iの9区の調査区のうちB・C区から多くの遺物とピット群が検出された（第Ⅶ章参照）。

第六次調査では、このような調査結果を受けて、B・C区の東側に、磁北を基準にして東西34m、南北6mのトレンチを設定し、西端を基点として2m毎に掘削を行なった（Fig. 30）。グリットの名称は南北列を第Ⅰトレンチ（以下ⅠTと略記する）、東西列をⅡトレンチとし、各グリットは西から1～17のナンバーを付した（以下ⅡT一〇区と略記する）。

ⅡTは西から東、すなわち上原地区の上方に行くにしたがって地山が高くなる。ⅡT－2区を境として東北の比高差は約30cmを計る。

黄褐色粘質土が地山をなす。地山の高低を反映して、西側（ⅡT－1区）では多く分層出来た。層序は以下のとおりである（Fig. 44）。

Ⅰ層　パサパサの耕作土　　Ⅱ層　硬い褐色土

Ⅲ層　褐色～黒褐色をなす粘質土　　Ⅳ層　暗褐色砂質土

Ⅴ層　黒褐色砂質土　　Ⅵ層　黄褐色粘質土（地山）

ⅡT－1区では、Ⅲ層が褐色気味のⅢa層と黒褐色気味のⅢb層に区別出来た。また同様にⅣ層も黒味の強いⅣa層と、明かるいⅣb層に区別出来た。

人工遺物はⅠ～Ⅴ層から出土したが、最も多いのはⅣ、Ⅴ層である。ⅡT－15区・ⅡT－17区などのトレンチの東側になると、耕作土の下はすぐに地山である。また遺構を検出したⅡT－12・13区においても耕作土→Ⅲ層→地山という層序でⅣ・Ⅴ層を欠落させている。このような層序からすると、過去に上原地区の東側は何らかの土の移動があったことが想定される。恐らく、上原の台地部の東側の高まりを均等にする為、西側に土が動かされたのであろう。ⅡT－Ⅰ区のぶ厚いⅡ層の中にⅣ層の砂質土がブロック状に混入しているのも、そのような動きの結果だと判断される。このような地均しの時期については、これを明らかにする確証を得られなかったが、恐らく近年の作業であろうと憶測される。

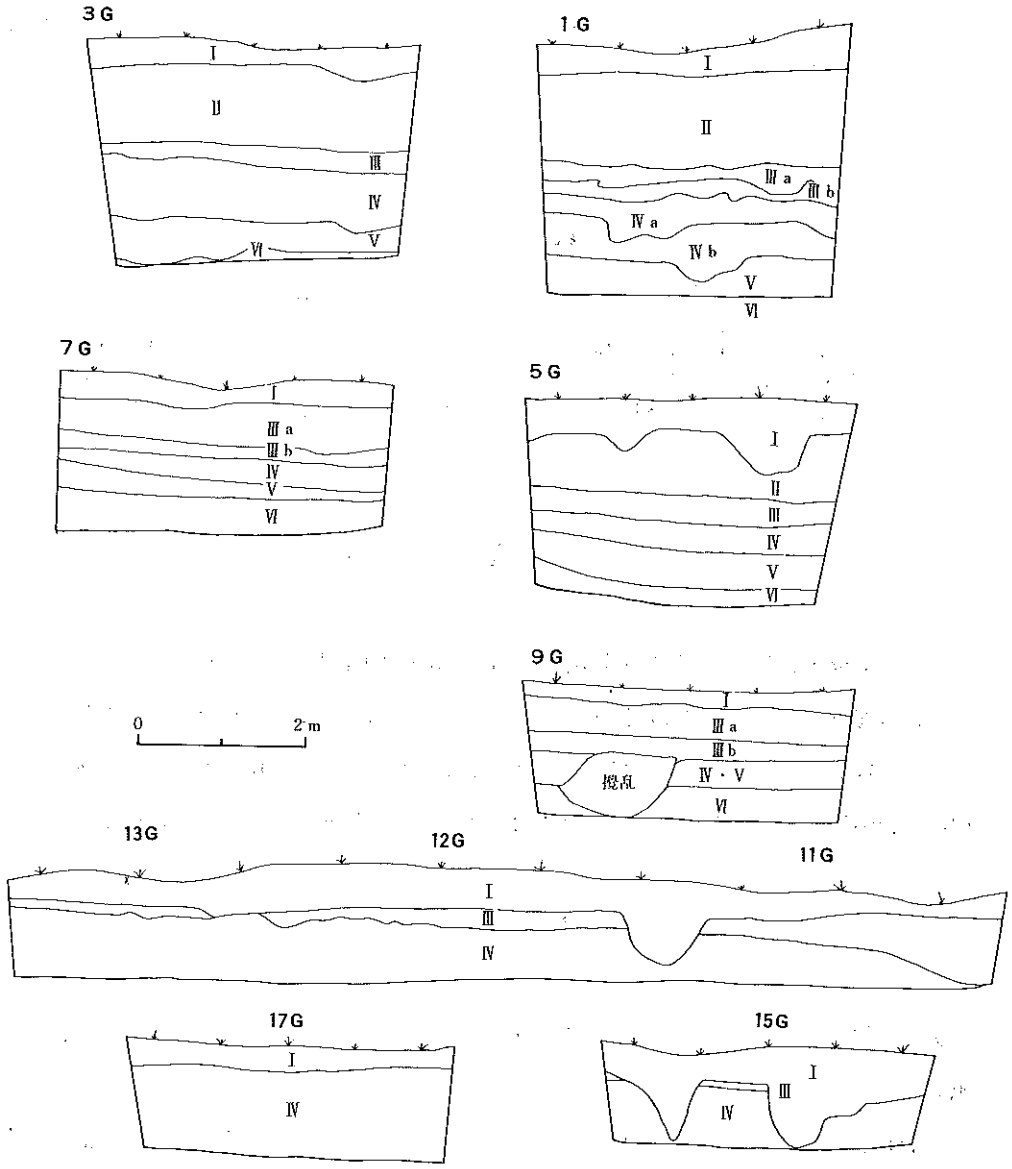


Fig.44 上原調査地区土層断面図

B 検出遺構

ＩＴ—12区のⅢ層を掘下げ途中、グリットの北側に落込みが認められたので、北側に広げるとともにＩＴ—11・13区も掘削した。長軸を東北にもつ長方形の竪穴を検出した（Fig. 45）。南北辺の長さ1.5m、東西辺は西側がやや広く0.75m、東側は0.5mを計る。壁高は一定で0.3cmを計る。床面は水平で、固くしまっていた。竪穴の四隅に４個のピットがあり、竪穴確認面と同位置で確認された。南辺の東のものをＰ１、西のものをＰ２、北辺の東のものをＰ３、西のものをＰ４とすると、それぞれの計測値は以下のようになる。

Tab. 6　ピット計測値

ピット No.	P1	P2	P3	P4
上　幅	16　15	16　16	15　11	10　10
底　幅	16　11	9　7	7　6	5　5
深　さ	36.4	44.9	72.5	32.8

単位はcm

2 遺　物

グリット全体から約100片の遺物が出土した。遺物は土器片と若干の瓦片である。

竪穴遺構から32片の土器片が出土した。いずれも小指大の極少破片で図示出来ない。土器内外面には刷毛目がみられ、その特徴より弥生後期（野辺田期）に比定出来る。遺構では、竪穴内に遺物が集中しているので、遺構の時期も遺物の示す時期と考えてよいと思う。

3 小　結

第六次調査の目的は、従来遺構が知られていなかった上原地区にトレンチを入れ、遺構の有無を知ることであった。

土層状態より、上原地区の東側の遺物包含層は既に削平されてしまっている可能性が高いと判断された。しかし幸いにも竪穴遺構を検出することができた。弥生後期のものと判断される。第五次調査でも、弥生中期の土器片が出土しており、上原地区に弥生期の遺構の存する可能性は高い。（島津）

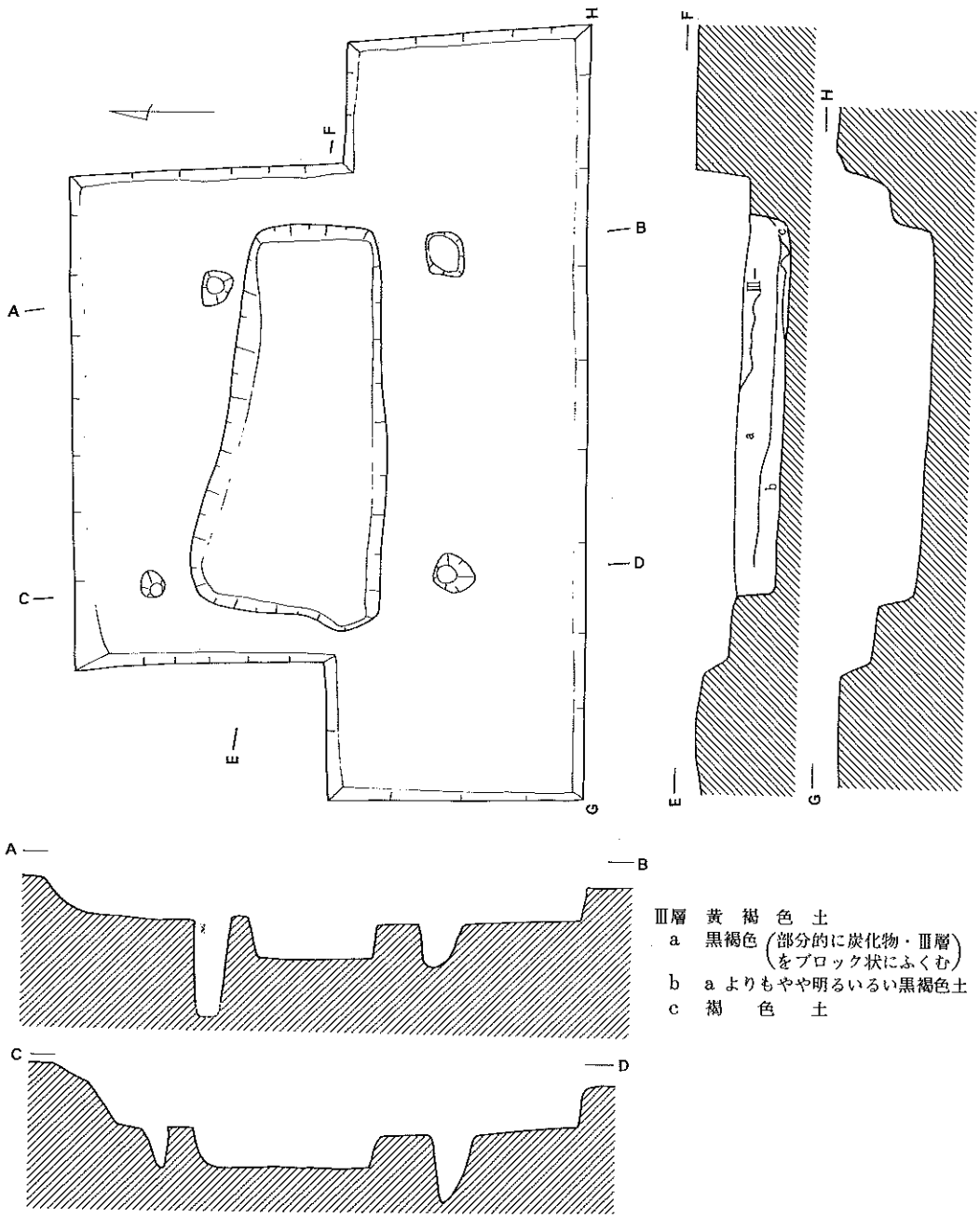


Fig.45 第六次調査検出竪穴遺構実測図

第Ⅸ章　第七次調査の成果

1　調　査　遺　構

A　調査に至るまで

宮野礎石群は第二次調査により、礎石群の所在が確認され、第四次調査時に礎石の部分を露出した。建物の規模は判明したが、建物の周辺の状況などは不明であった。第六次調査を実施中、宮野礎石群の埋没地区の桑畑の伐採が行なわれたのを知り、次の作物植付が始まる期間を利用して調査を行なった。

B　検　出　遺　構

(1) 礎　　石

今回の調査区では、移動しているものも含めて、大小37個の礎石を検出した（以下、礎石は第Ⅵ章・Fig. 27の番号付で呼ぶ）。礎石は一面に平坦面のある花崗岩を使用している。側面は加工調整されているようにみられる（Tab. 7）。

A列は10個の礎石が原位置を留めている。A—10の西側には2個の礎石があるが、宮野の礎石とは大きさを異にするので、他地から移動させられたものであろう。

B列は1～3・5・7・8の6個が原位置を留めている。4・5・6・の周辺には礎石を移動する（埋め込む）為に、後世掘られた穴がみられる。4・6は移動しているが6は石が巨大であったので動かすことが不可能であったらしい。9の礎石は抜かれ、掘穴のみ残っている。10はボーリングでも当たらない。

C列は1～3が原位置を留める。4～6は抜穴があり、礎石は動かされている。7は石は抜かれて在しない。

D列の1・4は原位置。3は西側に移動して、旧位置の礎石の裾跡が残っている。2は礎石本体は移動して根石が1個残る。7も移動している。

また礎石の間には、径15～20cmの扁平礫がみられる。この検出面は、礎石の上位面とほぼ同一であるので、礎石が据えられた時点に、これらも存した可能性が高い。今仮に、扁平礫を、南側列の西側のものからａ・ｂ・ｃと名付け更にB—3とB—4の間のものをｄ、北側の西の

Tab. 7 宮野礎石群計測表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
A	a 原位置 b 花崗岩 c 135×103 d 144.67m e	原位置 花崗岩 110×83 144.61m	原位置 花崗岩 102×93 144.61m	原位置 花崗岩 116×96 144.58m	原位置 花崗岩 111×111 144.60m	原位置 花崗岩 122×83 144.61m 凝灰岩根石あり	原位置 花崗岩 120×91 144.57m	原位置 花崗岩 125×96 144.58m 砂岩の根石あり	原位置 花崗岩 129×71 144.55m	原位置 花崗岩 118×100 144.58m
B	a 原位置 b 花崗岩 c 124×87 d 144.68m e	原位置 花崗岩 155×101 144.60m	原位置 花崗岩 117×90 144.59m	深く埋め込まれている 花崗岩 (114×76)	原位置 花崗岩 160×81 144.60m	南に深く埋め込まれている 花崗岩 (100×91)	原位置 花崗岩 120×92 144.58m	原位置 花崗岩 141×92 144.58m	茶褐色砂質土根石とみられる安山岩・凝灰岩の石あり。版築土・褐色砂をブロック状に含む（瓦・弥生式土器片混入）	—
C	a 原位置 b 花崗岩 c 100×99 d 144.60m e	原位置 花崗岩 106×82 144.63m 根石3コあり	原位置 花崗岩 99×79 144.62m 根石あり	原位置より西に深く埋め込まれている 花崗岩 (119×88)	西に深く埋め込まれている 花崗岩 (127×89)	深く埋め込まれている 安山岩 (80×69)	礎石抜取穴 茶褐色～黒褐色版築の土・褐色砂をブロック状に含む	—	—	—
D	a 原位置 b 花崗岩 c 146×106 d −144.67m e	根石あり	隣に埋め込まれている 花崗岩 (102×73) 凝灰岩根石3コあり	動いている 花崗岩 (126×86)	東に動かされている 花崗岩 (135×97)	—	東に動いている 花崗岩	—	—	—

a 移動の有無　b 石材　c 礎石寸法（単位cm）　d 礎石面標高　e 備考　— 不明　（ ）計測可能部の寸法

ものをe、東のものをfと呼び説明する。a～cは礎石のA－2、B－2、C－2と並行に存する（Tab. 8）。

このように、各石間の距離は一定ではないが、全体的に見た場合、礎石としての性格をこれらの石に与えてよいと思われる。

Tab. 8　小礎石寸法表

a—b	222 (240)	a—e	482 (480)
b—c	192 (168)	d—f	288 (300)
a—d	266 (262)	e—f	350 (300)
b—d	270 (276)	c—f	512 (540)
c—d	390 (388)		

※　並行数字の前者は二石の西端あるいは南端間の距離
（　）内の数字は東端あるいは北端間の距離
単位はcm

(2)　溝

礎石の東・西・南側に溝が巡っている。断面形はU字形をなす。礎石の一端より、溝の落ちぎわまでの距離は各方向ほぼ一定で50cmをはかる。また、礎石の真より溝底までは約1.5mをはかる。溝底は全体として、礎石と並行であるが西溝の北寄りの部分は若干、礎石側に寄る。溝底高は全体の地形の高低に準じて、南より北側へ低くなる。また、西より東側に低くなる。建物が所在していた当時の北側の溝の有無については明らかでない。現状ではA—10礎石のすぐ北側で段落ちになっている。溝の外側では地山の黄褐土から溝が掘込まれ、溝の内側では黒色の版築から土が溝の縁になっている。恐らく、溝の外側の部分から内側の礎石の存する部分を削平、整地し、版築を行ない礎石を据えた後、溝を掘削したものであろう。

（鶴嶋・島津）

2　遺　　物

(1)　遺物の出土状況

遺物の大部分は、東西の溝から出土した（Fig.46）。瓦と土器類のほか、少数の石器が出土した。石器は、地山の黒色土が旧石器・縄文時代の包含層になっている為の出土とみられる。遺物は溝底より、10～20cm浮いた状態を示す。

土器（Fig. 47）　278片の土器が出土した。土師器片が約9割を占める（Tab 9）。出土品は少破片で復原図示できるものは少ない。

Tab. 9　宮野礎石群出土土器一覧

土師器（230）					須恵器（40）				瓦器（2）	陶磁器（6）
杯・皿	高台付杯	甕	鉢	器形不明	杯・高台付杯	甕	硯	器形不明	縄文	弥生
29	8	28	8	157	15	4	1	5		

※（　）は総数をあらわす。

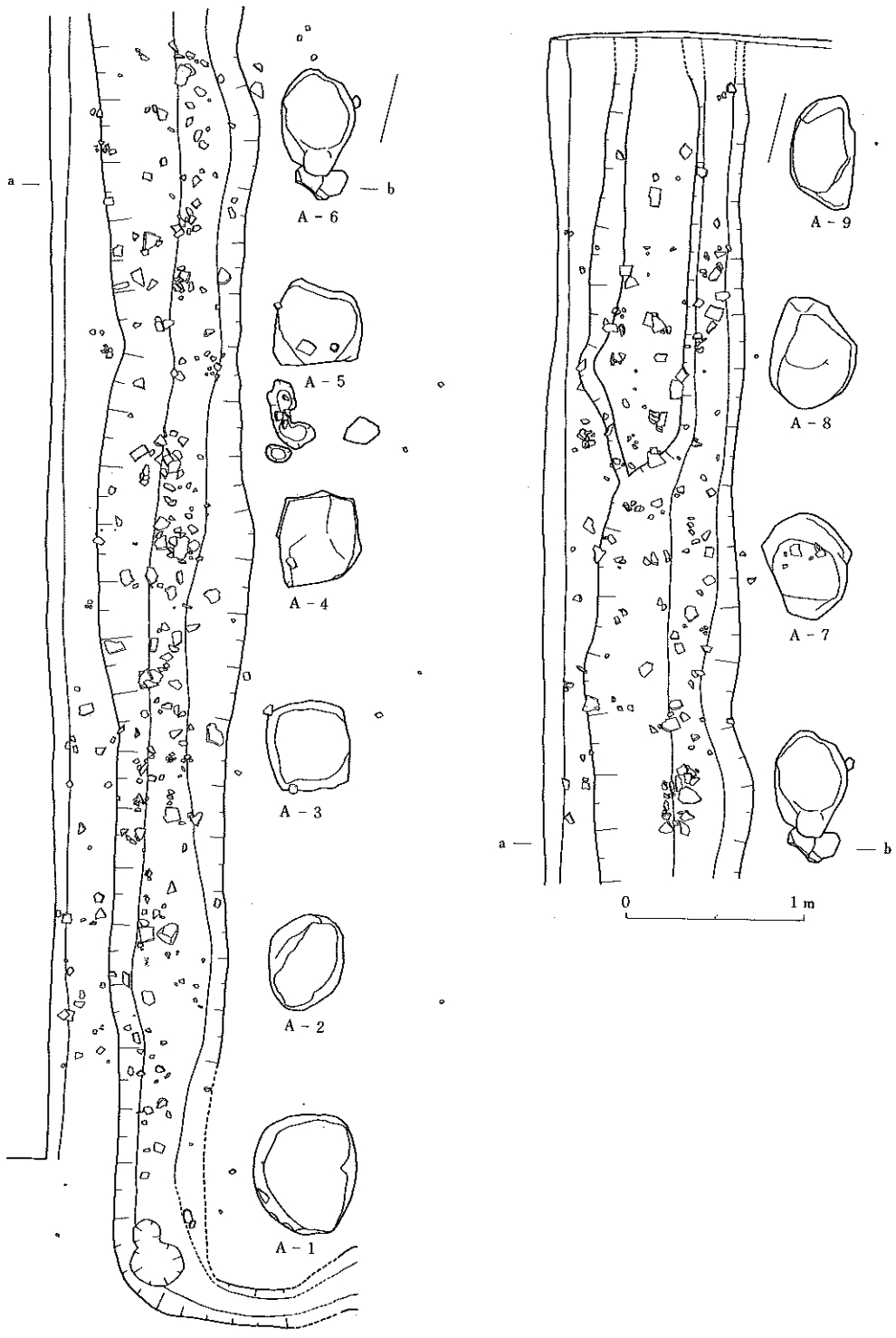


Fig.46 宮野礎石群西溝遺物出土状態

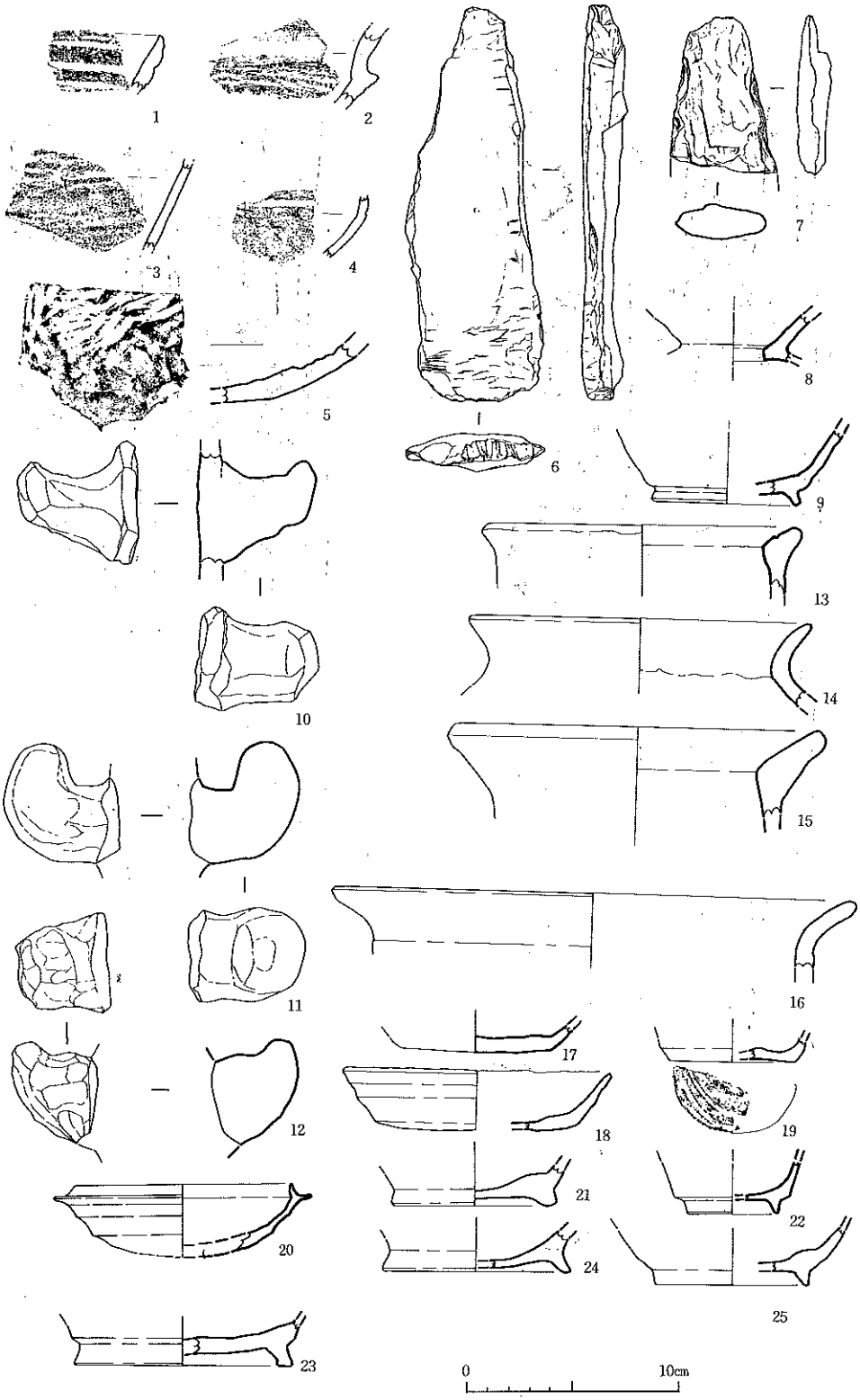


Fig.47 宮野出土遺物(1)

1～4は縄文土器。1は外面に三本の浅い沈線をもつ。2は鉢の胴部でく字形に強く屈曲する。下半部に横の荒い条痕をもつ。3・4は胴部破片。3は外面に横方向の条痕をもつ。4は胴部に一本の沈線をもつ。

5は甕の口縁部。口唇中央部がやや凹む。8は須恵器。胴部の破片。器種を明らかにしないが、平瓶の口縁部か。9は須恵器の杯高台部。直立気味に延びる体部をもつ。高台と体部の接が凹状をなす。底径7.1cmをはかる。10～12は土師器の甕把手部。小ぶりで、先端が強く屈曲する。13～16は土師器の甕。14の最大径は胴部に位置するが、他は最大径を口縁部にもつ。胴部は直線的に底部へ続く。口径は13が14.4cm、14が16cm、15が17cm、16が25cmをはかる。17～19は土師器の杯。17の底部には放射状に暗文風の圧痕が残っている。赤色顔料が内外面に付着。底径7.2cmをはかる。丁寧な作りで、器表はよく調整されている。18は小破片。復原口径12.6cm、高さ2.8cm、底径9.7cmをはかる。17と良く似た胎土、焼成である。19は底部に糸切離し痕が残る。20は須恵器の杯の身。焼成は良好で、蓋受の外面は小豆色をなす。復原口径10.2cmをはかる。21・23～25は土師器の高台部。21・25は表面が風化して調整痕などはよく観察できない。23は高台の内側はやや凹む。丁寧な仕上げで表面に赤色顔料が付着する。高台の幅径9.6cmをはかる。24は高台がやや外に張出す。表面に赤色顔料が付着する。22は近世の磁器。

石器 (Fig.47—6・7、Fig.48)　6は粘板岩を用いた砥石。上下は破損している。一面は使用された為、平滑である。一端に1～2cmの線状の傷が多くある。全長18.7cm、最大幅6cm、厚さ2.1cmをはかる。7は緑色片岩の周辺を調整した打石斧。刃部を欠失する。全長8.0cm、最大幅5.0cm。

Fig.48はナイフ形石器である。地山の黒色土から出土した。打面・打瘤を残し、基部両側および右側辺の一部にブランティングを施している。石材には緻密なサヌカイトを用いており、佐賀県多久地方の産である可能性がある。ブランティングは基部両側でノッチ状に施され、右側はブランティング加工の後、腹面側へ平担剝離を加えている。この平担剝離は側面観から見る限り、明らかに打瘤部の高まりを取り除く意図がみられる。なお、右側辺礫面部に施されたブランティングは連続したものでなく、形を整えるための荒い加工

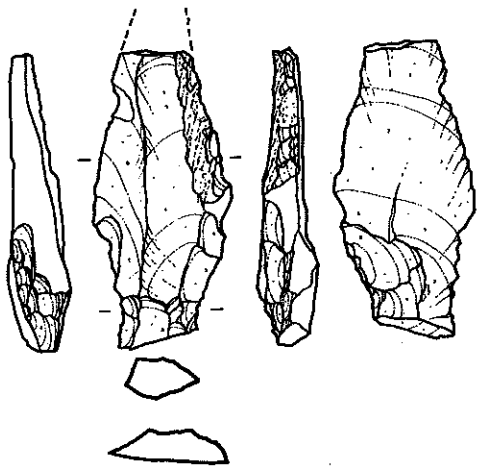


Fig.48 宮野出土遺物(2)

になっている。

この種のナイフ形石器は清水宗昭氏のいう「剝片尖頭器」[1]に類似するが、腹面側への平担剝離を施したものは「タイプ」としてとらえられておらず、今後の類例の増加が期待される。

瓦類（Fig.49･50）　瓦の大半は建物をめぐる雨落溝付近から出土している。軒先瓦はなく、いずれも丸瓦・平瓦の破片や細片の資料で、完形品は出土していない。出土した瓦は点数にして635点、重量にして122㎏しかなく、その出土量は比較的少ない（Tab10）。

Tab.10　宮野礎石建物跡出土瓦の出土点数と重量

	種類	点数	重量(㎏)	重量比(%)	5次調査分類
平瓦	Ⅰa	35	11.57	9.45	a類
	Ⅰb	21	5.74	4.69	c類
	Ⅰc	50	14.43	11.79	b類
	Ⅱa	16	7.64	6.24	h類
	Ⅱb	17	5.81	4.75	f類
	Ⅲ	330	56.83	46.43	d類
	不明	119	4.37	3.57	
小計		588	106.39	86.91	
丸瓦		97	16.02	13.09	
合計		635	122.41	100.00	

丸瓦は第五次調査時と同様に出土点数が少ないため、今回も分類することができなかった。しかし、出土品の中には少なくとも玉縁付丸瓦の破片とみられるものはなく、行基葺き丸瓦の尻部片とみられるものが1点だけあった。この所見は第五次調査の場合と一致する。丸瓦胴部片を観察すると、凸面はタテ方向にケズリ成形されたのちにヨコナデ調整が施されている。側面には凹面側に分割載面、凸面側に破面を残し、面取りなどは行なわない。

平瓦は凸面の叩き目と調整技法によって、次の3類6種に分類した。Ⅰ類は格子叩き目をもつもの。Ⅱ類は条痕をもつもの。Ⅲ類は調整により叩き目が消去されているものである。今回の分類法は第五次調査のそれと異なるが、平瓦の種類はに新しい資料はない。

Ⅰa類　幅1～2㎜、間隔2.5～5㎜の刻線とこれに直交する幅2～4㎜、間隔6～17㎜の刻線を加えた叩き板による長格子の叩き目をもつ（Fig.49—2）

Ⅰb類　幅2～3㎜、間隔3～5㎜の刻線とこれに直交する幅3～6㎜、間隔5～7㎜の刻線を加えた叩き板による小型の格子叩き目をもつ（Fig.49—3）

Ⅰc類　幅5㎜、間隔7～9㎜の刻線とこれに直交する幅5㎜、間隔10㎜前後の刻線を加えた叩き板による大型の格子叩き目をもつ（Fig.49—4）

Ⅱa類　板の小口に幅・間隔とも8㎜前後の凸凹をつけた工具による深さ1～2㎜のヨコ方向の条痕をもつ（Fig.50—5）

Ⅱb類　Ⅱa類と同様の工具を使用しているとみられるが、深さが浅く細かい条痕となるもの（Fig.50—6）

Ⅲ　類　ヨコナデ調整およびタテ方向のナデ調整を施すもの（Fig.50—7）

以上、分類した6種の平瓦の中でⅠ類の3種は格子叩きの後にナデ調整が加えられている。

さて、分類した各種の平瓦の製作技法は、Tab.11に示すとおりである。すなわち、全ての種類の平瓦には糸切痕・粘土板合せ目・模骨痕が観察され、また各種には布の綴じ合せ目や分割界線、側面の分割截面と破面がみられる。つまり、6種の平瓦は粘土板桶巻作り技法によって製作されている。なお、側面調整の点からすると、Ⅰ類とⅢ類の4種の平瓦には分割のまま破面を残すものと、のちにケズリ調整を加えるものがあるのに対して、Ⅱ類の2種には破面を残さないようにケズリ調整が加えられており、ナデ調整の有無と合わせて大きく2つの製作方法が存在することが知られる。ただ、平瓦凹面の広端縁にみられる布端痕は6種の平瓦すべてに確認されていることから、基本的には共通した技法によっていることが知られ、時期的な差はないと思われる。（鶴嶋・島津・古森政次）

Tab.11　宮野礎石建物跡出土平瓦の製作技法

類	種	糸切痕	粘土板合せ目	模骨痕	布綴じ合せ目	布端痕	分割界線	側面に破面を残す	側面のケズリ調整
Ⅰ	a	有	有	有	—	有	有	有	有
	b	有	有（s）	有	—	有	有	有	有
	c	有	有	有	有	有	有	有	有
Ⅱ	a	有	有	有	有	有	—	無	有
	b	有	有	有	—	有	有	無	有
Ⅲ		有	有（s）	有	有	有	有	有	有

—は未確認を表わす

3　小　結

宮野の礎石をもつ建物は、第四次調査で知られたような東西4列、南北10列の礎石群であることが再び確認された。更に建物の四周に溝が巡っていることが知られた。礎石の中心部から溝底までの距離は、西側で約5尺、南側で約4尺を測るので、建物の妻部分の軒の出が少なかったことがわかる。東西の溝から瓦が出土し、瓦葺の建物であったことが知られる。礎石には花崗岩の扁平石を用いている。周辺に整痕は認められるが、上表面には何の加工も施していない。礎石の間隔は東北8.5尺、南北8尺を測る。

建物の立地する場所は長者山の東麓にあたる為、整地するにあたり、山際の部分をより深く掘込んでいることが知られた。このため、版築は西側で顕著に認められ、東側では明瞭ではな

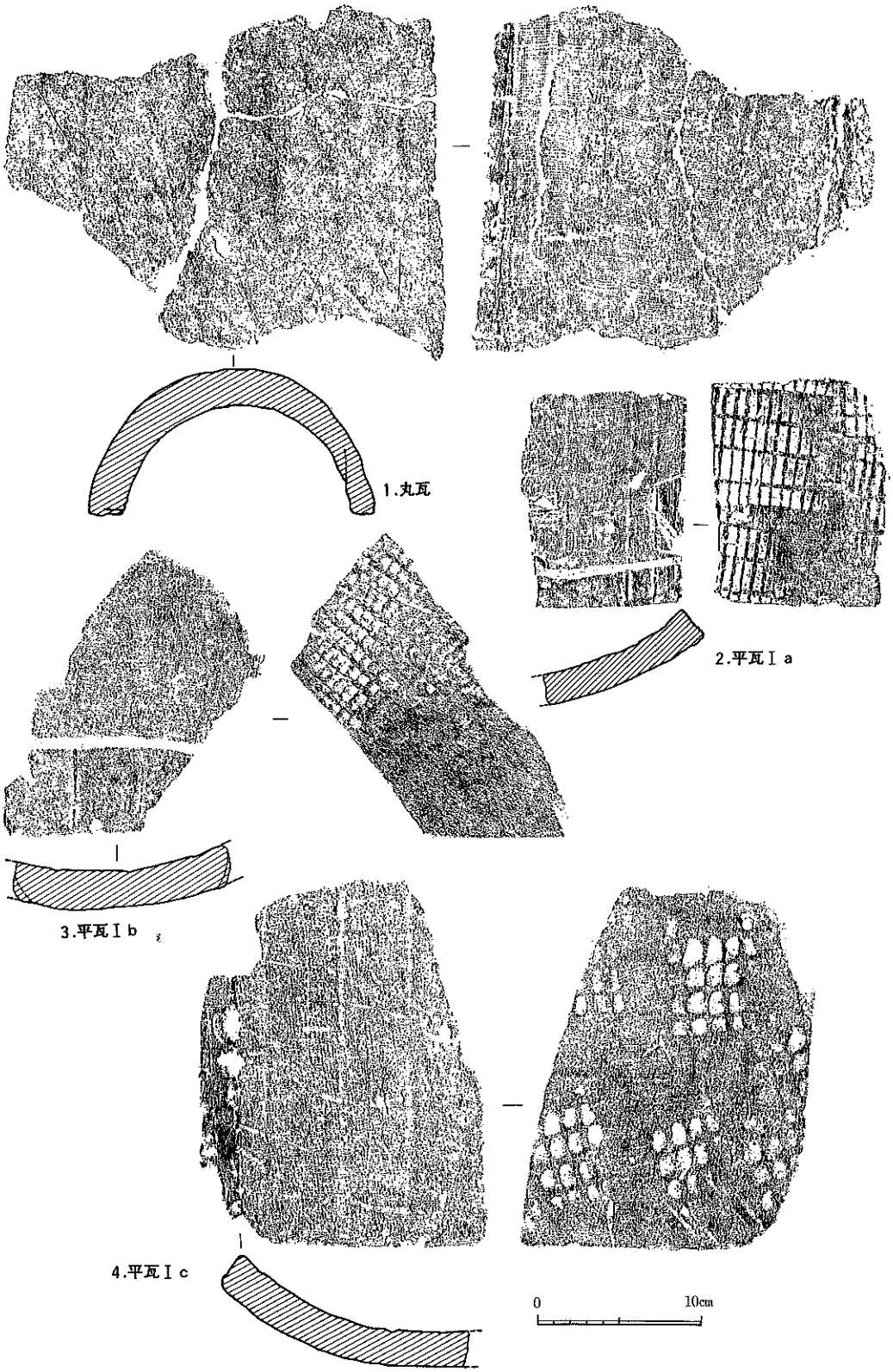


Fig.49 宮野出土遺物(3)

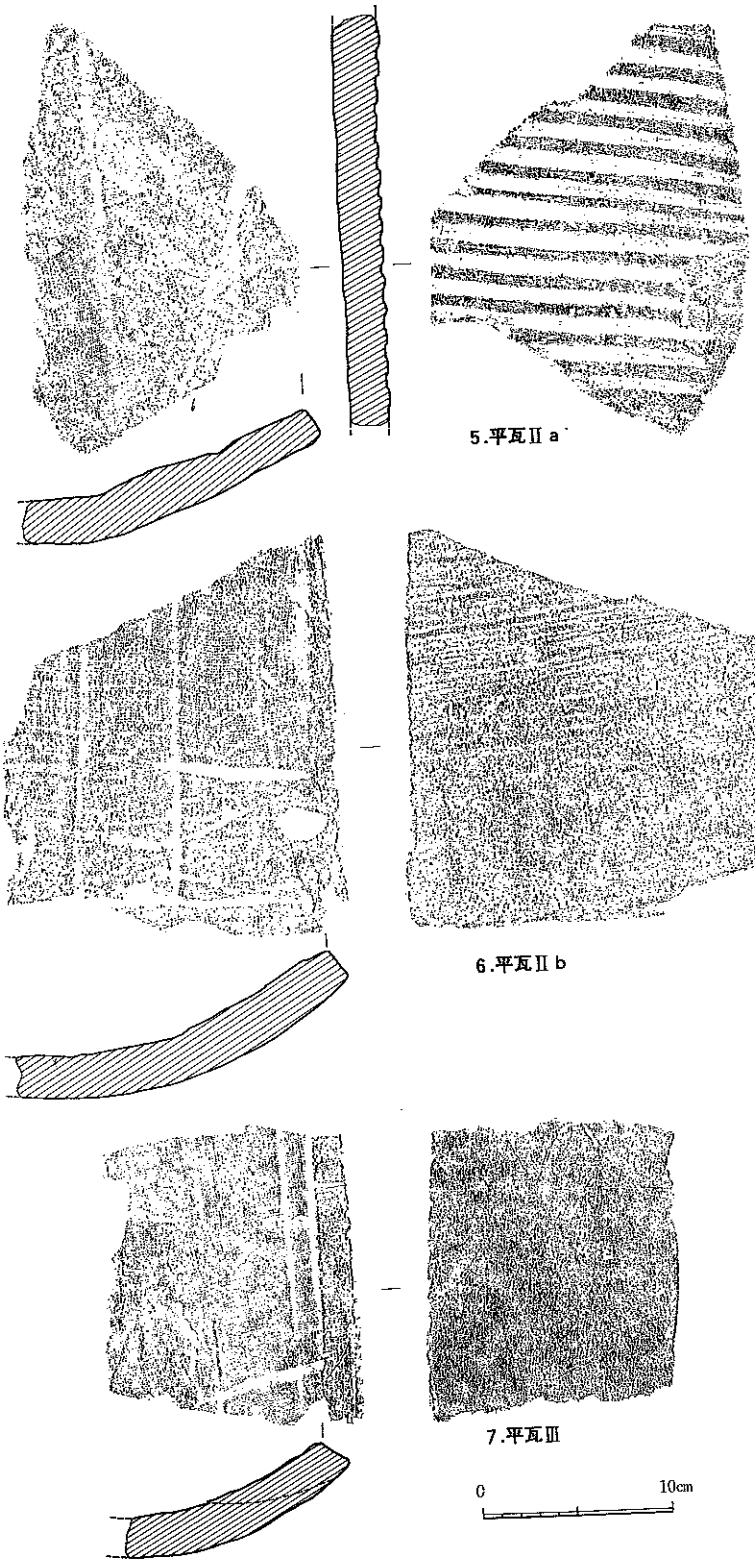


Fig.50 宮野出土遺物(4)

い。また建物本体の礎石とは別に小礎石が検出されたが、その機能についてはよくわからない。同様のものは福岡県大野城でも知られている。

溝内から出土した遺物は、瓦を主とし土器、石器などがみられた。土器は土師器と須恵器を主とする。小破片の為、製作技法を窺える資料は少ないが、総じて平安時代前期の年代と考えてよいと思われる。このような鞠智城時代のもののほかに、ナイフ形石器、縄文土器類も出土し、近くに包含層のあることが知られる。

瓦類は平瓦、丸瓦が出土し軒瓦は出土しなかった。軒瓦を持たない建物であったとみられる。丸瓦の形状より行基葺きだとみられる。平瓦は3タイプに分類され、それは6類に細分される。これは従来知られている鞠智城の瓦の分類と共通する。とくに注目されるのは、Ⅱ類の平瓦にみられる特異な調整法である。県下はもとより全国的にも類例が少なく興味ある調整法といえる。県下においては、白鳳期頃の創建とされる城南町陳内廃寺出土の3類の単弁軒丸瓦に伴う重弧文軒平瓦の中に、格子叩きの後に類似した調整が加えられているものがある[2]。この陳内廃寺の軒丸瓦3類は、瓦当嵌め込み技法によった特異な軒丸瓦であるが、この中の3類Cとされる単弁軒丸瓦は鞠智城跡の第五次調査で出土した単弁軒丸瓦と類似した文様をもっている。陳内廃寺の軒丸瓦が文様的には後出的な要素をもつが、双方の瓦製作が無関係でなかったことを示すものであろう。

一方、県外では奈良県法隆寺で出土した7世紀代のものとされる平瓦の中に極めて類似した資料がある。Ⅰ類と呼称されるその平瓦は「端部に凹凸を施した板状器具によってていねいになでつけて調整する[3]」もので、桶巻作り技法によっているという。また、石川県輪島市稲舟キウベエ窯跡に凸面条痕文の平瓦が出土している[4]。供伴する須恵器によって7世紀第Ⅳ四半期にあたるものと考えられている。

いずれも鞠智城と同様に7世紀のものであり、地域を異にして類似した平瓦製作技法が存在することは注目される。今後の類似資料の検討を必要とする。　（鶴嶋・島津）

註

1）清水宗昭「剝片尖頭器について」『古代文化』25巻11号
2）松本雅明「陳内廃寺」『城南町史』1965
3）岩永省三「瓦類」『法隆寺発掘調査概報』Ⅰ　法隆寺発掘調査概報編集小委員会　1982
4）石川県七尾市の木立雅朗氏の御教示による

第X章　考　　察

1　鞠智城の範囲

鞠智城の外郭の範囲については、二説ある。一は米原台地を中心とする周辺の地を城域とみる。二は初田川の西の尾根部から、初田川を横切り黒蛭、堀切に至る範囲を城域とする見方である。

今仮に前者を狭域説、後者を広狭説と呼び、その当否を検討してみよう[1)]。

広狭説を強く提唱されたのは坂本経堯氏であった。鞠智城の土塁線について次のように述べられている[2)]。

「米原台地が自然の塁壁に囲まれてあるので独立する土塁は元来少なかったとも思はれ又土塁の必要な所は既に早く開墾されて現在は連続する塁線を見ることは出来ない。」

として、具体的に鞠智城の範囲については次のように述べられた。

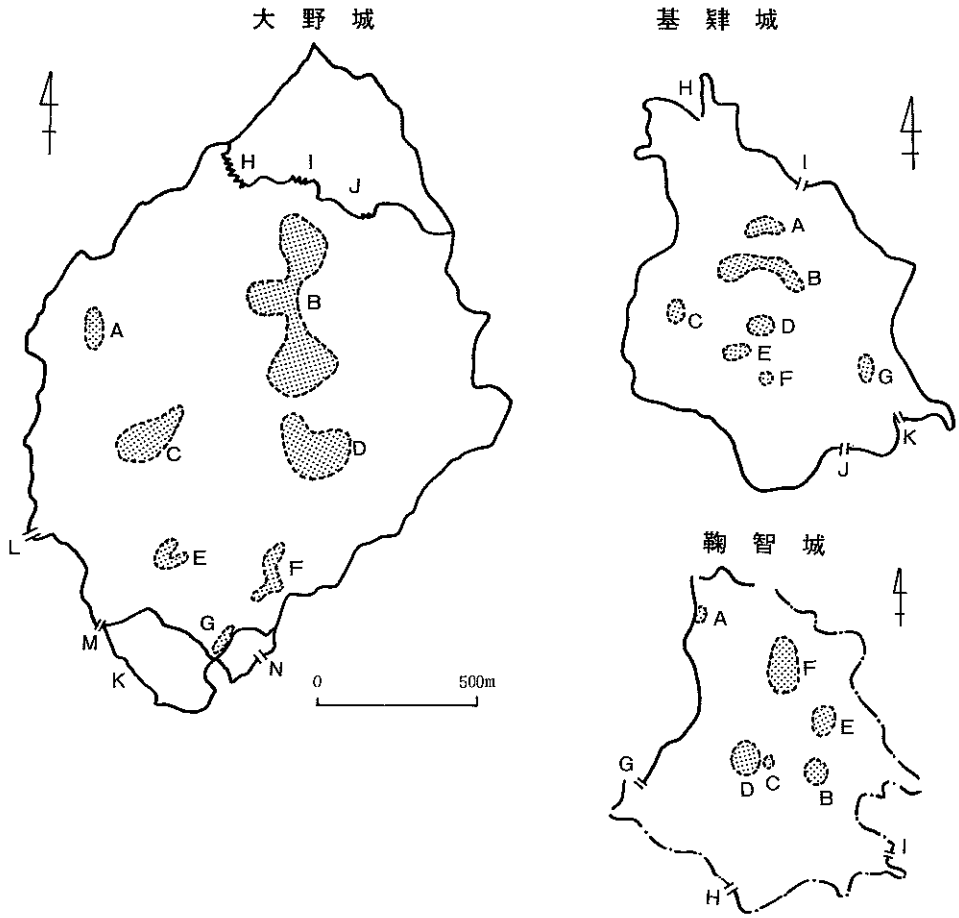
土塁が、東には稗方の尾羽根をつたって豪野山をこえて登り、西は頭合の谷をこえて木野の「尾羽根づたいにのぼって金頭で東線と合し、周囲約12キロメートル鞍部には盛土し丘の外側を急崖に切りおとすなど地形の利用がみられます。」

しかし、1967年以降の調査で、確実に盛土の土塁線と認められるのは、米原台地の西の尾根部のみであることが判った。

土塁線は池ノ尾門礎の南側の斜面より始まり、池ノ尾門礎の北側の斜面を昇り、灰塚、ススミの御所を経て佐官どんに達する。佐官どんを越えて、いったん跡切れるが、東折して米原から北に抜ける谷に面して終る。土塁の北と南の終点部分からは、それぞれ凝灰岩の急崖が連続しており、天然の防壁となっている。凝灰岩崖は極めて急峻で、南側の堀切の集落を見下す付近で、比高差25～30メートルを測る。こうしてみると、鞠智城は凝灰岩の急崖を巧みに城域に組込んでいることが解る。また堀切門礎の南側の凝灰岩の崖線は、幅約50mにわたり切落しがみられる。土線塁は、崖線の欠を補うように最小範囲を築かれているのである。したがって、この土塁線と崖線の延長を鞠智城の外郭の範囲とすることは可能である。

1980年に作成した空中写真により延長距離を算出すると3.5キロを測る。

このような数値は、天智期に築城され規模の判明している朝鮮式山城と比較してみると大野城で（6.3キロ）、基肄城（3.7キロ）に次いで大規模であるといえる[3)]（Fig. 51）。



大　野　城

A御殿場礎石群　2棟　H石　間　石　垣
B主城原礎石群　19棟　I北　石　垣
C八ツ波礎石群　14棟　J小　石　垣
D村上礎石群　10棟　K大　石　垣
E猫坂礎石群　5棟　L水城口門礎
F尾花礎石群　10棟　M坂本口門礎
G増長天礎石群　4棟　N大宰府口門礎

基　肄　城

A～G建物
（A4棟　B13棟　C1棟　D4棟
E3棟　F1棟　G4棟）
H北帝門跡
I東北門跡
J南谷水門跡
K仏谷水門跡

鞠　智　城

A佐官どん礎石　H堀切門跡
B長者原礎石群　I深迫門跡
C宮野礎石
D長者山礎石群
E上原礎石群
F米原礎石群
G池ノ尾門跡

Fig.51 古代山城概念図

註

1）島津義昭「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』所収　1983
2）坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」地歴研究第10篇第5号　1937
　坂本経堯「鞠智城」『菊池文化物語』1964　なお本文中の引用は後書よりおこなった。
3）Fig.51の大野城、基肄城の概念図は九州歴史資料館編「大宰府展」の図録に拠る。

2　鞠智城の構造

礎石などの地上に露出している遺構については、ほぼその確認作業と記録化は終了した。今後埋没している礎石や堀立柱建物などの調査が進められる必要がある。

ここでは、知られている遺構の分布から、鞠智城の構造について考えてみたい。

鞠智城の城域全体の平面形は、大略菱形をなす。城域内に二つの谷をもつ。すなわち長者山の北側から発し、そのまま北に抜ける谷と南側に東西に延びる谷である。後者は池ノ尾門礎の狭隘部を径て東に向い、深迫門礎から入りこむ谷と合体する。この谷の中央部の南の崖端に堀切門礎がある。以上の三カ所が鞠智城の全部の門礎である。

門礎石の形式はそれぞれ異なり、池ノ尾と深迫が対になる二石を用いるが、前者は丸味のある自然石、後者は扁平な自然石を使っている。中央部の堀切の門礎は一枚の扁平石の左右に枘穴を持つという構造で、枘穴の両外の部分には支柱を固定させる為の刳込みがある。東側の門に相当する深迫では瓦が出土しており、瓦葺の建物であったことが知られる。

この三カ所の門から城内に入り、中央の台地部へ達するには、馬こかしの狭隘部を通らねばならない。ここは左右に深い侵食谷が迫っている。

台地部には、少くとも五地区に十棟以上の礎石をもつ建物が存したとみられるが、建物の規模が解るのは数棟である（Fig. 53）。

建物規模は長者山の4間×3間を最小として長者原の5間×4間（推定）、宮野の9間×3間の三種が存する。柱間寸法も5.5尺、6.5尺、7尺、8尺と変化に富んでいる（Tab. 12）。このような大きさの違いは、建物の性格や築造期の差を示すものであろうか。

Tab. 12　鞠智城跡建物規模一覧

地区名	プラン 間×間	柱間寸法(尺) 桁行	梁行	建物の長軸方向	備考
佐官どん	4×3	—	—	(N−22−W)	原位置を保つのは1個のみ
長者原	4(5)×3(4)	6.5	5.5	N−11−W	炭化米を伴う。瓦葺
宮野	9×3	8	8	N−16−E	瓦葺
長者山No.1	4×3	8	8	N−3−W	
No.2	3×1(4)	7	7	NS	付近から瓦出土
No.3	—	—	6	NS〔WE〕	
No.4	3×3(4)	7	8	N−3−W	
上原	—	—	13	N−17−E	礎石存せず、抜取穴を測る

※（ ）は推定数値

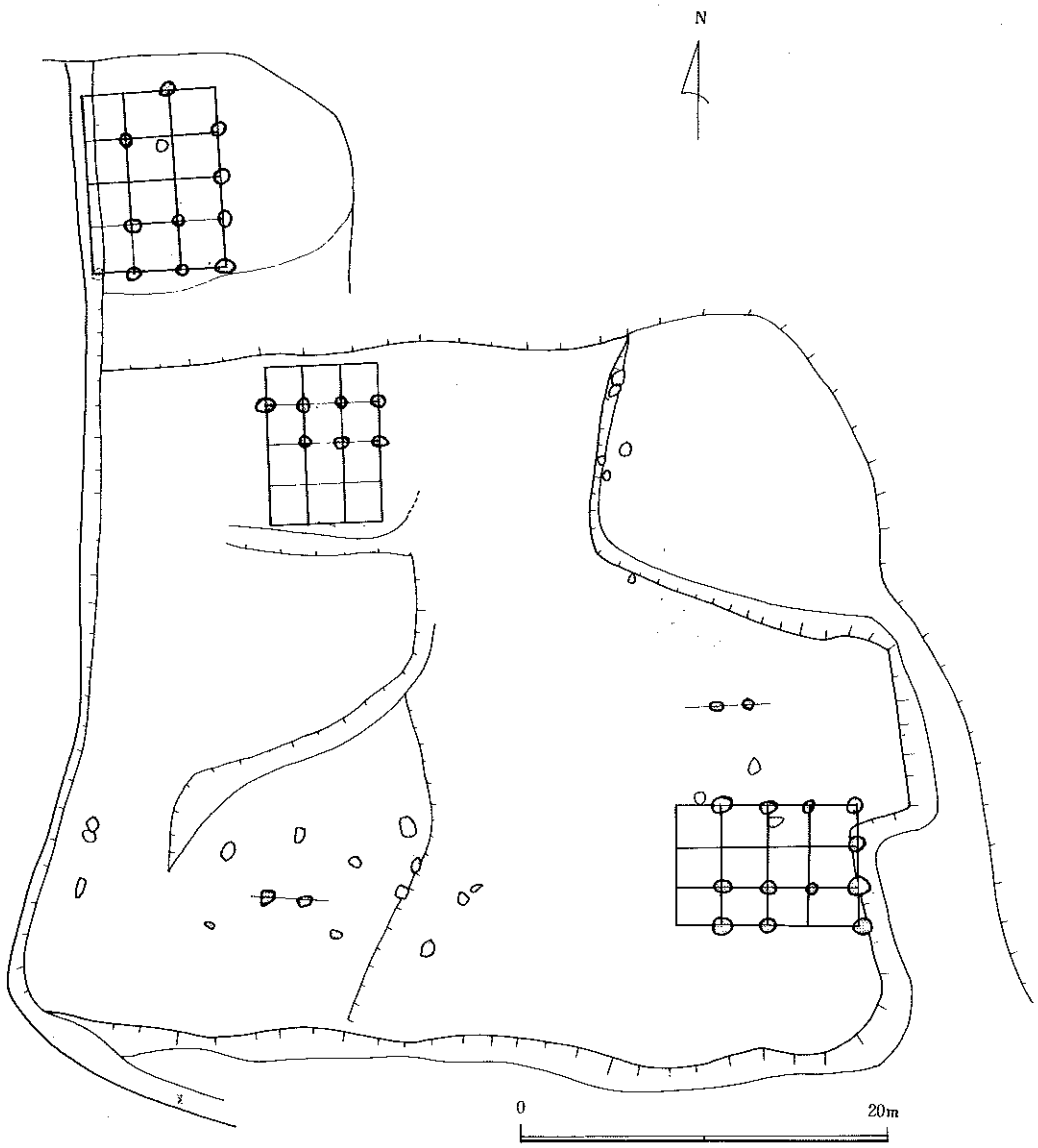


Fig.52 長者山礎石建物群配置復原図

建物の密集する長者山では7棟以上の礎石建物が知られているが、建物の並びの方向がほぼ南北に並列するか、直交しているので（Fig. 52）、築造期の時間差があまりないものと推定される。

建物のなかで異例なのは佐官どんの礎石建物で、土塁の内側の狭い平坦面に4間×3間（復原推定）の一棟の建物が知られている。立地場所が尾根部にあることは、平坦面に存するものと性格を異にする建物であると推定される。

台地の平坦面に存する長者原の礎石建物には炭化米が伴出した。炭化米の出土する箇所は米原集落内にもあり、広く米原一帯に米倉が存したことが解る。

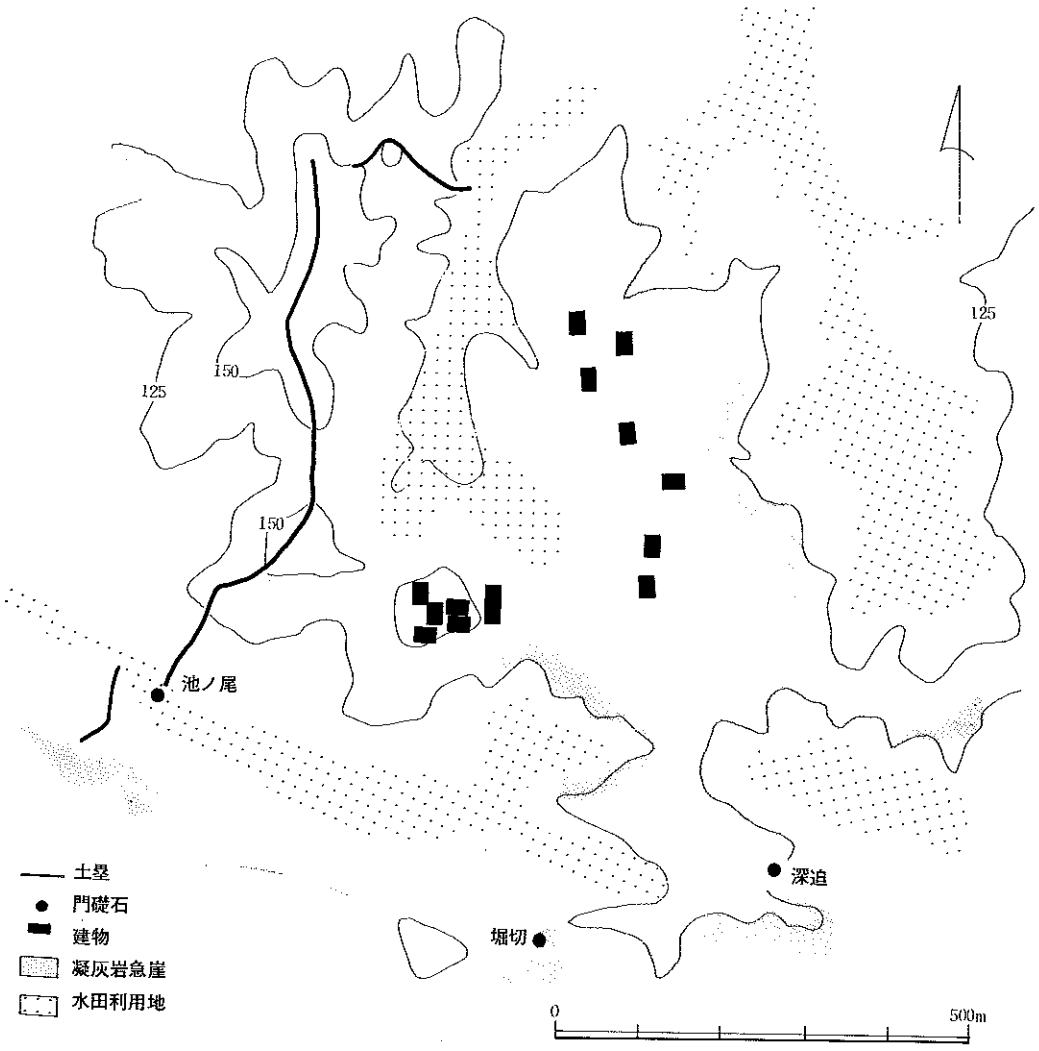


Fig.53 鞠智城概念図

米原周辺で焼米の出土することは古くから著名であったらしく『肥後国誌』には米原長者の伝説として記されている[1)]。米原の集落名は17世紀に成編した北嶋雪山『国郡一統志』にも見えることから、中世の終り頃にはその名称が成立していたと考えられる[2)]。米原周辺の焼米の出土は『文徳実録』天安2年（858）の「菊池城不動倉十一宇欠」の記事に関係するとみられる。

鞠智城の立地する地勢は城域内に河谷盆地を持つ大野城や基肄城とは異なっている。鞠智城が有明海から、平野部に深く込りこんだ山陵部にあることや、朝鮮式山城の分布の南限に位置することなどから、設置の意義について諸説ある[3)]。

鞠智城は、水門や石塁が欠失するなどの、他の朝鮮式山城と異なる点もあるが、土塁の規模や門礎などが存し、遺構の基本的性格は通有のものと同一である。したがって、その築城目的

も、天智期に築城された他の山城と同一であると考えられる。つまり白村江の敗戦を契機とする防衛施設群の一環とみなしうる。しかも大野城、基肄城が大宰府の直接的な防備を目的とした如く、鞠智城も広義にはそのような目的の為築城されたとせねばなるまい。しかし、この場合鞠智城の立地が直接戦闘を想定できない大宰府から遠距離にあることは役割りにおいてやや異なる性格を有していたと考えざるを得ない。すなわち軍事戦略的なものであったと考えられる。恐らく兵糧の備蓄が鞠智城の主たる役割であったのではあるまいか。　　（島津）

註

1）後藤是山編『肥後国誌・上巻』（1915）本書は森本一瑞により明和9年（1772）に成稿した。なお次の論巧でも米原長者伝説を取上げている。
斎藤忠「長者屋敷考」『日本古代遺跡の研究（論考編）』1976

2）北嶋雪山『国郡一統志』（寛文7年・1667年成稿）にも米原の名前がみえ、同地に存した堂宇として、夫神、東福寺、阿弥陀などがみえる。今日の米原の集落内には阿弥陀堂のみが残り、元緑銘の木造阿陀如来座像が存する。

3）坪井清足「古代山城研究の現状と課題」『鬼ノ城城』鬼ノ城学術調査委員会　1980
鏡山猛『大宰府都都城の研究』　1968
富田紘一「鞠智城」『日本城郭大系18』　1979　では「第二の磐井の叛乱に備えて、火君を牽制する意味で、肥後北部の穀倉地帯の中央に鞠智城を築いた」との見解を示す。

KUKUCHI NO KI

Final Report on the KUKUCHI NO KI Citadel

——Archaeological Monographs, Kumamoto Prefecture——

NO. 59

1983

KUMAMOTO PREFECTURE

CONTENTS

I Preface

1 Prologue to Investigation

2 Investigative Committee

3 Process of Making this Report

4 Excavated Areas

5 Investigative Diary

II History of KUKUCHI NO KI

1 History of KUKUCHI NO KI

2 History of Investigation

III Summary of the Ruins

1 Geographical Background

2 Summary of the Ruins

IV Results of the First and the Second Researches

1 Excavated Ruins

A Foundation stones of the Gate at IKENOO

B Foundation stones of the Gate at HORIKIRI

C Foundation stones of the Gate at FUKASAKO

D Corridor at UMAKOKASHI

E Stone Wall at MITSUEDA

F Foundation stones at SHAKAN DON

G Foundation stones in YONABARU Area

H Foundation stones at SHOGEN DON and MATURI YASHIKI

I Ruins at CHOJABARU

J Foundation stones at MIYANO

2 Summary

V Results of the Third Research

1 Excavated Ruins and Findings

A SHAKAN DON

B Foundation stones of the Gate at FUKASAKO

C Earthen Enclosure with Bank

D Estimated Foundation stones at ATAKA

2 Summary

Ⅵ Results of the Fourth Research

1 Excavated Ruins

A Foundation stones at CHOJABARU

B Foundation stones at MIYANO

C Foundation stones at CHOJAYAMA

2 Summary

Ⅶ Results of the Fifth Research

1 Excavated Ruins and Findings

A A Area

B B, C Areas

C D Area

D E Area

E F Area

F G Area

G H Area

H I Area

2 Summary

Ⅷ Results of the Sixth Research

1 Excavated Ruins

A Layers

B Unearthed Ruins

2 Objects

3 Summary

Ⅸ Results of the Seventh Research

1 Excavated Ruins

A Prologue to Investigation

B Unearthed Ruins

2 Objects

3 Summary

Ⅹ Discussions

Appendix

Remarks on the Korean Style's Citadel

…… HINO Shoshi

LISTS OF FIGURES

1 Location of the Investigated Areas
2 Topographical Chart at IKENOO
3 Plan and Section, Foundation stone of the Gate at IKENOO
4 Topographical Chart at HORIKIRI
5 Plan and Section, Foundatin stone of the Gate at KINO Shrine
6 Plan and Section, Foundation stone of the Gate at HORIKIRI
7 Topographical Chart at FUKASAKO
8 Plan and Section, Foundation stone of the Gate at FUKASAKO
9 Topographical Chart at UMAKOKASHI
10 Plan and Section, Stone Walls at UMAKOKASHI
11 Topographical Chart at MITSUEDA
12 Plan and Section, Stone Walls at MITSUEDA
13 Topographical Chart at SHAKAN DON
14 Layers, Foundation stones at SHAKAN DON
15 Distribution of the Trenches at SHAKAN DON
16 Layers of the Seventh and Eighth Trenches
17 Section of the Sixth Trench
18 Distribution of the Trenches at FUKASAKO
19 Sections of the C, G and E Trenches
20 Plan and Section of the C Trench
21 Section of the Estimated Rampart at FUKASAKO
22 Findings
23 Rampart of the KUKUCHI NO KI
24 Plans and Sections of the Rampart
25 Plans and Sections, Foundation stones at ATAKA
26 Plans and Sections, Foundation stones at CHOJABARU
27 Distribution Map of the Foundation stones at MIYANO
28 Layers, Foundation stones at MIYANO
29 Topographical Chart at CHOJAYAMA
30 The Fifth and Sixth Research Areas
31 Plans, B and C Areas, Sections of East Walls
32 Paddled Marks on the Plain Rooftiles
33 Section, SF501
34 Potsherds, B, C Areas
35 Potsherds, B, C Areas
36 Section, East Wall E Area
37 Plans, D and E Areas
38 Plan and Section, Pits drawn out of the Foundation stones
39 Plans, F and G Areas, Section, North Wall F Area
40 Potsherds, E Area
41 Potsherds, E Area
42 Potsherds, D Area
43 Restored Round Rooftile unearthed by the Fifth Research
44 Section of the Investigated Area, UENOHARU
45 Plan and Section, Storehouse uneathed by the Sixth Research
46 Findings in situ, Ditch of the West part, MIYANO
47 Findings, MIYANO
48 Stone Artifacts, MIYANO
49 Rooftiles, MIYANO
50 Rooftiles, MIYANO
51 Plans of Ancient Citadels
52 Reconstruction of Syorehouses, CHOJA YAMA
53 Plan of the KUKUCHI NO KI Citadel

LISTS OF PLANS

I Topographical Map of KUKUCHI Citadel

II Distribution Map, YONABARU Area

III Distribution Map, Foundation stones at CHOJABARU

IV Distribution Map, Foundation stones at MIYANO

LISTS OF PLATES

I General View of the KUKUCHI NO KI from the Air

II General View of the YONABARU tableland

III General View of the foundation stone at IKENOO

IV Foundation stone at IKENOO

V Foundation stone at IKENOO

VI General View of the foundation stone at IKENOO

VII General View of the foundation stone at IKENOO

VIII FUKASAKO Area and YONABARU tableland

IX General View of the FUKASAKO Area from the Air

X Foundation stone at FUKASAKO

XI Foundation stone at FUKASAKO

XII Foundation stone at FUKASAKO

XIII Foundation stone at FUKASAKO

XIV Foundation stone at FUKASAKO, General View

XV The south precipice of KIKUCHI NO KI

XVI The south precipice of KIKUCHI NO KI

XVII Foundation stone at HORIKIRI

XVIII Foundation stone at HORIKIRI

XIX Foundation stone at KINO Shrine

XX Northern View of KIKUCHI NO KI

XXI General View of CHOJAYAMA

XXII General View of CHOJAYAMA

XXIII Foundation stones at CHOJAYAMA

XXIV Foundation stones at CHOJAYAMA

XXV Foundation stones at CHOJAYAMA
XXVI Foundation stones at CHOJAYAMA
XXVII General View of CHOJAYAMA
XXVIII CHOJAYAMA and foundation stones at MIYANO
XXIX Before excavation of MIYANO
XXX CHOJAYAMA, General View from MIYANO foundation stones
XXXI Foundation stones at MIYANO, General View from CHOJAYAMA
XXXII Foundation stones at MIYANO, General View from South
XXXIII The situation of Layers at MIYANO fouadation stones
XXXIV HANCHIKU and drain section at MIYANO foundation stones
XXXV Foundation stones at SHAKAN DON
XXXVI Foundation stones at CHOJABARU
XXXVII Foundation stones at CHOJABARU
XXXVIII Rampart of KIKUCHI NO KI
XXXIX Rampart of KIKUCHI NO KI
XXXX Stone wall at MITSUEDA
XXXXI Tilling the rice field and founded foundation stones at CHOJABARU
XXXXII Rooftiles
XXXXIII Rooftiles
XXXXIV Rooftiles unearthed by the Sixth Research

LISTS

1 List of the Investigated Areas
2 List of the Findings unearthed from Foundation stone of the Gate at FUKASAKO
3 List of the Rooftiles
4 Analysis Table of the Plain Rooftiles
5 List of Pits, B and C Areas of Fifth Research
6 List of Pits, the Sixth Research
7 List of Foundation Stones, MIYANO
8 List of small Foundation Stones, MIYANO
9 List of Potsherds, MIYANO
10 List of Rooftiles Uneearthed from Foundation Stones, MIYANO
11 Froming Technique of Plain Rooftiles, MIYANO
12 List of Buildings, KUKUCHI NO KI

Summary

The following is a summary of the results of the archeological investigations conducted by the Bureau of Cultural Property, Kumamoto Prefecture. The Bureau has recently concluded archeological researches on the Kukuchi No Ki Citadel (鞠智城), a project which stretched over a period of six years from 1967. As a result the general outline of the Citadel has been clarified.

Kukuchi No Ki is one of the ancient citadels in Yonabaru (米原), Kikkamachi (菊鹿町), Kumamoto Prefecture. It is situated on the end of the western slope of Aso-san (阿蘇山), and commands a bird's eye view of the whole Kikuchi River (菊池川) Valley. Furthermore it enjoys a distant view of Uto (宇土) and Mashiki (益城) in the south as well as the Ariake (有明) area in the west.

In and around Kukuchi No Ki there are many ancient govermental structures, such as the Torenji (十連寺) Temple, Nisidera (西寺) District Office and the national road leading to Dazaifu (大宰府), the central administrative office of Kyushyu.

The first mention of Kukuchi No Ki in Japanese literature is to be seen in Shoku Nihongi (続日本紀) which reads "Ohno (大野), Kii (基肄) and Kukuchi shall be repaired by the Dazaifu." This record is dated the second year of the Emperor Monmu (文武天皇) (698 A. D.).

The Citadel of Ohno is situated on Mt. Shioji (四王寺山), to the north of the Dazaifu and that of Kii on Mt. Boju (坊住山) in Kiyamacho (基山町), Saga Prefecture. The Ohno and Kii Citadels were both built in 665 by the order of Okurai Fukuryu(憶礼福留) and Shihi Fukufu(四比福夫), descendants from the Korean royal family of Paeckche. Although we have no historical documents on when and upon whose order the Kukuchi No Ki was built, it may safely be assumed that the Paeckche people constructed it in the latter half of the 7th century, through analytical researches of its style and finds unearthed.

Various attempts had been made to locate the Kukuchi No Ki by many scholars since the 18th century. In this century the foundation stones which seem to have constituted a part of the Citadel were found around the Yonabaru area. Among foundations excavated in the Kukuchi No Ki Citadel are a rampart, foundation stones of the gates and the storehouses.

The Citadel lacks the stone walls common to most ancient citadels. The Yonabaru taffaceous terrace on which the Kukuchi No Ki is located has natural steep cliffs more than 20 m. in depth at its southern end, so we may be justified in concluding that it was unnecessary to build stone walls there.

A rampart, 6 m. in width and 3 m. in height remains on the top of western hill of

the Yonabaru terrace. It is steep on the outside and flat on the inside so as to be used as corridors.

Foundation stones of the gates were found at three places, Ikenoo (池ノ尾) in the west, Fukasako (深迫) in the east and Horikiri (堀切) between them. Each of them are made of granite. More than six storehouses have been excavated on Choja Yama (長者山) in the southern part of the Yonabaru terrace. Two of them have been restored to the dimentions of 3 spans x 4 spans. At Miyano (宮野) on the eastern slope of Choja Yama, there is a well-presserved storehouse estimated to be 3 spans x 9 spans extending north and south.

We are not in a position to ascertain the scales of styles of the other storehouses on the central part of Yonabaru, Choja Yama, and Uenohara (上原)

Nine storehouses have been restored from foundations unearthed at the Yonabaru area, but it can be conjectured that there were more than ten storehouses, judging from the existence of a number of foundation stones scattered in Yonabaru.

It is generally known that Yonabaru produces a lot of carbonized grains of rice. The name of Yonabaru may be associated with this fact. Etymologically, "yonabaru" means 'rice field", yone, rice, baru, field.

We have a lot of carbonized grains of rice around the foundation stones at Choja Yama, so the storehouses at Yonabaru seem to have been used as granaries.

There are also many plain and round rooftiles around the foundation stones. Among them there is a rooftile which is motif and design of the Fujiwara style.

The length of the rampart enclosing the Kukuchi No Ki Citadel totals about 3.5 *km*. It is the same scale as the Kii Citadel but smaller than that of Ohno which is 6.8 *km*. in lenght.

We cannot clarify when the Kukuchi No Ki went into ruin, because we have not any records since 879 A.D..

In conclusion, we would like to stress the fact that there still remain a number of unsolved problems, such as the function of the Kukuchi No Ki, the relationship between the Kukuchi No Ki and the other two citadels Ohno and Kii, the relations between the Kukuchi No Ki and the Dazaifu and the like.

Furthemore, it is hoped that the appropriate steps should be taken, which we unanimously consider to be urgent, through cooperation with the local and governmental authorities so that a more close investigation may be carried out on the Citadel in question by means of keeping it in good preservation.

We believe firmly that positive steps toward that end in the near future will yield the most valuable results in archeological studies of the KuKuchi No Ki Citadel.

付　論

朝鮮式山城についての一考察

日野尚志

西海道に設けられた朝鮮式山城[1]には、対馬嶋の金田城[2]、筑前国の大野城[3]、怡土城[4]、肥前国の基肄城[5]、肥後国の鞠智城[6]がその位置と遺構が知られているが、大津城[7]は博多大津と無関係でないことは明白といえる。しかしその遺構は残っていないし、その位置すら判明していない。さらに稲積[8]、三野[9]2城については、どこに設けられていたのか推測さえつかない。また遺構も現在のところ九州で発見されていない。

ところで、これらの朝鮮式山城を考えるにあたっては軍団との関係[10]を抜きにしては十分な考察が進められないのではないだろうか。そうはいうものの史料的制約もあって西海道で軍団名の判明するのは御笠[11]、遠賀[12]、基肄[13]3団にすぎないが、それでも大野城は御笠郡に、基肄城は基肄郡にあって軍団との関連が深いことをうかがわせる。

『類聚三代格』巻18弘仁4年8月9日条の太政官符によれば、軍団は筑前国に4団、筑後国に3団、肥前国に3団、肥後国に4団、豊前国に2団、豊後国に2団と記され、これらの団数は奈良時代以来変化してないと判断[14]される。そうであれば3～4郡の割合に1団[15]が設けられたとする静態的な考え方は西海道では該当すると思われるが、陸奥国[16]では該当しない。

ここでは国府の設置された郡には必ず軍団が置かれたと判断し、さらに軍団関係地名、古代の交通路、軍事上の要衝地、郡名、郡司等を考慮して軍団の設けられた郡（軍団名と郡名が一致するとは限らないが[17]、ここでは郡名と一致するとしておく）を考えてみたい。このような憶測のうえに憶測を重ねるという研究に対して厳しい批判があるのは当然であろう。しかし、このような考察も未解決の問題に対する一つのアプローチとしてみるのも全く無駄ではないと思う。

さて、筑前国4団のなかで、遠賀、御笠2団を除く他の2団は怡土（団名憶測、以下同じ）、那珂（団名憶測、以下同じ）2団であろう。それは大宰府の外港である博多大津の位置する那珂郡と博多湾から怡土水道を経て玄界灘に至る海上交通の要衝地にあたる怡土郡に設けられたのは間違いないだろう。この2郡には前述した大津城、怡土城が設けられていた。

怡土郡の雷山には神籠石があるが、大宰府の主船司[18]が設けられていたことも軍事、交通上の要衝地であったことを物語るといえよう。その遺称地にあたる周船寺に隣接して板持[19]・千里（せんり）[20]・高来（こうらい）[21]などの渡来系を示す地名があるだけでなく、怡土の県主[22]、さらには郡司[23]も渡来系であった

とみられる点に注目したい。

以上のように考えてみると、筑前国4団のうち3団の位置する郡では朝鮮式山城が確認されることになる。残る遠賀団の属する遠賀郡は博多湾と関門海峡の中間にあたるだけでなく、韓泊[24]・鳩舸の水門[25]があったことがわかる。したがって博多大津と長門関の中間位置、さらには遠賀川の水運[26]と京と大宰府を結ぶ駅路の結節点[27]にあたっていたといえる。河口の芦屋は中世鉄釜の産地として知られていたが、ここが砂鉄の産地であったからである。『延喜式』巻24主計上条によれば、筑前国の調として鉄を貢納していたので、律令時代遠賀郡もその一端を担っていたのであろう。軍団の想定地には鉄の産地が多いことから、軍団には鉄の産地を抑える目的[28]があったことは確かといえよう。遠賀川水系に属する筑前国には遠賀・鞍手・穂浪・嘉麻4郡があり、この4郡が遠賀団の管轄区であろう。『和名抄』によれば、この4郡で24郷を数える。

これら4郡のなかで鞍手郡は『日本書紀』欽明天皇15年12月条に記す鞍橋君と関連があるのではないだろうか。それはともかく『和名抄』によれば鞍手郡の郷名に物部氏と関連深い新分、二田、十市があることは注目に値する。このことは宮田町磯光に『日本三代実録』元慶元年12月15日辛巳条に「授$_2$筑前国従五位下織幡神正五位下$_1$。正六位上天照神従五位下。」と記す天照神社（式外社で、物部の祖神饒速日命を祭祀する）があることから明白といえよう。鞍手郡も遠賀郡同様鉄の産地であったのではないだろうか。

なお、怡土団の管轄は怡土、志麻、早良3郡、那珂団のそれは那珂、粕屋、宗像、席田4郡、御笠団のそれは御笠、夜須、上座、下座4郡であろう。3団の管轄する郷の総数を『和名抄』でみると、怡土団22郷、那珂団35郷、御笠団24郷となり、那珂団が非常に多くなるが、宗像郡（『和名抄』では14郷で西海道で最も多い）が神郡[29]であったためであろうか。

筑後国では国府の置かれた御井郡には高良山神籠石があり、その北西麓に位置していた国府は東西、南北の駅路の結節点[30]に位置するなど軍事、交通上の要衝地であり、軍団が置かれたのは確実であろう。軍団の想定される郡に草壁郷や草壁（日下部）氏が確認[31]される場合が多いが、御井郡の郡司に草壁公[32]が確認されることに注目したい。また『和名抄』によれば郷名に山家、弓削があり、前者からは山部氏、後者からは物部系の弓削部がそれぞれ想定される。山部氏は門号氏族であるが、鉄との関連[33]も指摘されている。

残る2団のうち1団は小字名[34]から山門団（団名憶測、以下同じ）であろう。その位置は女山神籠石のある北西麓に位置しているが、近くに大草があって『和名抄』に記す草壁郷の遺称地に比定されるので、ここでも軍団と草壁氏との関連が考えられる。他の1団は郡名から考えて生葉団（団名憶測、以下同じ）であろう。生葉郡は門号氏族の的氏に由来するとみられるだけでなく、『和名抄』によれば物部郷があり注目される。また生葉郡に隣接する竹野郡には二田

郷があり、物部氏との関連が考えられる。さらに生葉、竹野、山本3郡の条里が同一条里区[35]に属することも興味深く、この3郡が生葉団の管轄であろう。

『和名抄』によって3団の管轄する郡を推定し、その郷数[36]を数えてみると御井団は御原、御井、三潴3郡の管轄で20郷、山門団は上妻、下妻、山門、三毛4郡の管轄で16郷、生葉団は生葉、竹野、山本3郡の管轄で18郷となる。

肥前国3団のなかで1団は前述したように基肄団であるが、『日本三代実録』貞観8年7月15日条に「大宰府馳レ駅奏言。肥前国基肄郡人川辺豊穂告。同郡擬大領山春永語$_2$豊穂$_1$云。(以下略)」とあり、郡司に門号氏族の山部氏が確認され、前述したように鉄との関連が考えられる。ところで、基肄郡に隣接する養父郡では『肥前国風土記』養父郡漢部郷条に「昔者　来目皇子　為$_3$征$_{\bar{2}}$伐新羅$_1$　勒$_2$忍海漢人$_1$　将来居$_2$此村$_1$　令レ造$_2$兵器$_1$　因曰$_2$漢部郷$_1$」とあり、忍海漢人が背振山地南山麓の寒水川流域で砂鉄を採取していたとみられるので、基肄郡でもその可能性が大きかったといえよう。なお、漢部郷の南は物部郷であり、物部氏と鉄との関連が考えられる。

残る2団のうち1団は『肥前国風土記』逸文に「杵島県　県南二里　有$_2$一孤山$_1$　従レ坤指レ艮　三峰相連　是名曰$_2$杵島$_1$　坤者曰$_2$比古神$_1$　中者曰$_2$比売神$_1$　艮者曰$_2$御子神$_1$一名軍神動則兵興(以下略)」とあり、杵島山の北東にある勇猛山(259m)を一名軍神といい、動けば兵士がたちあがると記すことから、杵島山の北山麓に杵島団(団名憶測、以下同じ)が考えられる。杵島山の西麓にはおつぼ山神籠石があり、山門郡同様神籠石と軍団との関連も無視できない。他の一団は肥前国府の置かれた佐嘉郡の佐嘉団(団名憶測、以下同じ)であろう。佐嘉郡には帯隈山神籠石があり、杵島郡同様軍団との関連について考えるべきであろう。

基肄団は基肄、養父、三根、神埼4郡、佐嘉団は佐嘉、小城、松浦3郡、杵島団は杵島、藤津、彼杵、高来4郡をそれぞれ管轄していたとみられる。これら3団を『肥前国風土記』に記す各郡の郷数を合計してみると基肄団は25郷(『和名抄』では18郷)、佐嘉団は24郷(『和名抄』では15郷)、杵島団は21郷(『和名抄』では12郷)となる。

『類聚三代格』巻18　弘仁4年8月9日条の太政官符に「肥前国二千五百人　団三　減$_2$一千人$_1$　定$_2$一千五百人$_1$准レ上」と記すが、同巻18弘仁4年12月29日条の太政官符に「応レ加$_{\bar{2}}$置軍毅$_1$事筑前豊後筑後肥前豊前肥後　(中略)　謹検$_{\text{下}}$太政官去宝亀十一年十一月廿三日下$_2$兵部省$_1$符$_{\text{上}}$称。肥前国兵士五百人。軍毅二人。豊後国兵士六百人。軍毅二人者。(後略)」とあり、肥前国は2団がそれぞれ1,000人、1団が500人であったことがわかる。そして500人の軍団はおそらく杵島団であろう。それは株島団の管轄する4郡が小郡[37]であったり、郡域が広いのに郷が少ないという特徴(肥前国東部は狭い郡域で郷が多い)がみられることから、人口が少なく軍団が小団規

模になっていたのであろう。杵島団の4郡域は現在の長崎県の北部を除く大部分（但し、離島を除く）と佐賀県西部が入り、広い範囲を管轄しなければならず、そのため軍毅は多忙をきわめたために定員が多く認められたとみたい。

なお、この弘仁4年12月29日条に記す内容から、この500人軍団は宝亀11年に設置された軍団とみる見解[38]があるが、既に指摘されているように軍団は養老3年10月戊戌条[39]（管内七道諸国における軍団の減少）、天平11年5月25日[40]（軍団の暫停）、宝亀11年3月辛巳条[41]（三関辺要を除く諸国の軍団の規模縮少）、延暦11年6月7日[42]（陸奥・出羽・佐渡・大宰府管内を除く諸国の軍団廃止、但し延暦21年12月長門国は復旧）と改革を受けながら、養老3年以後大宰府管内諸国は改革を受けていないこと、さらに宝亀11年3月に軍団が整備縮少されていくなかで、その8箇月後に大宰府管内の肥前、豊後2国だけに軍団の増置があったとは考えられない。『令集解』巻6　職員令条に「八十一例云。軍団置レ毅者。兵士満二千人一者。大毅一人。少毅一人。六百人以上。大毅一人。少毅一人。五百人以下。毅一人。」と記すように、軍団には1000人、600人以上500人以下の規模があったことが知られる。したがって養老3年以後西海道にも500人（または500人以下）、600人（または600人以上）の軍団があっても不自然ではない。また前述したように軍団の想定される『肥前国風土記』逸文もあり、史料に確認される基肄団、国府の置かれた佐嘉郡の佐嘉団の3団が養老3年以後にあったと判断したい。

肥後国4団については全く手がかりがない。国府の置かれた託麻郡に1団、さらに鞠智城の置かれた菊池郡に1団を考えるのは無理がないと思う。問題は残る2団であるが、白川、緑川流域に郷数の多い郡が集中しているので、もう1団を熊本平野に、他の1団を肥君の本貫地八代郡に比定してみたい。

菊池団（団名憶測、以下同じ）は菊池川流域の水系に属する菊池、山鹿、玉名3郡を管轄していたとみられるが、玉名郡は肥後国でも宇土郡とともに有数の産鉄地であったが[43]、鉄と関連の深い疋置郷[44]と郡司に日置氏[45]が確認されるのに注目したい。山鹿郡にも日置地名があり鉄との関連も考えられよう。そうであれば菊池団も鉄を扼える目的があったことは間違いなかろう。

託麻団（団名憶測、以下同じ）は託麻、宇土、益城、天草4郡を管轄していたのではないかと思われるが、熊本平野にもう1団を考えるとすれば、飽田団（団名憶測、以下同じ）であろう。そうであれば、飽田団の属する飽田郡と託麻団の属する託麻郡が隣接することになるが、相模国では余綾団の属する余綾郡と大住団の属する大住郡が隣接していたので別に不自然ではない。なお余綾団は足上、足下、余綾3郡を管轄していたことは間違いないと思うが、『和名抄』によれば、3郡で19郷を数える。

ところで、『延喜式』に記載される駅名から考えて、飽田郡養飼駅で駅路が2手に分れてい

たと判断され、交通の要衝にあったことがわかる。また『日本三代実録』貞観3年8月21日条に「肥後国飽田郡大領外従七位上建部公貞雄借$_2$外従五位下$_1$」とあり、郡司が門号氏族であったことがわかる。さかのぼって平城宮出土木簡[48]に「肥後国飽田郡調綿壱佰屯天平三年主政大初位下勲十二等建部君馬□」、さらに『大日本古文書』25に記す「瑜伽師地論巻第三十八奥書」に「天平勝宝六年歳次甲午八月十九日写　飽田郡建部君虫麻呂」、『続日本後紀』承和14年3月丙申朔条に「肥後国飽田郡人従三位大蔵卿平朝臣高棟家令正七位上建部公弟益男女等五人。賜$_2$姓長統朝臣$_1$。貫$_2$附左京三条$_1$。」とあり、郡司、郡司クラスに建部君が確認されるので、彼等の一族が譜代の郡司であった可能性が強い。飽田団は飽田、合志、阿蘇3郡を管轄していたのであろう。残る八代団（団名憶測、以下同じ）は八代、球磨、芦北3郡を管轄していたとみられる。

『和名抄』に記す郡別の郷数を団別に合計してみると、託麻団は25郷、菊池団は25郷、飽田団は29郷、八代団は18郷となる。なお、菊池郡の郡司は判明しないが、隣接する合志郡の郡司に日下部氏[49]が確認されること、八代市内に日置川があることに注目したい。

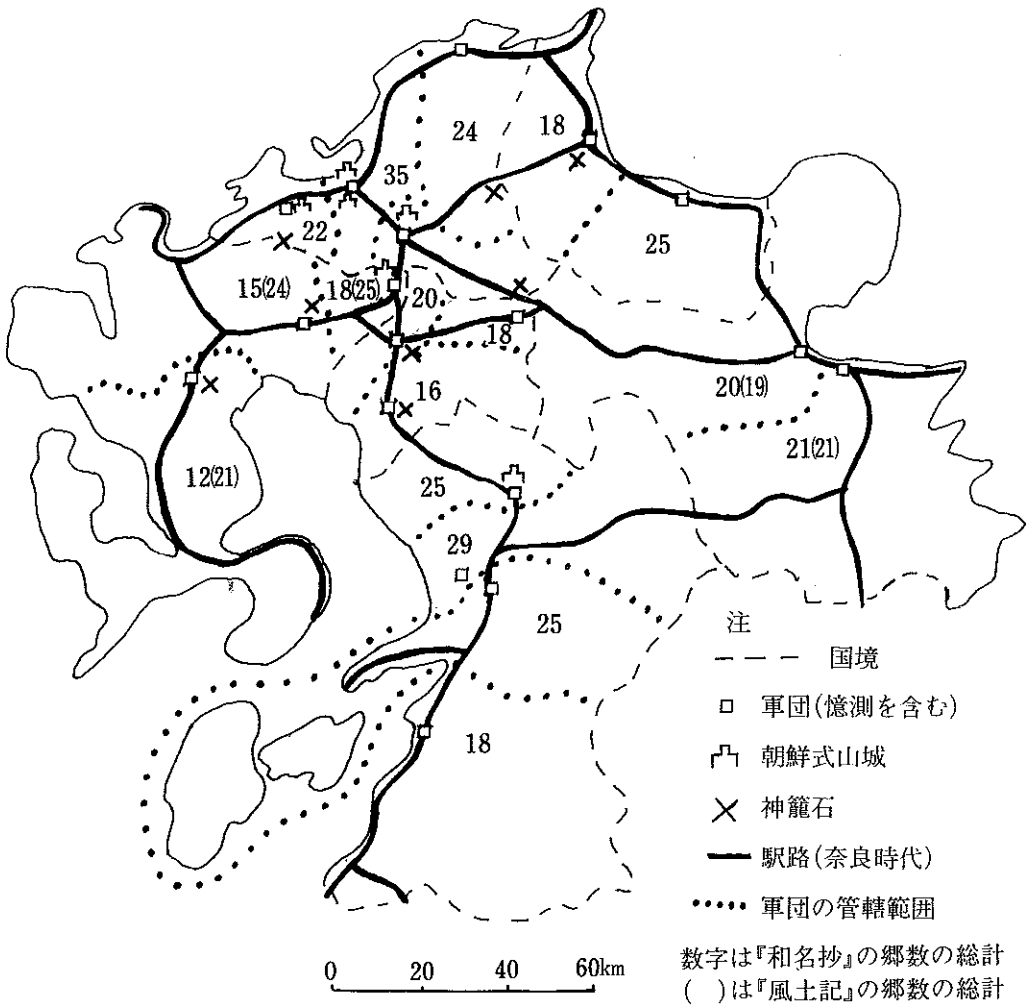
豊前国は2団であるが、軍団の存続した当時の国府が仲津郡で、のちに京都郡に移動したのか、またはその逆であったのか、議論の別れるところであるが、いずれにせよ企救、田河、京都、仲津4郡で1団、築城、上毛、下毛、宇佐4郡で1団を考えるべきであろう。京都郡（一部は仲津郡域に及ぶ）には神籠石があり、軍団との関連も考慮すべきであろう。国府所在郡の1団以外は憶測すら困難であるが、鍛冶技術を持っていた海部系の佐知氏[50]の支配した下毛郡の下毛団（団名憶測、以下同じ）であろうか。『和名抄』に鉄の産地とみられる穴師郷がある。なお、『和名抄』によれば企救、田河、京都、仲津4郡で18郷、築城、上毛、下毛、宇佐4郡で25郷となっている。

『類聚三代格』巻18　弘仁4年8月9日条の太政官符に「豊後国一千六百人　団二　減$_2$六百人$_1$定$_2$一千人$_1$准レ上」と記すが、同巻18弘仁4月12月29日条の太政官符に「（前略）謹検$_下$太政官去宝亀十一年十一月廿三日下$_2$兵部省$_1$符$_上$称。肥前国兵士五百人。軍毅二人。豊後国兵士六百人。軍毅二人者。然則承前之例。或特加置(以下略)」と記す内容から、1000人の1団と600人の1団があったことがわかる。このうち600人の1団を軍団の増設とみる見解[51]もあるが、8郡で1団であったとは考えにくく、単なる軍毅の定員増とみたい。

さて、1団は国府の置かれた大分郡の大分団[52]（団各憶測、以下同じ）であろう。豊後国府は『延喜式』に記す駅名の現在地への比定から考えて、豊前国府から豊後国府を経て日向国府に南下する駅路と大宰府から日田郡を経て豊後国府に至る駅路、さらには肥後国府から豊後国府に至る駅路が集まり、駅路の十字路的位置にあったとみられる。また『和名抄』によれば、大

分郡に海部系の津守郷、物部系の跡部郷があり、瀬戸内海にめんする海上交通、さらには軍事上の要衝地にあったといえよう。軍団廃止後であるが郡司に膳大伴[53]氏が確認されるのに注目したい。大分団は大分、直入、大野、海部4郡を管轄していたとみられるので、残る1団が国埼、速見、球珠、日田4郡を管轄したことになるが、4郡の位置から考えて速見団（団名憶測、以下同じ）であろう。この場合、日田、球珠2郡は筑後川水系に、速見、国埼2郡は瀬戸内海にめんし、地理的なまとまりに乏しい。そのために軍毅の定員増が計られたのであろう。『豊後国風土記』に記す郡別郷数を合計してみると大分団は21郷（『和名抄』では21郷）、速見団は19郷（『和名抄』では20郷）となる。

以上、憶測に憶測を重ねて6国の軍団名について考察を進めたが、6国の交通路、朝鮮式山

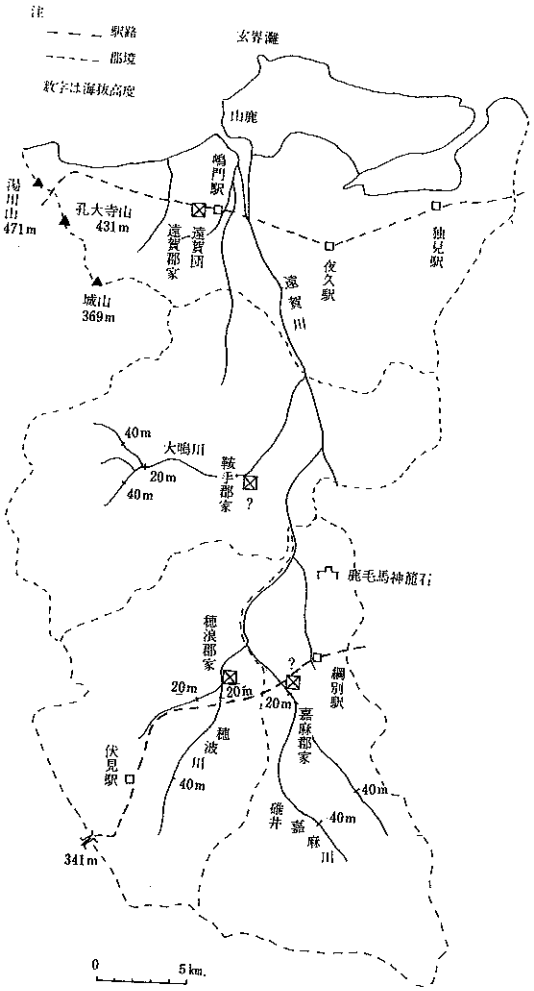


第1図　養老3年10月から天長3年11月までにおける西海道6国の軍団

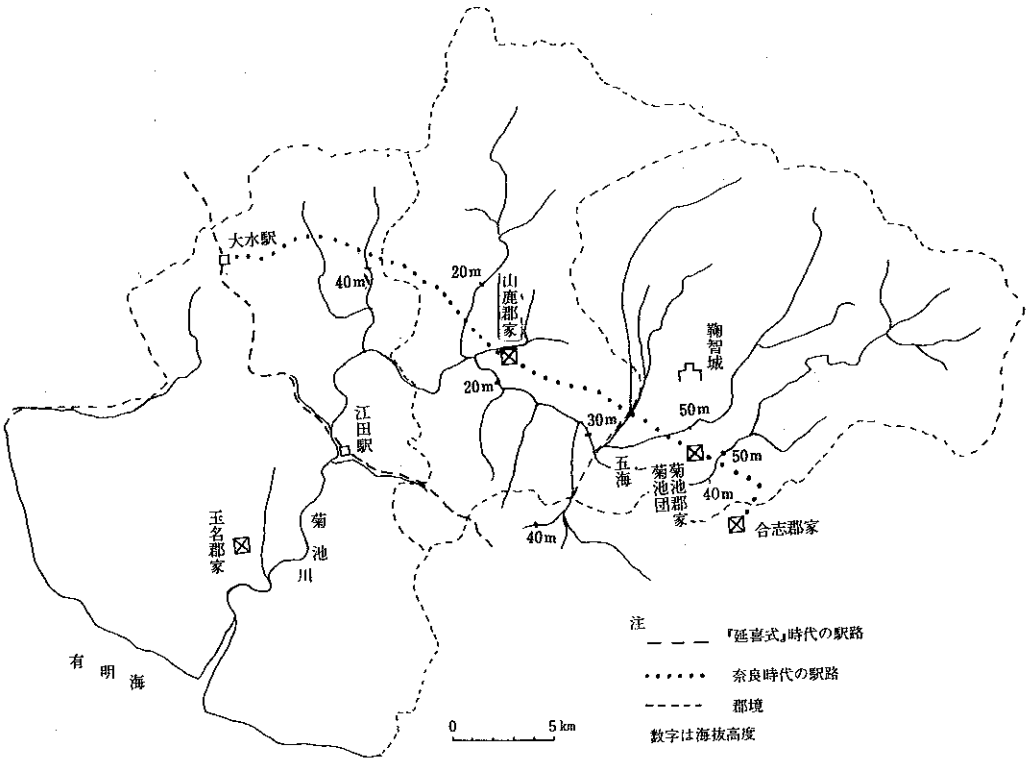
城の位置、国府の位置等を記入した第1図によって各軍団の管轄する地域をみてみると、同一の駅路に沿う郡、同一の水系に属する郡など、一つのまとまりをなす傾向が読みとれる。このことから軍事、交通上の要衝地（国府・朝鮮式山城・神籠石・港・駅路の十字路等）を重点にして、鉄の産地、正丁の数、地理的なまとまりを配慮して軍団数が決定されたのではないだろうか。

位置の知られない三野・稲積2城を除く他の朝鮮式山城は大陸から侵寇に備えて対馬から大和に至る軍事・交通上の要衝地を扼えるという国家的な見地にたって7世紀後半に築城されたのであるが、鞠智城の場合、なぜ菊池川上流域に築城されたのか明確でない。そこでこの問題について若干考えてみたい。

前述した遠賀団についてもう一度考えてみたい。遠賀団は遠賀川流域に沿う4郡を管轄していたとみられるが、軍団は遠賀郡家と同所[54]にあったとみられる。その位置は遠賀町大字尾崎の小字「郡田」であろう。そうであれば、駅路と嶋門駅[55]にも近い位置にあるだけでなく、遠賀川河口にも近い。さらにもう一つ注目されるのは遠賀川の遡航地点はかなり上流域にまで達し、嘉麻[56]、穂浪[57]、鞍手[58]3郡家まで舟運があったことは間違いない。これに対して菊池川も遠賀川同様、玉名、山鹿、菊池3郡家も遡航地点内にあったと判断される。さらに河口の玉名郡は鉄の産地であり、遠賀郡も同様であったとみられる。しかし軍団が一方は河口、一方が上流域と異なるのは、その地理的位置からくるとすれば、鞠智城は直接大陸を意識して築城されたとはいいがたい。別の見方をすれば、菊池川河口よりも上流域が重要視されたことになる。それは



第2図　遠賀川流域の筑前国四郡



第3図　菊池川流域の肥後国三郡

この上流域が大宰府から肥後国府を経て南に至る駅路に沿うルート上にあり、やはり隼人を意識したと判断される。隼人を意識したのであれば、なにも菊池郡でなく、もっと南でもいいのではないかと思われるが、肥後国南部を一種の緩衝地帯としてとらえ、白川、緑川の北側で生産性の高い（鉄、米、養蚕[59]）地帯を背後に控え、有明海方面からは菊池川の水運によって連絡できる菊池郡が選ばれたのであろう。時代ははるかに下るが、加藤清正が薩摩の島津氏を意識して白川の北側に熊本城を築城した意図に類似しているのではないだろうか。

奈良時代から平安時代の初期にかけて、肥後国北部の駅路[60]は玉名郡の大水駅から山鹿・菊池・合志郡家を経て肥後国府に達していたとみられるが、菊池郡家から大津に抜けて豊後国府に達する駅路もあったのではないだろうか。そうであれば、駅路の要衝地も抑えていたことになる。なお、この想定される駅路に沿う駅家は推測すらつかないが、大水駅からの距離等を考慮すれば、山鹿郡家と同所かその付近、菊池・合志郡家の中間地点にあたる駅路の屈折点付近にあったことが考えられる。

次に三野・稲積2城について考えてみたい。このうち三野城は『延喜式』に記す美野駅と関連があるのではないだろうか。美野駅の遺称地は福岡市中央区簀島であるが、その位置から考えて、古代は博多大津に隣接した駅であったとみられる。簀島はかつて那珂郡に属していたの

で、前述の大津城とともに那珂郡に2城存在したことになるが、長門国豊浦郡にも2城あった可能性[61]が強く、大宰府の外港である博多大津周辺に2城あっても不自然ではないと考えたい。

ところで、博多古図[62]によると、博多湾内に小島が描かれている。この島は『類聚三代格』巻18　貞観11年12月5日条の太政官符に「加以鴻臚中嶋館并津厨等離二居別処一無レ備二禦侮一」と記す中嶋であろう。鴻臚館は現在の平和台球場に比定されるので、ここから離れた所に鴻臚中嶋館ならびに津厨（博多大津の厨であろう）があったことがわかる。また「中嶋」は『和名抄』に記す那珂郡中嶋郷と無関係ではないとみられ、博多湾に浮ぶ島に博多大津に関連する諸施設があって、港を中心にして繁栄していたために一郷を形成していたのであろう。さらにこの古図からこの島と式内社住吉神社の間に狭い入江が描かれているが、美野駅は住吉神社付近に比定[63]されるので、三野城はこの美野駅付近で、博多大津城と対峙していた可能性もある。

美野駅付近は奈良時代伊智郷[64]に属し、門号氏族の建部氏がいたが、簀島に隣接して犬飼があり、その西南には住吉の小字「宮田・三宅田」があり、大化前代に設けられた那津官家付属の水田[65]があったとみられるが、那珂団[66]も住吉に設けられたのではないかと思われる。このように簀島付近が大化前代から博多湾にめんする軍事・交通上の要衝地であったことがよく理解されよう。

残る稲積城は地理的位置から考えて博多湾と関門海峡の中間地点遠賀郡が最有力であるが、朝鮮式山城[67]は確認されていない。長門関の対岸門司関のある企救郡で古城山を有力視[68]する考えもあるが、前述したように軍団は考えにくく、したがって企救郡内に朝鮮式山城を比定することは困難といえよう。

対馬嶋の金田城の位置を考えるとならば、博多大津と対馬嶋の中間地点にある壱岐嶋も無視できない。雷山神籠石がある位置に筒城神社が祭祀されていることから、壱岐郡郷ノ浦町筒城を重視する見解[69]もあるが、玄武岩からなる低山性（最高は岳ノ辻の213m）の壱岐嶋で朝鮮式山城は考えにくい。

ともあれ、現在のところ稲積城の現在地への比定は困難といわざるをえないが、他の朝鮮式山城の位置から考えて、対馬―壱岐―博多湾―北九州に至る玄界灘沿岸に比定するのが妥当であろう。

最後に『続日本紀』天平12年9月戊申条に「大将軍東人等言。殺二獲賊徒豊前国京都郡鎮長大宰史生従八位上小長谷常人。企救郡板櫃鎮小長凡河内田道一。但大長三田塩籠者。着二箭二隻一逃二竄裏一。生二虜登美。板櫃。京都三処営兵一千七百六十七人一。」にみえる登美（小倉北区富野がその遺称地とみられる。旧企救郡）、板櫃（小倉北区板櫃がその遺称地、旧企救郡）鎮について述べてみたい。西海道で史料的に確認されるのはこの3鎮だけであるが、鎮とは戦時

編成に組みこまれた防禦施設であり、平時編成の軍団と異なることに注目したい。このことは豊前国は2団なのに確認される鎮が少なくとも3鎮あることから明らかに異なることがわかる。このような戦時編成下におかれた鎮に勤務していたのが防人であろう。このような鎮は西海道にも数多くあったのではないかとみられるが、3鎮以外確認されず不明といわざるをえない。見方をかえれば、企救郡に軍団・朝鮮式山城がないが、軍事[70]・交通上の要衝地にあたるので、複数の鎮を置いたとも考えられる。また『出雲国風土記』巻末に記す「宅枳成、瀬埼成」もやはり戦時編成に組みこまれた防禦施設とみたい。

以上、憶測に憶測を重ねるという結果に終始したが、このような未熟な考察が軍団の位置、史料で確認できる朝鮮式山城の現在地への比定考察に少しでも役立てば幸いである。

注

1）古代を考える会編（1978）『朝鮮式山城の検討』19—50頁に神籠石と朝鮮式山城の相違が詳細に述べてある。

2）『日本書紀』天智天皇6年11月条に「是月、築$_{2}$倭国高安城・讃吉国山田郡屋嶋城・対馬国金田城$_{1}$」と記す。

3）『日本書紀』天智天皇4年秋8月条に「遣$_{2}$達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国$_{1}$、築$_{2}$大野及椽二城$_{1}$。」を初見とする。

4）『続日本紀』天平勝宝8年6月甲辰条に「始築$_{2}$怡土城$_{1}$。令$_{3}$大宰大弐吉備朝臣真備専$_{2}$当其事$_{1}$焉。」、天平神護元年3月辛丑条に「大宰大弐従四位下佐伯宿祢今毛人為$_{下}$築$_{2}$怡土城$_{1}$専知官$_{上}$。」、神護景雲2年2月癸卯条に「筑前国怡土城成」とあり、築城開始から完成までの年月がわかる。

5）前掲3）『続日本紀』文武天皇2年5月甲申項に「令$_{下2}$大宰府$_{1}$繕$_{中}$治大野。基肄。鞠智三城$_{上}$。」と記す。

6）前掲5）『日本文徳天皇実録』天安2年6月己酉条に「又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。」、『日本三代実録』元慶3年3月月16日丙午条に「又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。」と記す。

7）『続日本紀』宝亀3年11月辛丑条に「罷$_{2}$筑紫営大津城監$_{1}$。」と記す。

8）『続日本紀』文武天皇3年12月甲申条に「令$_{3}$大宰府修$_{2}$三野。稲積二城$_{1}$。」と記す。

9）前掲8）

10）日野尚志（1980）「古代山城と軍団—山陽・南海・西海三道の場合—」『史学研究五十周年記念論叢』485—507頁。

11）「御笠団印」で知られる。実物の写真解説が二玄社（1965）『日本の古印』10—11頁、177—178頁にある。なお、九州歴史資料館（1976）『大宰府史跡出土木簡概報』—46頁に「御笠団□□□」と記す。

12）「遠賀団印」で知られる。実物の写真・解説が二玄社(1975)『日本の古印』9—10頁、177頁にある。

13）『日本紀略』引仁4年3月辛酉条に「大宰府言。肥前国司今月四日解称。基肄団校尉貞弓等去二月九日解称。新羅人一百十人駕$_{2}$五艘船$_{1}$。著$_{2}$小近嶋$_{1}$。与$_{2}$土民$_{1}$相戦。即打$_{二}$殺九人$_{一}$。捕$_{二}$獲一百一人者$_{一}$。」と記す。

14）高橋崇（1963）「律令兵制における軍団数と兵士数」『続日本紀研究』第10巻4・5号合併号、26頁。松本政春（1980）「律令制下諸国軍団数について」『古代文化』32巻6号、55頁。

15）栗田寛（1901）『栗田先生雑著』下巻。

16）板橋源（1966）「古代陸奥軍団考」『軍事史学』第五号、2—20頁。

17）『出雲国風土記』巻末に「熊谷団」が記されるが、出雲国に熊谷郡はなく、飯石郡の郷名と一致する。

18）『令集解』巻6　職員令条の大宰府に「主船一人。掌$_{レ}$修$_{二}$理舟楫$_{一}$」と記す。

19）『新選姓氏録』河内国諸蕃条に「板茂連　伊吉連同祖。楊雍之後也」とあり板茂連は板持連とも称していた。なお、板持は『小右記』寛仁3年8月10日甲午条に「。前略）二人、筑前国志摩郡安楽寺所領板持

庄人、即進府、一人、（後略）」と記すのが初見。この史料から郡境の変化が考えられる。

20）千里に根深石（高さ約1.4m、横約1.6m、厚さ35cm）は条里の9図23里23坪と26坪の交点にあり、立石ともいうが、この石は朝鮮から飛んできたもので、朝鮮からの距離が千里あったので千里の名称がついたとの伝承がある。

21）高麗の転訛とみられる。

22）『釈日本紀』巻10巻に「筑前国風土記曰　怡土郡。（中略）怡土県主等祖五十跡手　聞二天皇一　抜二取五百枝賢木一　立二千船舳艫一　上枝挂二十握剣一　参二迎穴門引嶋一献之　天皇勅問二阿誰人一　五十跡手奏言　高麗国意呂山　自レ来降来日桙之苗裔　五十跡手是也」とあり、高麗国から渡来したと記す。そうであれば地名の高来（こうらい）は注目に値する。

23）怡土郡家は旧怡土村大字三雲の小字「郡ノ前・郡ノ下・郡ノ後」付近とみられ、前述の高来に近い。また『和名抄』に記す託祖郷の遺称地高祖は三雲の東にあたるが、この付近一帯が託祖郷であった可能性が強く、そうであれば、『大日本古文書』1　大宝2年の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」に記す嶋郡大領肥君猪手の庶母宅蘇吉志須弥豆売と妾宅蘇吉志橘売の2人は怡土郡託祖郷出身とみられ、吉志姓から渡来系で郡司か郡司クラスの有力者とみられるが、肥君と婚姻を結んでいるところから、郡司の一族であろう。

24）『平安遺文』第三巻　延喜5年の「観世音寺資財帳」に「遠賀郡山鹿林東山壱処　四至東南北海限、西従布刀浦至韓泊道限右、大宝三年十月廿日官所施入」とあり、ここに記す山鹿は遠賀川河口右岸に現存するが、韓泊の遺称名はない。やはり遠賀川河口付近であろう。

25）『万葉集註釈』巻3に「風土記云　鳩嶋県　々東側近　有二大江口一　名曰二鳩嶋水門一　堪レ容二大船一焉」とあり遠賀川河口付近が港として発展していたことをうかがわせる。

26）古代の水運に関する史料はないが、流域には東大寺領の金生、碓井、山鹿庄、高野山金剛三昧院領となった粥田庄があった。『平安遺文』第5巻大治5年11月5日条の「筑前国碓井封年貢米送状」によれば、「船賃料、梶取功食料、平駄賃料、本賃料、兵士粮料、国川下賃料（注脱）」など、遠賀川流域から東大寺までに要する費用等が詳細に記されている。これによれば年貢船は底が浅く平たい艀（ひらた）（平駄）船によって遠賀川を下った。なお、碓井は遠賀川の上流域にあるが、海抜は約25m前後である。

27）遠賀川を渡る地点に嶋門駅が設けられていた。『延喜式』巻18によれば、嶋門駅に馬23疋が置かれていた。『日本三代実録』貞観15年5月15日戊寅条に「（前略）諸国渡船廿年已上為レ期買替。而嶋門渡船二艘。不レ知二始置之時一。（後略）」とあり、二艘で運営されていたが、『類聚三代格』巻18　貞観18年3月13日条の太政官符に「応下筑前国嶋門駅家付二当国一令中修理上事　右参議権帥従三位在原朝臣行平起請称。件駅家。在二筑前国遠賀郡東一。去二大宰府一二日程。去二肥後国一七日程。承前之例。令二肥後国一加二修理一。令三筑前国供二駅具一。因レ茲肥後工夫常苦二於長途一。筑前主守不レ憂二其破損一。望請。以二件駅家一付二筑前国一。永令二修理一者。右大臣宣。奉レ勅。依レ請。」とあり、修理されたことがわかる。なお『続日本紀』天平12年10月壬辰条に記す「鞍手道」は遠賀川に沿う鞍手郡内の道（駅路か）を指すとすれば、嶋門駅で合流していた可能性が強い。

28）前掲10）。

29）『類聚三代格』巻7　延暦19年12月4日条の太政官符に「応レ停三筑前国宗像郡大領兼二帯宗像神主一事　右得二大宰府解一称。当郡大領補任之日。例兼二神主一即叙二五位一。而今准二去延暦十七年三月十六日勅一。譜第之選永従二停廃一。擢二用才能一。具有二条目一。大領兼神主外従五位下宗像朝臣池作十七年二月二十四日卒去。自レ爾以来頻闕二供祭一。歴二試才能一未レ得二其人一。又案二神祇官去延暦七年二月廿二日符一称。自今以後簡下択彼氏之中潔清廉貞。堪二祭事一者上。補二任神主一。限以二六年一相替者。然則神主之任既有二其限一。仮使有レ才堪三理レ郡兼二帯神主一。居二終身之職一兼二六年之任一。事不二穏便一。謹請二官裁一者。右大臣宣称。奉レ勅。郡司神主職掌各別。莫レ令三郡司兼二帯神主一。」『類聚国史』巻19　延暦17年10月丁亥条に「勅。国造郡領。其職各殊。今出雲筑前両国。慶雲三年以来。令下二国造一帯中郡領上。託二言神事一。動廃二公務一。雖レ有二其怠一。無レ由二勘決一。自今以後。不レ得レ令下二国造一帯中郡領上。又国造兼帯二神主一。（後略）」とあり、宗像郡大領が補任の日に宗像神社の神主を兼帯することを停止した。このことから神郡で郡領の神主兼帯であったことがわかる。

30）木下良（1977）「国府の『十字街』について」『歴史地理学紀要』19　5—32頁。

31) 前掲10)、503 頁。

32) 高良神社（1972）『高良玉垂宮神秘書同紙背』235 頁に「弓削郷戸主草部公、大領草部公吉継、少領草部公名在」とあり、御井郡司は弓削郷を本貫地にしていたのであろう。

33) 井上辰雄（1976）「吉備叛乱伝承の歴史的背景」『歴史人類』—西山松之助先生退官記念論文集、45—81頁。

34) 瀬高町大字長田の小字「壇ノ中溝、軍場」、通称名として壇ノ池（バス停あり）がある。これらの地名が平坦地にあって、周辺には条里地割も分布するので、これらの地名が地形に由来しているとは考えられない。

35) 日野尚志、佐田茂編（1974）『旧山本郡の条里』久留米市開発公社、30—39頁。

36) 『律書残篇』によれば、筑後国の総郷数と70で、『和名抄』のそれは54と大幅に減少している。70郷の郡別郷数は判明しないが、一団あたり少くとも20郷に達していたと考えたい。

37) 『和名抄』では杵島郡 4 郷、藤津郡 2 郷、彼杵郡 2 郷、高来郡 4 郷で、12郷しか記されていない。一方、『肥前国風土記』では杵島郡 4 郷、藤津郡 4 郷、彼杵郡 4 郷、高来郡 9 郷で、 4 郡で合わせて21郷となっている。『日本三代実録』貞観 8 年 7 月15日丁巳条に「（前略）藤津郡領葛津貞津。高来郡擬大領大刀主。（後略）」とあり、この頃藤津郡が小郡であったことがわかる。したがって 9 世紀後半には藤津郡が『和名抄』に示すように、 2 郷になっていた可能性もあり、『和名抄』に記す郷の減少を単なる脱落と考えるだけでなく、郷の変遷についても十分考慮すべきであろう。

38) 前掲14)、高橋の論文では26頁。松本の論文では55頁。

39) 『続日本紀』。

40) 『類聚三代格』巻18　延暦21年12月条の太政官符。

41) 『続日本紀』。

42) 前掲39)。

43) 熊本県教育委員会(1979)『生産遺跡基本調査報告書 1 —製塩遺跡、製鉄遺跡、石器製作所』、89—97頁。

44) 井上辰雄（1970）『火ノ国』、学生社、161—173頁。

45) 名著出版（1970）『玉名郡誌』、第 4 編通史28頁に「関白七道西海道太宰府　玉名郡人権擬少領小初位下日置郡公之治地高野山」と記す銅板誌が知られる。また『宇佐大鏡』に「玉名郡伊倉別符　件別符者当郡々司日置則利先祖相伝之私領也」とあり、日置氏が確認される。

46) 『大日本古文書』 2 、109頁。

47) 『大日本古文書』 2 、109頁。

48) 奈良国立文化財研究所（1969）『平城宮木簡一解説』122頁。

49) 『日本三代実録』貞観18年 9 月 9 日癸未条に「（前略）管肥後国合志擬郡大領日下部辰吉。於$_2$所部正六位上奈我神社河辺$_1$。獲$_2$白亀一$_1$。（後略）」とある。

50) 中野幡能（1975）『八幡信仰史の研究（増補版）』上巻、吉川弘文館、11・65、81—82、105—108頁。

51) 前掲38)

52) 大分市上野の小字に「壇ノ本」があるが、大分市内を見下ろす丘陵地の末端にあって墓地になっているが、この地名は地形に由来するものと考えたい。羽屋の小字「番上田」は注目してもよいのではないだろうか。

53) 『続日本後紀』承和15年 6 月庚辰条に「所管豊後国大分郡擬少領膳伴公家吉。於$_2$同郡寒川石上$_1$。（後略）」と記す。

54) 『続日本紀』天平12年 9 月戊申条に「（前略）広嗣於$_2$遠珂郡家$_1$。造$_2$軍営$_1$儲$_2$兵粮$_1$。而挙$_2$烽火$_1$。徴$_2$発国内兵$_1$矣。」とあり、軍団と郡家が同所であったとみられる。

55) 駅の位置を明確にしがたいが、島津付近であろう。

56) 郡家は明確でないが、稲築町大字山野付近と思われる。

57) 郡家は稲波町大字秋松の小字「郡毛（ぐんげ）」と判断されるが、現在は、穂波川の川床になっている。

58) 郡家は明確でないが、宮田町大字磯光の式外社天照神社付近であろう。

59) 『和名抄』によれば、菊池郡に子養郷（遺称地は七城町大字五海）がある。

60) 鶴嶋俊彦（1979）「古代肥後国の交通路についての考察」『駒沢大学大学院地理学研究』第9号、7―24頁。
61) 前掲10)
62) 福岡市文化会館所蔵の写本絵図による。そのなかでも弘安年中の「博多図」と称するものは著名。
63) 日野尚志（1974）「古代における大宰府周辺にの官道について」『歴史地理学紀要』16、143―144頁。
64) 『万葉集』814 に「那抄郡伊知郷蓑嶋人建部牛磨是也」と記す。
65) 日野尚志（1976）「筑前国那珂、席田、粕屋、御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集（1）、84頁。
66) 前掲63）。
67) 宗像、遠賀郡境の湯川山（471m）・孔大寺山（499m）は好位置にあるが、遺構など全く知られていない。
68) 榑松静江（1979）「朝鮮式山城の高安城に関する軍事地理学的研究―新しい方法論の提示を通じて―」『奈良女子大学研究報告』、16―39頁。
69) 前掲68）、20頁。
70) 企救郡の郡司は明らかでないが、『日本書紀』雄略天皇18年秋8月己亥朔戊申条に「（前略）使下筑紫聞物部大斧手（後略）」とあり、物部氏の有力者がいたことに注目したい。

「追記」

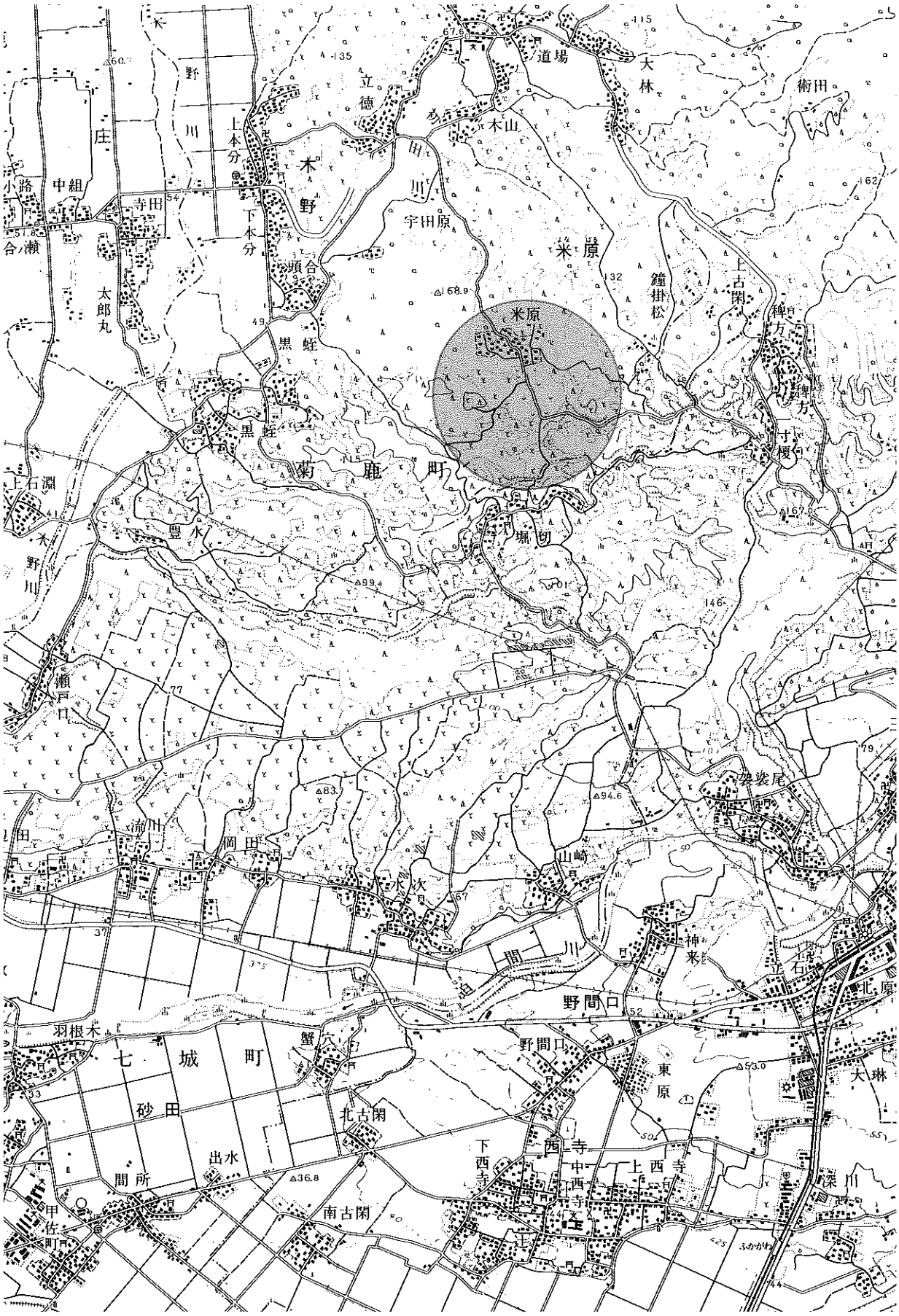
昭和58年4月2日、福岡県遠賀郡岡垣町と宗像郡玄海町にまたがる湯川山（標高471m）に朝鮮式山城の遺構ではないかとみられる土塁・水門等の見学会があった。

朝鮮式山城の遺構であるかどうか今後の調査が必要であるが、この遺構が朝鮮式山城であれば、筆者にとっては好都合といえる。見学会の案内状をいただいた地域相研究会に厚く御礼申し上げます。

図面・図版

●写真説明の後のカッコ内は撮影年月を示す

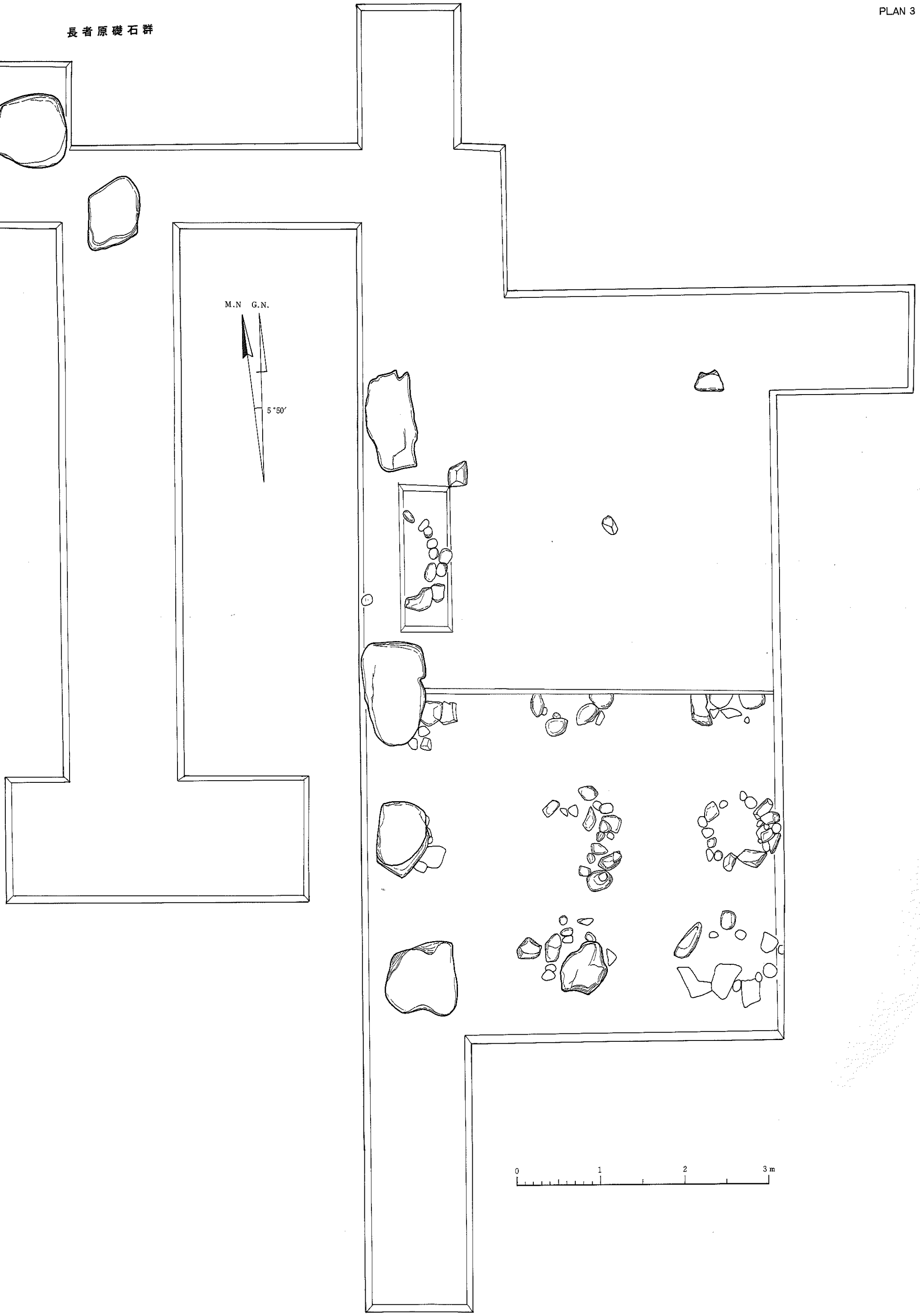
●遺物写真のPlate番号は、対向ページと対応する。

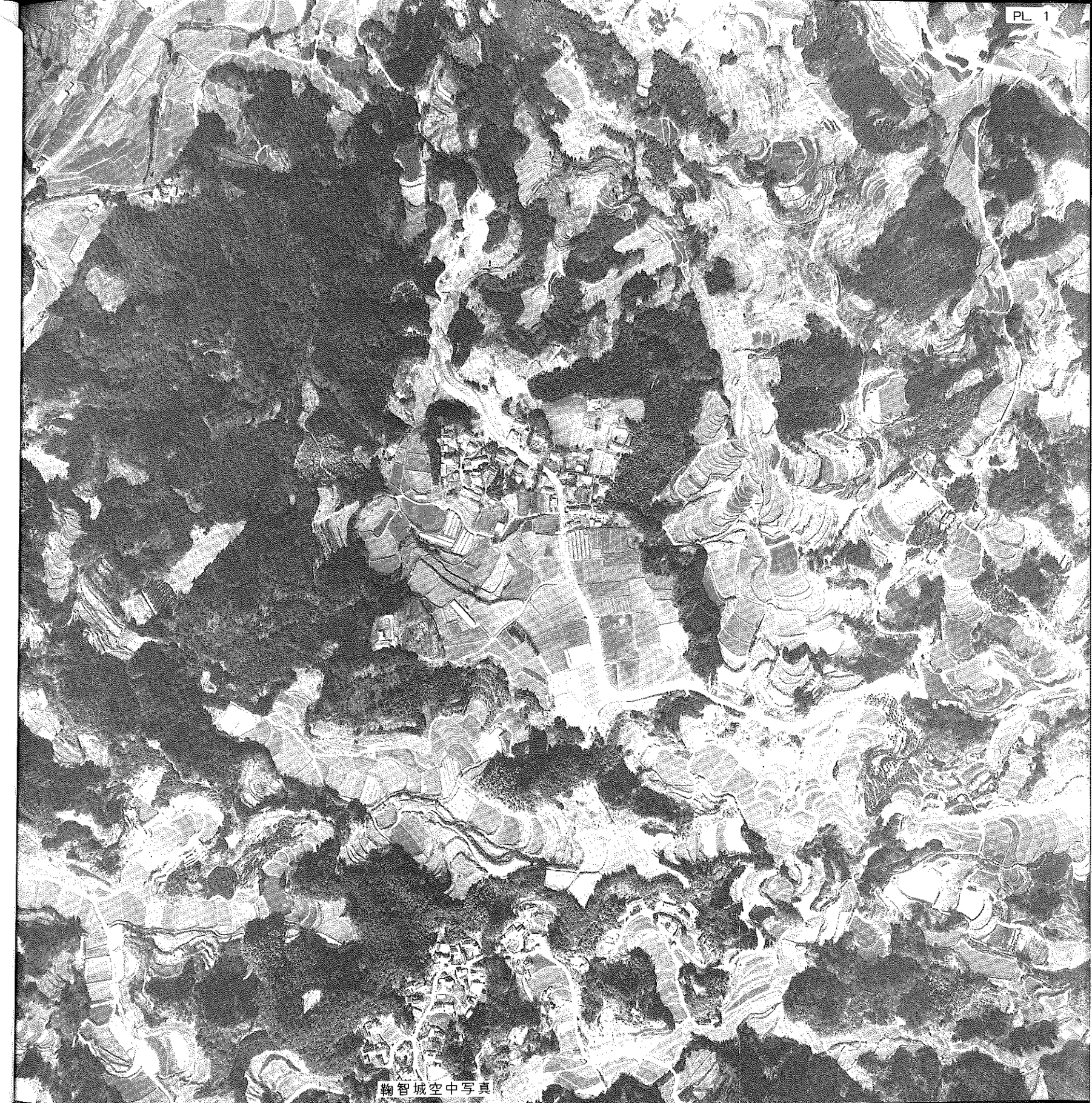


道場
大林
術田
立徳
木山
上本分
木野
下本分
寺田
中組
小路
合瀬
太郎丸
頭合
宇田原
米原
鐘掛松
上古閑
稗方
黒蛭
菊鹿町
豊水
堀切
寸榎
上石淵
瀬戸口
袈裟尾
流川
岡田
山崎
水次
神来
立石
北原
野間口
羽根木
七城町
蟹穴
東原
大琳
砂田
北古閑
出水
間所
下西寺
西寺
中西寺
上西寺
深川
甲佐町
南古閑
ふかがわ

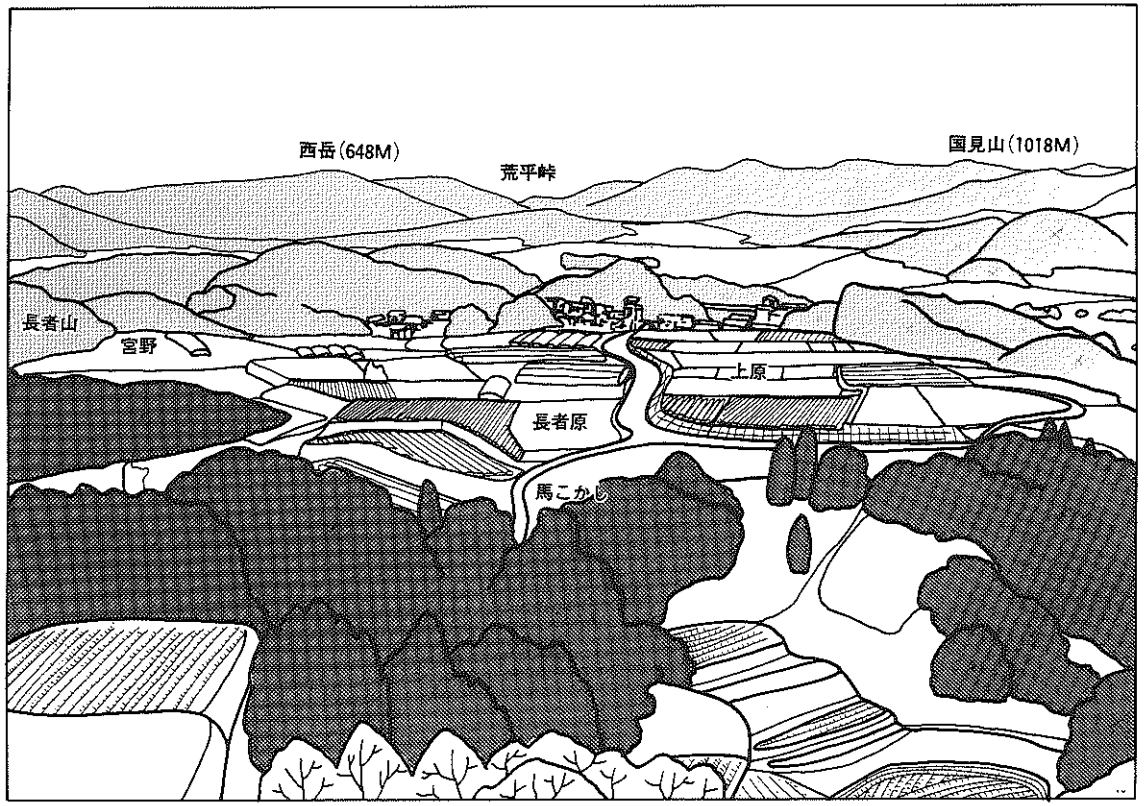
0
100m

長者原礎石群





鞠智城空中写真

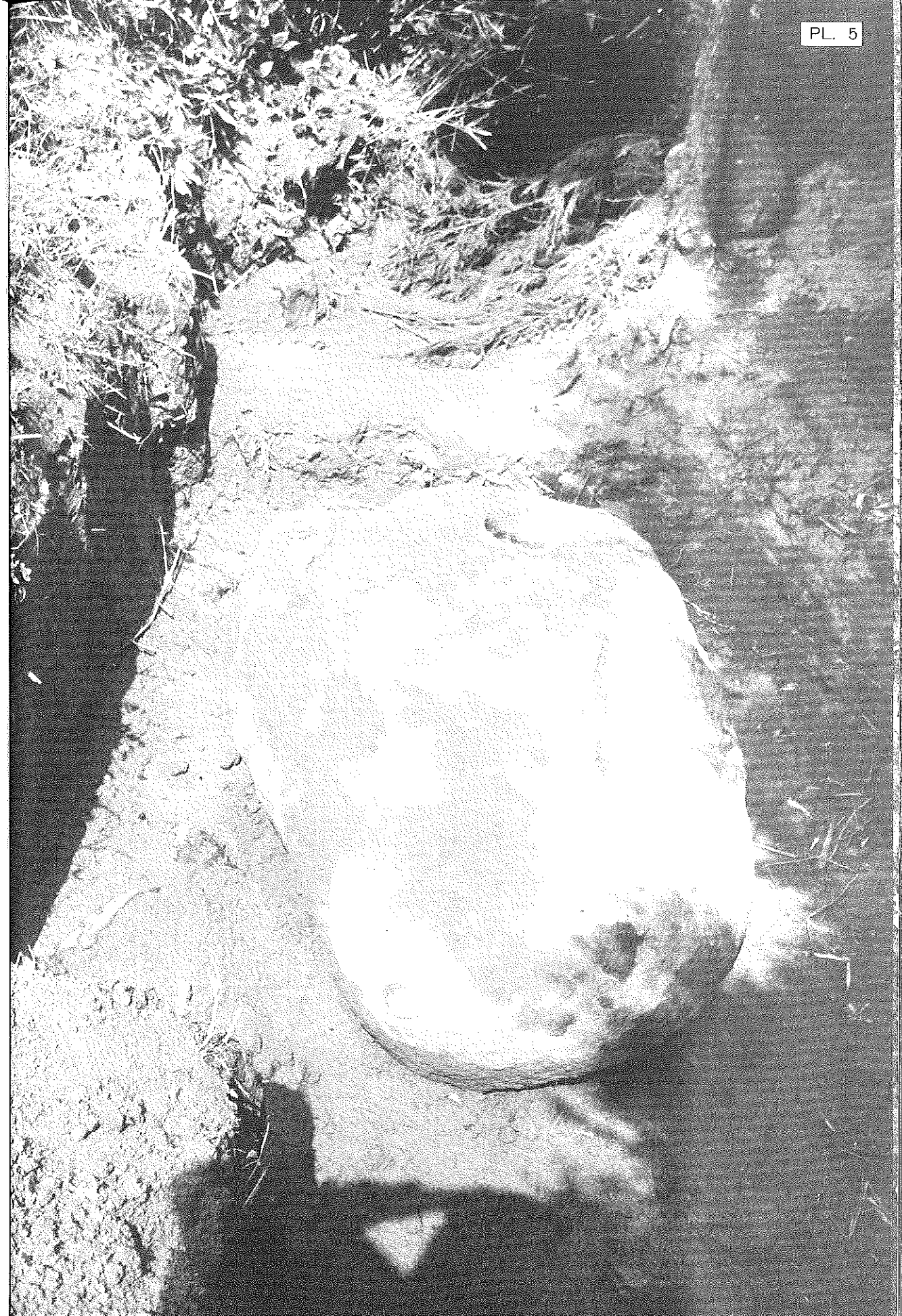


米原台地全景(南より北をみる)

◀池ノ尾門礎遠景(西より東をみる)▶

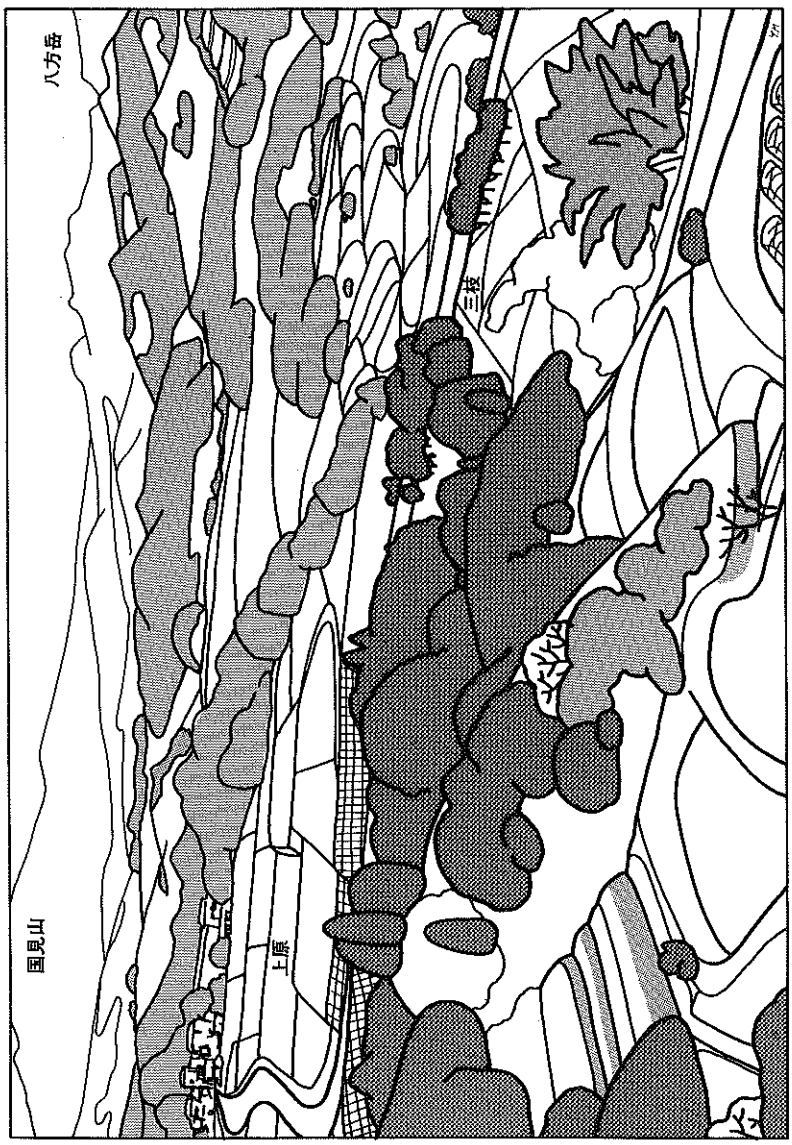
池ノ尾門礎石(1980年11月) ▶

池ノ尾門礎(1967年7月) ▶



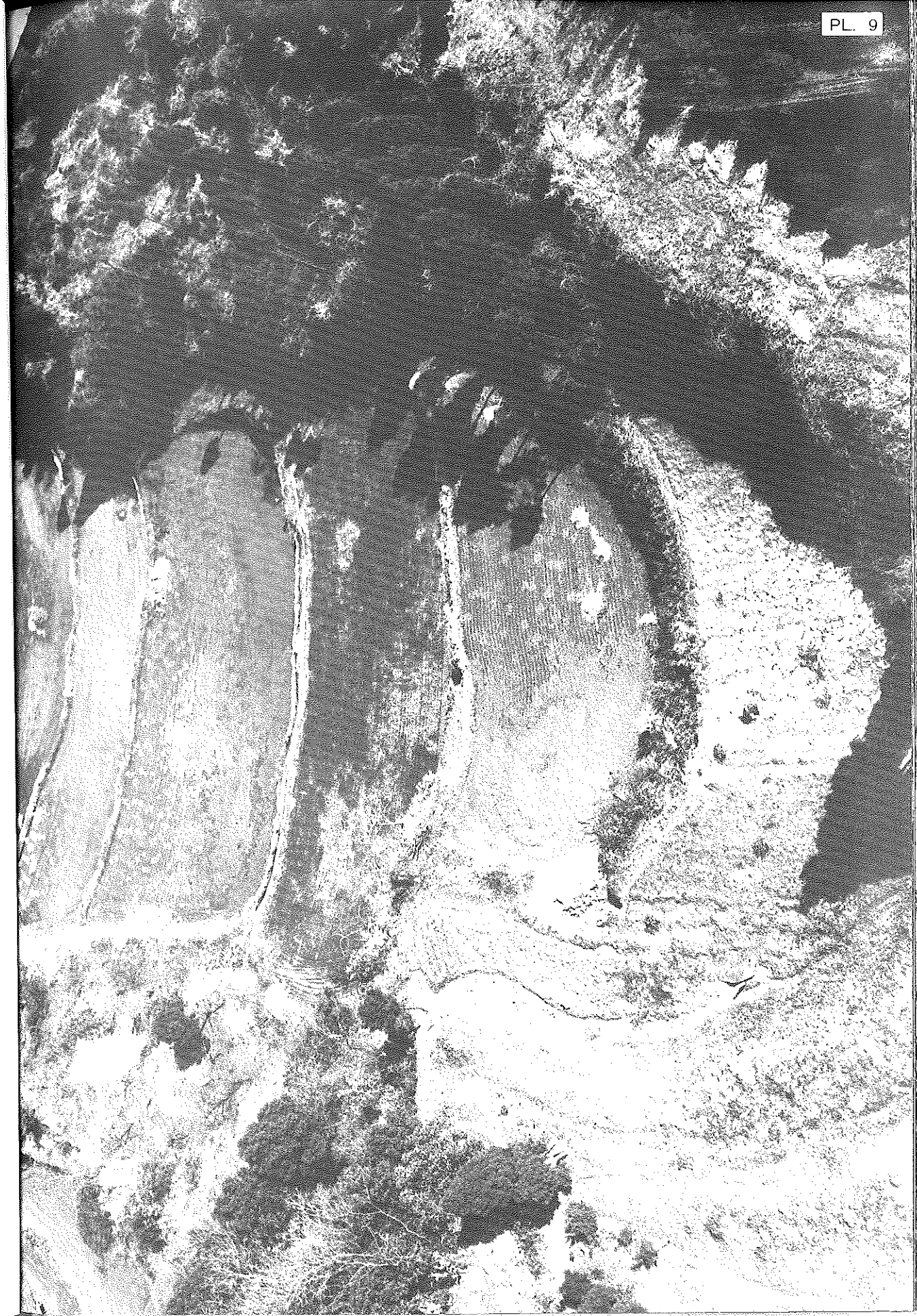
池ノ尾門礎周辺(1967年7月) ▶

池ノ尾門礎周辺(1967年7月) ▶

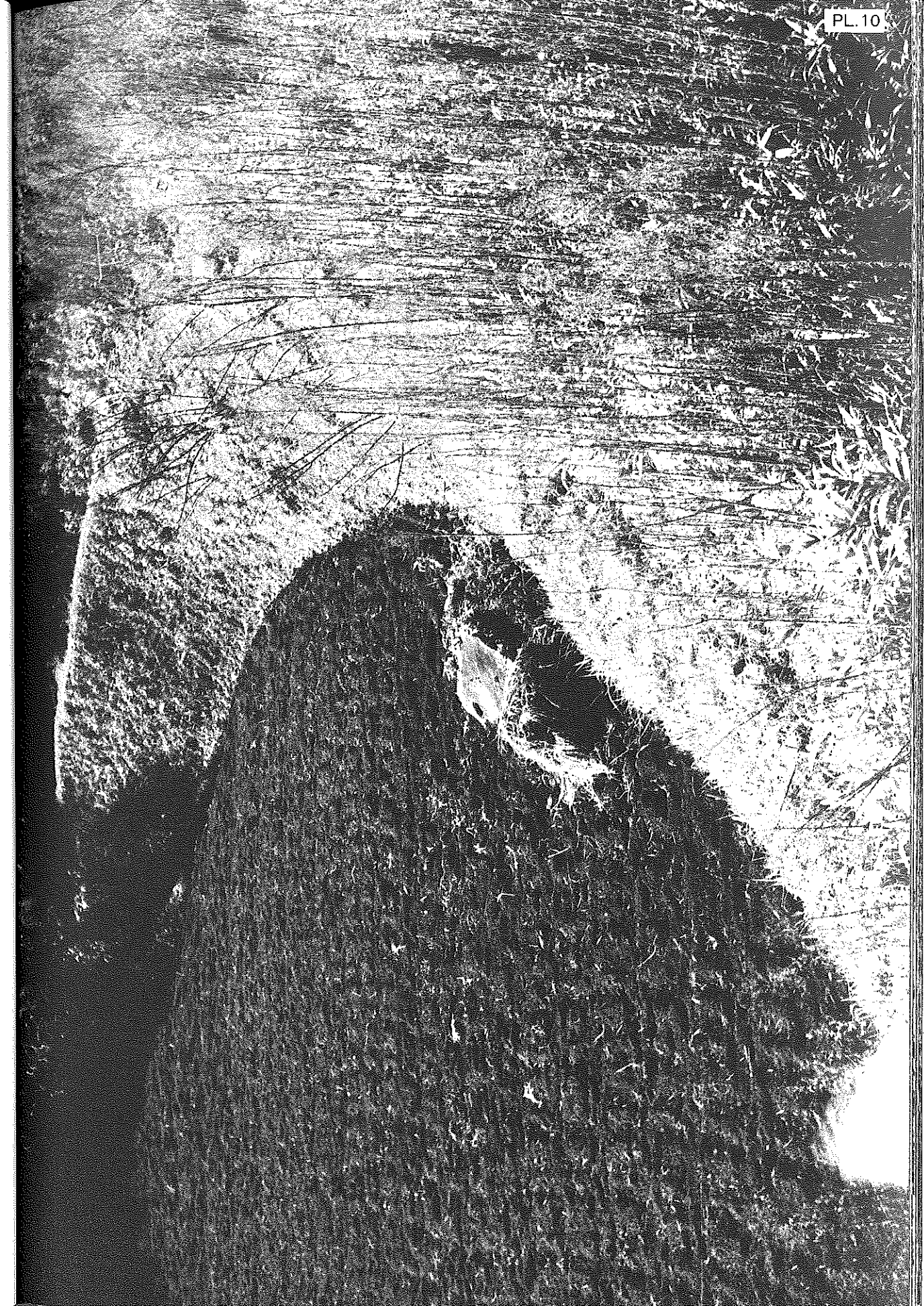


深迫地区と米原台地（上原地区）・南より北をみる(1983年２月)

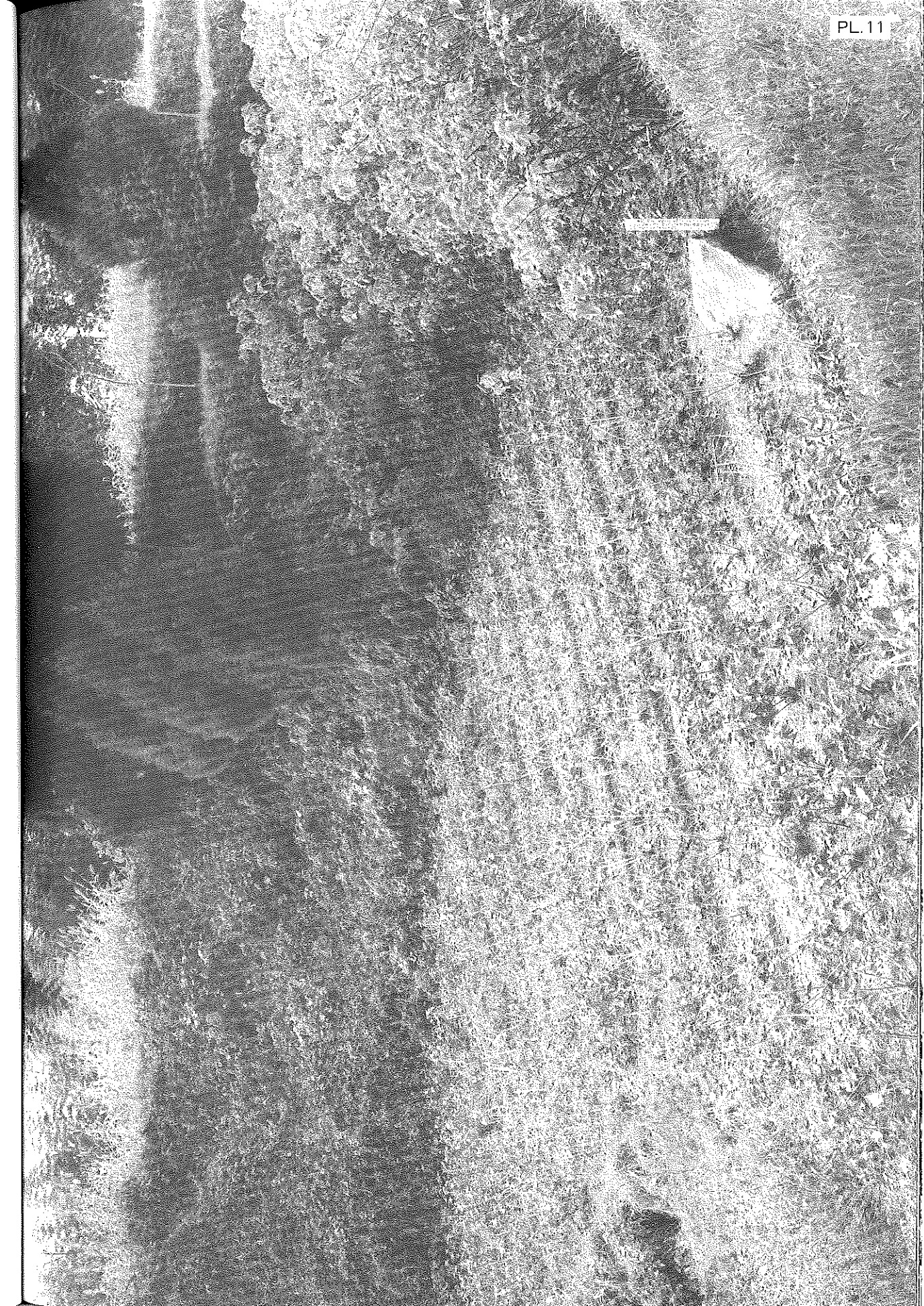
深迫地区空中写真(1983年2月) ▶



深迫門礎(1966年12月) ▶

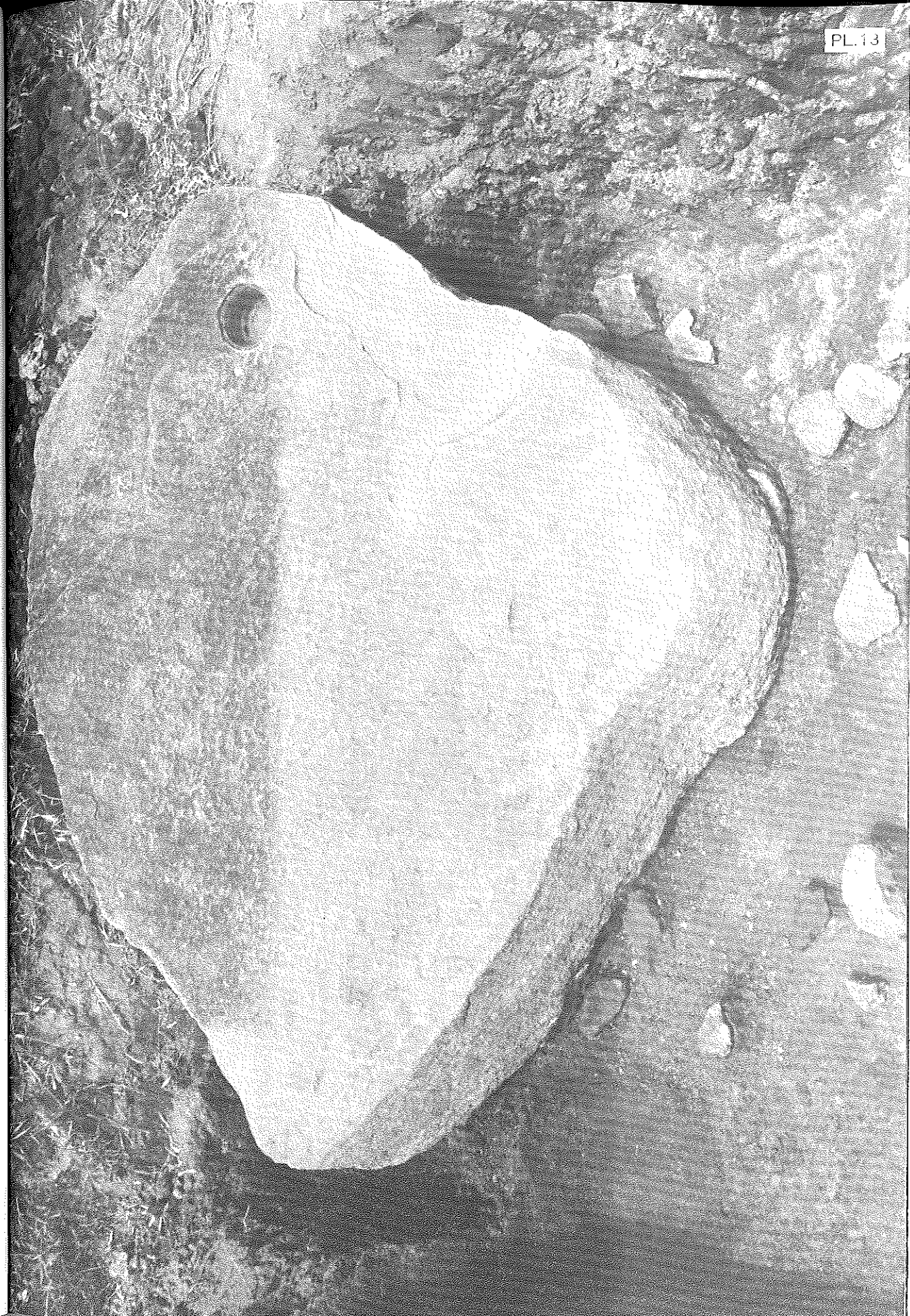

PL. 10

深迫門礎(1980年11月) ▶

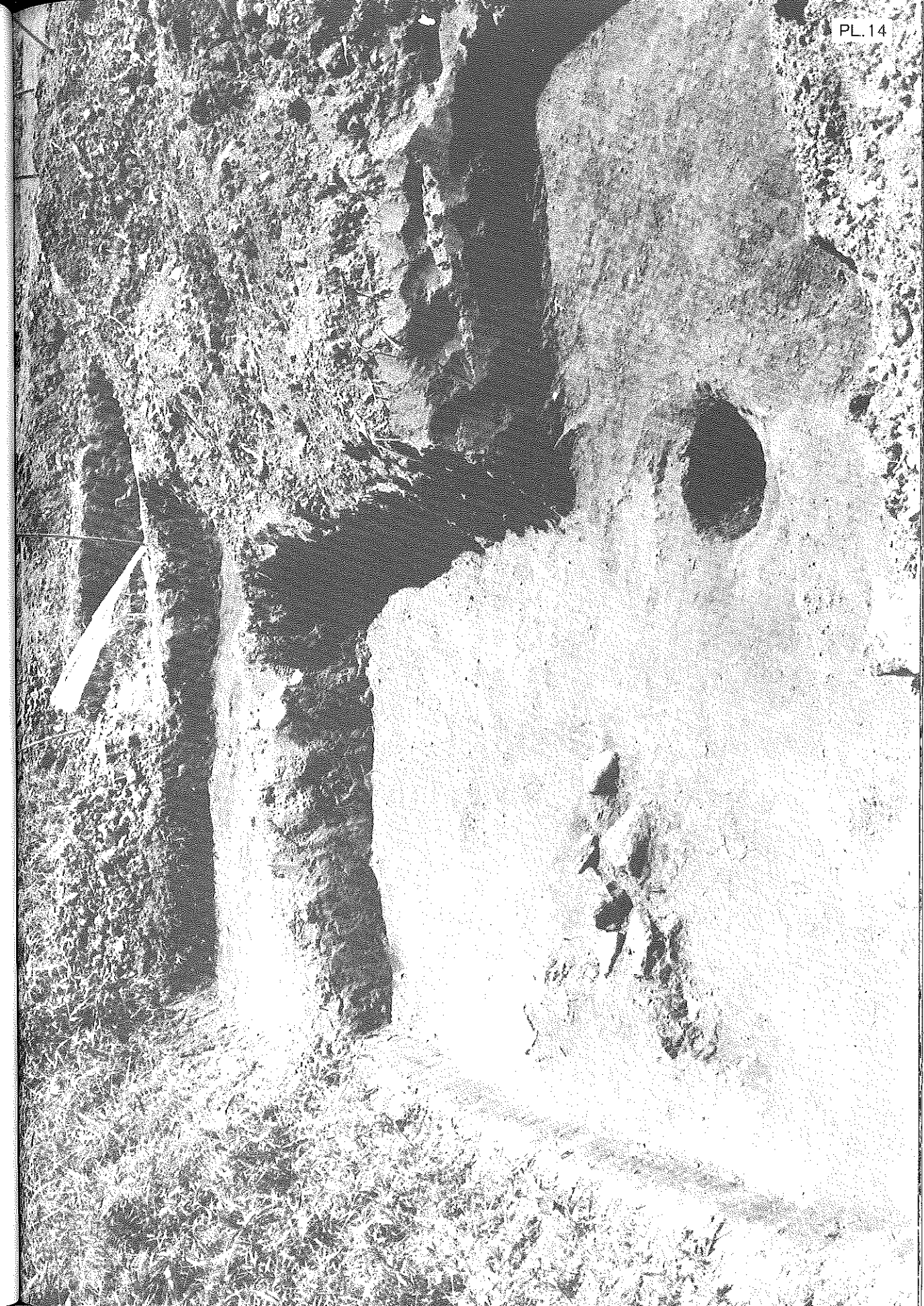


深迫門礎(1980年11月) ▶

深迫門礎(1967年7月) ▶


PL.13

深迫門礎調査風景(1967年7月) ▶

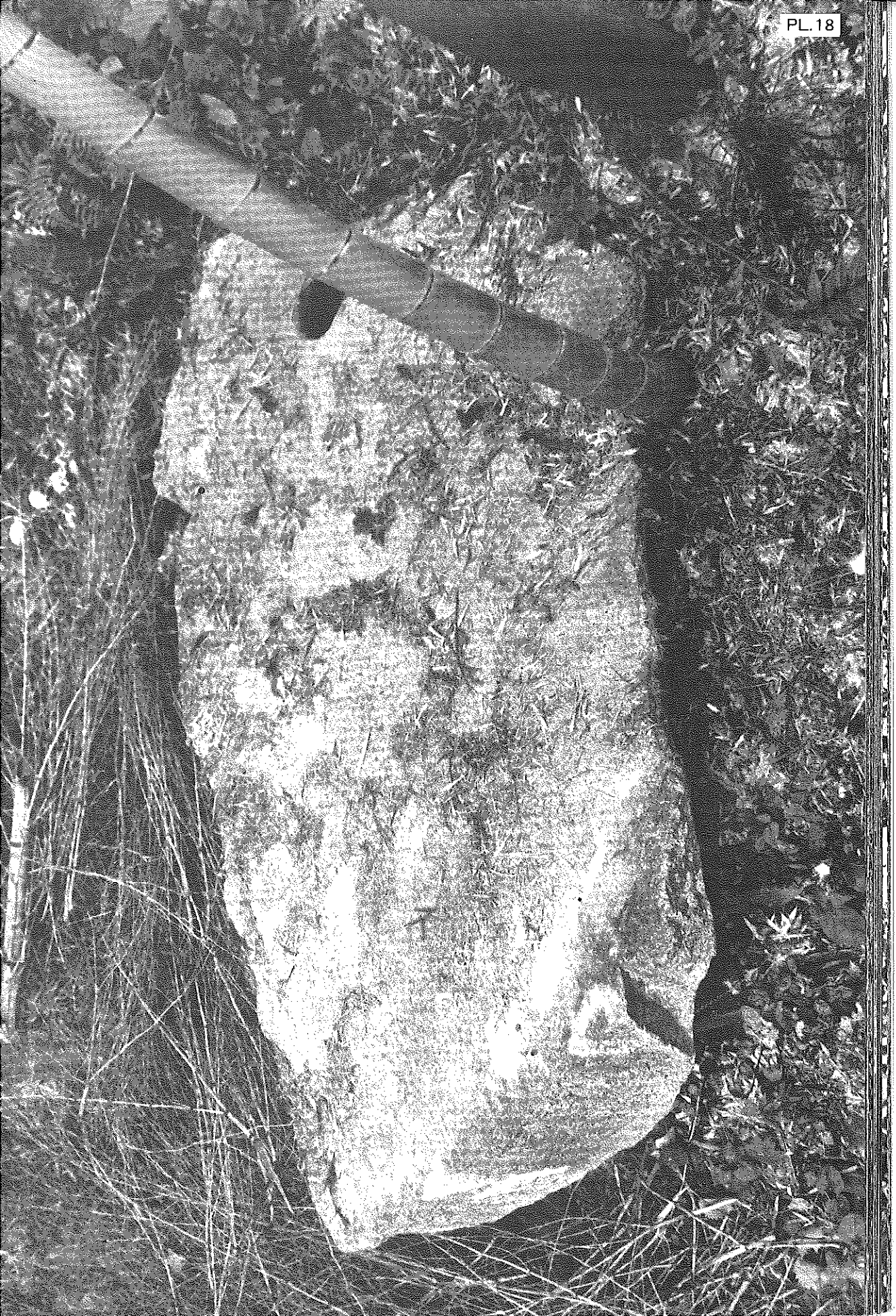


鞠智城南縁の崖(1983年2月) ▶

鞠智城南縁の崖(1968年4月) ▶

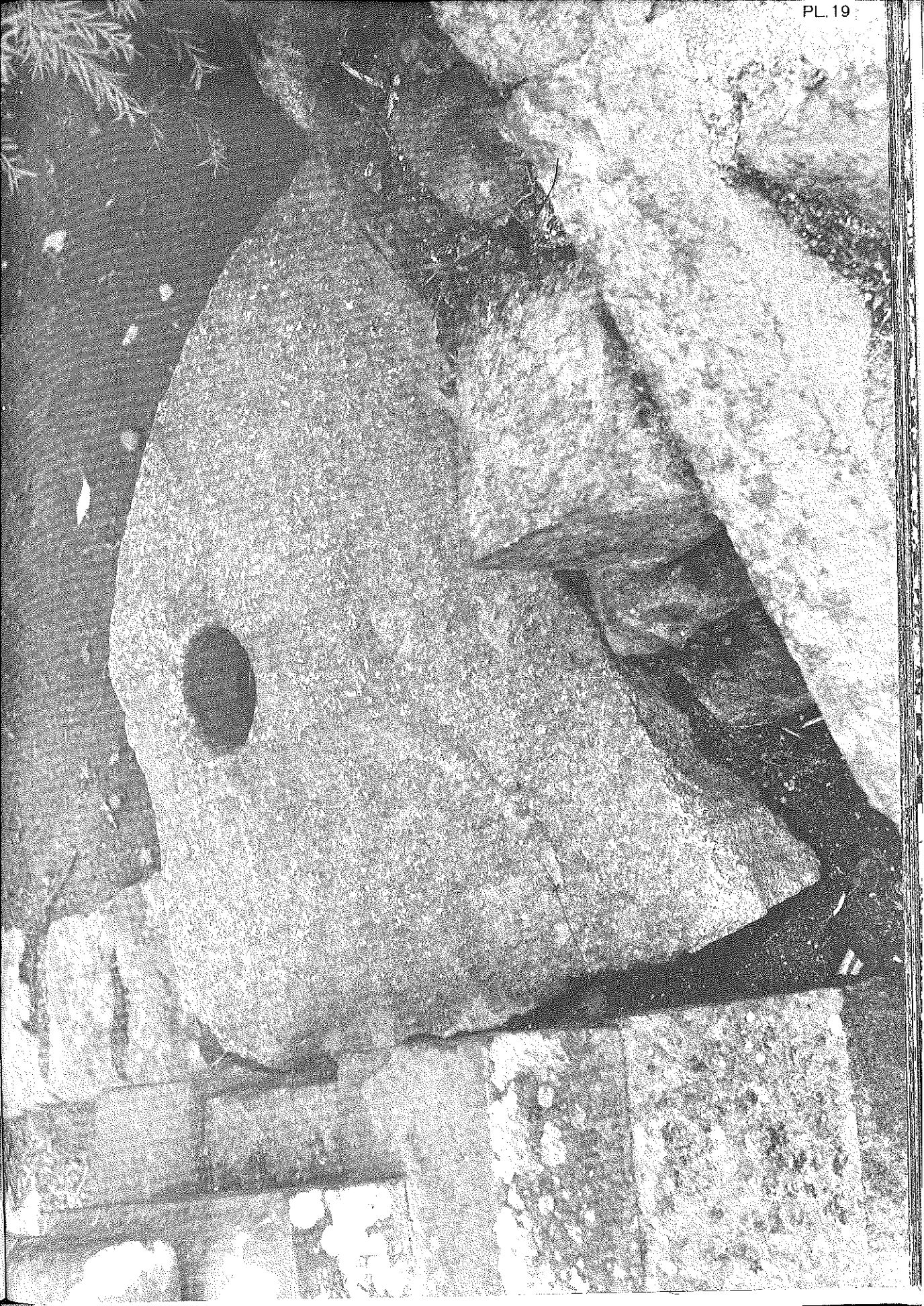
堀切門礎石▶

堀切門礎石 ▶



PL.18

木野神社礎石(1967年7月) ▶



鞠智城北側風景(1982年2月) ▶

PL. 20

長者山全景・東より西をみる(1983年2月) ▶

長者山風景(1983年2月) ▶

長者山礎石群(1982年2月) ▶

PL. 23

長者山礎石群(1983年3月) ▶

PL. 24

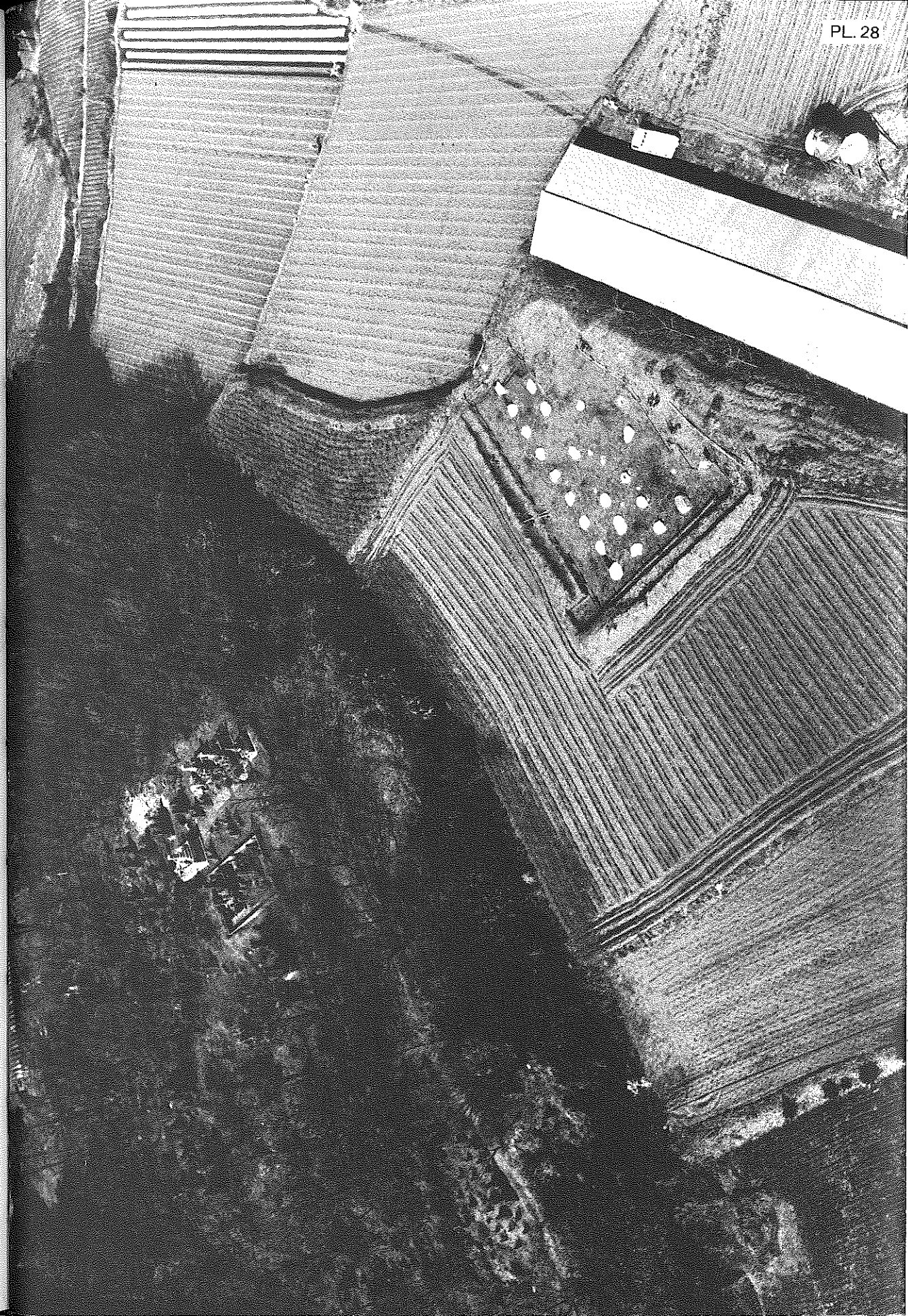
長者山礎石群(1980年12月) ▶

長者山礎石群(1980年11月) ▶

PL. 26
長者山礎石群

長者山全景・西より東をみる(1982年2月) ▶

長者山と宮野礎石群(1983年2月) ▶



調査前の宮野地区(1970年2月) ▶

宮野礎石群より見た長者山(1983年2月) ▶

長者山より見た宮野礎石群(1981年3月) ▶

PL.31

宮野礎石全景・南より北を見る(1981年3月) ▶

宮野礎石群遺物出土状態(1981年3月) ▶

PL. 33

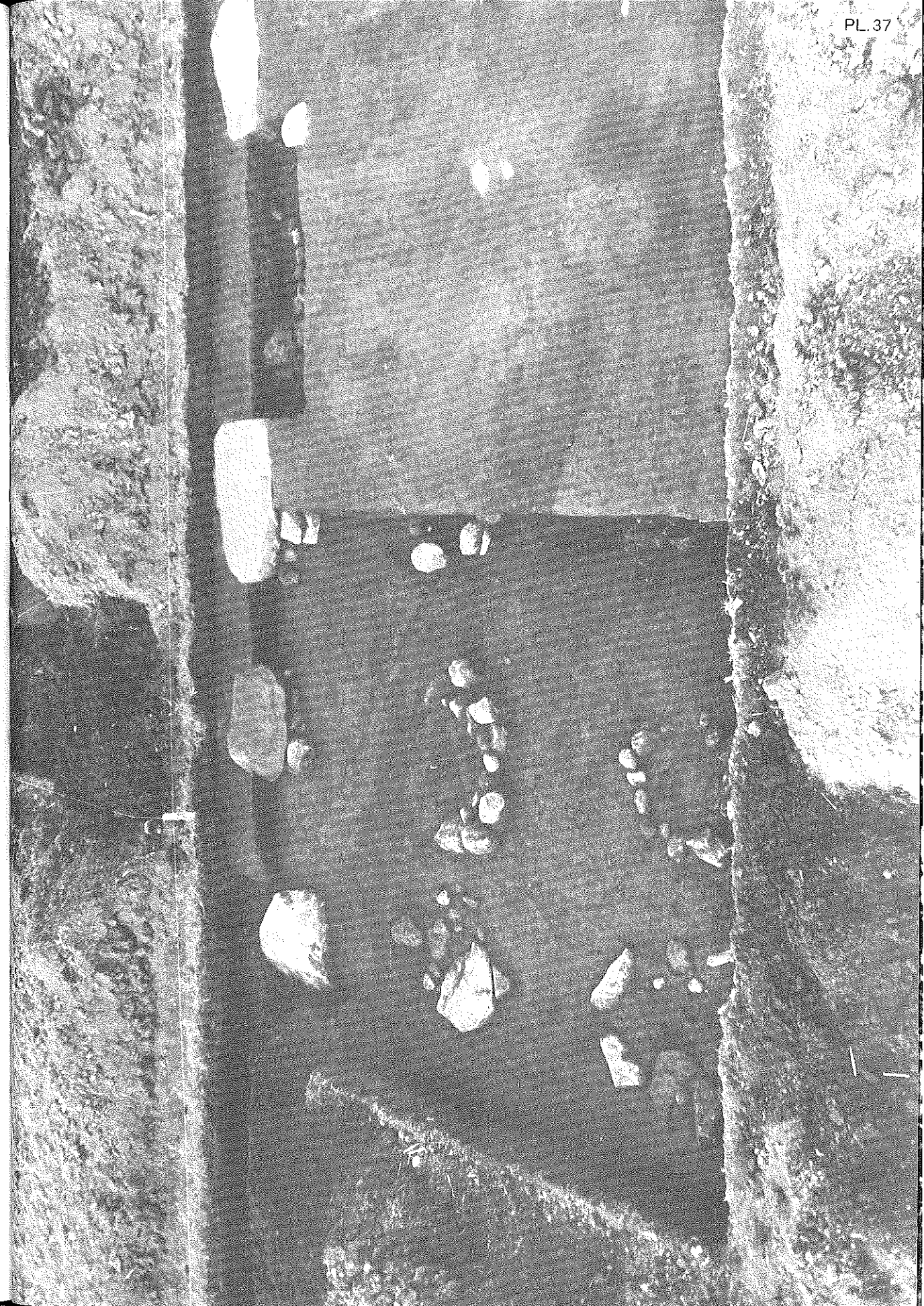
宮野礎石の版築と溝断面(1981年3月) ▶

佐官どん礎石群(1967年7月) ▶

長者原礎石群(1970年2月) ▶

PL. 36

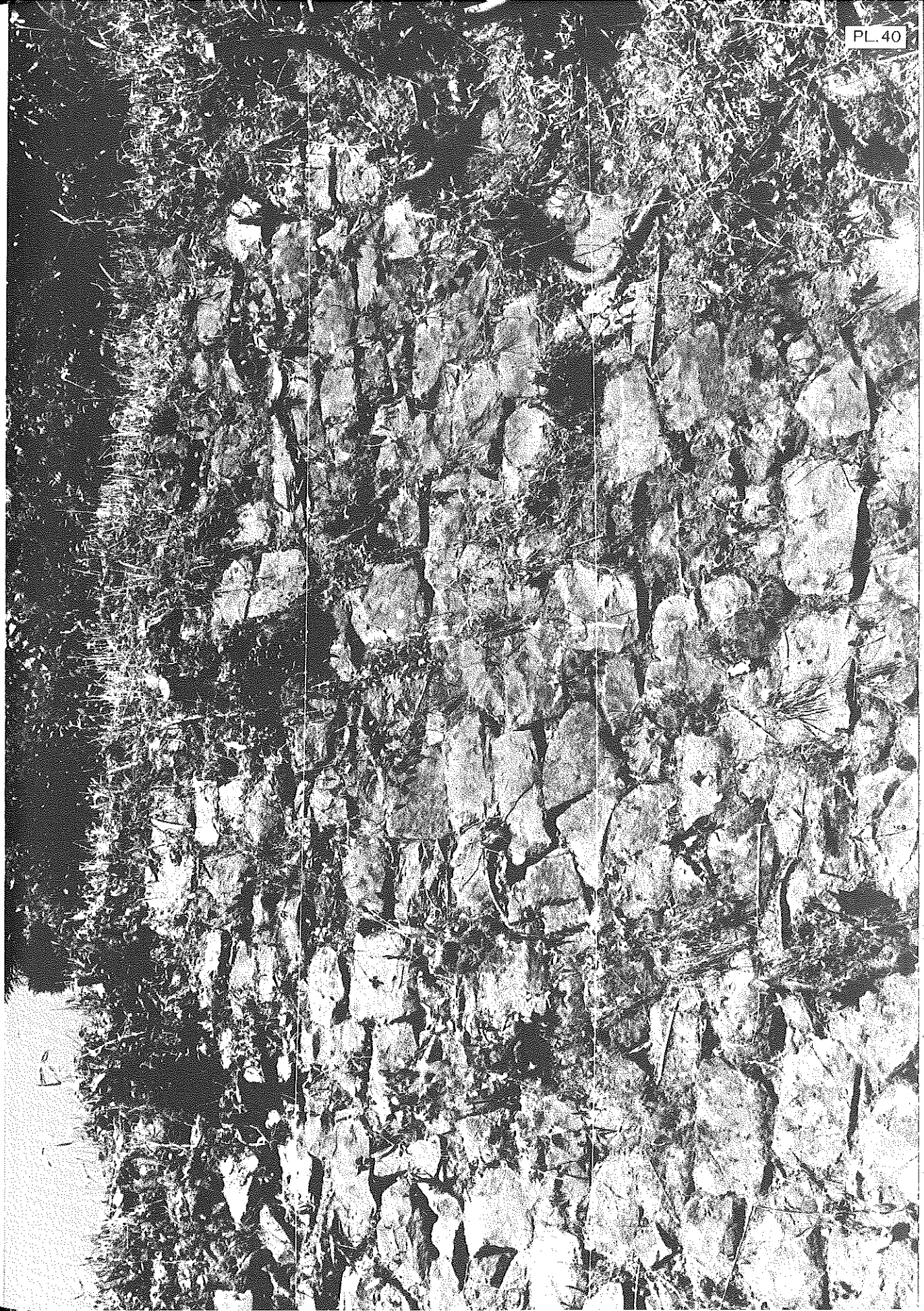
長者原礎石群(1970年2月) ▶



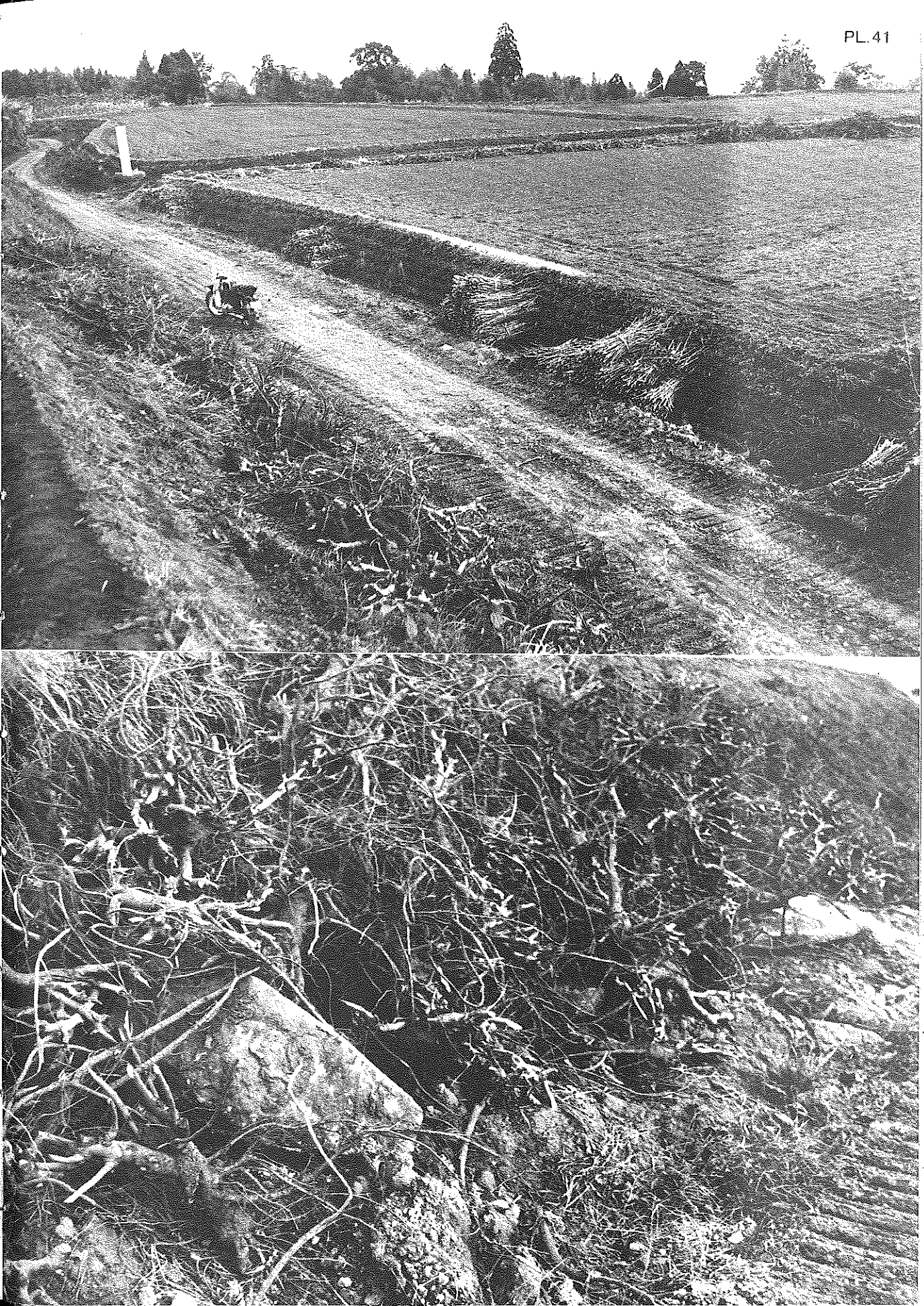
鞠智城土塁(1968年2月) ▶

鞠智城土塁(1968年2月) ▶

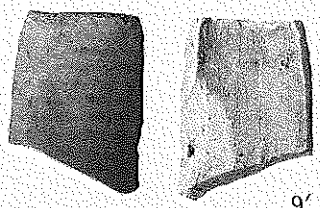
三枝石垣(1967年7月) ▶



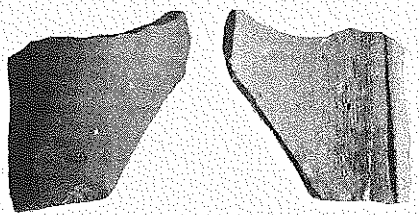
長者原地区の開田状態と露出礎石(1966年11月) ▶



平瓦実測図（1：4）

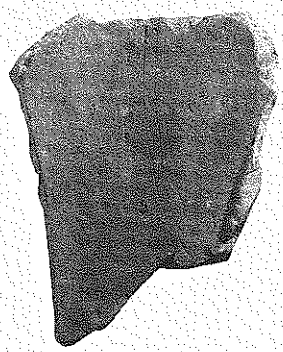


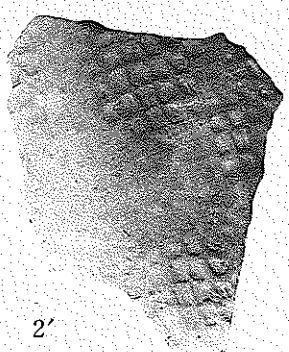
9′



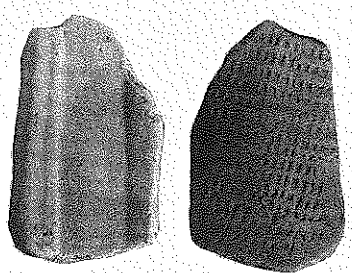
10′

1′

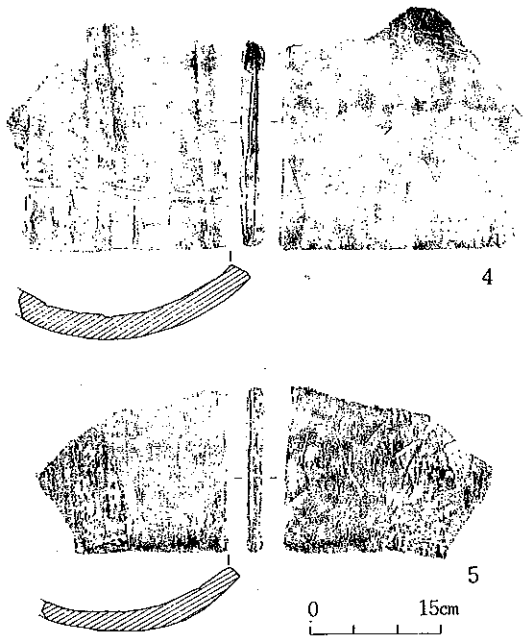


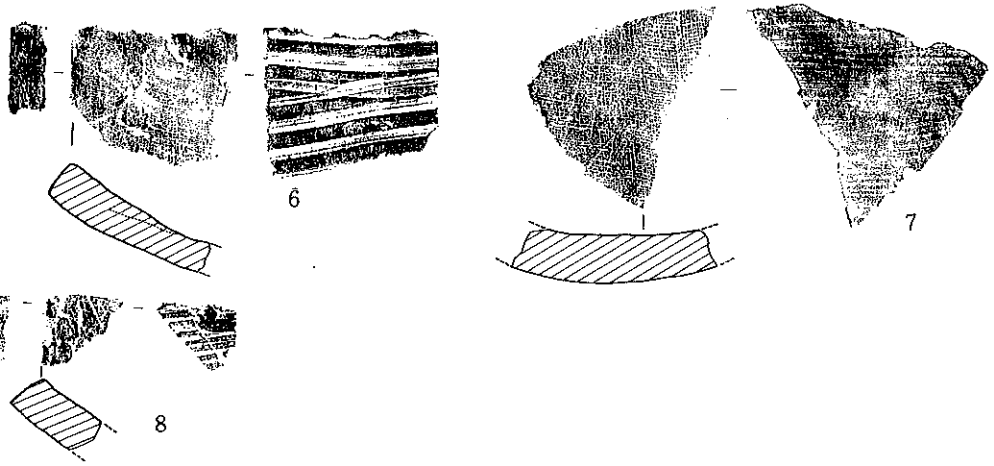


2′



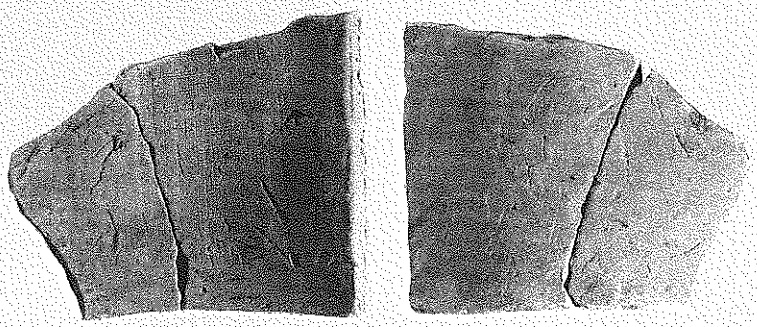
3′



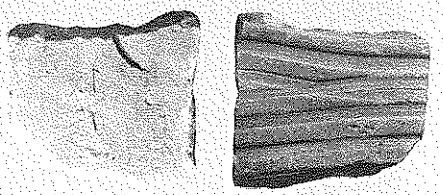


平瓦実測図(1：4)

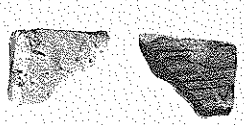
4′



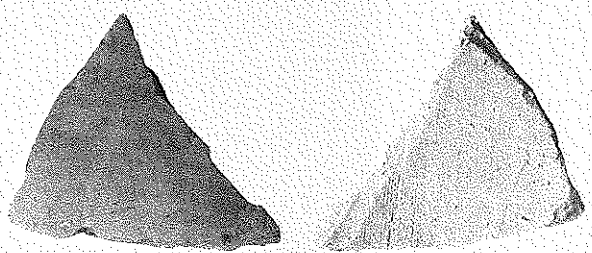
5′



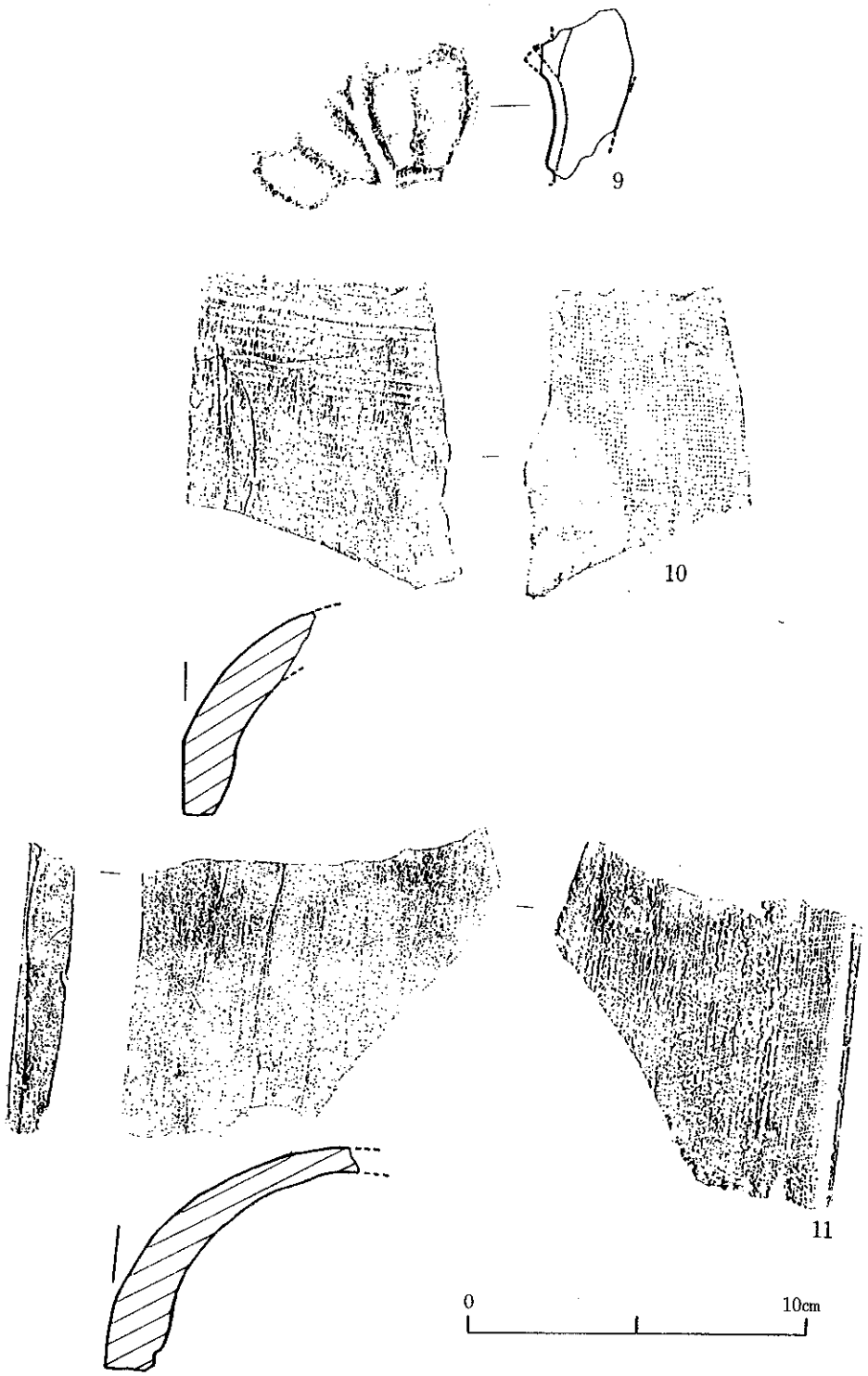
6′



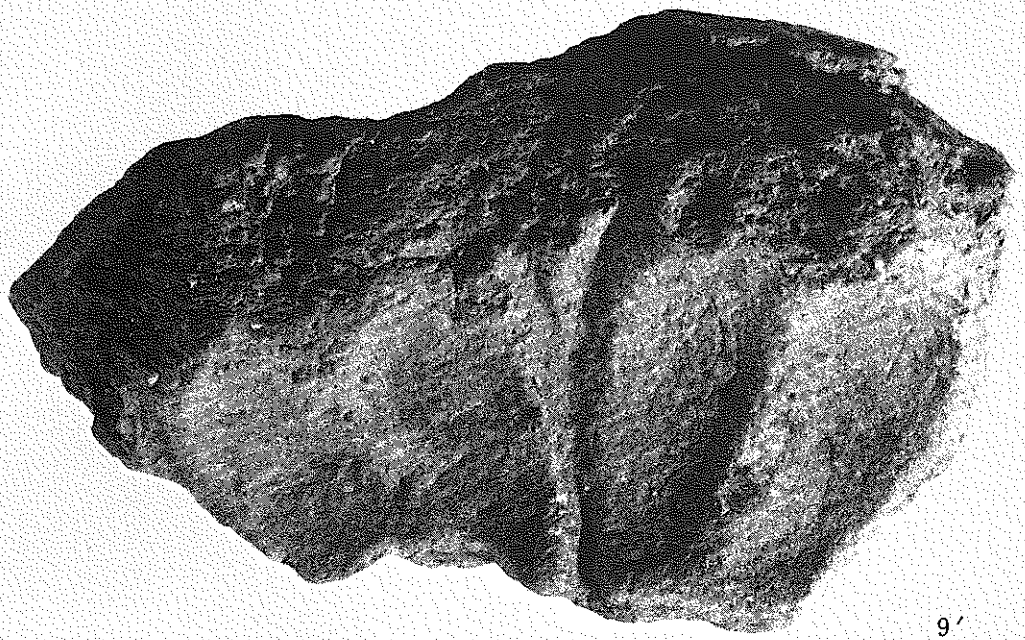
8′



7′



軒丸瓦・丸瓦実測図



9′

熊本県文化財調査報告　第59集

鞠智城跡

昭和58年3月31日

発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
℡ (0963) 83—1111

印刷　株式会社　秀巧社
〒862 熊本市国府4丁目10番18号
℡ (0963) 66—1221

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 59 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日